

An aerial photograph of a mountainous landscape. In the background, a large, snow-capped mountain peak rises against a clear blue sky. Below the mountain, a dark, calm lake is nestled in a valley. The foreground shows a small village with several buildings, some with red roofs, and a paved road. The terrain is a mix of green grass and brown, leafless trees, suggesting a late autumn or winter setting. The overall scene is serene and scenic.

北海道利尻富士町

沼浦海水浴場遺跡（第2次）

沼浦遺跡（第1次）

発掘調査報告書

2018年12月

礼文・利尻島遺跡調査の会

目次

はじめに	1
I. 調査の経緯と経過	2
1. 立地と周辺の遺跡	2
2. 調査の歩み	2
3. 調査区の設定・経過	4
4. 調査日誌	4
II. 各調査区の状況	6
1. 堆積構造の分析と層群の分類	6
2. B0区	7
3. B1a'区	12
4. B1a区	15
5. B1区	19
6. B1b区ベルト	21
7. B1b区	26
8. B3区	30
9. B7区	32
10. E1区	37
11. TP1	40
12. D1・D2区	41
III. 出土遺物	45
1. 出土土器	45
2. 出土石器	123
3. 出土骨角器	124
IV. 沼浦海水浴場遺跡（第2次調査）の動物遺体	125
V. 沼浦海水浴場遺跡 第1・2次調査出土人骨について	142
VI. 附篇	149
1. 過去の調査・採集資料 その（2）	149
まとめ	199
参考文献	200

例言

1. 本書は、沼浦海水浴場遺跡（利尻富士町鬼脇字沼浦 132、145、146 番地 搭載番号：H-10-16）の第2次学術調査と沼浦遺跡（利尻富士町鬼脇字沼浦 99 番地 搭載番号：H-10-17）の第1次学術調査の概要、及び島内における過去の出土・表採資料を取録したものである。発掘調査には、礼文・利尻島遺跡調査の会（岩城克洋・大野彩奈・折登裕介・折登亮子・北沙織・高坂勇佑・箱石幸祐・藤原吉希・柳澤清一・横田真名望）、利尻富士町教育委員会（山谷文人）が参加し、2017年4月28日～5月15日に実施した。
2. 本調査及び過去資料の実査、遺跡景観のドローン撮影については、利尻富士町教育長の石川武弘氏、同教育委員会の山谷文人氏、利尻町立博物館の佐藤雅彦氏、地権者の祐川イツ氏・道場年樹氏、自治会長代理の工藤昭二氏、川村一彦氏、若林吉武氏より格別なるご配慮とご援助をいただいた。また調査期間中、西谷榮治氏、藤澤隆史氏、阿部明義氏、藤井優規氏から種々のご教示・ご支援をいただいた。
3. 整理作業と報告書の作成は、千葉大学文学部考古学研究室の了解のもとに、同研究室及び関連の施設、各自の自宅において、2018年12月15日まで実施した。
4. 人骨鑑定は藤田尚氏（新潟県立看護大学）に、動物遺存体の鑑定と分析については内山幸子氏（東海大学）に、写真撮影は藤原吉希氏（東京女子医科大学）にそれぞれ依頼した。
5. 執筆は、岩城・内山・大野・北・高坂・箱石・藤田・藤原・柳澤・山谷・横田の11名が分担した。
6. 各種の作業については、資料の拓本・実測（柳澤・山谷）、編集・組版（北）、写真撮影（藤原）、監修（山谷）が、それぞれ担当した。
7. 土器の口・胴・底径を推定復元する場合には、本文・附篇ともに推定範囲内の最小値を用いることとした。
8. 実測図版・写真図版ともに、遺物資料には重複しない3桁の番号を付している（本調査/土器資料：001～455、石器資料：456～473、骨角器資料：474～485、出土人骨：501～531（人骨に関しては一部一括で番号を付与しているものがある。）、附篇/沼浦海水浴場遺跡土器資料：601～655、亦稚貝塚土器資料：701～897）。本文中で『(000)』や『000例』のような形で、3桁の数字が引用されている場合は、この資料番号のことを示すこととする。
9. 土層観察時の土色の判定には、農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所 監修（2001）『新版 標準土色帖』を使用した。

はじめに

平成 29 年 4 月 28 日から 5 月 15 日にかけて、沼浦海水浴場遺跡および沼浦遺跡において、利尻富士町教育委員会監修のもと礼文・利尻島遺跡調査の会による学術調査が実施された。沼浦海水浴場遺跡については、28 年に続いた 2 次調査であり、沼浦遺跡については、両遺跡の比較検討や遺跡群の広がりを確認するための 1 次調査である。また本報告においては、過去の調査・採集資料として、本町所蔵のこれまで未報告であった資料を掲載した。また、亦稚貝塚の資料についても利尻町立博物館協力のもと掲載している。

沼浦海水浴場遺跡においては、1 次調査の範囲をさらに掘削し層位的な遺跡の変遷をより詳しくとらえることができた。また、E 区や TP1 の調査によって面的な広がりについても検討することができた。さらに、遺跡の古地形や包含層の形成など地質的な分野からも検討を加えている。

一方、沼浦遺跡（D 地点）においては、続縄文期からオホーツク文化期の遺構こそ発見に至らなかったものの、鈴谷式土器が出土し、また近代と思われる道路状遺構を確認することができた。これは、近代における集落のようすや構造を考えるうえでも、貴重な成果となったといえる。

(山谷 文人)

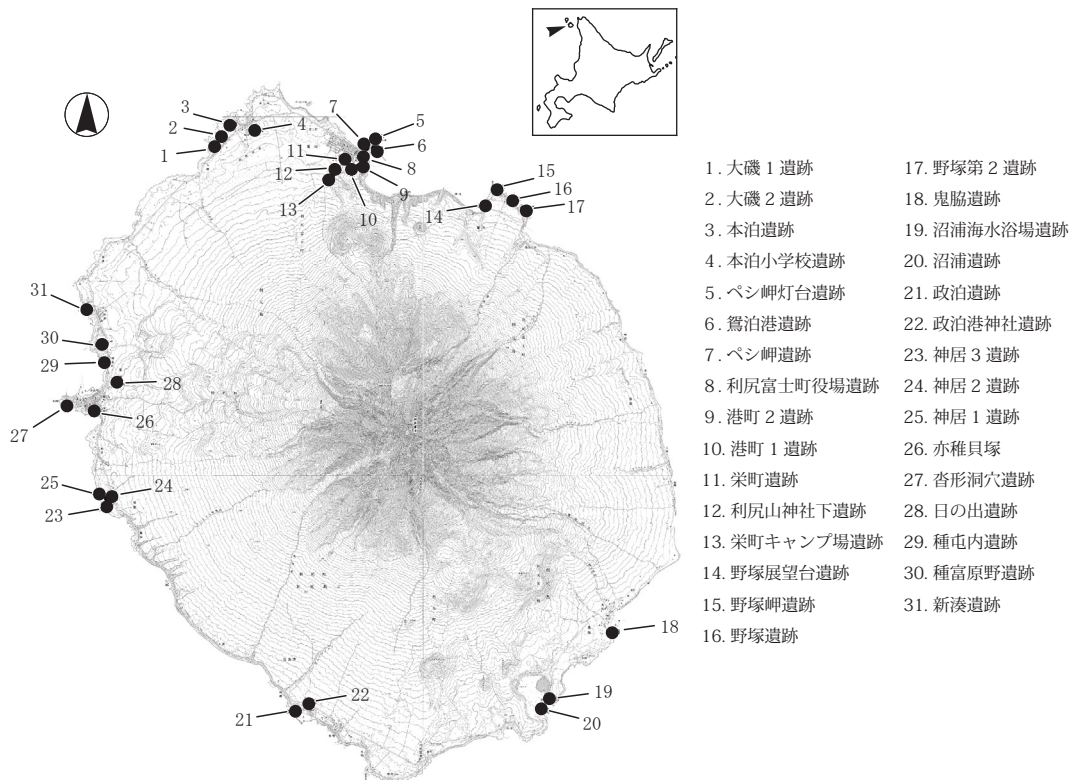


図 1 利尻島内の遺跡 (国土地理院発行 1/25,000 『鴛泊』『雄忠志内』『鬼脇』『仙法志』を改変)

I. 調査の経緯と経過

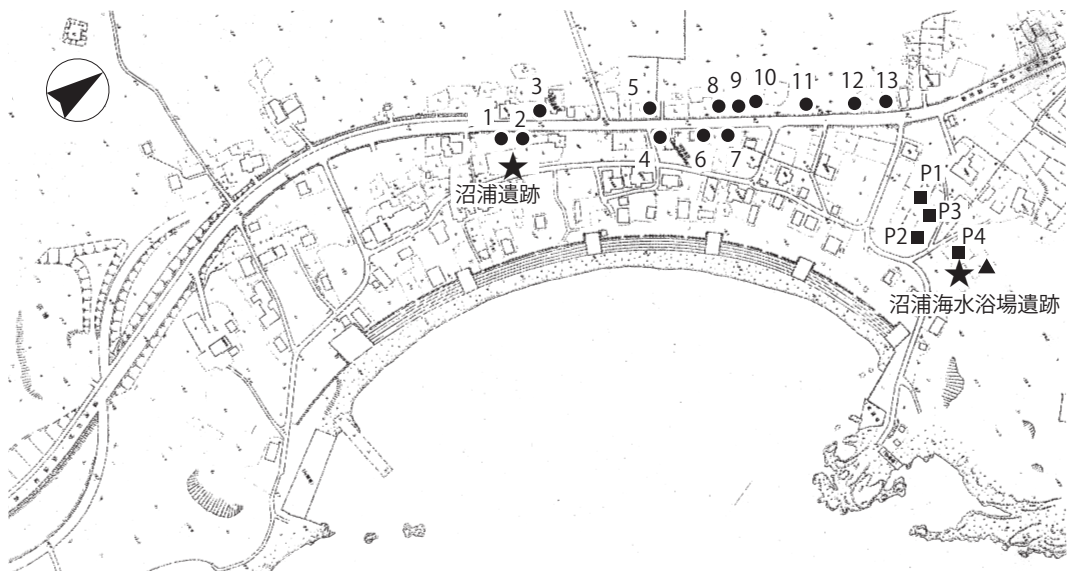
1. 立地と周辺の遺跡 (図1)

沼浦海水浴場遺跡ならびに沼浦遺跡は、利尻島の南東部に所在する沼浦地区に位置しており、標高4～5mほどの砂浜海岸を有する平坦な砂丘上に立地している。本地区は、アイヌ語で「ヲタトマリ（砂浜のある入江）」とよばれ、周辺には沼浦湿原やオタトマリ沼などの景勝地が広がっている。また、利尻山の火山活動の痕跡として、約7,000年前以前に起きたマグマ水蒸気爆発による二度の噴火によって形づくられた瓢箪形のマール地形が認められる。さらに、湿原や沼の形成には、縄文海進による海水の流入と約4,000年前以前に起きた海退が影響しているとされる。

また、近隣には鬼脇遺跡（オホーツク文化期）が知られている。なお、平成29年10月27日に柳澤清一氏とともに立地の確認および遺物採集を試みたが、成果は得られていない。鬼脇港築港の際に、相当の破壊を被っているとの印象を持った次第である。（山谷）

2. 調査の歩み (図2)

本遺跡の調査史については、前報のなかでも概観した。重複する内容もあるが、以下に述べる。明治時代に藤井秀（東京人類学会会員）による遺物採集の記録がある。採集地点は、径にして14m、人の背丈ほどの高さがある砂丘からという（宇田川1983）。その後、昭和7年に名取武光と後藤寿一による小規模な発掘が行われた。報告の中で、元々の沼浦



● 1～13：北海道教育委員会試掘地点(平成3年度) ■ P1～P4：筑波大学試掘地点(平成6年度)
▲：利尻富士町教育委員会調査地点(平成14年度) ★：今年度調査地点

図2 今年度と過去の調査地点 (山谷・内山 2004 を改変)

の地形は、浜沿いに砂丘があり盆地（集落側）にかけて緩い傾斜になっていたという。さらに、その傾斜面から平地にかけては、3.6m 四方の方形の竪穴が 5、6 カ所あり、また砂丘上に 2 カ所の貝塚があったことが記されている。また、現在遺跡の範囲に登録はされていないが、集落の西方に和人とアイヌの墓地があったことが記録され（名取 1933）、近隣住民の聞き取りからも言い伝えが残っている。昭和 24・25 年には大川清による試掘（2 地点）が行われている（大川 1998）。

昭和 51 年には、岡田淳子らによる最初の本格的な分布調査が行われ、沼浦 A 遺跡（現、沼浦海水浴場遺跡）と沼浦 B 遺跡（現、沼浦遺跡）が確認されている（岡田ほか 1984）。

平成以降では、平成 3 年に道教委によって道道の整備工事に伴う B 調査で試掘が行われた。平成 6 年には、筑波大による調査で 4 カ所のテストピットが発掘されている（未報告）。平成 14 年には町教委による詳細分布調査が実施され、オホーツク文化期の包含層が検出されている（山谷・内山 2004）。平成 28 年には、礼文・利尻島遺跡調査の会による沼浦海水浴場遺跡の第 1 次学術調査が行われた。（山谷）

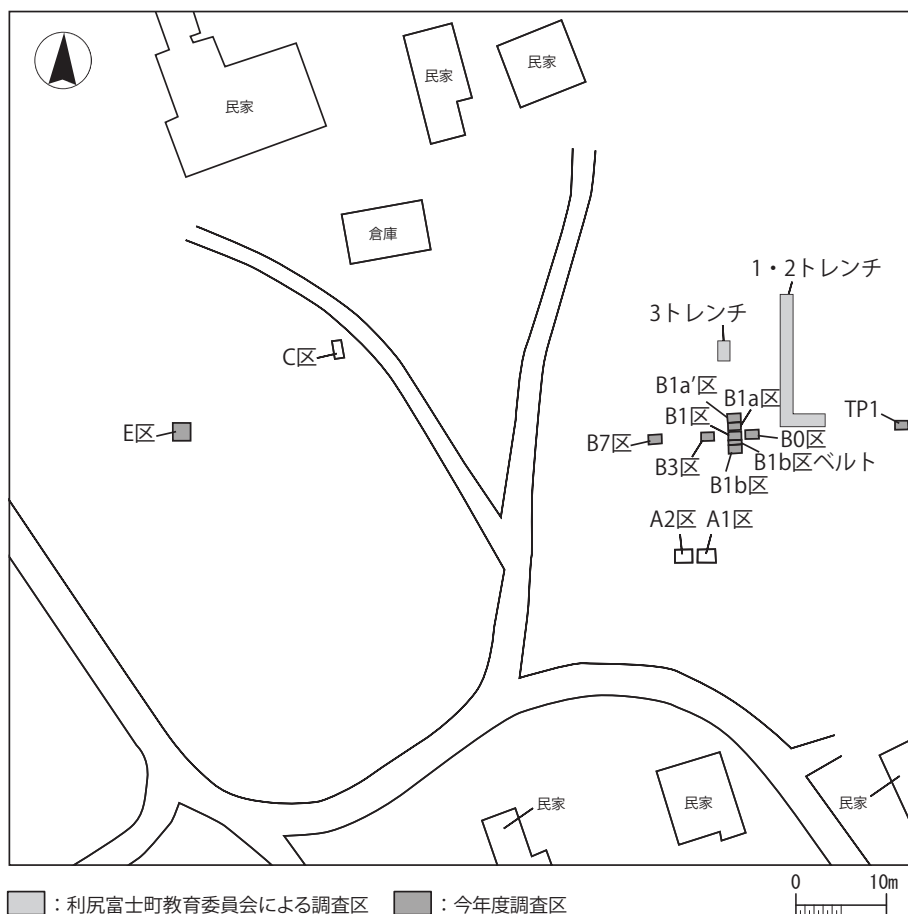


図3 沼浦海水浴場遺跡調査区配置図

3. 調査区の設定・経過 (図 3)

本年度は沼浦海水浴場遺跡 (H-10-16) とともに、隣接する沼浦遺跡 (H-10-17) も対象として 18 日間に亘って発掘調査を実施した。

沼浦海水浴場遺跡 文化層の層位的な変遷を捉えるために、調査区を追加しながら掘り進めた。B 地点では、昨年度の B1・B1a・B3 区に加え、新たに B0 区 (1.0 × 1.5m) と B1b 区 (1.0 × 1.5m)、B1a' 区 (1.0 × 1.5m) を設定し、都合 9 m² の掘削を完了した。さらに、B0～B1a' 区と異なる時期の文化層を求めて、畑崖面上に位置する筑波大学の試掘地点 (P4) 付近に B7 区 (1.0 × 1.5m) を新設した。なお、東側の岩壁下テラス面においても、文化層・竪穴住居跡の有無を確認するために TP1 (1.0 × 1.5m) を設定し、試掘した。さらに C 地点付近における文化層の広がり把握するために、かつて多量の遺物が出土したとされる C 地点西方 10m 付近を E 地点と呼称し、E1・E2 区 (各 2.0 × 2.0m) を設定したが、E1 区のみを掘削して調査を終了した。

沼浦遺跡 平成 28 年の第 1 次調査の際、沼浦地区自治会館に近い旧砂丘に沿った緩斜面の畑に貝殻散布が認められ、鈴谷式・剥片類などが採集された。この付近を D 地点と呼称し、2.0 × 4.0m の発掘区 (D1・D2 区) を設けて発掘したが、出土遺物に乏しく期待したような成果は得られなかった。(柳澤 清一)

4. 調査日誌

4 月 28 日 (金) 曇のち晴

機材搬入。草刈り・清掃。B 地点発掘停止面の露出。**B0 区・B1b 区の新設。**

4 月 29 日 (土) 曇のち晴

各区撮影。**B7 区の新設。**B 地点掘削開始。B1 区：DK1 に伴う人骨片検出。

B3 区：US131-139 掘削。

4 月 30 日 (日) 曇のち雨

B0 区：US132-133 掘削。B3 区：土層断面の確認。午後に雨天撤収。

5 月 1 日 (月) 曇

B7 区：掘削開始。**D1・D2 区の新設。**D 区：US401-404 掘削。B0 区：US130-136 掘削。

B1 区：人骨取り上げ。B1b 区：US134-137 掘削。B3 区：土層断面精査。

5 月 2 日 (火) 晴

鴛泊小学校 6 年生の体験学習 (B7 区北側畑表土を発掘)。**E1・E2 区の新設。**B0 区：US135, 136, 141 掘削。B1b 区：US137, 142, 143 掘削、DK1 掘削・外形測量。B7 区：US101, 129, 144, 145 掘削。D 区：US404, 405 掘削。

5 月 3 日 (水) 晴

TP1 設定。B0 区：US135, 136, 141 掘削。B1b 区：US142, 143, 150 掘削。**B1a・B1a' 区設定。**B1a・B1a' 区：US101, 146 掘削。B7 区：US129, 144, 145, 148, 149 掘削。D 区：US404, 405 掘削。

5月4日(木) 晴

B0区:US141, 156, 158 掘削。B1a区:US152, 159 掘削。B7区:US148 掘削。
TP1:完掘。D区:US407-409 掘削。

5月5日(金) 晴のち曇

B0区:US156, 158, 166 掘削。B1b区:US161, 165 掘削。B1区:US119 掘削。B1a'区:
US159, 164 掘削。B7区:US148, 149, 162, 163 掘削。TP1:土層断面図作成。D区:
土層断面図作成、写真撮影、埋め戻し。

5月6日(土) 雨のち曇

B0区:土層断面図作成。B1b区:US161, 165 掘削。B1区:US119, 169 掘削。B7区:
US163, 165 掘削。E1区:US601, 602 掘削。

5月7日(日) 晴時々曇

B0区:撮影。B1b区:土層断面図作成。B1b区ベルト:US101-103・DK2 掘削。B1a区:
ベルト掘削、US173, 174, 119, 175 掘削、DK3・4 断面精査。B7区:US163, 170,
171, 172 掘削。E1区:US602-604 掘削。

5月8日(月) 晴

宿舎待機。

5月9日(火) 晴

B1a区:US177, 180-182 掘削。B7区:US178, 172, 168, 170, 171, 179 掘削。E1区:
US603, 604 掘削。

5月10日(水) 晴

B1b区ベルト:US137, 116, 117, 142, 143, 161, 180 掘削。B1a'区:US180-182 掘
削。B7区:US171, 179, 183-185 掘削。E1区:US604 掘削。

5月11日(木) 晴

B1b区ベルト:US186, 187, 165, 182 掘削。B1b区:土層断面精査。B7区:US183
-185 掘削、土層断面図作成。B1b-B1a'区:土層断面精査。E1区:US604, 605 掘削。

5月12日(金) 晴

B1b-B1a'区:3D撮影。B7区:3D撮影。E1区:US605 掘削。

5月13日(土) 晴

B1b-B1a'区:土層断面図作成。B0区・B7区:埋め戻し。E1区:US605 掘削。

5月14日(日) 曇のち晴

B1b-B1a'区:3D撮影、サンプル採取、遺物取り上げ、埋め戻し。E区:土層断面図作成、
埋め戻し。

5月15日(月) 晴時々雨

B1b-B1a'区:埋め戻し。機材撤収。

II. 各調査区の状況

1. 堆積構造の分析と層群の分類 (図4)

今回調査においては、堆積層、構造物、形成面の全てにユニークな単位番号 (US) を付与する形式をとり、堆積構造の把握に努めた。全調査区の構成要素を時系列で並べてマトリクスを構成したものが図4である。これまでの調査で、当遺跡における堆積層は3つの層群に分類されることが認識された。近現代の営為に由来すると思われる攪乱堆積層を第1層群、オホーツク文化期の投棄行為に由来すると思われる魚骨層などを含む傾斜堆積層を第2層群、オホーツク文化期とそれ以前の遺物を若干含む堆積層を第3層群とするものである。図4で用いた層群の色分け (第1層群：無色□、第2層群：灰色■、第3層群：茶色■) は、本報告の各種図表において共通して使用する。 (岩城 克洋)

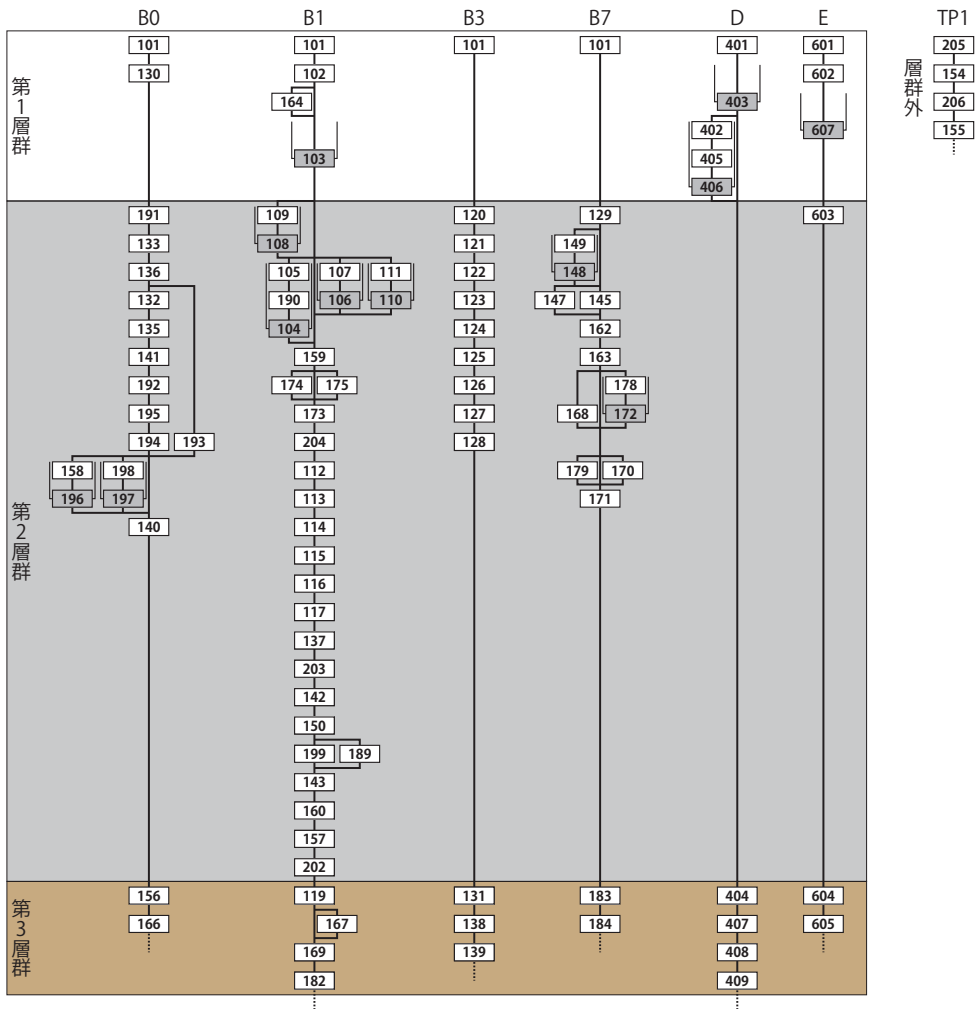


図4 各調査区の層序構成マトリクスと層群の分類

2. B0区

(1) 概要 (図5、表1)

B1区・B1a区の第1次調査所見を確認するために、B1区の東側にB0区を新設し、B1区と利尻富士町教育委員会トレンチとの土層対応の把握を目指した。調査区はB1区の東側に0.5mの間隔をあけ、1.0×1.5mの大きさで設定した。4月29日から5月7日まで9日間に亘って掘り進め、地山(US166)を検出したところで掘削を停止し、記録作業後に埋め戻して調査を終了した。

堆積土層は大きく三群に区別される。耕作などの影響を受けた第1層群(US101・130)、ウニ殻・魚骨を多量に含む層や土層が互層をなす第2層群(US133～136・191～197・140)、その直下に全域で検出され、遺物をほとんど含まない第3層群(US156・166)である。第1層群としては、表土及び攪乱を受けた旧耕作土の2層を認める。第2層群は多量のウニ殻・魚骨を含む層と、ウニ殻・魚骨の混入が見られる暗褐色土層が、傾斜堆積またはレンズ状に堆積している。全体的に南東から北西方向になだれる。層厚と傾斜は変化に富んでおり、起点と終点を異にした斜面堆積の各層を正確に分層することは困難であった。土層断面を対照しながら分層を心掛け、丁寧に掘り下げを行ったものの、土層断面図作成の際には多くの新層が追加された。このように本区では、第2層群の掘削時点での堆積構造の把握が不十分であり、水平掘削によって複数層の遺物を一括して取り上げた可能性があることから、当該層からの出土遺物に関しては、日付を元に便宜的に上中下の三つのまとまりに集約して扱うこととした。このことに関する特別な処置については、出土土器の項目で説明する。第3層群としては区内の全域において、US156・US166の2層が東壁に向かって緩やかに傾斜する状況が認められた。

本区では、第2層群から最も多くの土器と動物遺存体が検出された。土器で主体を占めるのは、沈線文を施す土器(IV群4類)及びその他のIV群の土器である。その他に、続縄文土器(II群)、元地式に比定される厚手の土器(IV群10類)、擦文土器(V群)が見られる。第3層群では、若干の土器片が出土したにとどまる。動物遺存体では、海獣類は量的には少なく、アシカ科とアザラシ科が僅かに確認された。陸獣類ではブタがUS133・135・136を中心に目立って検出されている。ウニ類と魚類は多量に出土している。魚類としては、取り上げ資料ではタラ科やフサカサゴ科が多く、1Lサンプルでは、ニシン科がアイナメ科・フサカサゴ科と同じくらい目立っており、タラ科がそれに次いでいる。鳥類は7種が確認されており、量的にも他区を凌いでいる。骨角器や石器などの製品は確認されず、3点の未成品ないし截断片を検出したにとどまる。

(2) 層序と出土遺物 (図5・17～23、表1・12・20、写真1・5)

US101 旧耕作土で、近現代遺物が含まれる。掲載遺物はIV群4類の小片1点にとどまる。

US130 黒褐色砂質土層で耕作等の攪乱を受けているが、小片ながら多くの土器片が出土

している。II群やIV群1・3類が混入しているものの、IV群4類などが主体を占めている。動物遺存体としては、魚類としてタラ科、アイナメ科、鳥類ではアホウドリ科、ウ科、ウミスズメ科、哺乳類ではイヌ科・ブタ科・アシカ科が確認された。

US191 北壁土層断面に見られる黒褐色土層で少量のウニ殻・魚骨を含む。1Lサンプルでは、魚類としてニシン科・タラ科・フサカサゴ科・アイナメ科・カジカ科・カレイ科など多くの種類が確認された。

US133 ウニ殻・魚骨層。南壁を除く全ての土層断面に見られる。動物遺存体を除くと、掲載すべき遺物には恵まれなかった。ウニ殻・魚骨・貝類などを多量に含む。

US136 黒褐色土層。ウニ殻・魚骨を少量含む。本層で特に注目されるのは、IV群10類の小片(022)と擦文土器のV群a類(023)が、北壁の最上部で隣接して検出されたことである(写真1-1)。また南壁のUS197切り込み位置付近の本層最下部より、IV群4f類(039)の大きな破片が出土している(写真1-2)。このほかに本層から出土した遺物で、掲載できたものは少ないが、IV群4類(020・029)やIV群6類(030)、厚手のIV群10類(021)、II群(018)などがある。動物遺存体も多数出土している。

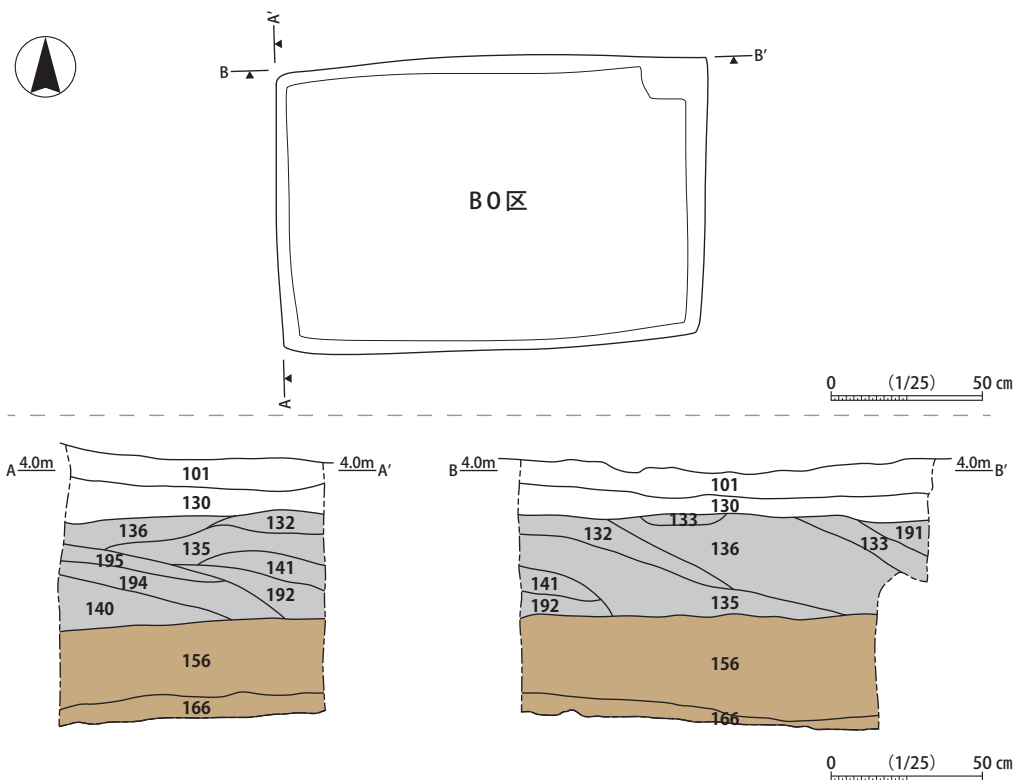


図5 BO区平面図・土層断面図

US132 北壁と西壁土層断面に見られる暗褐色のウニ殻・魚骨層で、砂を少量含む。本層出土として掲載できる土器片はⅡ群（016）とⅣ群 1a類（019）の各1点である。

US135 黒褐色の土層でウニ殻・魚骨及び砂を少量含み、多くの土器片が出土している。多くの層を包括して遺物を取り上げているため、個々の資料の層は特定できない。本層として取り上げた資料で主体を占めるのはⅣ群 4類の土器である。これらに伴って擦文土器の小片（047）が検出されている。また、Ⅳ群 1・2類やⅡ群などの古い土器片も若干混じって出土している。

US141 黒褐色土層で区内の北西角に見られる。ウニ殻・魚骨及び砂・炭化物を少量含み区内中央に向かって傾斜する。出土遺物に乏しく、掲載し得たものは、Ⅳ群 3a類（041）1点にとどまる。

US192 黒褐色土層で区内の北西角に見られる。ウニ殻・魚骨及び炭化物を少量、ロームブロックを中量含む。1Lサンプル内の動物遺存体として、魚類ではツノザメ科、ニシン科、フサカサゴ科、アイナメ科が観察される。

US195 黒褐色砂質土層で区内の南西角に見られる。ウニ殻・魚骨及び炭化物を中量、炭化物・砂を少量含む。1Lサンプル内の動物遺存体として、魚類ではニシン科、タラ科、アイナメ科が観察される。

US194 黒褐色砂質土層で区内の南西角に見られる。ウニ殻・魚骨・貝類を中量、ロームブロック・砂を少量含む。1Lサンプル内の動物遺存体として、魚類ではニシン科、フサカサゴ科、アイナメ科が観察される。

US193 黒褐色土層で区内の東壁土層断面に見られる。ウニ殻・魚骨・貝類を少量含む。魚類ではニシン科、フサカサゴ科、アイナメ科、カジカ科、カレイ科が観察される。

US158 黒褐色の砂質土層でUS196の埋土。若干のウニ殻・魚骨のみで、図化すべき遺物は出土していない。

US196 調査区の中央部で検出された土坑で、土層断面には表れない。US140から切り込まれている。

US198 US197の埋土。上位層であるUS136と基質・組成ともに相違点は無く、区分することは難しいため、推定線を引いて便宜的に分層した。掲載し得る遺物は出土していない。

US197 南壁土層断面に見られる土坑である。US140から切り込まれており、断面は砲弾型を呈する。

US140 ウニ殻・魚骨層で区内の南西角を中心に検出される。掲載し得たのは、厚手の元地式の胴部・底部（Ⅳ群 10g類）の大破片1点（048）にとどまる。本例は、US136最下部のⅣ群 4f類例（039）の直下から検出された（写真 1-3）。層位が特定される貴重な一例として注目される。動物遺存体としては、ウニ殻・魚骨・貝類を多量に含んでおり、その含有量は他層と比べてもっとも多い。

US156 黒色土層。US141の直下に堆積し、全域に広がる。大波状の沈線文とポッチを

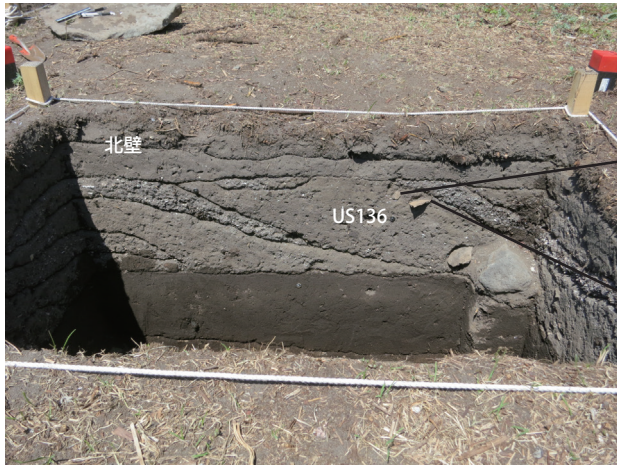


図 19-023

1

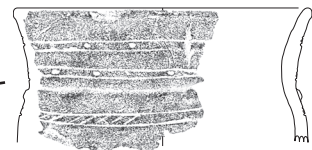


図 21-039

2

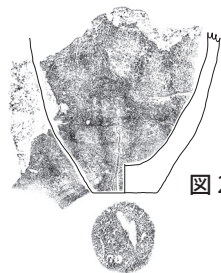


図 23-048

3

写真1 B0区の土器出土状況

有する IV 群 9 類と突瘤文の IV 群 1 類各 1 点が検出されたにとどまる。

US166 暗褐色土層。遺物の出土は少なく、IV 群 4 類 1 点が出土している。

(藤原 吉希・柳澤)

表 1 BO 区土層観察表

層序	層名 (土色)	特徴
US101	表土 (10YR2/2)	草木の根に富む表土。貝類・魚骨を僅かに含む。しまり・粘性弱。
US130	2 層：黒褐色砂質土層 (10YR3/2)	貝類・魚骨を僅かに含み、少量の炭化物を伴う。しまり・粘性弱。
US191	黒褐色土層 (10YR3/2)	ウニ殻・貝類・魚骨を少量含む。しまり・粘性弱。追加層①。
US133	3 層 (2)：ウニ殻・魚骨層 (10YR3/2)	西壁側で東に向かって傾斜堆積する。ウニ殻・魚骨を主体とした層。
US136	4 層：黒褐色土層 (10YR3/2)	区内の東壁・南壁側で厚く堆積する。ウニ殻・魚骨の混入は僅少。魚骨を少量含み、炭化物を伴う。
US132	3 層 (1)：ウニ殻・魚骨層 (10YR3/2)	BO 区西側にレンズ状に堆積。魚骨・ウニ殻・貝類を多量に含む。
US135	4 層：黒褐色土層 (10YR3/2)	US132 直下に堆積する。US133 よりもウニ殻・魚骨は少ない。
US141	黒褐色土層 (10YR3/2)	ウニ殻と貝類を少量含む。炭化物を僅かに伴う。追加層②。
US192	黒褐色土層 (10YR2/3)	ウニ殻・貝類・魚骨を少量含む。しまり・粘性強。炭化物・ロームブロックを中量含む。追加層③。
US195	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻・貝類・魚骨を中量含む。炭化物を伴う。追加層⑥。
US194	黒褐色砂質土層 (10YR2/3)	ウニ殻・貝類・魚骨を中量含む。炭化物を伴う。ロームブロックが少量混じる。追加層⑤。
US193	黒褐色土層 (10YR3/2)	貝類・魚骨を少量含む。追加層④。
US158	黒褐色土層 (10YR3/2)	US196 (ピット) の埋土。ウニ殻・魚骨を含む。
US198	黒褐色土層 (10YR3/2)	US197 (ピット) の埋土。US136 に酷似した層相を示す。
US140	4 層：ウニ殻・魚骨層 (10YR3/2)	南西の角から西壁・南壁側に緩やかに傾斜堆積し、ウニ殻・魚骨・貝類を多量に含む。
US156	黒色土層 (10YR2/1)	US141 の直下。全域で検出される。ウニ殻・魚骨の混入は僅少。しまり・粘性中。
US166	暗褐色土層 (10YR3/3)	しまり・粘性弱。発掘停止面。

3. B1a' 区

(1) 概要 (図6、表2)

本区は、B1a 区北側で魚骨層 (US152) の濃集部および倒置された元地式土器の底部を検出し、これらが土坑である可能性が考えられたことから、拡張区として設定したものである。調査区は 1.0 × 1.5m の大きさで設定し、うち南側に 0.3m 幅のベルトを設けた。US119 を検出したところで、B1a 区 US152 の濃集部は土坑ではないと判断し、ベルトを除去した。その後はベルト部分を区別せず、一括して面的に掘削をおこなった。5月3日から9日まで7日間に亘って掘り進め、記録作業ののち埋め戻して調査を終了した。

基本層序は B 地点の他の区と同様、近年の耕作土や攪乱からなる第1層群、貝層主体の第2層群、貝層群の下に水平堆積する第3層群に大別される。第2層群はおおむね南西から北東へ傾斜堆積する様相を呈しており、各貝層間には砂層がみられる。攪乱により不明瞭ではあるが、貝層の堆積はより北側に連続する可能性がある。

遺物は、土器・石器・骨角器・動物骨・魚骨・貝類が出土している。土器については、第1、第3層群で II、IV、V 群の土器が、第2層群では一部 II 群の土器もみられるものの、IV 群の土器が主体となる。

(2) 層序と出土遺物 (図6・24～45、表2・13・19～20、写真4～5)

US101 表土。堆積1層。B区全体で検出される。黒褐色砂質土を基質とし、草木根に富む。遺物は土器のほかに動物骨、貝類、現代遺物がみられる。II群、III群、IV群2類の土器が出土している。

US102 堆積2層。B区全体で検出される。根を多く含む黒褐色土層。近現代遺物がみられることから、近現代の攪乱を受けていると考えられる。遺物は、土器を主体として動物骨、貝類が出土しており、土器には IV 群 4a 類、V 群 a 類のものがみられる。US101 からこの層までが第1層群であるが、動物遺存体としてオットセイ (メス) ほか海獣類、哺乳類が確認されている。

US103 近現代の攪乱面。B区全体で検出される。US102 に覆われる。

US173 ウニ殻、魚骨、アワビ類を含む混土貝層。土色は黒褐色である。遺物は土器、獣魚骨が多数出土しており、人骨、貝類、剥片、テフラを含む。土器は続縄文土器 (II 群)、オホツク式土器 (IV 群 1～4・6・8 類)、擦文土器 (V 群) がみられる。人骨については2点出土しており、内訳は大腿骨近位、頭骨片が1点ずつである。動物遺存体として、海獣類の寛骨 (座骨) と哺乳類の腓骨とみられるものが確認されている。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、魚骨はニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・カレイ科等が確認されている。

US159 黒褐色土層で、貝類、魚骨が混入する。遺物は土器、獣魚骨、貝類が多数出土し、石器、骨角器、ヒトの可能性のある骨、テフラ類や石器剥片類を含む。多様な土器が出土

しているが、掲載したもののうち続縄文土器（Ⅱ群）2点を除いて、すべてオホーツク式（Ⅳ群）に属するものである。石器は尖頭器の基部が1点出土している。また、骨角器については用途不明の製品1点が出土している。ヒトの尺骨の可能性が高いとの同定結果を得た骨も1点みられる。動物遺存体についてはキタキツネ、ブタ、アシカ科、種不明陸獣類・海獣類が出土している。中でもブタとアシカ科が目立ち、ブタの大腿骨には切創痕がみられる。1Lサンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・アイナメ科・カレイ科等の魚類などの動物遺存体のほか、1点鉄製品が確認されている。

US164 黒褐色土に褐色土がブロック状に入る層で、B1a'区南西端にみられる。攪乱を受けており、現代遺物が数点出土している。

US119 堆積8層。黒褐色土層。この層以下はほぼ水平な堆積を示す。出土資料としては土器のほか、剥片、スコリア、自然石がみられる。土器はⅣ群2・4・6・8類、Ⅴ群が確認された。

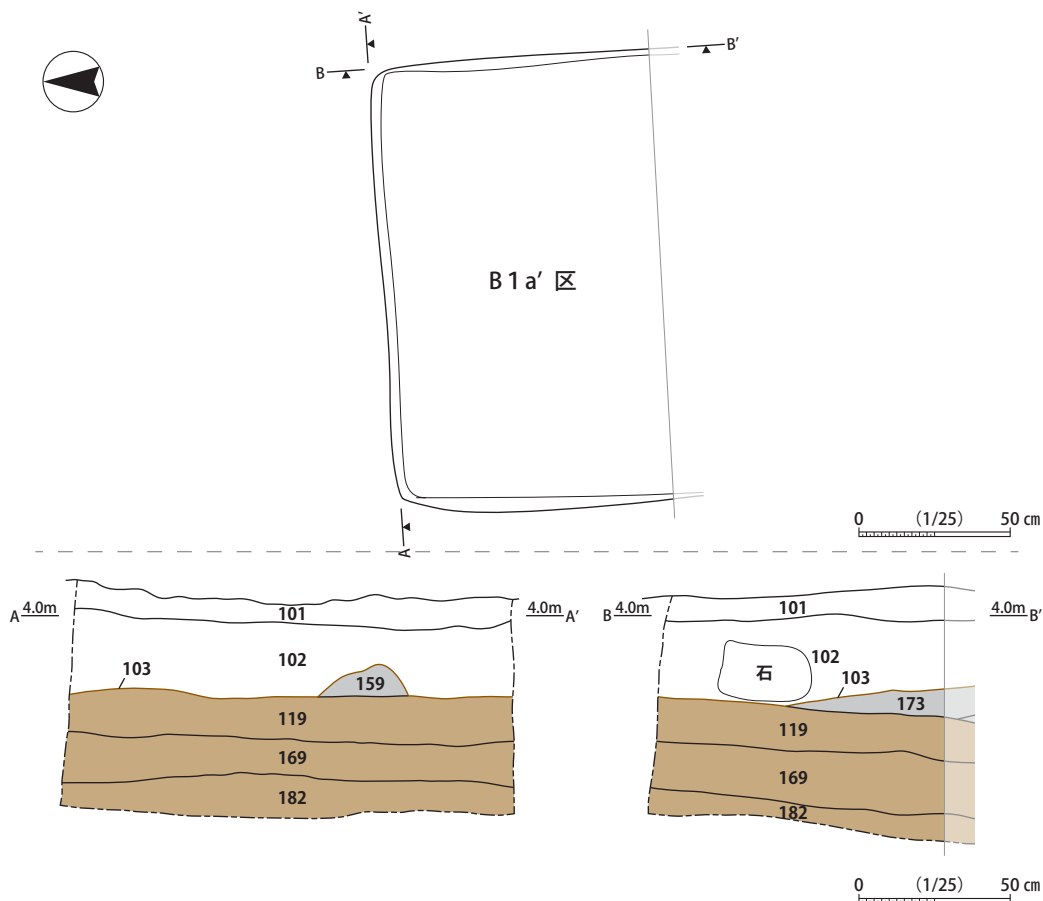


図6 B1a'区平面図・土層断面図

US169 堆積9層。US119の直下に水平に堆積する。土色はUS119と同様であり、色調による分層は困難であるが、こちらのほうがしまりが強い。遺物は検出されなかった。

US182 にぶい黄褐色土層。地山層である。遺物は検出されなかった。 (箱石 幸祐)

表2 B1a'区土層観察表

層序	層名 (土色)	特徴
US101	表土 (7.5YR2/2)	旧耕作土。黒色砂質土を基質とし、草木根に富む。遺物は土器のほかに動物骨、貝類、現代遺物がみられる。
US102	黒褐色土層 (7.5YR2/2)	根を多く含む黒褐色土層。旧耕作土。現代遺物がみられ、土器を主として動物骨、貝類が出土している。
US164	黒褐色土層 (7.5YR2/2)	B1a'区南西端に見られる黒褐色土に褐色土がブロック状に入る層。攪乱があり、現代遺物が数点みられる。
US159	黒褐色混貝土層 (5YR2/2)	黒褐色砂質土層。土器、獣魚骨、貝類が多数出土し、石器、骨角器、人骨?、テフラ類や剥片類を含む。攪乱を受けており、残存するのは一部のみ。しまりやや弱・粘性弱。
US173	黒褐色混貝土層 (7.5YR3/1)	傾斜堆積の貝層。ウニ殻・魚骨、アワビ他貝類を含む。土器、獣魚骨が多数出土し、人骨、剥片、テフラを含む。しまり・粘性弱。
US119	黒褐色土層 (10YR2/2)	この層以下はほぼ水平な堆積を示す。遺物は土器を主体とし、剥片、スコリアがみられる。しまりやや強。
US169	黒褐色土層 (10YR2/2)	US119と同じ土色だが、しまりが強く遺物を含まない。
US182	にぶい黄褐色砂質土層 (10YR4/3)	地山層と推測される。しまり・粘性中。遺物を含まない。

4. B1a区

(1) 概要 (図7、表3)

本区は、第1次調査でB1区掘削の際に人骨を伴う土壌(DK1)が確認されたことによる拡張区であり、B1区北側に隣接して1.0×1.5mの規模で設定されたものである。昨年度にDK1を一部掘削した状況で調査を停止し、埋め戻していたが、現状を回復したうえでUS112より本年度の調査を開始した。4月28日から5月9日までの11日間に亘って調査をおこない、地山層(US119)を検出した段階で調査を終了、その後記録作業および埋め戻しをおこなった。なお、US146の北壁付近において、貝層の濃集部とそれに伴う倒置された元地式深鉢の底部下半を検出し、土壌の可能性があると判断したため、北側に隣接してB1a'区を拡張している。

堆積状況としてはB1調査区内の他の区画と同様に、耕作土や近年の攪乱からなる第1層群、貝層主体の第2層群、第2層群下で水平堆積する第3層群に大別される。第2層群はおおむね南東側から北西側へ斜面堆積しており、各貝層間には砂層が確認された。

遺構は、昨年度の調査で土壌が3基確認されている(DK1、DK3、DK4)。DK1は人骨を伴う土壌であり、今回の調査で新たに3点の成人人骨が確認された。DK3については昨年度の調査で掘削を終了している。DK4については出土した骨は人骨ではないと同定されており、またB1a'区側において、覆土(US111)中に現代遺物の混入がみられることから、後世に攪乱されていると考えられる。

遺物については土器、剥片類、人骨、動物骨、貝類が出土している。土器については、昨年度調査の第1層群では攪乱により混在している土器群、今回調査の第2層群ではオホーツク式土器群(IV群)および若干の擦文土器(V群)、第3層群ではIV群がほぼ全てを占める、といった出土傾向が観取される。また、動物骨、貝類については第3層群ではみられない。

(2) 層序と出土遺物 (図7・24～45、表3・13、写真2)

US101 表土。耕作土であり草木根を多く含む。昨年度調査済みである。

US102 堆積2層。昨年度に調査済みだが、土層断面精査中に新たに土器、動物骨、現代遺物が出土した。土器は掲載していない。動物遺存体としては哺乳類とみられる骨片が確認されている。

US105 DK1土壌の埋土第1層。遺物は土器21点、人骨3点、動物骨多数、貝類5点、炭化木材1点が出土した。土器は1点を掲載しており、IV群4b類に分類される。人骨については頭骨2点、肋骨1点でいずれも成人と同定された。これらはすべてDK1の壁際より出土している(写真2)。また、昨年度の調査で得られた一部の遺存骨には切創痕らしき損傷がみられる。1Lサンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、動物遺存体は貝類、ウニ類、ニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・その他魚類、鳥類、哺乳類が検

出された。

US190 昨年度に未調査であった、US105 下の DK1 土壌 (US104) の埋土第 2 層。土器、動物骨が出土している。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・アイナメ科等の魚類、海獣類が確認された。

US104 DK1 土壌。形態は直径約 70cm のほぼ正円で深さ 40cm を測る。US204、US112 を切る。土壌中心より北東方向の US204 の直上には長辺 50cm、短辺 30cm を測



写真 2 DK1 人骨出土状況

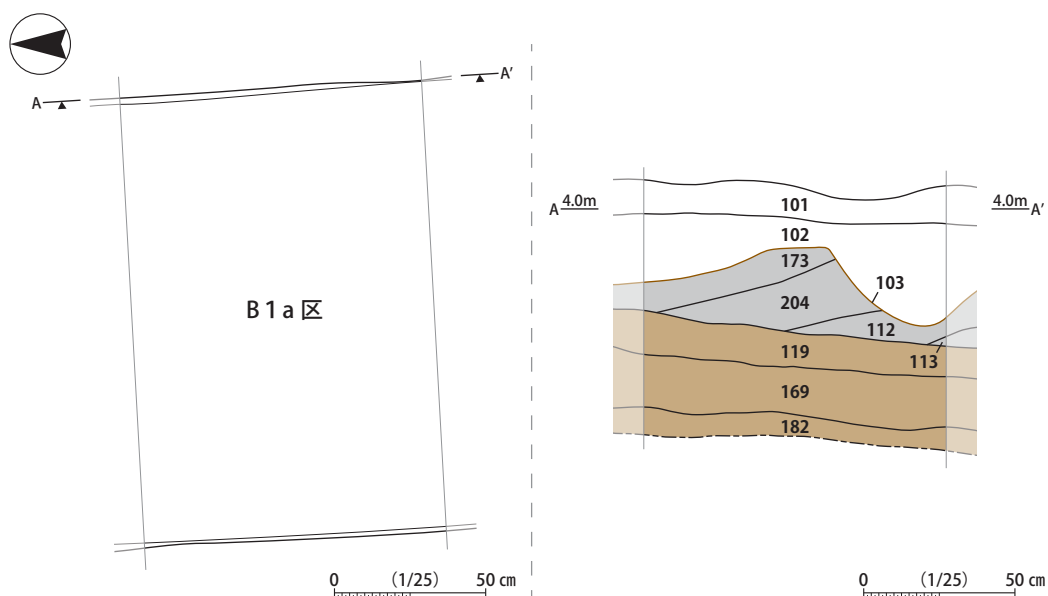


図 7 B1a 区平面図・土層断面図

る不整長方形、厚さ 5cm 程度の平石がみられた。土層掘り込み面と同一面に置かれ、貝層の堆積に沿って傾斜しているとみられる。

US109 DK3 土層の埋土。昨年度調査済みである。動物遺存体としては哺乳類とみられる骨片が出土している。

US108 DK3 土層。土層断面では不明瞭である。推定径 60cm で平面形はほぼ正円、確認された深さは 10cm 程度である。上部が攪乱により消失していると考えられる。

US111 DK4 土坑 (US110) の埋土。現代遺物がみられ、近年の攪乱が想定される。今回調査で新たに土器 15 点、現代遺物 1 点、動物骨 3 点が出土している。土器は 3 点を掲載しており、内訳は IV 群 4a 類が 1 点、V 群 a 類が 2 点である。

US110 昨年度の調査で DK4 土坑としたものだが、攪乱を受けており不明瞭である。平面形は不整形で長さ 50cm 以上、幅約 60cm、深さ約 30cm を測る。土層断面においても観察は困難である。

US174 三角形の砂だまり状に検出された茶褐色土層で、動物骨、貝類を含む。遺物は土器 9 点、動物骨 11 点が検出された。土器は 3 点を掲載しており、IV 群 6b 類 2 点、IV 群 8b 類が 1 点である。動物遺存体としてはクジラ目ほか、海獣類がみられる。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US173 堆積 3 層。暗褐色混貝土層で、ウニ殻、魚骨、アワビ類を含む。B1a 区北側で濃集し、直上から元地式の土器底部が出土した。遺物は土器 12 点、人骨 1 点、動物骨 6 点、貝類 7 点、炭化木材 1 点が検出された。土器は 3 点を掲載し、内訳は IV 群 10g 類、IV 群 2a 類、IV 群 8a 類が各 1 点である。人骨については椎骨と同定されている。動物遺存体としては海獣類、哺乳類とみられるものが出土した。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、エゾアワビ・タマキビガイ、ウニ類、フジツボ類、ツノザメ科・ニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US204 US173 と US112 の間にやや厚く堆積する土層。遺物は土器 11 点、動物骨 3 点、貝類 3 点が出土している。土器は 4 点を掲載しており、内訳は IV 群 3b 類、IV 群 2a 類、IV 群 8c 類、IV 群 4a 類のものが各 1 点である。

US112 昨年度調査の B1a 区ウニ殻・魚骨層①に相当する。遺物は土器 3 点、動物骨 2 点が出土している。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、エゾアワビ、ウニ類、ニシン科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US113 極暗褐色砂質土層で、魚骨、貝類、ウニ殻が若干量混入する。遺物は土器 4 点、動物骨 1 点、貝類 1 点、剥片 1 点が出土している。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US119 堆積 8 層。黒褐色土層。遺物は土器 25 点が出土している。土器は 8 点を掲載し、内訳は III 群、IV 群 2d 類、IV 群 4a 類、IV 群 4b 類のものが各 1 点ずつ、IV 群 4f 類、IV

群8b類のものが各2点ずつである。

US169 堆積9層。US119の直下に水平に堆積する。土色はUS119と同様であり、色調による分層は困難であるが、本層のほうがかしまりが強い。遺物は検出されなかった。

US182 にぶい黄褐色土層。遺物は検出されなかった。地山層と推測される。

US0 排土中や前回調査の埋め戻し土より、土器4点、動物骨3点、剥片1点が出土した。土器2点を掲載し、内訳はIV群8c類、IV群6a類が1点である。動物遺存体としてはオートセイ(メス)ほか哺乳類が確認されている。(箱石)

表3 B1a区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土(7.5YR2/2)	旧耕作土。黒色砂質土を基質とし、草木根に富む。本年度では遺物は出土していない。
US102	黒褐色土層(7.5YR2/2)	旧耕作土で、草木根を含む。現代遺物がみられ、土器を主体として動物骨、貝類が出土している。
US109	黒色砂質土層(10YR2/1)	DK3土壌の埋土。昨年調査済みである。動物遺存体としては哺乳類とみられる骨片が出土している。
US105	黒褐色砂質土層(10YR3/2)	DK1土壌の埋土第1層。しまり・粘性弱。小礫を含む。土器、人骨、動物骨、貝類がみられる。
US190	黒褐色土層(7.5YR2/2)	DK1土壌の埋土第2層。しまり・粘性中、US119よりはしまりが弱い。東側に傾斜し、底面はやや波打つ。
US111	黒褐色砂質土層(10YR2/2)	DK4土壌の埋土。現代遺物がみられ、近年の攪乱が想定される。遺物は土器、動物骨がみられる。
US159	黒褐色混貝土層(5YR2/2)	黒褐色砂質土層。土器、獣魚骨、貝類が多数出土し、石器、骨角器、人骨、テフラ類や剥片類を含む。攪乱を受けており、残存するのは一部のみ。
US174	黒褐色土層	三角形の砂だまり様に検出された。貝類・獣骨を含む。遺物は土器、動物骨がみられる。
US173	黒褐色混貝土層(7.5YR3/1)	堆積3層。ウニ殻・魚骨層。アワビ類を含む。北壁中央部付近で濃集する。
US204	黒褐色土層(7.5YR2/2)	US173とUS112の間にやや厚く堆積する土層。東壁土層断面のみに観察される。
US112	暗褐色混貝砂層(10YR3/3)	前回調査のウニ殻・魚骨層①に相当する。ウニ殻、魚骨を多量に含み、しまり・粘性弱。
US113	極暗褐色砂質土層(7.5YR2/3)	しまりやや強、粘性中。魚骨、貝類、ウニ殻が若干量混入する。遺物は土器、獣骨、貝類、剥片が出土している。
US119	黒褐色土層(10YR2/2)	しまりがやや強い黒褐色土層。遺物は土器のみである。
US169	黒褐色土層(10YR2/2)	色調はUS119と同様であるが、しまりが強く遺物を含まない。
US182	にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3)	地山層と推測される。しまり・粘性やや弱い。遺物を含まない。

5. B1区

(1) 概要 (図8、表4)

第1次調査では、DK1～3の土壌3基を第2層 (US102) 直下で検出し、それぞれ区内において壙底面まで掘り下げ、第8層 (US119) の上面で調査を停止していた。各壁面に対してはUS119の掘り下げを若干行い、図面上の堆積状況が明瞭になるように計らった。

今回調査においては、B1a区側の調査の進展を待ち、それが完了してからUS119を掘り下げ、以下US169から地山層のUS182まで掘削して、調査を終了した。

US119は、B1a区側からみると南東方向に緩やかに傾斜している。散漫ながら小さな土器片を包含するが、動物遺存体をまったく含まない、しまりのよい黒褐色の土層である。それ以下のUS169、182では遺物が検出されない。なお土器片の大半はIV群4類であり、IV群1類と2類の古いものが僅かに含まれる。

なお本区では、DK1の壙底面付近と考えられる位置 (西壁から80cm、北壁から25cm) において、裏返し状態の小型ソーメン文土器片を検出した。出土状況を示す記録を欠いているが、略測した位置からはDK1の壙南壁付近に相当することから、US112上面を掘り込んで構築されたDK1土壌に伴うものと推定される。

(2) 層序と出土遺物 (図8・24～45、表4・13)

US105 (DK1埋土) 昨年度調査したDK1 (US104) の埋土が一部残存していたもの。上述のように小型のソーメン文土器1点が検出されたが、US119の土器群とは明らかに時期を異にするものである。DK2の検出面直下で検出されたソーメン文土器 (第1次報告：図44-247例) よりも、一時期古いものに比定される。

US119 (旧8層) ウニ殻・魚骨層が互層をなしていた第2層群に比べると、その直下に当たる本層では、遺物の出土量が急減する。これは、本来の遺物包含部がDK1によって切られていることに起因すると考えられる。土器の断面は風化しておらず、遺棄されたときの状態を保っている。接合するものはなく、すべて断片である。掲載できたものは僅か9点にとどまる。そのうち7点は刻文と沈線を併用するものや摩擦式浮文を伴う土器群 (IV群4・6・8類) で占められている。時期的には、まとまりの良い資料といえる。その他に、古い突瘤文の小片 (156) や刻文土器 (158) なども、各1点検出された。本層では、石器・骨角器類などは検出されていない。

US169 (旧9層) US119に比べると、しまりや粘性はやや弱く、区内の全域に分布している。北壁・東壁側では、部分的に風化した石屑・石塊を含んでおり、やや硬くしまっている。本層でも、動物遺存体や石器・骨角器類は検出されていない。 (柳澤)

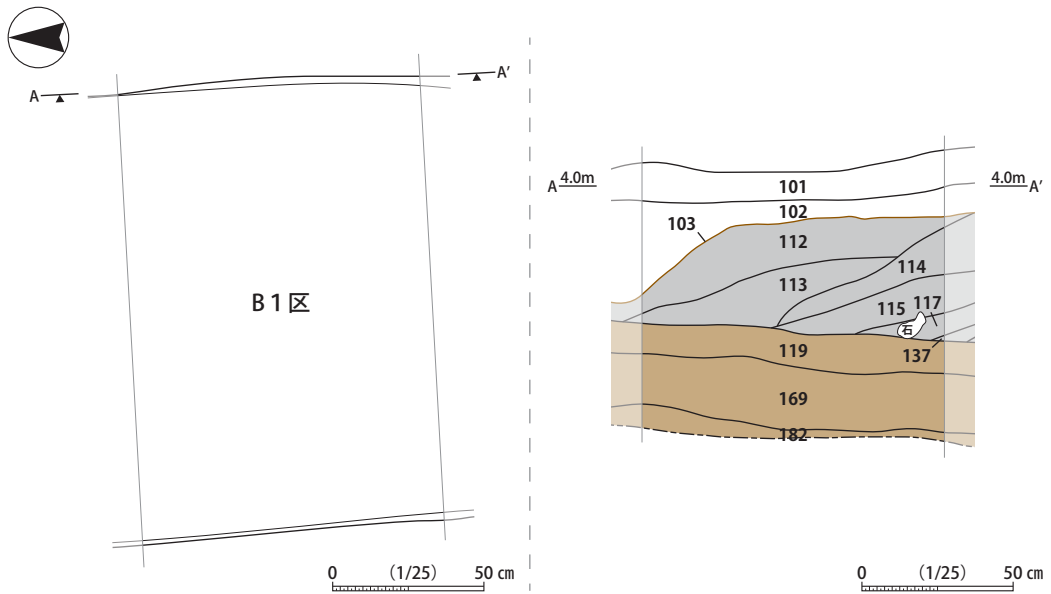


図8 B1区平面図・土層断面図

表4 B1区土層観察表（今回調査分のみ）

層序	層名（土色）	特徴
US105	黒褐色砂質土層 (10YR3/2)	DK1埋土。有機物と多量の小石を含む。US102(旧2層)に比べ、魚骨や貝類、ウニ殻などを相当量含む。土壌は、US119の上面から掘り込まれており、埋土はその面までほぼ均一な様相で堆積し、人骨の断片を伴う。
US119	黒褐色土層 (10YR2/2)	旧8層。非常にしまりが強く、硬く堆積。区内の全域に分布し、南東方向に緩やかに傾斜する。しまり・粘性強。土器小片を散漫に包含する。
US169	黒褐色土層 (5YR2/1)	US119に比べ、しまり・粘性はやや弱い。区内の全域に広がり、部分的に風化した石屑・石塊を含む。遺物は出土しない。

6. B1b 区ベルト

(1) 概要 (図9、表5・6)

本ベルトは B1b 区と B1 区の間にあたる部分に位置する。B1 区の調査終了後、5月7日より3日間に亘って断続的に掘り進めた。0.5 × 1.5m の範囲で設定し、B1・B1b 区の土層堆積の関連性を観察すること、DK2 土壌プランを確定すること、出土遺物の層的な変化を捉えることなどを目的として調査を行った。

調査の結果、本ベルトは B1b 区と B1 区に中心を持つ文化層の境界部分にあたることが明瞭に捉えられた。他方 DK2 のプランについては不明瞭な点が多く、推定するにとどまった。調査範囲が狭いことから出土遺物は相対的に少量であったが、土器組成という点では、以下のとおり層的に重要な所見を得ることができた。

他区と同様にベルト内の堆積層は大きく三分される。第1層群は表土とその直下の堆積層で、大部分が近現代に攪乱されていると考えられる。掲載すべき出土遺物は見当たらない。ついで B1・B1b 区に連続するウニ殻・魚骨層と砂層からなる傾斜堆積層群が検出される。これらを一括して第2層群として捉える。第2層群内では時期に大きな差はなく、沈線文を施す土器 (IV 群 4 類) を主体とする。その他に厚手の元地式 (IV 群 10 類) も見られる。擦文土器 (V 群) は検出されていないが、B0 区に似た出土傾向を示している。US119 以下は、土層断面図に見えるように、緩傾斜の堆積土層へと移行する。地山への漸移層である US169・182 までを含めて第3層群として捉えるが、遺物の出土は US119 に限定される。IV 群 1 類の古い土器も混在するが、大部分は第2層群に類似した IV 群 4 類に限定され、B1 区の様相と共通している。排土 (US0) から、同時期の土器片が採集されており、US119 に由来するものと推定される。なお以下では動物遺存体について、1L サンプルのデータも加えて適宜記載する。

(2) 層序と出土遺物 (図9・24～45、表5・6・13・20、写真5)

US101 (旧1層) 表土層。出土遺物は少なく、掲載し得る土器片も無い。

US102 (旧堆積2層) 土器は小破片が多く、文様を有し掲載できるものに乏しい。動物遺存体も少なく、人工的な遺物も検出されていない。1L サンプルは未採取である。

US103 (攪乱面) 東壁側において、傾斜堆積する多くの層を切り込み椀状に広がる近現代の攪乱面である。

US107 (DK2 埋土) 埋土の堆積状況や内容は昨年度の第1次調査における B1 区での所見と特に変わらない。土壌内から出土した土器で掲載できたのは僅かに IV 群 4b 類の破片 1 点 (066) である。人骨は破片を含めて、1・2 次を通じ検出されていない。動物遺存体としては、エゾタマキガイ 1 点が確認されたにとどまる。

US106 (DK2) 昨年度の第1次調査において B1 区で検出された土壌。残念ながらベルト自体が B1 区・B1b 区における土層堆積の境界にあたるため、切り込み面や大きさなど

は判然としない。残存部分からの推定になるが、平面は約 80 × 90cm の卵形を呈し、断面形は底面が広く、深さは約 16cm で、全体として皿状の形態になると考えられる。

US112 (旧堆積 3 層) ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む土層である。層相は昨年度と変わらないが、出土遺物に乏しい。1L サンプルは未採取である。

US113 (旧堆積 4 層) 本層でもウニ殻、魚骨、貝類をある程度含んでいるが、やはり出土遺物に乏しい。掲載できる土器片も存在しない。

US114 (旧堆積 5 層) ウニ殻、魚骨を多量に含む層である。東壁に向かって急傾斜で堆積する。動物遺存体は豊富に検出されたが、他の遺物で掲載できるものは出土していない。貝類は、イガイ・タマキビガイ科の 2 種にとどまる。ウニ類が多い。魚類では、アイナメ科・ニシン科が目立ち、タラ科・フサカサゴ科なども若干含まれている。

US115 (旧堆積 6 層) 暗褐色の砂層で、本層も東壁に向かって傾斜堆積する。出土遺物に乏しく、動物遺存体では微量の海獣類が検出されたのみである。

US116 (旧堆積 7 層) 褐色砂を基質として、ウニ殻や魚骨を多量に含む層である。西壁から東壁に向かって傾斜堆積する。出土遺物は少なく、土器で掲載し得たのは僅か 2 点にとどまる。113 例 (IV 群 2a 類) と元地式に比定される厚手の破片 (IV 群 10d 類) である。骨角器として、本層の上面で骨鋤の断片が 1 点出土している (479)。動物遺存体としては、ブタ、アザラシ科を含む海獣類、ウミスズメ科を含む鳥類が観察される。貝類は 8 種が検出された。タマキビガイ類が目立ち、イガイやウバガイ、エゾアワビ・エゾチヂミボラ・ヒメエゾボラなども確認された。これらはフジツボ類とともに、僅かに伴う程度である。それに対して、ウニ類は多量に検出されており、魚類では、アイナメ科が最も多い。ついでニシン科・フサカサゴ科・タラ科と続き、カレイ科は微量であった。

US117 (旧 7 層下間砂層) US116 下で東壁に向かってしだいに厚さを増して堆積する砂層である。本層でも出土数は少ないが、興味深い土器片が検出された。沈線を引いた肥厚口縁部を有し、頸部に大きな鋸歯文をえがく 116 例、幅広い口縁部端に爪形文を施し、手捏ね風な作りの 117 例、それに元地式に比定される厚手の 118 例、続縄文土器の 115 例である。また、動物遺存体も若干量が検出されている。海獣類のオットセイ、鳥類のアホウドリ科、貝類、ウニ類が僅かに出土している。魚類ではややタラ科が目立ち、ニシン科・アイナメ科・カレイ科などがそれぞれ少量含まれている。

US137 暗褐色砂質土層。ウニ殻、魚骨、貝類を多く含む。B1b 区側からの堆積層で、ベルト内で末端が収束する。出土遺物に乏しく、IV 群 4b 類 2 点が検出されたにとどまる。動物遺存体も掘削時には鳥類 1 点が出土したに過ぎないが、1L サンプル中より、かなりの種数が確認された。貝類ではイガイとタマキビガイなど、ウニ類も含まれている。魚類では 7 種が確認された。アイナメ科・ニシン科が目立つほか、フサカサゴ科・タラ科・ヒラメなどが続き、カジカ科も僅かに伴っている。魚骨をやや多く含み、海獣類や鳥類の遺存骨に乏しい点が特徴的といえよう。

US203 暗褐色砂質土層。US137 と US142 の間層に相当する。出土遺物に乏しい。若干

の魚骨が出土しているが、1L サンプルが未採取のため、詳細は不明である。

US142 黒褐色砂質土層。ウニ殻、魚骨、貝類を多く伴う。B1b 区から連続する層で、その末端がベルト内で収束する。土器の出土は乏しいが、動物遺存体は豊富に検出されている。貝類は 8 種、タマキビガイ類を筆頭にして、イガイ・エゾチヂミボラなどが目立ち、エゾアワビ・ヘソアキクボガイ・ヒメエゾボラは、ごく僅かに検出された。ウニ類が多く含まれている。魚類も豊富に含まれており、約 10 種が確認された。タラ科が目立っており、それにアイナメ科・フサカサゴ科・ニシン科が続く。その他ではカジカ科・カレイ科の存在も注目される。また点数は少ないが、ツノザメ科やネズミザメ科も検出されている。鳥類ではアホウドリ科が 1 点のみ、陸獣類としては、ブタが多く、他にアシカ科・アザラシ科等の海獣類が僅かに確認された。

US150 US142 の下部にある暗褐色砂層（旧 US142 間砂層）。ウニ殻、貝類、魚骨を少量含む。B1b 区側からベルトに向かって傾斜する。

US199 黒褐色砂質土層。US150 の下部に堆積（旧 US142 下部）し、魚骨、貝類、ウニ殻などを多量に含んでいる。B1b 区から連続する層で、ベルト内でその末端が収束する。US142 と同じ砂質土層であるが、動物遺存体の包含量ははるかに少ない。掘削時の出土例は無く、1L サンプル中より各種の遺存骨が確認された。貝類は微量で 1 種に止まる。ウニ類は多く含まれており、魚類も 6 種が確認された。アイナメ科が最も多く、ついでニシン科が目立つ。タラ科・フサカサゴ科はやや少なく、カジカ科・カレイ科はごく僅かに検出された。海獣類や鳥類などを含まない点が、本層の特徴である。

US143 黒褐色砂層。魚骨、貝類を僅かに含む B1b 区から連続する層で、東壁側においてごく僅かに堆積する。出土遺物に乏しい。動物遺存体の出土は無く、1L サンプル中でも、貝類、ウニ類、魚骨などが、それぞれ若干量検出されたにとどまる。

US160 黒褐色砂質土層。ウニ殻、魚骨を僅かに含み、調査区の東側で堆積し始める層である。出土遺物に乏しい。

US119 (旧堆積 8 層) 黒褐色土層。非常にしまりが強い堆積層で、ベルト内の全域に広がり南東に向かって緩やかに傾斜する。動物遺存体は検出されていない。上位の層に比べると、小面積ながらもかなりの土器片が出土した。刻文と沈線文を併用する IV 群 4 類をはじめとして、刻文土器（160）、十和田式土器（159）などが含まれており、B1 区の US119 に類似した傾向を示している。

US186 (焼土②) 暗褐色土層。B1b 区の焼土①（US167）と同レベルの東寄りの地点で検出された。直径約 25cm のほぼ円形で、5～10cm の厚みを有する。無遺物である。

US187 (焼土③) 暗褐色土層。US186 と同レベルでベルト中央において検出された。楕円形を呈し、25×40cm の大きさで、5～10cm の厚みを有する。無遺物である。

US169 黒褐色土層。しまり・粘性ともにやや強い土層であり、ベルト内全域に堆積する。無遺物層である。なお US119 との境界は、漸移的で明瞭には捉えられない。

US182 鈍い黄褐色砂質土層で、地山層に相当する。しまりはやや弱く、粘性に乏しい。

直径 2cm 程度の固結した粘土粒を含む。無遺物層である。

(柳澤)

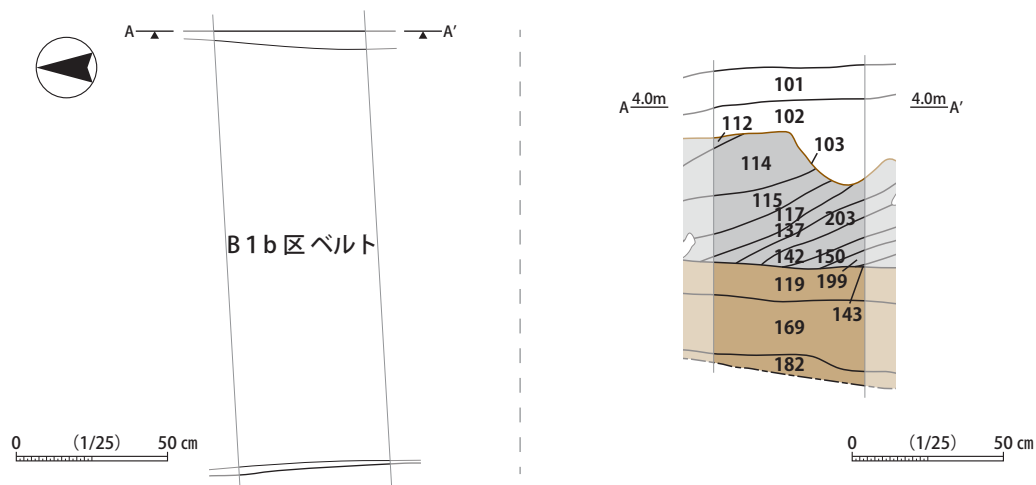


図9 B1b区ベルト平面図・土層断面図

表5 B1b区ベルト土層観察表(1)

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土(7.5YR2/2)	草木根を多量に含む旧耕作土。黒褐色の砂質土層。しまり・粘性弱。
US102	黒褐色砂質土層(7.5YR2/2)	旧堆積2層。黒褐色の砂質土層。有機物と多量の小石を含む。しまり・粘性弱。
US107	黒褐色砂質土層(10YR2/3)	DK2埋土。有機物、礫・小石を多量に含む。ウニ殻を主体として、魚骨、貝類を多量に伴う。底面では、US116と区別できない部分がある。
US112	暗褐色砂質土層(10YR3/3)	旧堆積3層。ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含み、土質分に乏しい。しまりやや弱、粘性弱。B1b区からB1bベルトにかけて堆積し、北側に傾斜する。直径5～8cmの砂溜まりを含む。
US113	黒褐色砂層(10YR2/2)	旧堆積4層。ウニ殻、魚骨、貝類を少～中量含む。直径3～5cmの砂溜まりが数箇所に存在する。しまり・粘性弱。本区のみ堆積。
US114	ウニ殻・魚骨層②(7.5YR3/4)	旧堆積5層。褐色砂に茶色の成分が含まれ、ウニ殻、魚骨を多量に含む。B1区の東壁側に向って急傾斜で堆積している。砂質土層。しまり・粘性弱。

表6 B1b区ベルト土層観察表(2)

層序	層名(土色)	特徴
US115	黒褐色砂層(10YR2/3)	旧堆積6層。黒褐色の砂層。土質分に乏しい。B1区の東壁に向かって傾斜する。しまり・粘性弱。
US116	ウニ殻・魚骨層③(10YR2/3)	旧堆積7層。褐色砂に多量のウニ殻・魚骨を含む。砂質土層で、B1区の南壁側を含むベルト部で検出される。東壁に向かって緩やかになだれながら薄層化する。しまり・粘性弱。
US117	暗褐色砂層(10YR3/3)	旧堆積7層下間砂層。湿り気のある暗褐色の砂層で、ごく少量のウニ殻、魚骨、貝類を含む。しまりやや強、粘性弱。
US137	暗褐色砂質土層(5YR2/2)	ウニ殻、魚骨、貝類を多く含む。B1b区側からの堆積層でベルト内で収束する。しまり・粘性弱。
US203	黒褐色砂質土層(10YR2/2)	US137とUS142上部の間層。魚骨を少量含む。しまり・粘性やや弱。
US142	黒褐色砂質土層(10YR3/1)	ウニ殻、魚骨、貝類を多く伴う。B1b区からベルトに向かって厚く堆積し、収束する。しまり弱、粘性やや弱。
US150	黒褐色砂層(10YR3/1)	US142の下部にある黒褐色砂層(旧US142間砂層)。ウニ殻、貝類、魚骨を少量含む。B1b区側からベルトに向かって傾斜する。しまり・粘性弱。薄く均一な層。
US199	黒褐色砂質土層(10YR2/2)	US150の下部に堆積(旧US142下部)。魚骨、貝類、ウニ殻を多量に含む。しまりやや弱、粘性弱。B1b区から連続する層。
US143	黒褐色砂層(10YR3/1)	魚骨、貝類を僅かに含む。しまり・粘性弱。B1b区から連続する層で、東壁側に僅かに堆積する。
US160	黒褐色砂質土層(10YR2/2)	ウニ殻、魚骨を僅かに含む。調査区南東角付近に堆積する。しまり・粘性やや弱。
US119	黒褐色土層(10YR2/2)	旧堆積8層。非常にしまりが強い堆積。ベルト内の全域に分布し、南東方向に緩やかに傾斜する。
US186	黒褐色土層(10YR2/3)	焼土②。焼土①と同レベルでベルト内に堆積。しまりやや弱、粘性中。
US187	暗褐色土層(10YR3/4)	焼土③。焼土①・②と同レベルでベルト内に堆積。しまりやや弱、粘性中。
US169	黒褐色土層(5YR2/1)	しまり・粘性やや強。全域に堆積する。US119との境界は不明瞭。
US182	にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3)	地山層に相当する。しまりやや弱、粘性弱。直径2cm程度の固結粘土粒を含む。

7. B1b区

(1) 概要 (図 10、表 7)

B1b区はB1区の南側に南北1.0m×東西1.5mの大きさに設定し、5月1日から15日間に亘って調査を行った。堆積状況は、第1層群(US101～103)・第3層群(US119～182)がおおむね水平堆積であるのに対し、第2層群(US137～202)は南北に急傾斜で堆積している。このため、調査区内の第2層群においては、北壁と南壁、東壁と西壁それぞれにおいて堆積層が対応せず、狭い範囲ながらも複雑な様相が観察された。

第1層群はUS101・102の2層で構成され、草木根を多く含む。水平に堆積し、区内全域で見られる。南半部については、第2層群中の混貝土層からの混入が多い。US137からUS202までの第2層群については、土層断面図作成時の観察及び整理時の検討の結果、調査時点では傾斜堆積状況の認識が不十分であったことが確認された。そのため、遺物の取り上げ層位を正確に特定することが難しく、第2層群出土の遺物に関しては出土した日付を元に上中下に三等分して処理している。このことについては、III-1で詳述する。第3層群は第1層群と同様にほぼ水平堆積である。US161・165は区内全域に広がる。US161は昨年度のB1区8層に相当し、US165はB1区9層に対応すると考えられる。調査区の南東隅のUS165上面では焼土(US167)を検出した。それより下位のUS182は地山層となる。遺物を含まない本層上面で調査を終了した。

遺物は、土器、石器、骨角器、獣骨、魚骨、貝類が出土している。このうち、獣骨、魚骨、貝類は第2層群中に多くみられる。土器片は150点ほどを数える。堆積第2層(US102)からは、ガラスなど近現代遺物が出土していることから、堆積第1層(US101)と堆積第2層は近現代の耕作などに伴う攪乱層であると推測される。第2層群は厚く互層をなして堆積しており、大半の遺物が集中して検出された。土器片をはじめ、海獣骨、陸獣骨、鳥骨、魚骨、貝類が多く出土している。土器は、上層からは沈線文を施す土器(IV群4類)が出土している。第2層群の中では、中層から最も多くの土器片が発見された。摩擦式浮文を施す土器(IV群6類)が主体を占め、ほかに突帯を施す土器(IV群1類)、刻文を施す土器(IV群2類)、無文土器(IV群8類)などが出土している。また擦文土器(V群)も、ごく少片ながら1点が出土している。下層では突瘤文・突帯を施す土器(IV群1類)と摩擦式浮文を施す土器(IV群6類)が主体となっている。ほかに貼付文を施す土器(IV群5類)もみられる。第2層群の動物遺存体では陸獣骨が目立っている。種別ではブタが多く、ほかにオットセイやアシカ科も出土している。さらに貝類、魚骨も多量に出土しており、第2層群から出土した豊富な遺物群は、当時の人々の生活状況を反映していると考えられる。第3層群では爪形文を施す土器(IV群3類)が主体を占め、海獣骨や陸獣骨はみられなくなる。また、貝類、魚骨もごく僅かで、第2層群と比べると大幅に減少している。

(2) 層序と出土遺物 (図 10・24～45、表 7・13・19～20、写真 4～5)

US101 表土。堆積第 1 層。黒褐色砂質土を基質とする。全体的に草木根を多く含む。遺物は、土器、獣骨、魚骨、石器剥片が出土している。土器は近現代の攪乱に伴い二次的に堆積したものである。円形刺突文を施す土器 (IV 群 2d 類) と無文土器 (IV 群 8a 類) が僅かに出土している。

US102 堆積第 2 層。US101 と同様に黒褐色砂質土を基質とする。調査中は US134 としていたが、昨年度の調査で B1 区から検出された US102 (堆積第 2 層) 同じ層であるため統合した。遺物は、土器、石器、海獣骨、陸獣骨、鳥骨、魚骨、貝類、ガラスなどの近現代遺物が出土している。土器は沈線文を施す土器 (IV 群 4b 類) を主体として、刻文を施す土器 (IV 群 2a 類)、無文土器 (IV 群 8a 類) も出土している。動物遺存体はアシカ科・ブタが少量みられる。魚骨は、サケ科・フサカサゴ科・アイナメ科・カレイ科が少量出土している。刺突具の破片が 1 点検出された (写真 5 - 481)。

US103 近現代の攪乱面である。US102 を覆土としている。

前述のように本調査区の第 2 層群においては、出土遺物の取上げ層位について特別な処置をしているため、帰属する層位を特定できる遺物が少ない。その中で土器に関しては、摩擦式浮文や幅広い凹線を施す IV 群 6b・6c 類が目立っている。刻文・沈線文を併用する IV 群 2d 類もみられる。貼付文の IV 群 5b 類や擦文土器の V 群 b 類 (坏) も僅かに検出された。また IV 群 1a・c・d 類なども、他区と同様に混在的に出土する状況が認められる。

US137 北壁側で厚く堆積しており、ウニ殻や魚骨、貝類を相当量含む層である。動物遺存体は、主にニシン科・アイナメ科などが確認されている。

US203 US137 と US142 に挟まれた間層に当たる。動物遺存体はアイナメ科などが僅かに確認されている。

US142 本層はウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む層で北壁側に厚く堆積し、南壁側に広がる。魚骨層と認められる。魚骨で種が同定できるものはわずかで、ニシン科・フサカサゴ科・アイナメ科などが確認されている。

US150 US142 の下部を中心に検出された。ウニ殻や魚骨の量は少ない。区内の中央から北側の部分に堆積する。動物遺存体は、ニシン科・アイナメ科などが確認されている。

US199 US150 と同じく US142 の下位で検出された。ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む。1L サンプル未採取である。

US143 南壁から北壁に向って傾斜堆積する層である。魚骨や貝類は乏しい。動物遺存体は、ニシン科・アイナメ科・フサカサゴ科が僅かに確認されている。

US160 ウニ殻、魚骨、貝類が含まれている。動物遺存体は、ニシン科・フサカサゴ科・アイナメ科、ブタなどが確認されている。

US157 西壁側では薄層であるが、南壁側では厚く堆積する。動物遺存体は、ニシン科・

アイナメ科が少量ずつ確認されている。

US202 南西側の隅にみられる。動物遺存体は、ニシン科・タラ科・フサカサゴ科・アイナメ科がそれぞれ少量確認されている。

US119 堆積第8層。黒褐色土層である。遺物は土器、石器、魚骨が出土している。土器は爪形文を施す土器（IV群3b類）が主体的に出土しており、ほかに刻文を施す土器（IV群2a類）や無文土器（IV群8a類）なども出土している。魚骨はニシン科が出土している。

US167 焼土①。調査区南東部でのみ検出される。US165の上面に約10×15cmの大ききで楕円形に水平堆積しており、東壁土層観察面においても5cmほどの厚さで見られる。

US169 堆積第9層。暗茶褐色砂質土層である。遺物は、土器のみ出土している。沈線文を施す土器（IV群4a類）、無文土器（IV群8a類）、厚手の土器（IV群10d類）がみられる。

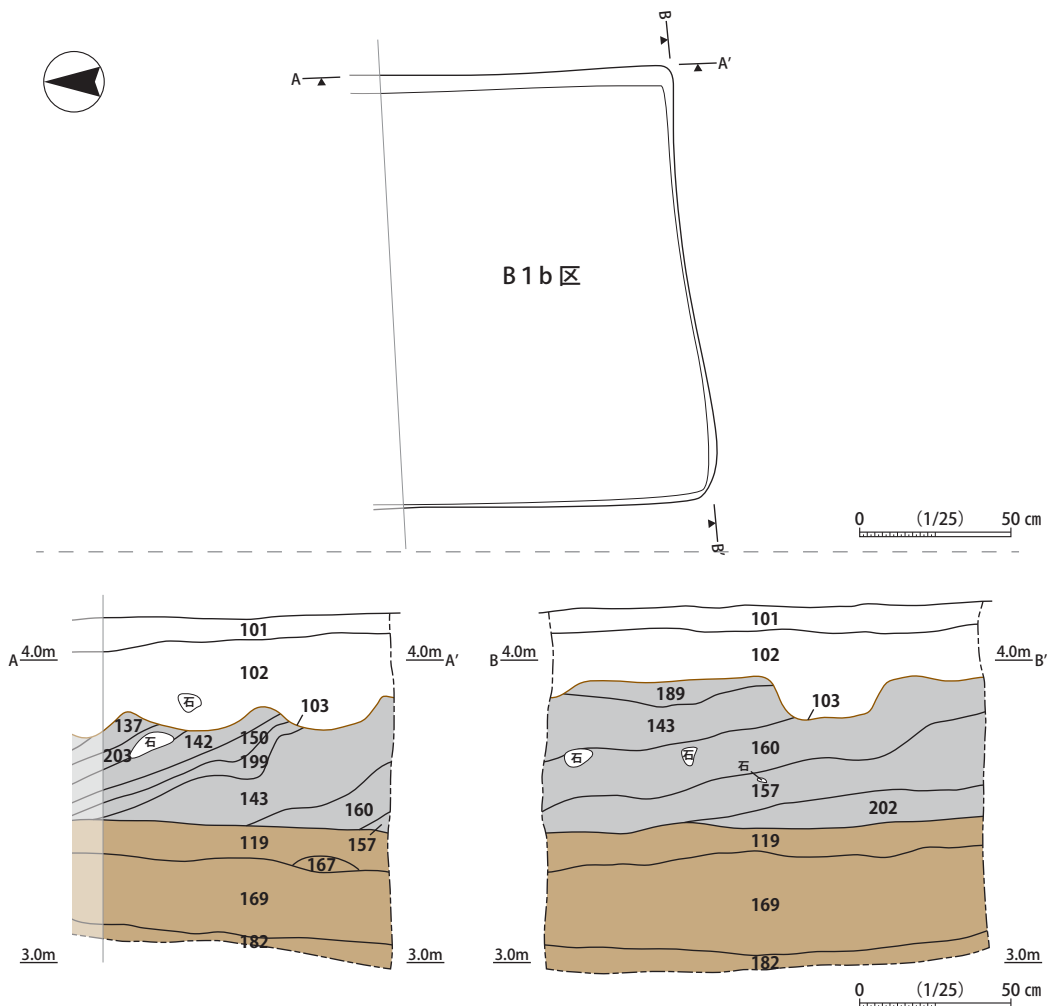


図10 B1b区平面図・土層断面図

US182 地山層に相当する黄褐色砂質土層。団結粘土粒を少量含んでいる。遺物は検出されていない。(高坂 勇佑)

表7 B1b 区土層観察表

層序	層名 (土色)	特徴
US101	表土	旧耕作土。草木根を多量に含む砂質土。しまり・粘性弱。
US102	黒褐色砂質土層 (7.5YR2/2)	堆積第2層。小石を含み、調査区全体に堆積する。しまり・粘性弱。
US137	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻、魚骨、貝類を中量含む。北壁付近に厚く堆積する。しまり・粘性弱。
US203	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US137 と US142 上部の間層。魚骨、貝類が少量みられる。しまり・粘性やや弱。
US142	黒褐色砂質土層 (10YR3/1)	ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む。北壁付近に厚く堆積し、南壁土層断面でもみられる。しまり・粘性弱。
US150	黒褐色砂層 (10YR3/1)	US142 の下部にある黒褐色砂層。ウニ殻、魚骨、貝類を少量含む。調査区中央から北側に広く見られる。しまり・粘性弱。
US199	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US142 の下部にある黒褐色砂層。ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む。しまり・粘性弱。
US143	黒褐色砂層 (10YR3/1)	魚骨、貝類を少量含む、南壁から北壁に向かって傾斜して堆積する。しまり・粘性弱。
US160	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻、魚骨、貝類を中量含む。しまり・粘性やや弱。
US157	暗オリーブ褐色砂質土層 (2.5Y3/3)	北西隅でウニ殻・魚骨層の下に薄く見られる。西壁・南壁では厚く堆積している様子がみられる。ウニ殻、魚骨の混入はほとんど無い。しまり・粘性弱。
US202	オリーブ黒色砂質土層 (5Y2/2)	調査区南西隅でのみみられる。魚骨を少量含む。部分的に暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) のブロックを少量含む。しまりやや強、粘性弱。
US119	黒褐色土層 (10YR2/2)	堆積第8層。調査区全体に堆積する。しまり・粘性やや強。
US167	焼土① (5YR4/4)	US119 下部で部分的にみられる焼土である。調査区南東部で検出される。しまり・粘性やや弱。
US169	黒色土層 (7.5YR2/1)	堆積第9層。US119 下に厚く堆積する。しまり・粘性やや強。
US182	にぶい黄褐色砂質土層 (10YR4/3)	地山層である。粒径 2cm ほどの固結粘土粒を少量含む。しまりやや弱、粘性弱。

8. B3区

(1) 概要 (図 11、表 8)

B3区は、第1次調査でB1区の西側に設定された調査区である。B1区から西側にB2区(未調査)を隔てて、南北1.0×東西1.5mの範囲となっている。昨年度は8層(US128)までで調査を終えており、今回はより下層の状況を確認し、地山の検出を目指した。地山層の12層上面を確認した時点で調査を終えた。

出土土器は、9層(US131)よりIV群を主体に確認されている。10層以下については、遺物は確認されていない。

(2) 層序と出土遺物 (図 11・46・47、表 8・14、写真 2)

US131 (9層) 黒褐色土。炭化物を含む。遺物は、土器、石器、骨が出土している。掲載できた土器は8点である。IV群主体で、182は沈線文、188は刻文を有する。187は、IV群1類で突帯を有する。189はV群の破片でハケメ痕をもつ。

US138 (10層) 9層に似た黒褐色土。しまりあり、砂質。遺物は含まない。

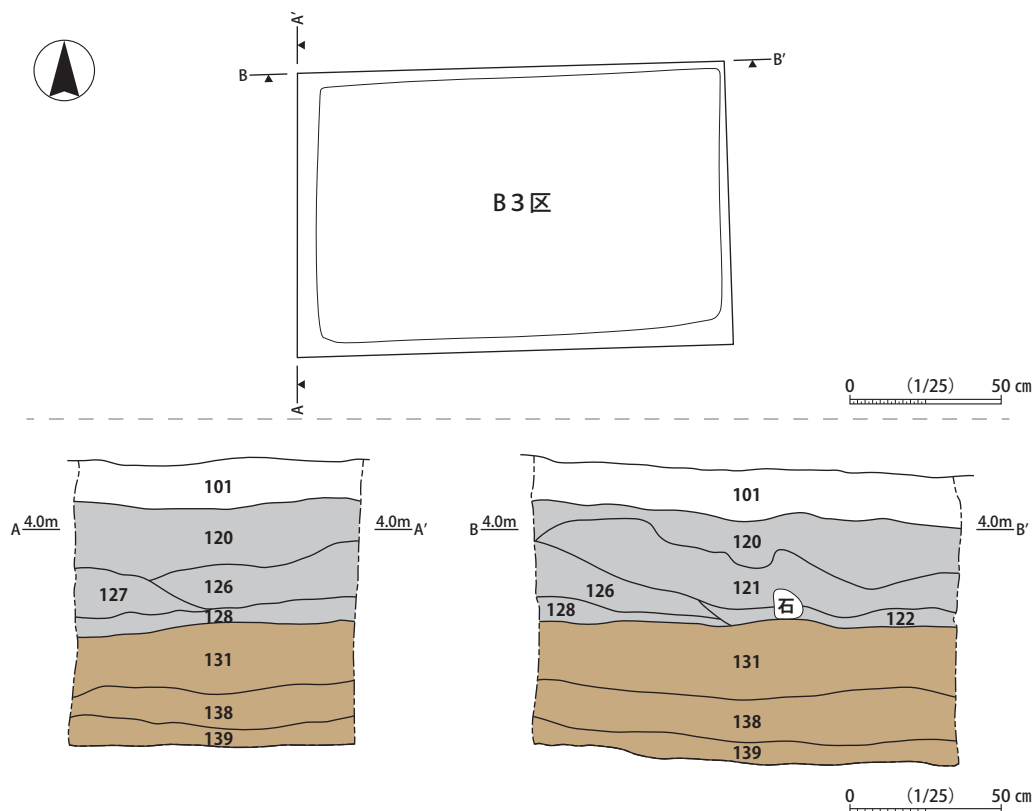


図 11 B3区平面図・土層断面図

US139 (11層) 暗赤褐色砂質土。しまりあり。褐色土ブロックを含み、東側が貼り床状になっている。ブロックが固化したものであろう。遺物は含まない。地山との漸移層。
(US未設定) (12層) 明褐色砂層。地山層。東方向に約10cm傾斜している。(山谷)

表8 B3区土層観察表(今回調査分はUS131/US138/US139)

層序	層名(土色)	特徴
US101	1層:表土(耕作土)	全体に15~20cmの厚さで堆積。
US120	2層:暗褐色砂質土層(10YR2/3)	全体に堆積する。魚骨を含む。
US121	3層:魚骨層	魚骨・ウニ殻・獣骨を含む。特に東側では濃密。炭化物や砂・褐色土ブロックを含む。
US122	3層下部:暗褐色砂質土層(10YR2/3)	魚骨を含む。
US123	4層:灰褐色砂層(7.5YR5/2)	さらさらした砂層。遺物を含まない。
US124	5層:暗褐色砂質土層(10YR2/3)	魚骨を含む。
US125	6層:灰褐色砂層(7.5YR5/2)	遺物を含まない。
US126	6'層:灰褐色砂層(7.5YR5/2)	さらさらとした砂層。
US127	7層:暗褐色砂質土層(10YR2/3)	魚骨を含む。
US128	8層:暗褐色砂質土層(10YR2/3)	上部は魚骨が混じる。下部は遺物を含まない。
US131	9層:黒褐色土層(5YR2/1)	遺物、炭化物を含む。
US138	10層:黒褐色土層(5YR2/1)	砂質でしまりあり。遺物を含まない。
US139	11層:極暗赤褐色砂質土層(5YR3/2)	しまりあり。褐色土ブロック含む。遺物を含まない。

9. B7区

(1) 概要 (図 12、表 9)

B7区は、B0～B3区の西側に位置する。B地点の他の区に比べ地表面が20～30cm程高くなっており、現在も畑地として利用されている。耕作の際に土器片が検出されるという情報を得て、文化層の堆積状況の把握を目的に1.0×1.5mの範囲で調査区を設定した。

調査は4月29日から5月12日まで14日間に亘って行った。上層は度重なる耕作の影響を受けており、砂質土層の中に部分的な魚骨やウニ殻の濃集部を含んでいた。土層堆積は北東に向かってやや傾斜している様子がみられた。遺物は各時期のものが混在しており、現代遺物のほか、刻文土器や沈線文土器などが出土している。中層では砂や魚骨、ウニ殻などの薄い層が北東へ傾斜しながら互層をなしており、部分的に分層が困難であった。調査区の東側で土坑(US148)と考えられる遺構が確認されており、その埋土からブタの下顎骨や、多数の石が出土している。直径15cm程の石がおおよそ同じ高さで複数検出される面(US172)も確認された。下層では層のしまりがやや強くなり、遺物は少なくなった。B1bからB1a'区で検出されている層(US182)と同一と考えられるUS185を検出し、深さ約1.5mまで掘削したところで調査を終了した。

遺物は非常に多く、土器、石器、獣骨、魚骨、貝類、近現代遺物などが多数出土している。上層である第1層群では耕作による攪乱の影響を受け、各種遺物のほか、近現代遺物も出土している。中層の第2層群では磁器片が1点出土しているほかは近現代遺物がみられなくなり、刻文を施す土器(IV群2類)や沈線文を施す土器(IV群4類)が主体となる。下層の第3層群では無文の土器(IV群8・9・10類)がみられるようになるが、全体の出土数は少なくなる。最下層にあたるUS183・184では刻文を施す土器と擦文土器(V群)が1点ずつ出土しているのみである。動物遺存体としては、アシカ科・アザラシ科等の海獣骨、ブタやキツネ等の陸獣骨のほか、アホウドリ科やウ科をはじめとする鳥骨も出土している。魚骨はタラ科やフサカサゴ科等が確認されている。貝類はエゾアワビやイガイ等が確認されている。また、骨角器は骨鏃が1点出土しているほか未成品が多数出土している。石器は石鏃・石斧が各2点と未成品数点が出土している。

(2) 層序と出土遺物 (図 12・48～73、表 9・15・19～20、写真 4～5)

US101 表土。堆積第1層。畑地の耕作土である黒褐色の砂層である。調査区全面に5～10cm程の厚さで堆積している。草木根や石が混入する。遺物は土器、石器、現代遺物、獣骨である。土器は、沈線文を施す土器(IV群4類)のほか、続縄文土器(II群)、刻文を施す土器(IV群2類)、摩擦式浮文を施す土器(IV群6類)、擦文土器(V群)が出土している。石器は石鏃の未成品が1点出土している。獣骨はネズミ科等、貝類はイガイ、ほかにフジツボ類の破片等が出土している。

US129 堆積第2層。オリーブ黒色土層。調査区全面に30cm程の厚さで堆積している。

魚骨とウニ殻を少量含む。おもに調査区の西側において、ウニ殻、魚骨、貝類がそれぞれ濃集している箇所が複数確認されている。東壁側では下の層である US149 との境界が不明瞭で分層は困難であった。遺物は土器、獣骨、貝類、現代遺物、石器が出土している。土器は、刻文を施す土器 (IV 群 2 類)、沈線文を施す土器 (IV 群 4 類) を主体とし、その他に無文の土器 (IV 群 8 類) や擦文土器 (V 群) がみられる。獣骨はブタの頭蓋骨のほか、アシカ科・アザラシ科など海獣骨も出土している。鳥骨はアホウドリ科とウ科のものが数点出土している。また、ヒトの橈骨片と大腿骨片が各 1 点出土している。貝類はエゾアワビ・タマキビガイ・エゾチヂミボラ・イガイが出土している。石器は石鏃と考えられるものが 1 点出土している。

US145 堆積第 3 層。貝類の碎片を主体とする。ウニ殻をごく僅かに含む。調査区の中央部で検出され、東壁及び西壁付近ではほぼ確認できない。上面で薄く炭化物が堆積している様子が確認された。遺物は出土していない。

US147 堆積第 3 層。暗褐色砂層である。ウニ殻を少量含む。調査区南側のごく一部で

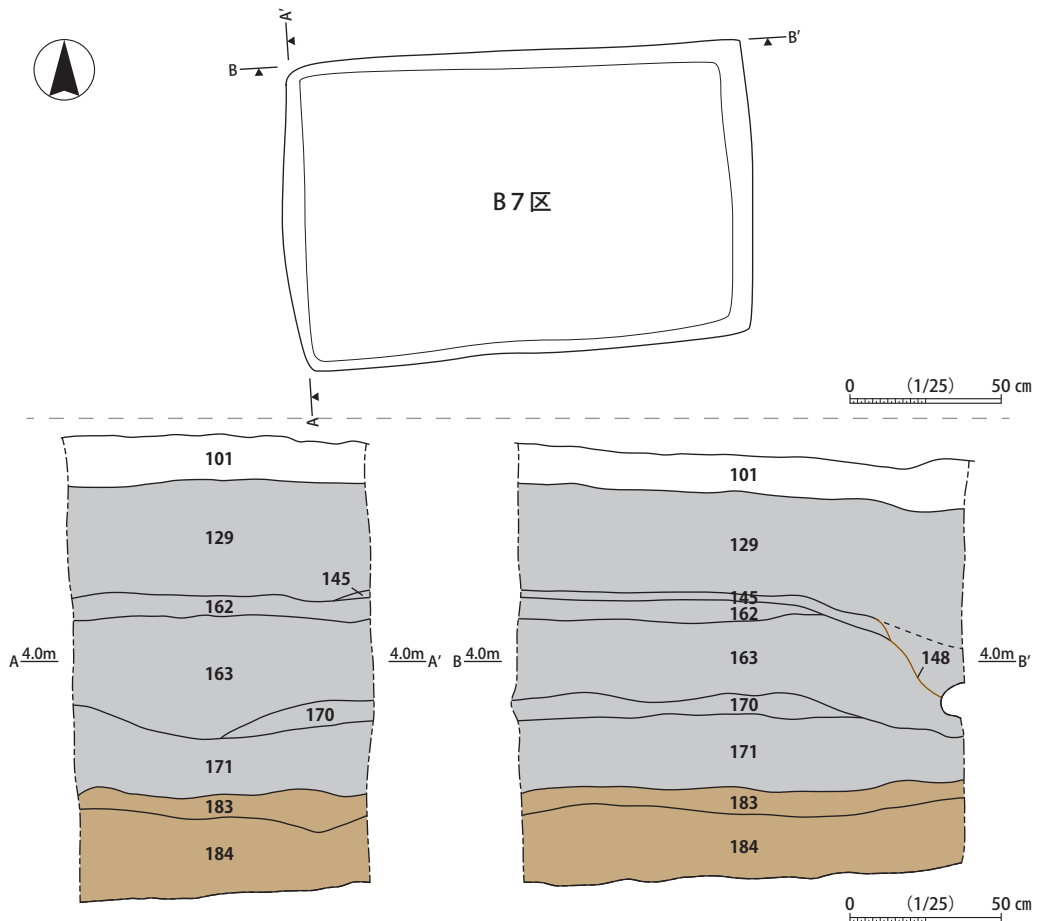


図 12 B7 区平面図・土層断面図

のみ検出され、土層断面では南壁でのみ確認される。上面で炭化物が検出されることから、US145 と同時期のものと考えられる。遺物は出土していない。

US148 調査区の東側で検出された土坑と考えられる遺構である。US145 及び 147 を切り込んで形成されている。壁面はやや緩やかに傾斜しているが、部分的に傾斜が急になり、南壁土層断面ではほぼ垂直に落ち込んでいる様子が確認された。深さは約 40～50cm であったが、調査区外まで続いていたため、正確な規模は不明である。

US149 US148 とした土坑の埋土である。暗赤褐色の砂を基質とする。魚骨を中量含んでいる。部分的に炭化物の集中部が検出されており、US145 及び 147 由来の物と考えられる。遺物は、土器、獣骨、人骨、貝類、石が出土している。土器は沈線文を施す土器（IV 群 4 類）と厚手の無文土器（IV 群 10 類）が中心である。獣骨はアシカ科・アザラシ科等の海獣骨のほか、ブタの上顎骨が出土している。鳥骨はアホウドリ科・ウ科・カモ科のものが出土している。貝類はエゾアワビが出土している。石は、北壁際の土坑切り込み面のやや近くで 30cm 程の扁平な石が出土したほか、15～20cm 大の石が複数出土している。また、石鏃が 1 点出土している。

US162 堆積第 4 層。暗赤褐色土層である。ウニ殻と魚骨をごく少量含む。US145 及び 147 の下に約 10cm の厚さで堆積しているが、US148 とした土坑の影響で調査区の東側では検出されない。遺物は土器、獣骨、魚骨、貝類が出土している。土器は続縄文土器（II 群）、突瘤文を施す土器（IV 群 1 類）のほか、沈線文を施す土器（IV 群 4 類）などが出土している。獣骨はアシカ科等の海獣骨が出土している。貝類はエゾアワビ・エゾチヂミボラが出土している。

US163 堆積第 5 層。ウニ殻、魚骨、貝類を主体とする層である。US162 同様、US148 とした土坑部分を除く調査区の全面で確認される。厚さは約 20cm 程度で、東側に向かってやや傾斜している。遺物は非常に多く、土器、獣骨、魚骨、貝類、石のほか、近現代のものと考えられる磁器片が 1 点出土している。土器は非常に多様で、刻文を施す土器（IV 群 2 類）、沈線文を施す土器（IV 群 4 類）、無文土器（IV 群 8・9・10 類）等を中心に、爪形文を施す土器（IV 群 3 類）、擦文土器（V 群）なども出土している。海獣骨はアシカ科・アザラシ科など、陸獣骨はブタが主体で、頭蓋骨や下顎骨が出土しているほか、キタキツネが確認されている。鳥骨はアホウドリ科・ウ科・ウミスズメ科のものがそれぞれ多数出土している。また、ヒトの肋骨片が 1 点出土している。貝類はエゾアワビ・タマキビガイ・エゾチヂミボラ・ヒメエゾボラなどが確認されている。また、石斧が 1 点出土している。

US168 黄褐色の粘質土の集中部である。調査区の北側、US163 の最下部で部分的に検出されたが、土層断面では確認できない。遺物は土器が 1 点出土している。貝類は出土していない。

US172 調査区北側で確認された配石と考えられる遺構である。US163 の下部から US170 及び US171 の上面にかけて、約 15～20cm 大の石数点が半円を描くような形で出土した。

US178 US172 としての配石に囲まれる部分を充填する黒褐色土層である。魚骨を少量含む。US170 との境界は不明瞭で、特に土層断面においては分層が困難であった。土器は無文土器（IV 群 8・10 類）が数点出土している。獣骨はアシカ科・アザラシ科等海獣骨が出土している。鳥骨はアホウドリ科・ウミスズメ科のものが出土している。貝類はエゾアワビ・タマキビガイ・エゾチヂミボラなど 5 種類が出土している。また、骨角器の未成品が 1 点出土している。

US170 堆積第 6 層。黒褐色土層である。しまりがやや強く、魚骨をごく僅かに含むほか、部分的にオリーブ黒色の粘性の強い土が混入している。おもに調査区の西側で検出される。遺物は少なく、刻文を施す土器（IV 群 2 類）が 2 点出土しているほかは、獣骨は種別不明の海獣骨が数点、貝類はエゾチヂミボラ・ヒメエゾボラ・イガイ各 1 点が出土している。

US179 堆積第 6 層。暗褐色砂層である。ウニ殻や魚骨などは含まれていない。調査区の南東側で、US148 としての土坑の下に堆積している。US170 とほぼ同じ高さで確認されているが、しまりはやや弱い。この層も遺物は少なく、土器は刻文・沈線文を施す土器（IV 群 4 類）と無文土器（IV 群 9 類）などが数点出土している。獣骨は種別不明の海獣骨が数点、鳥骨はアホウドリ科・ウ科のものが各 1 点出土しているのみである。貝類は出土していない。

US171 堆積第 7 層。黒褐色砂層である。しまりはやや強く、ウニ殻と魚骨をごく少量含む。調査区の南東隅を除き、約 20～30cm の厚さで堆積している。遺物は土器、獣骨、石が検出されている。土器は無文土器（IV 群 9・10 類）が主体で、ほかに沈線文を施す土器（IV 群 4 類）などが出土している。獣骨はアシカ科・アザラシ科をはじめとする海獣骨が多数出土しているのに加え、キタキツネやブタなど陸獣骨も数点出土している。鳥骨はアホウドリ科・ウ科・ウミスズメ科等が多数出土している。貝類はエゾアワビ・ヒメエゾボラ・イガイ等が出土している。また、骨鏃が 1 点出土している。

US183 堆積第 8 層。黒色土層である。ウニ殻や魚骨などの混入物はほとんどなく、しまりがやや強い。調査区全体で約 10cm の厚さで堆積が確認される。この層から遺物はほとんど確認されなくなり、土器は無文土器の小片数点が出土しているのみである。獣骨は種別不明の海獣のものが数点出土している。鳥骨及び貝類は出土していない。

US184 堆積第 9 層。黒色土層である。混入物がほとんどなく、しまりがやや強い。US183 に比べて粘性がやや強い。調査区全面で確認される。遺物はほとんどなく、無文土器の小片数点と、磨製石斧と考えられるものが 1 点出土しているのみである。獣骨、鳥骨、貝類は出土していない。

US185 堆積第 10 層。茶褐色砂層である。調査区全面で確認される。本区は地山層と考えられるこの層を検出したところで調査を終了した。（北 沙織）

表9 B7区土層観察表

層序	層名 (土色)	特徴
US101	黒褐色土層 (2.5Y3/2)	表土。耕作地として使用されており、草木根や石が混入している。しまり・粘性弱。
US129	オリーブ黒色土層 (5Y2/2)	堆積第2層。調査区全面に約30cmの厚さで堆積している。魚骨とウニ殻を少量含む。調査区の西側では、魚骨、貝類、ウニ殻それぞれの濃集部が検出される。しまり・粘性弱。
US149	黒褐色土層 (5YR2/2)	US148とした土坑の埋土。魚骨を中量含んでいる。土層断面では部分的にUS129との境界が不明瞭であった。炭化物の集中部がみられる。しまり・粘性弱。
US145	貝類濃集部	堆積第3層。ウニ殻を少量含む貝類の濃集部。調査区の中央部でのみ検出され、南壁・東壁土層断面では確認できない。上面にごく薄く炭化物が堆積している。しまり・粘性やや弱。
US147	暗褐色土層 (10YR3/3)	堆積第3層。ウニ殻を少量含む。調査区南側で部分的に検出される。上面にごく薄く炭化物が堆積している様子が確認される。しまり・粘性弱。
US162	暗赤褐色土層 (5YR3/2)	堆積第4層。ウニ殻と魚骨をごく少量含む。調査区の西側で約10cmの厚さで検出される。しまり・粘性弱。
US163	ウニ殻・魚骨層	堆積第5層。ウニ殻、魚骨、貝類を主体とする層。調査区の西側ではUS148とした土坑に切り込まれ確認できない。しまり・粘性弱。
US168	黄褐色粘質土集中部 (10YR5/6)	US163の最下部で部分的に検出される。粘質土の集中部である。土層断面では確認できない。しまりやや弱、粘性やや強。
US178	黒褐色土層 (5YR2/2)	US172とした配石と考える遺構を充填する土層。魚骨を少量含む。US170との境界が不明瞭で、土層断面では分層が困難であった。しまりやや弱、粘性弱。
US170	黒褐色土層 (5YR2/2)	堆積第6層。魚骨をごく僅かに含む。部分的に粘性のやや強いオリーブ黒色の土が混入する。土層断面では調査区の北西側で検出される。しまりやや強、粘性やや弱。
US179	暗褐色土層 (7.5YR3/3)	堆積第6層。ウニ殻、魚骨はほとんど含まない。US170とほぼ同じレベルで、調査区の南東側で検出される。しまり・粘性やや弱。
US171	黒褐色土層 (2.5Y3/1)	堆積第7層。ウニ殻、魚骨をごく少量含む。調査区南東隅では検出されない。しまり・粘性弱。
US183	黒色土層 (10YR1.7/1)	堆積第8層。調査区全面で検出される。しまりやや強、粘性やや弱。
US184	黒色土層 (2.5Y2/1)	堆積第9層。調査区全面で検出される。しまり・粘性やや強。

10. E1区

(1) 概要 (図 13、表 10)

E地点は、沼浦海水浴場遺跡の今回の調査範囲の中では、最も西側に位置している。調査区は4.0×2.0mで設定したものを南北で二分し、北側を1区、南側を2区と呼称した。調査は5月5日から12日の8日間に亘って、E1区のみを対象としておこなった。

堆積層は、大きく3つの層群に分けられる。第1層群(US601・602)は現代遺物を多く含んでおり、耕作土であったと考えられる。第2層群に属すると考えられるUS603であるが、近現代の攪乱(US607)を強く受けて残存層厚が非常に薄くなっている状態のため、これらの攪乱の影響による上位層由来の遺物がある程度含んでいると考えられる。第2層群まではほぼ水平堆積であったのに対し、第3層群(US604・605)は、若干南西に向かって傾斜して堆積していた。これらの層からは土器片や石器・石片が若干出土している。第3層群に入ってから遺物の出土がほぼなくなったため、調査面積を半分に減じて下位の堆積構造の確認を目指した。その後、北半分のスプトレンチにおいてしまりが強く固結化したブロックをとところどころに含んだUS606を検出したところで調査を終了した。

遺物は、土器、石器、獣骨、魚骨、貝類が出土している。この内、獣骨、魚骨、貝類は、全て第1・2層群から出土しており、近現代の活動により残されたものであると考えられる。土器片はUS601～604で出土しており、76点の土器片を掲載した。第1層群からはオホーツク式土器(IV群)を主体とし、鈴谷式土器(III群)・擦文土器(V群)が出土している。第2層群からはオホーツク式土器(IV群)が出土している。第3層群では縄文土器(I群)とオホーツク式土器(IV群)が確認されている。石器はUS604・605から石鏃・搔器が出土している。

(2) 層序と出土遺物 (図 13・74～84、表 10・16・19、写真 4)

US601 表土。黒色砂質土を基質とする。草木根を多く含む。遺物は土器、近現代遺物が出土している。ほとんどが二次的に堆積したものと考えられる。土器は、沈線文を施す土器(IV群4b・f類)、摩擦式浮文を施す土器(IV群6a類)、無文土器(IV群8a・c類)などのオホーツク式土器を主体とし、その他に鈴谷式土器(III群)が出土している。

US602 堆積第2層。黒褐色砂質土を基質とし、ところどころにウニ殻、魚骨、貝類の層がブロック状に混入する。旧耕作土と思われる。US601と同様に草木根を多く含む。遺物は土器、海獣骨、陸獣骨、鳥骨、魚骨、貝類、近現代遺物が出土しているが、これらも二次的な堆積物と考えられる。土器では、突瘤文を施す土器(IV群1a・b類)、刺突文を施す土器(IV群2c・d類)、爪形文を施す土器(IV群3a・b類)、沈線文を施す土器(IV群4a・b・c・f類)、摩擦式浮文を施す土器(IV群6a・b類)、無文土器(IV群8b・c類)などのオホーツク式土器を主体とし、その他に続縄文土器(II群)・鈴谷式土器(III群)・擦文土器(V群a・b・d類)が出土している。陸獣骨はキタキツネ・ブタが出土している。

魚骨はニシン科・フサカサゴ科等が出土している。貝類はマイマイ目・クロタマキビガイ？が確認された。

US607 近現代と思われる攪乱面を一括したもの。耕作などの攪乱行為は複数回にわたる可能性がある。

US603 堆積第3層。基質はUS602と同様の砂質土だが、ウニ殻、魚骨、貝類をあまり含まない。全面的に根による攪乱や後世の掘り込み・耕作等による攪乱（US607）を受けている。遺物は土器、海獣骨、魚骨、貝類が出土しているが、US607の攪乱による上位堆積層由来の遺物が含まれているようである。土器では、沈線文を施す土器（IV群4a類）と無文土器（IV群8c類）が出土している。海獣骨はアザラシ科等が出土している。魚骨はニシン科が確認されている。貝類は破片のみで、種を同定するには至らなかった。

US604 堆積第4層。基質は粘性の高い黒色土である。遺物は土器と石器が出土している。土器は縄文土器（I群）、突瘤文を施す土器（IV群1b類）、刻文を施す土器（IV群2a類）、沈線文を施す土器（IV群4f類）が出土している。石器は石鏃2点と搔器2点が出土している。

US605 堆積第5層。黒褐色砂質土を基質としており、地山層の直上の層と考えられる。スコリア状の軽石を少量含んでいる。遺物は石器のみで、搔器が2点出土している。

US606 堆積第6層。基質は固くしまったにぶい黄褐色砂質土で、固結化したブロックをところどころに含んでいる。遺物は確認されていない。（横田 真名望）

表 10 E1 区土層観察表

層序	層名（土色）	特徴
US601	表土（10YR2/2）	黒色砂質土を基層とし、根を多く含む。しまり・粘性弱。
US602	黒褐色砂質土層（10YR2/2）	調査区全体に約30cmの厚さで堆積する。根を多く含む。しまり・粘性弱。
US603	暗オリーブ褐色砂質土層（2.5Y3/3）	調査区の全体に堆積する。根を多く含む。しまり・粘性弱。
US604	黒色土層（7.5YR2/1）	調査区の全面で検出される。しまりやや弱、粘性弱。
US605	黒褐色砂質土層（7.5YR2/2）	調査区の全面で検出される。スコリア状の軽石粒を若干含む。しまりやや弱、粘性弱。
US606	にぶい黄褐色砂質土層（10YR4/3）	北側1mの範囲で確認される。地山層と考えられる。西壁では一部段状に落ちる様子が見られる。また、東から西に向かってやや傾斜する。しまりやや弱、粘性弱。

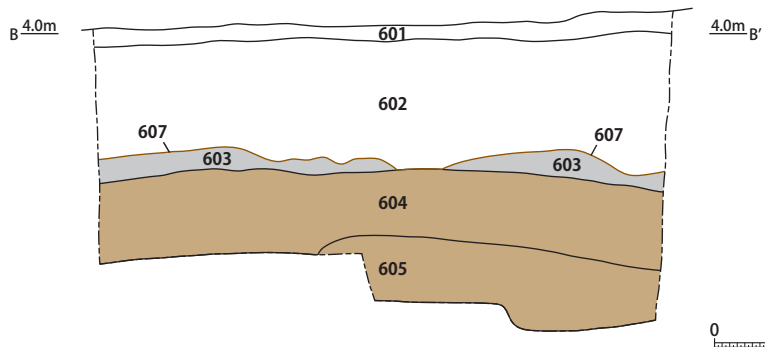
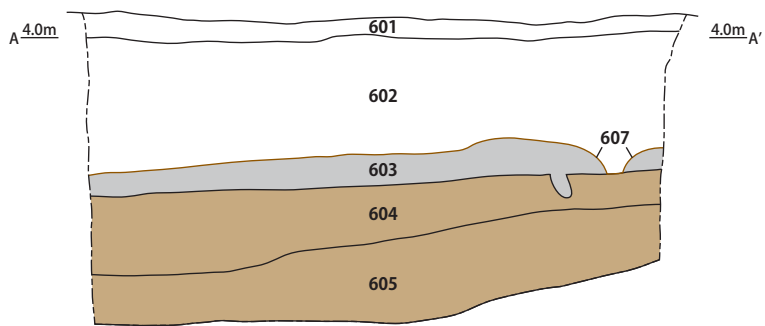
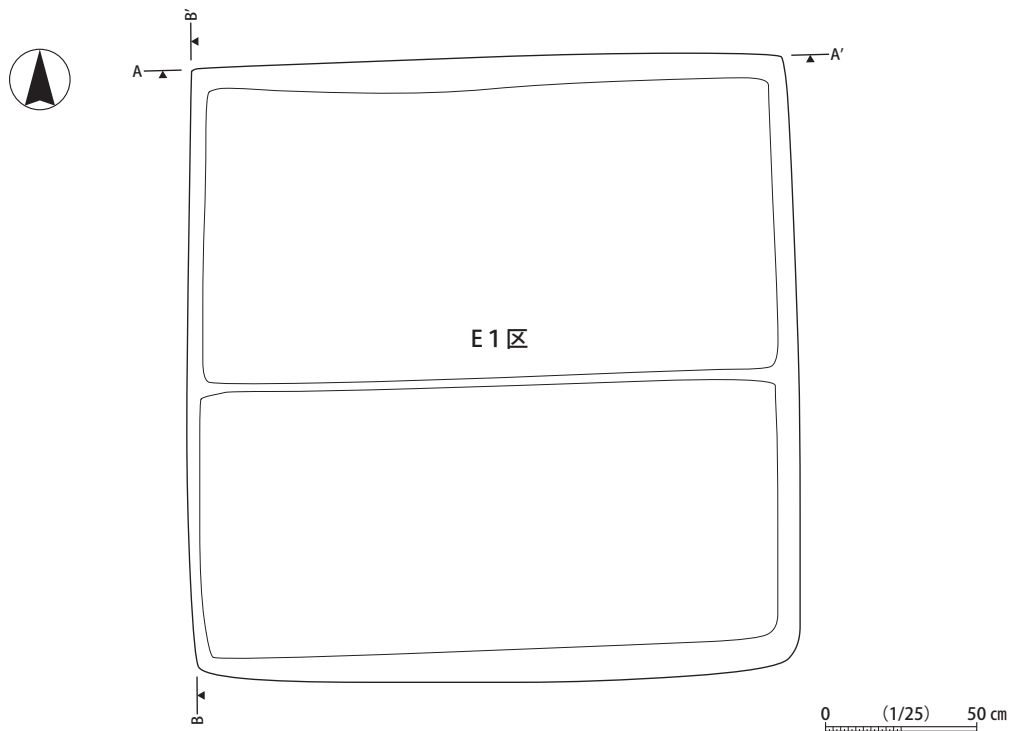


图 13 E1 区平面图·土层断面图

11. TP1

(1) 概要 (図 14)

TP1 は、沼浦海水浴場遺跡の東端に位置する。B0 区から平成 14 年調査の 1・2 トレンチを挟んで、約 15 m 東に設定した。現地表面において本調査区はほかの調査区よりも高く、テラス状を呈していて背後に展望台の斜面を擁する。この高まりが何を意味するのか、元々の地形を残していること、あるいは近代以降の集落の造成に伴なって寄せられた土であること、その要因を探るべく調査を行った。調査範囲は、東西方向に 1.0 × 1.5m で設定した。

層序は、表土以下、間層をはさんで上層・下層に区分された。各層序がフラットな厚さで堆積し、ブロック状の黄褐色土を含むこと、下層の遺物の時期が混在している状況など、ほかの調査区と様相を異にしていることからみて、現時点では後世の造成による堆積とみられる。第一段階として、下層が盛土され、整地（間層）を行ない、第二段階として、上層→表土の順で盛土されたと考えられる。

(2) 層序と出土遺物 (図 14・85～88、表 17、写真 3)

US205 (表土) 褐色土。木根や石が多く、黄褐色ブロックを含む。層厚は、43～46cm でフラット。

US154 (上層) 暗褐色土。木根や石が多く、黄褐色ブロックを少量含む。層厚は、44～46cm でフラット。表土に似ており、後世の盛土と考えられる。

US206 (間層) 黄褐色土。しまり、粘性あり。炭化物を含む。層厚は 10cm 程度でフラット。

US155 (下層) 暗褐色土。黄褐色ブロックや砂、石を多く含む。とくに下端において石を密に含む。遺物を含む。層厚は、34～37cm でフラット。土器は、IV 群を主体に、I～III 群まで散見される。

(地山層) 黒褐色土。未調査につき US 未設定。しまり強。小石や黄褐色粒含む。(山谷)

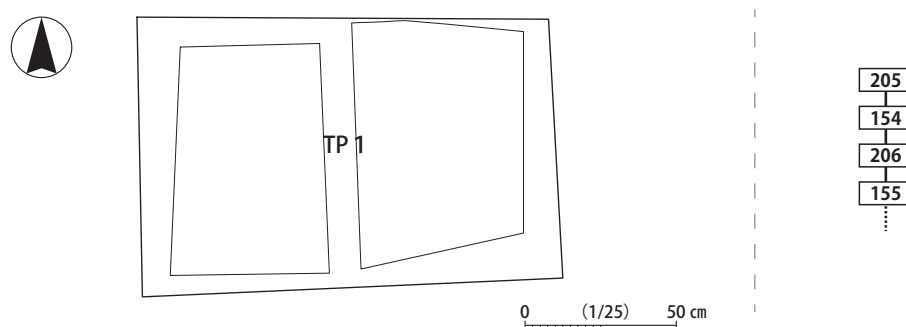


図 14 TP1 平面図・層序構成マトリクス

12. D1・D2区

(1) 概要 (図 16、表 11)

D 地点は平成 3 年度に北海道教育委員会が試掘をおこなった沼浦遺跡の範囲内に位置し、旧砂丘に沿った緩斜面の畑地である。沼浦海水浴場遺跡の第 1 次調査の際に、鈴谷式土器などが表採されたことから、鈴谷式期およびそれ以前の文化層の層位的な把握を目的として、調査を実施した。南北 2.0 × 東西 4.0m のトレンチを設定し、それを東西方向で二分して西側を D1 区、東側を D2 区と呼称した。調査は D1・D2 区ともに、5 月 1 日から 5 日まで 5 日間に亘っておこなった。

土層堆積状況の特徴としては、東 (D2 区) から西 (D1 区) に向かって緩やかに傾斜し、色調の異なる砂層が成層状態を保って整然と堆積しているということが挙げられる。

D1・D2 区ともに表土である US401 掘削開始後、早い段階で US404 を確認した。US404 は第 3 層群に属する地山漸移層であると考えられることから、この段階で全面掘削を停止し、北壁側に D1・D2 区を横断する形で 0.5 × 4.0m のサブトレンチを設定して、土層の堆積を確認するための掘削をおこなった。その後、D1 区にて US404 に切り込む形で溝状遺構 (US406) が確認された。US406 は、側面および底面に黄褐色粘土ブロックが敷き詰められており、近現代の道路遺構の可能性が考えられる。US404 の下層からは US407、そのさらに下層に US408 を確認した。US404 下部および US407 上部で土器が複数確認されていることから、US407 上面がある一時期の活動面であった可能性はあるが、居住空間ではないと考えられる。US408 では遺物が全く確認できなかったため、US409 上面を検出したところで調査を終了した。

遺物は、土器、石器、獣骨、貝類のほか近現代遺物が出土している。土器は US401 ~ 407 において出土した。第 1 層群 (US401 ~ 405) からは続縄文土器 (II 群)・鈴谷式土器 (III 群) が出土している。これらに混じって磁器・ガラス片・一銭硬貨などの近現代遺物が出土していることから、第 1 層群に属する堆積層は、近現代以降に攪乱・形成されたものと考えられる。沼浦遺跡に設定された D 区においては、沼浦海水浴場遺跡に設定された他調査区で検出されている第 2 層群に属する堆積層は検出されず、第 1 層群の直下から第 3 層群の堆積層が検出される。第 3 層群 (US404 ~ US407) では続縄文土器 (II 群) が主体を占め、僅かに 1 点のみ無文土器 (IV 群 8c 類) を伴っている。なお、下層の US404 においても近現代遺物が出土されたが、検出時の状況などから、これらは D1・D2 区全域に散在している近現代の柱穴や攪乱坑 (US403) の影響を受けて第 1 層群から貫入したものとする。石器は、第 1 および第 3 層群から 35 点の剥片が出土している。

(2) 層序と出土遺物 (図 16・89 ~ 91、表 11・18)

US401 表土。黒色砂質土を基質とする。近現代に土質改良の目的で畑に撒かれたと考えられるウニ殻および貝類が混じる。遺物は土器片、石器剥片、磁器・ガラス片・一銭硬貨

などの近現代遺物が出土している。ほとんどが二次的に堆積したものと考えられる。土器は続縄文土器（II群）が2点、鈴谷式土器（III群）が3点出土している。

US403 D1・D2区全域に散在する近現代のものと考えられる柱穴および攪乱坑を一括したもの。埋土は全て表土と同じ組成のためUS401扱いとしている。US402および405を切り込むものがD1区、US404を切り込むものがD2区、US404およびUS407を切り込むものがD2区にて確認された。

US402 溝状遺構US406の範囲内において、US401下から検出される堆積層。検出状況からは溝状遺構US406の覆土第1層とも考えられるが、土層断面図を参照するとわかるように、堆積が薄いうえに傾斜堆積の影響でちょうど溝状遺構の外形線付近で当該層の堆積が途絶えていることから、断定することは難しい。黒褐色土を基質とし、堆積範囲はUS405におおむね準ずる。遺物は確認されていない。

US405 溝状遺構US406の覆土。US402に覆われる。基質はUS404に近似する黒色砂質土。溝状遺構の底面・側面にあたる部分に黄褐色（10YR5/6）の粘土ブロックが集中するほか、全体にも若干量の粘土ブロックを含む。遺物は続縄文土器（II群）1点のほか、石器剥片や近現代遺物としてガラス片が出土している。

US406 D1区西半分で確認された、近現代のものと考えられる溝状遺構。側面および底面には、黄褐色粘土ブロックを含む土が敷き詰められている。

US404 US401下の黒色砂質土層。D1区西半で溝状遺構US406が切り込む。遺物は、磁器・ガラス片・鉄釘などの近現代遺物のほか、下層で土器片、石器剥片が出土している。土器は続縄文土器（II群）18点が出土した。

US407 US404下の砂質土層。US404からの変化は漸移的であり、はっきりと分層できるものではない。上部で土器片、石器剥片が出土している。土器は続縄文土器（II群）2点、無文土器（IV群8c類）1点が出土した。

US408 US407下の砂質土層。US407からの変化は引き続き漸移的であり、明確には分層できない。遺物は出土していない。（大野 彩奈）

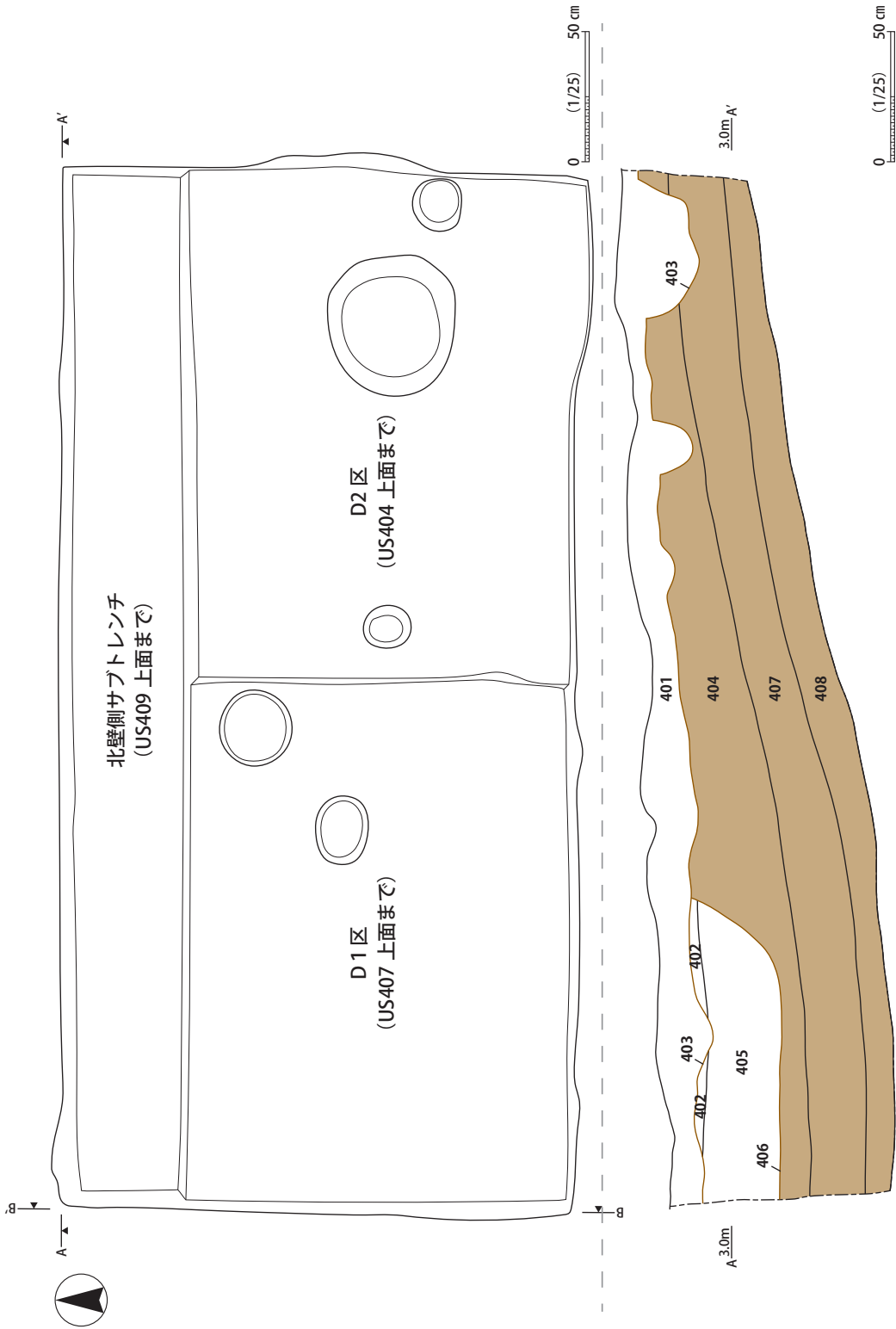


図 15 D1・D2区平面図・土層断面図(1)

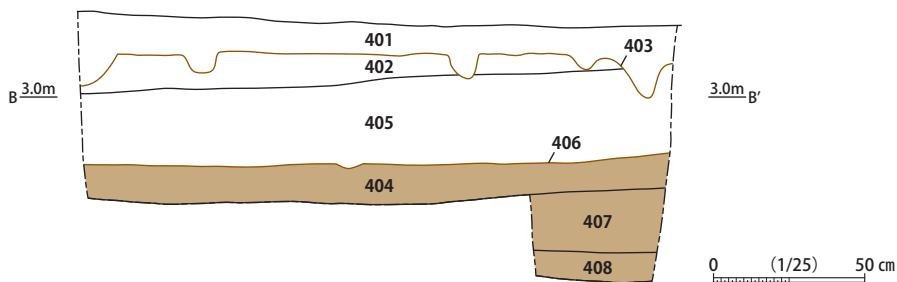


図 16 D1 区土層断面図 (2)

表 11 D1・D2 区土層観察表

層序	層名 (土色)	特徴
US401	表土	耕作土。黒色砂質土を基層とする。ウニ殻が肥料として混じる。土器片、石器片、近現代遺物を含む。
US402	黒褐色土層 (10YR2/3)	US401 下整地層。西側半分に堆積する US406 の遺構とその覆土 US405 を覆うように堆積する。範囲は US405 に準ずる。
US405	黒色砂質土層 (10YR1.7/1)	溝状遺構 US406 の埋土。基質は US404 に近似する黒色砂質土層。底面・側面に黄褐色 (10YR5/6) の粘土ブロックが集中するほか、埋土全体にも若干量の粘土ブロックを含む。土器片、石器片、近現代遺物を少量含む。
US404	黒色砂質土層 (10YR1.7/1)	US401 下の黒色砂質土層。D1 区西半で US406 遺構が切り込む。しまりがやや強く、粘性は弱い。下層に土器片、石器片を含む。
US407	黒褐色砂質土層 (10YR2/3)	US404 下の砂質土層。US403 の柱穴が 2 ヲ所ある。西側へ向かって傾斜する。下部になるとしまりがやや強く、粘性は弱い。US404 と漸移しており、境界は不明瞭である。上部に土器片、石器片が含まれる。
US408	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US407 下の砂質土層。US407 と漸移していて、境界は不明瞭である。遺物を全く含まない。しまりがやや強く、粘性は弱い。

III. 出土遺物

1. 出土土器

(1) 土器の分類

本年度も多種多様な土器が出土した。混乱を避けるため、第1次調査の分類案に若干の変更を加えた(ゴシック体部分)。分類は文様・器形の特徴を基準として大きくI～V群に区分し、更に文様要素の個別的な特徴から細分を行った。本報告内の土器に関する記述と記載にはこの仮分類案を用いる(IV群1a類を「IV-1a」の様に略記することがある)。

I群：縄文土器

II群：続縄文土器

III群：鈴谷式系

IV群：「オホーツク式系」

1類：突瘤文・突帯などを施すもの

a：突瘤文・貫通孔のみ b：突瘤文とその他の文様 c：突帯、その他の文様 d：胴部文様のみ

2類：刻文を施すもの、スタンプ文などを施すもの

a：刻文のみ b：刻文とスタンプ文・指押文など c：スタンプ・刺突文 d：円形刺突文

3類：爪形文、刺突文・刻み目文・指押文などを施すもの

a：押捺するもの b：捻りを加えるもの c：刺突紋、刻み目文 d：指押文

4類：沈線文・凹線文などを施すもの

a：平行沈線又は沈線・凹線文のもの b：刻文・刺突文・沈線文 c：縦沈線を施すもの
d：矢羽根状の沈線 e：斜格子沈線 f：沈線とその他の文様
g：斜行沈線又は鋸歯文を施すもの h：波状凹線文 i：ポッチのみ

5類：貼付文を施すもの

a：擬縄貼付文 b：直線・波状ソーメン文 c：ネットソーメン文
d：捻りもしくは押圧を加えるもの e：ポッチ・ボタン状 f：太い貼付文のもの
g：沈線・擬縄貼付文

6類：摩擦式浮文を施すもの

a：摩擦式浮文のみ b：摩擦式浮文とその他の文様 c：幅広凹線による摩擦式浮文

7類：突帯を持つもの(削除：1類に合体)

8類：無文のもの

a：胴部 b：底部 c：口縁部

9類：やや厚手のもの

a：刻文 b：貼付文 c：摩擦式浮文 d：無文 e：沈線・凹線文 f：スタンプ文 g：底部

10類：厚手のもの

a：沈線文 b：スタンプ文 c：突帯文 d：無文 e：摩擦式浮文 f：口唇部文 g：底部

V群：擦文土器

a：甕形 b：杯形 c：壺形 d：模倣的なもの e：その他

(2) B0区 (図17～23、表12)

B0区においては、II-2において述べたように、調査時における第2層群の傾斜堆積の把握が不十分であったことから、水平掘削によって複数の堆積層の遺物が一緒に取り上げられた可能性を鑑みて、第2層群出土資料に関しては、出土日時をもとに上中下の三つのまとまりに再区分して処理することとした。第2層群上部は「B0-2upp」とし、含まれるUSはUS132, 133, 135, 136, 191、第2層群中部は「B0-2mid」とし、含まれるUSはUS132, 135, 136, 141, 192, 194, 195、第2層群下部は「B0-2low」とし、含まれるUSはUS135, 136, 140, 141, 192, 193, 194, 198である。これらの処理を経ていることから、分析の精度は限定的である。第1層群からはオホーツク式土器を主体として他に続縄文土器、第2層群からはオホーツク式土器を主体として他に続縄文土器、鈴谷式土器、元地式土器、擦文土器、第3層群からは中厚手を含むオホーツク式土器のみが出土している。三層群ともに、オホーツク土器 (IV群) が主体であることは共通している。 (岩城)

表12 B0区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数	
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明		
101							1								3	4
130		2		3	1	1	7								33	47
B0-2upp		3		1			1					1			22	28
B0-2mid		2			1	2	1		1						29	36
135												1	1			2
192															2	2
193															1	1
B0-2low		2	1	2		4	4			2	1	1	1	91	109	
158														3	3	
156				1							2			8	11	
166							1									1

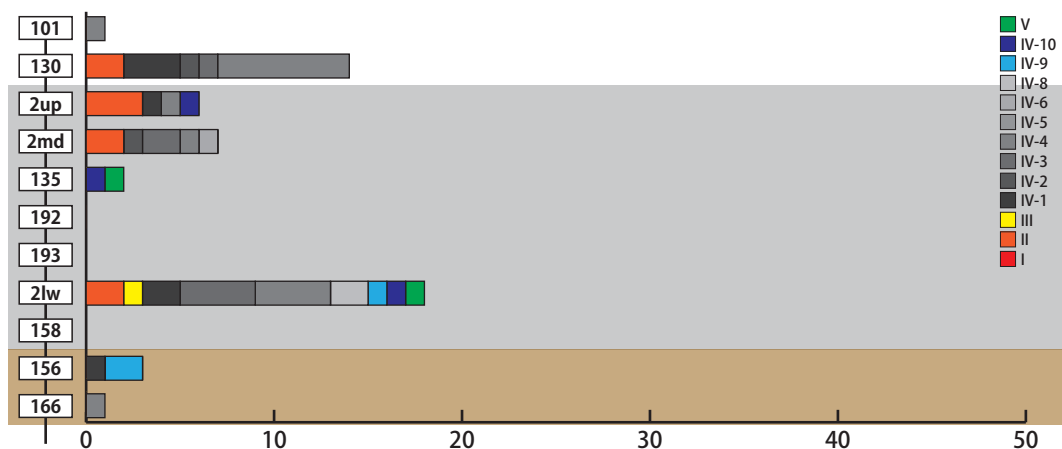


図17 B0区堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)

US 101



US 130 (1)

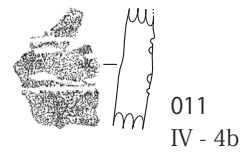
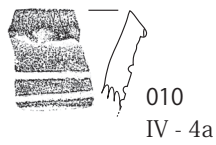
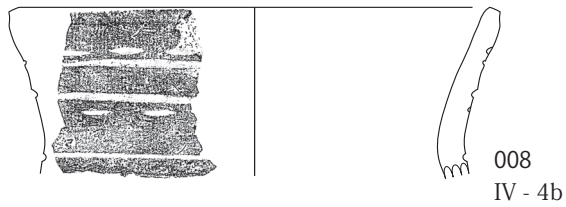
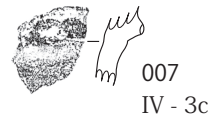
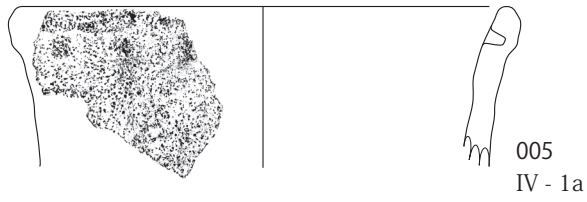
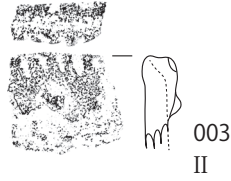
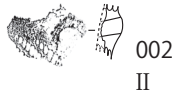
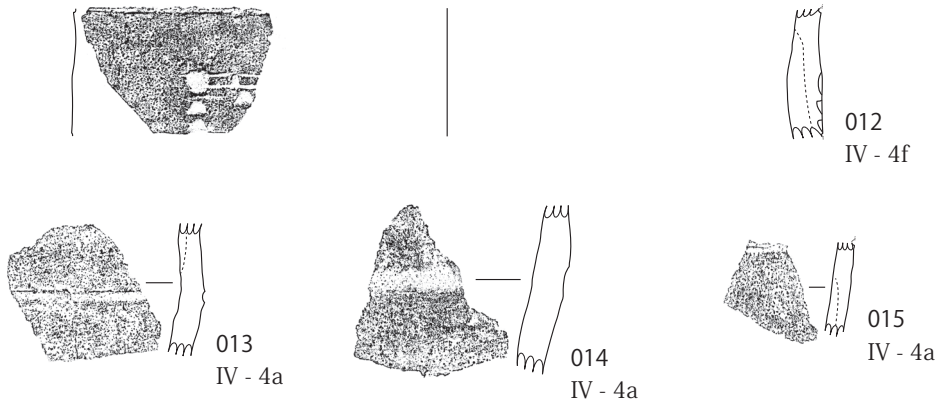
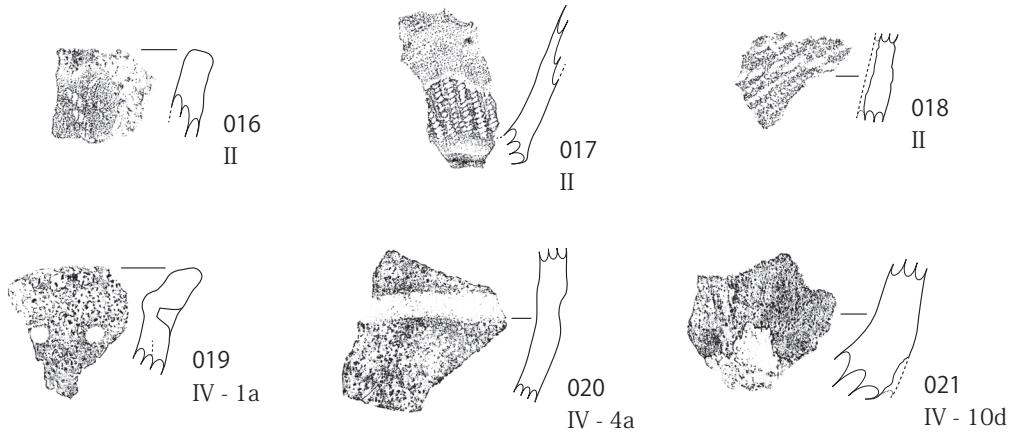


图 18 B0 区出土土器 (1) (S=1/2)

US 130 (2)



第2層群上位



US 135

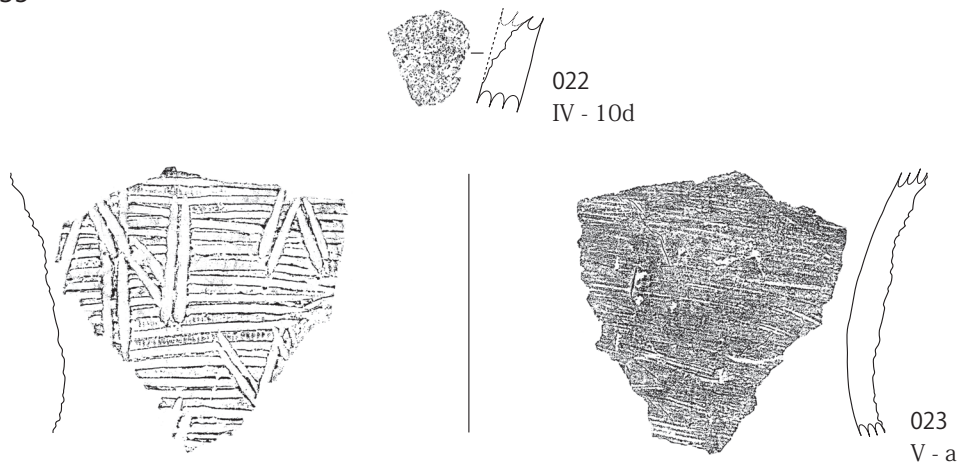
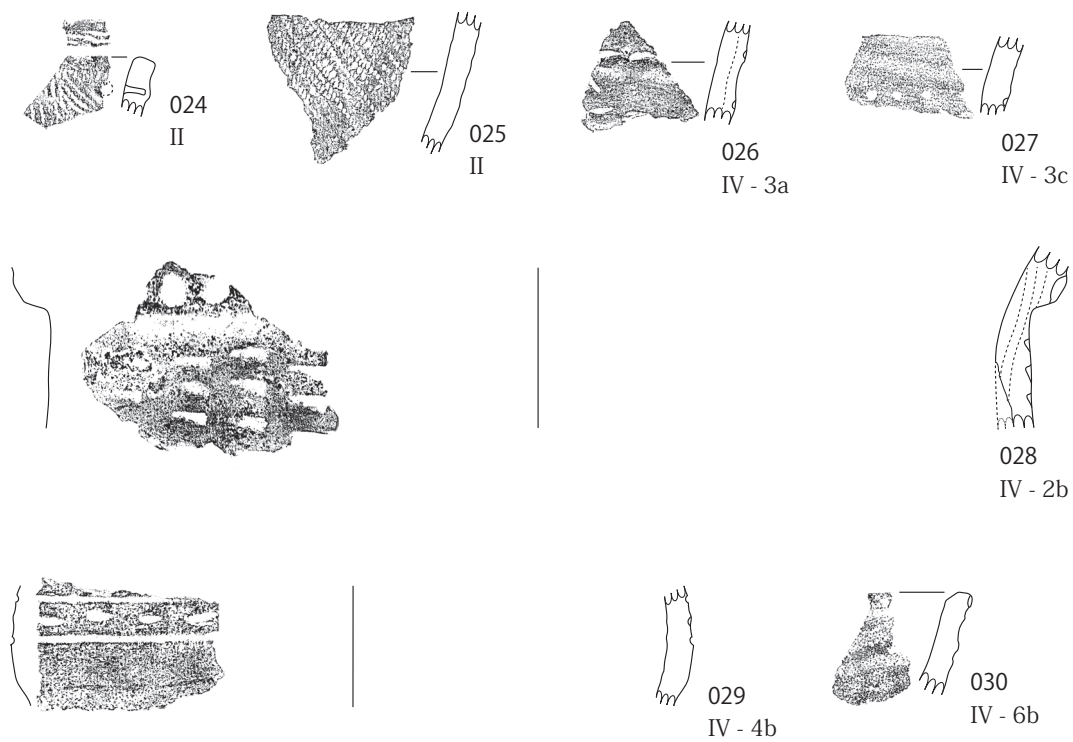


图 19 B0 区出土土器 (2) (S=1/2)

第2層群中位



第2層群下位 (1)

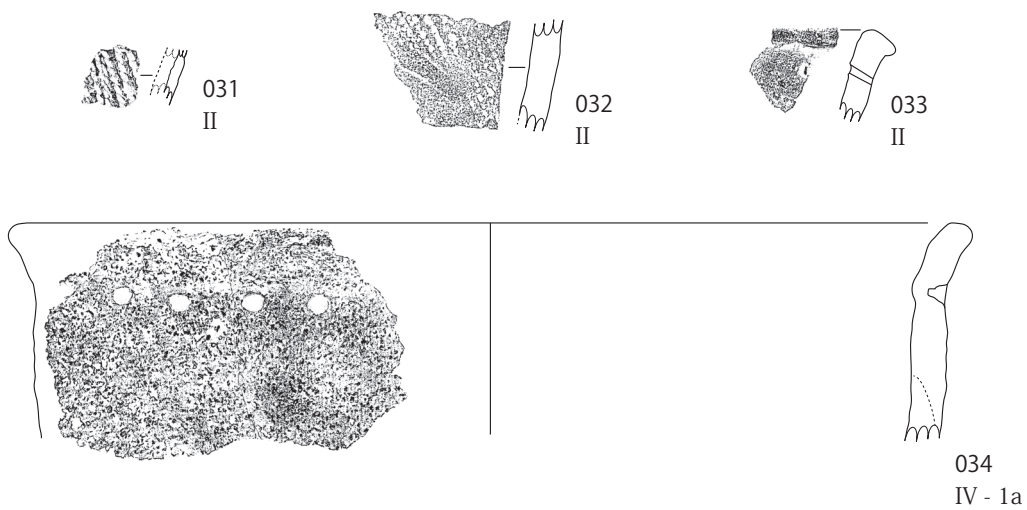


图 20 B0 区出土土器 (3) (S=1/2)

第2層群下位 (2)

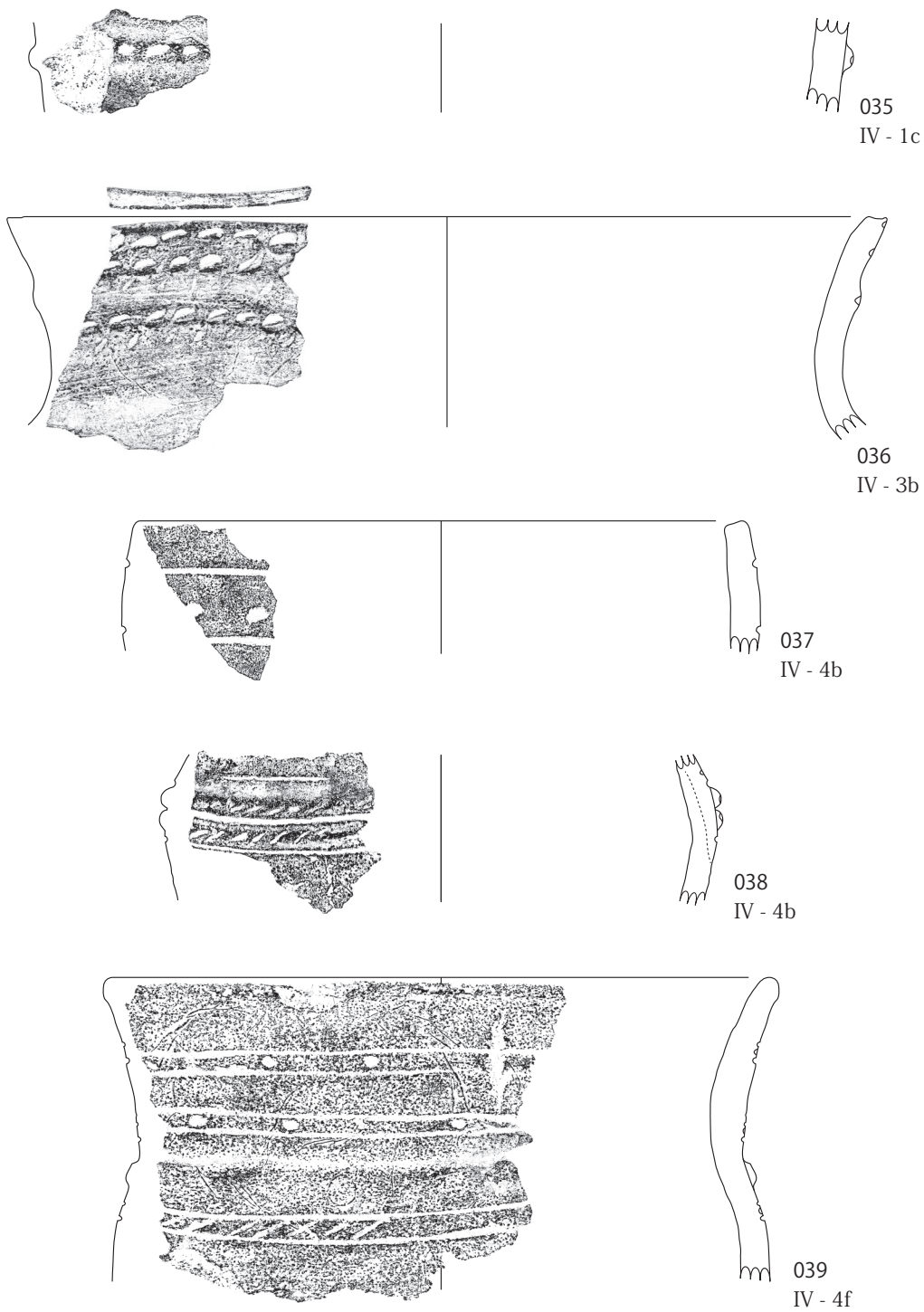


图 21 B0 区出土土器 (4) (S=1/2)

第2層群下位 (3)

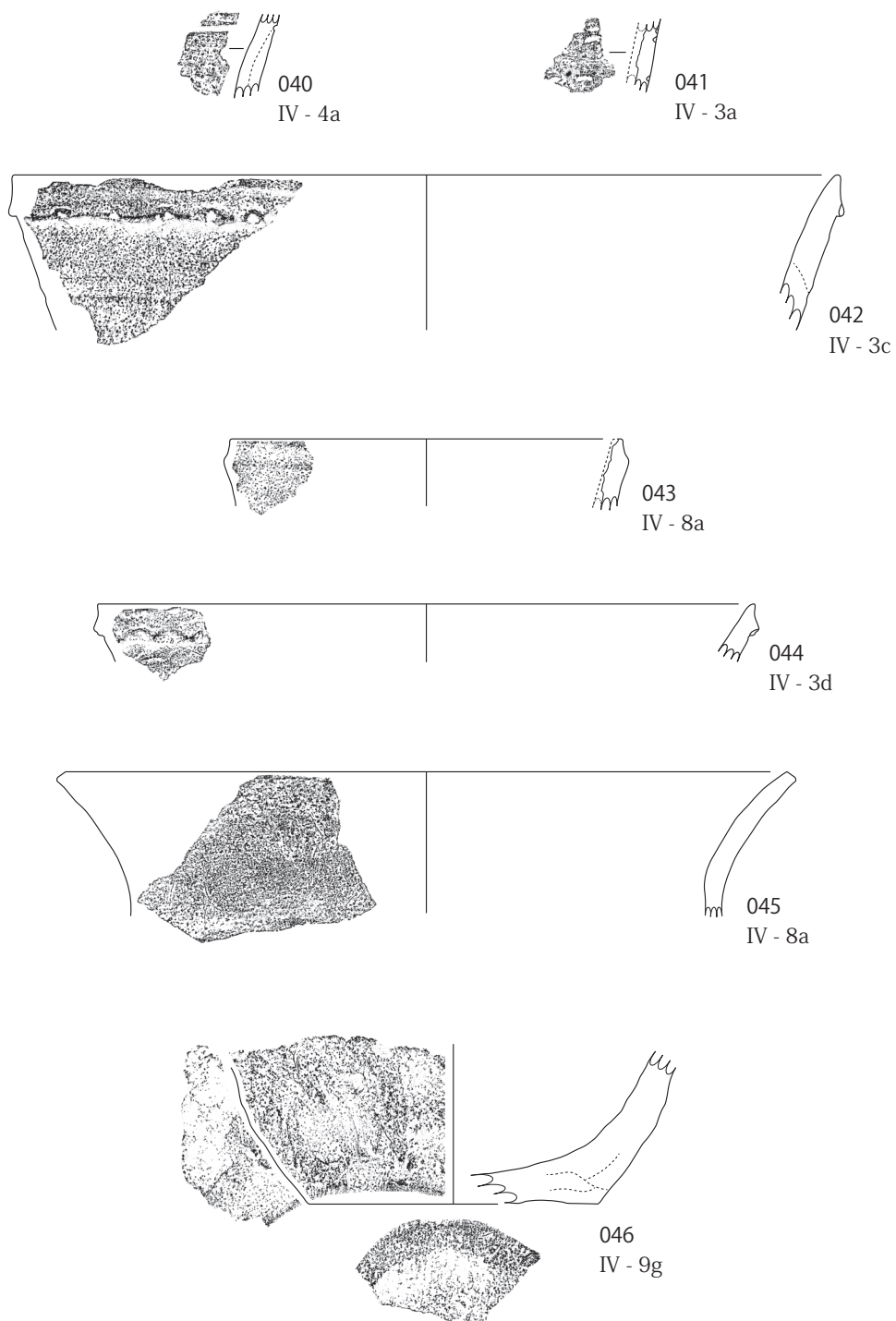


图 22 B0 区出土土器 (5) (S=1/2)

第2層群下位 (4)

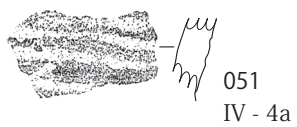
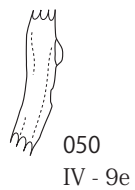
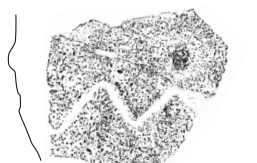
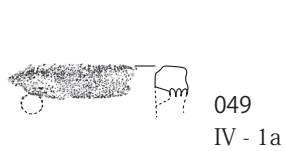


图 23 B0 区出土土器 (6) (S=1/2)

(3) B1 調査区全体 (図 24 ~ 45、表 13)

まず最初に「B1 調査区」という呼称について説明する。B 地点において B1 系列として設定された調査区は北から順に、B1a' 区 -B1a 区 -B1 区 -B1b 区ベルト -B1b 区であり、最終的に幅 1.5m、長さが南北合計 4.5m の一連のトレンチとなった。初期の設定と命名時に「B1 区」というアルファベットの枝号を付さない調査区を設定してしまった不手際から、この一連のトレンチを一連のものとして指し示す呼称を欠く事態を招いてしまった。以後、本報告においては、B1 系列のトレンチを指し示す場合に「B1 調査区」という名称を便宜的に用いることとする。

B1 調査区について長軸の土層断面を一連のものとして精査した結果、第 1 層群と第 3 層群については、B1a' 区から B1b 区まで一連の水平堆積層が数単位ずつ堆積していること、第 2 層群については、南の B1b 区側から北に向かって投棄を繰り返しながら前進する一連の傾斜堆積層群が形成されていることがそれぞれ判明した。従って、B1 調査区の第 2 層群においては、B1b 区 (古) → B1a' 区 (新) という一連の時系列が成立することになる。B1 調査区に関して、「II. 各調査区の状況」においては、調査時の掘削単位毎に分けて、それぞれの担当者が個別に状況を説明した。しかしながら、出土遺物を分析するにあたっては、一連の時系列に整列しうる資料を分割して提示することに意味はないので、一括して整列したものを提示し、かつ出土傾向の分析を行った。なお、B1b 区の第 2 層群からの出土遺物に関しては、B0 区の第 2 層群と同様の理由で、調査時に登録された出土層位に関しては、認識が不十分であった可能性を排除できないことから、第 2 層群出土遺物を上中下の三つのまとまりに整理し直す処理を行っている。第 2 層群上部は「B1b-2upp」とし、含まれる US は US137, 142, 143, 150, 160, 189, 199, 203、第 2 層群中部は「B1b-2mid」とし、含まれる US は US142, 143, 150, 157, 160, 199、第 2 層群下部は「B1b-2low」とし、含まれる US は US143, 157, 160, 199, 202 である。

以上の条件をふまえて B1 調査区の土器出土傾向を見てみると、図 24 から分かるように、オホーツク式が主体を占めることは間違いない。特に第 3 層群の一層目にあたる US119 からは、まとまった数量のオホーツク式土器が出土している。それ以外の類別に関しては、続縄文土器が第 1 層群 (US101)、第 2 層群の上位 (US159, 173)、第 2 層群の中位 (US117) から、鈴谷式が第 1 層群 (US101)、第 3 層群 (US119) から、元地式が第 2 層群上位 (US159, 173)、第 2 層群中位 (US116, 117)、第 3 層群 (US169) から、擦文土器が第 1 層群 (US102)、第 2 層群上位 (US111, 159, 173)、第 2 層群下位 (B1b-2mid)、第 3 層群 (US119) からそれぞれ出土している。出土点数の総計で見ると、第 2 層群の上部と第 3 層群の上部に数量的なまとまりが認められる。 (岩城)

表 13 B1 調査区全体各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明	
101		1	1		2									17	21
102					1		4			1			2	75	83
164															0
109															0
107							1							1	2
111							1						2	12	15
105							1	1						20	22
190														4	4
159		2		2	4	3	4	1		1		2	2	49	70
174									2	1				6	9
175															0
173		2		1	2	1	3		1	3		1	1	58	73
204					1	1	1			1				7	11
112														3	3
113														4	4
114														2	2
115														1	1
116					1							1		4	6
117		1					1				1	1		8	12
B1b-2upp.							1							9	10
137							1			1				25	27
203							1								1
142														11	11
B1b-2mid.				1	2				3	1			1	35	43
150															0
199														11	11
189															0
143															0
B1b-2low.				2				1	2					10	15
160															0
157															0
202															0
119			1	2	5	2	11		2	8			1	78	110
167															0
169							2			1		2		7	12
182															0

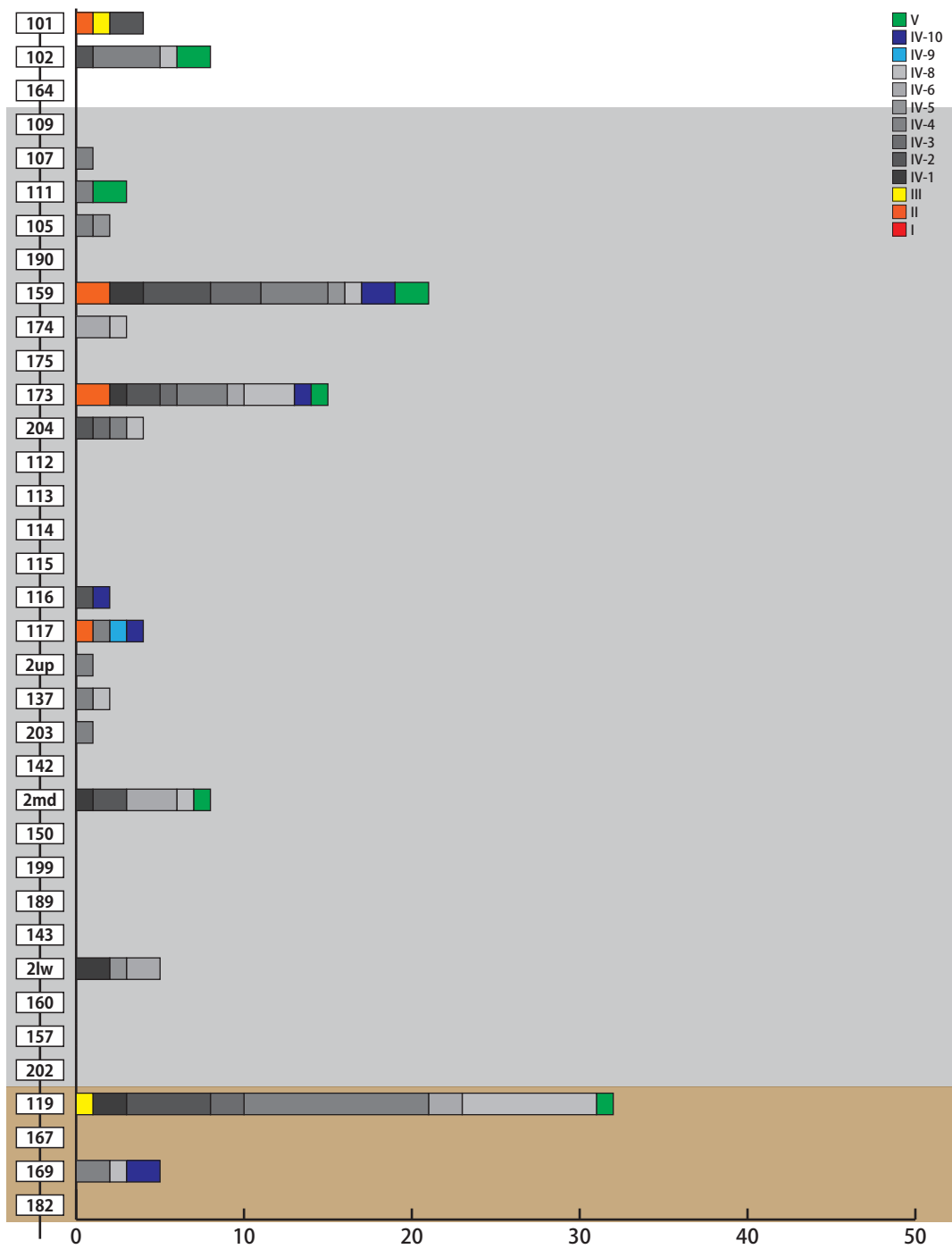
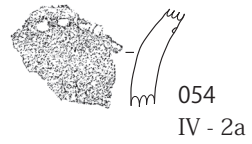
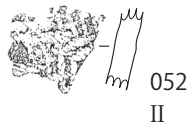
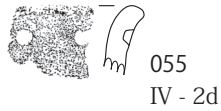


図 24 B1 調査区全体堆積各層の土器出土傾向（不明土器片は除く）

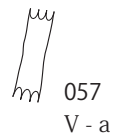
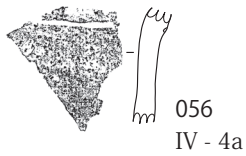
US 101 (B1a')



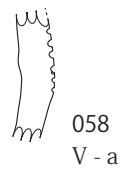
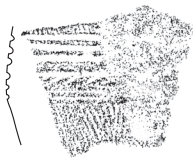
US 101 (B1b)



US 102 (B1a')



US 102 (B1a' ベルト)



US 102 (B1b)

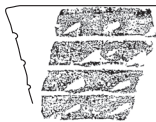
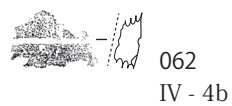
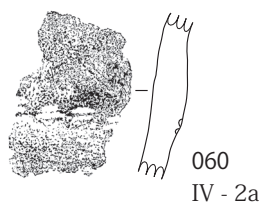


図 25 B1 調査区出土土器 (1) (S=1/2)

US 102 (B1b)



US 105 (B1a)



US 105 (B1)

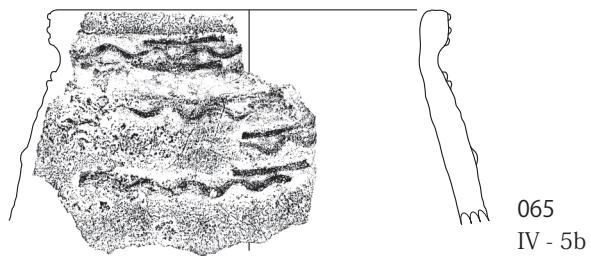
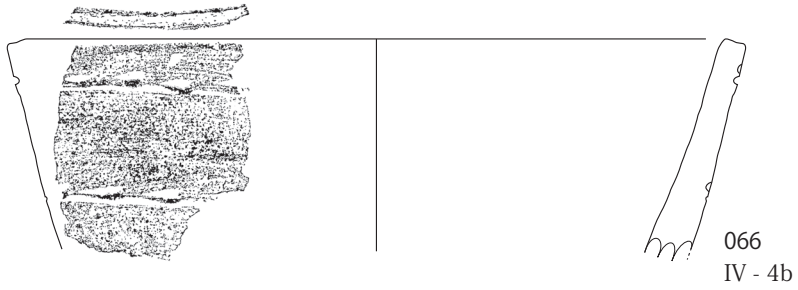
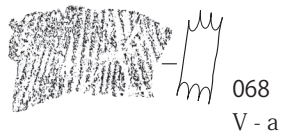
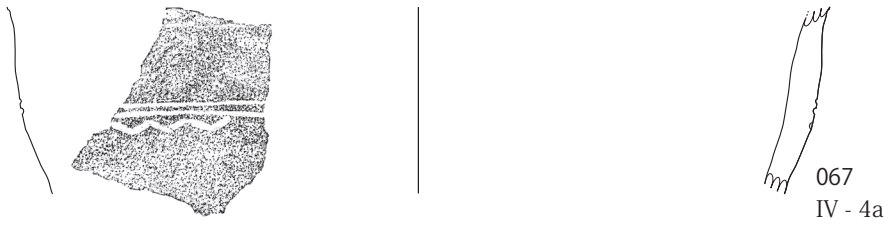


图 26 B1 調査区出土土器 (2) (S=1/2)

US 107 (B1b ベルト)



US 111 (B1a)



US 159 (B1a') (1)

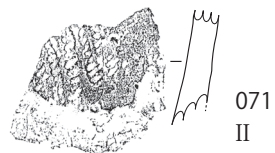
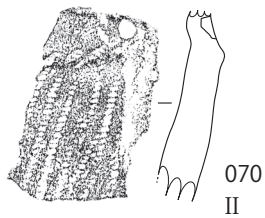


図 27 B1 調査区出土土器 (3) (S=1/2)

US 159 (B1a') (2)

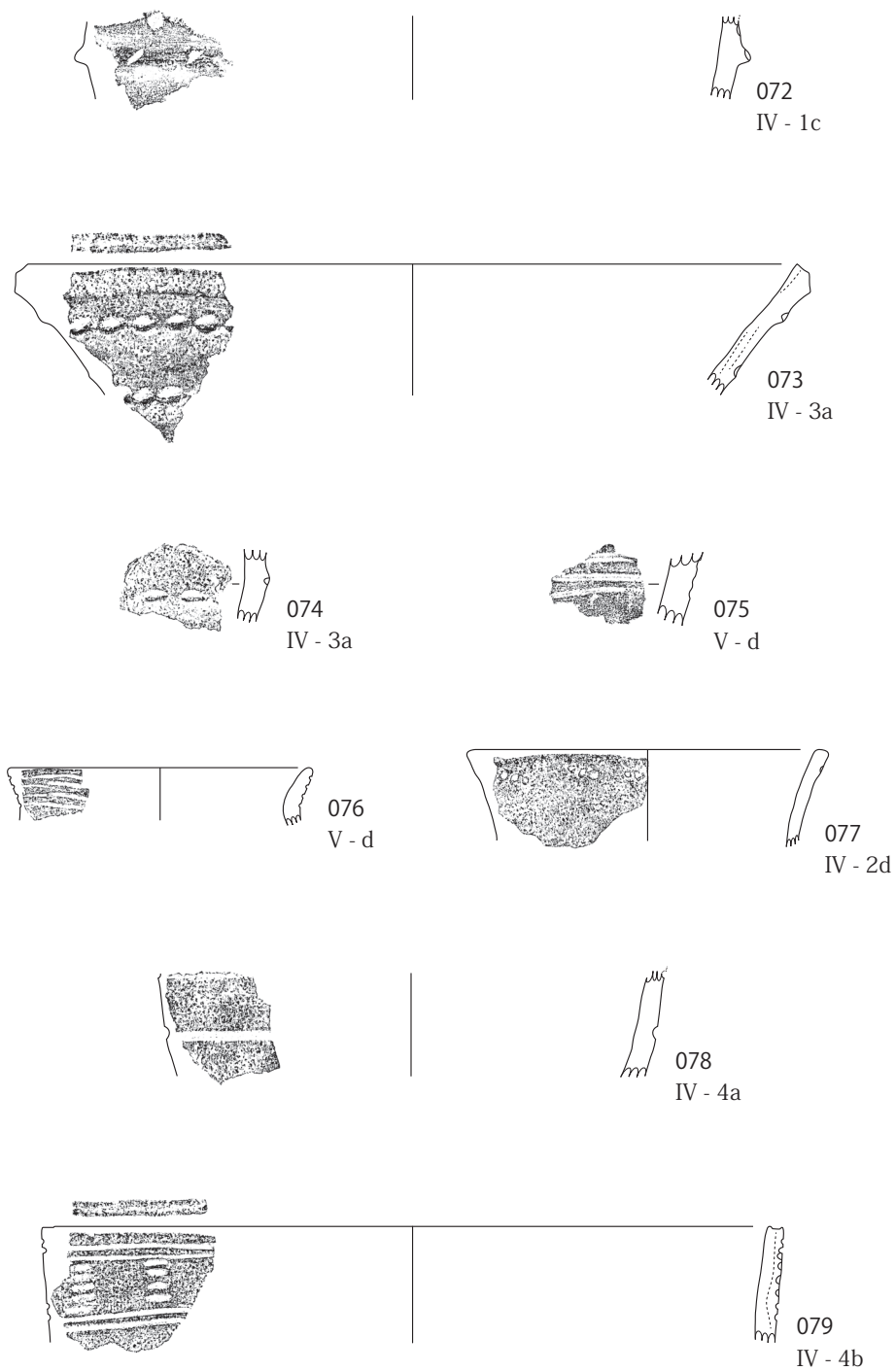


图 28 B1 調査区出土土器 (4) (S=1/2)

US 159 (B1a') (3)

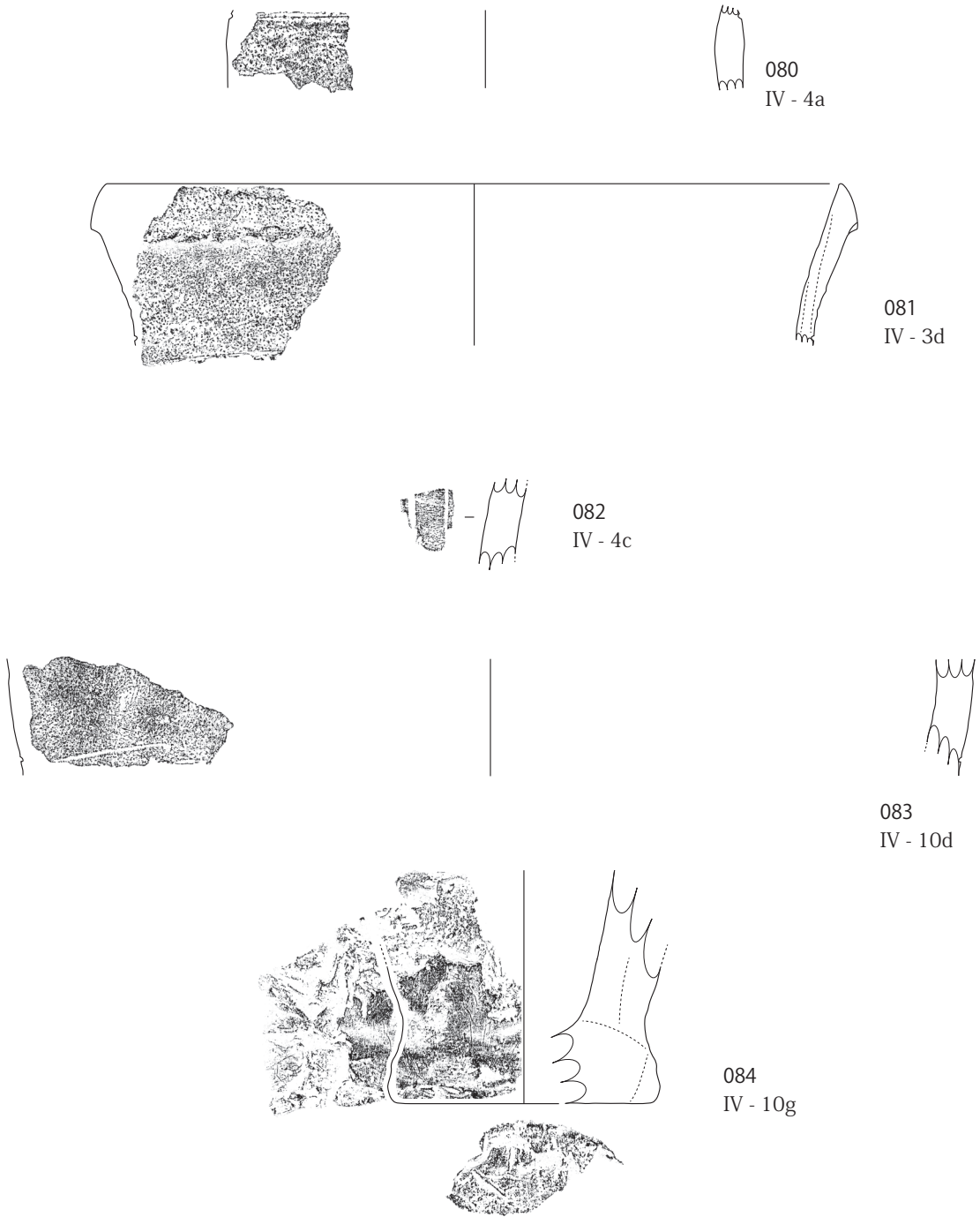
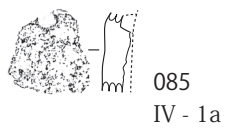


图 29 B1 調査区出土土器 (5) (S=1/2)

US 159 (B1a') (4)



US 159 (B1a' ベルト)

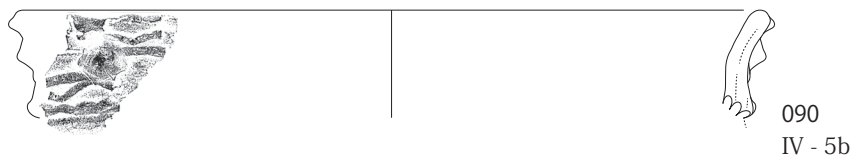
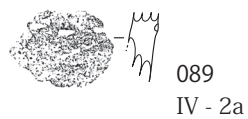
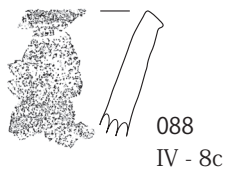
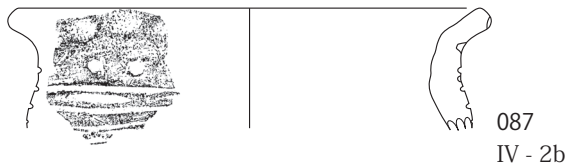
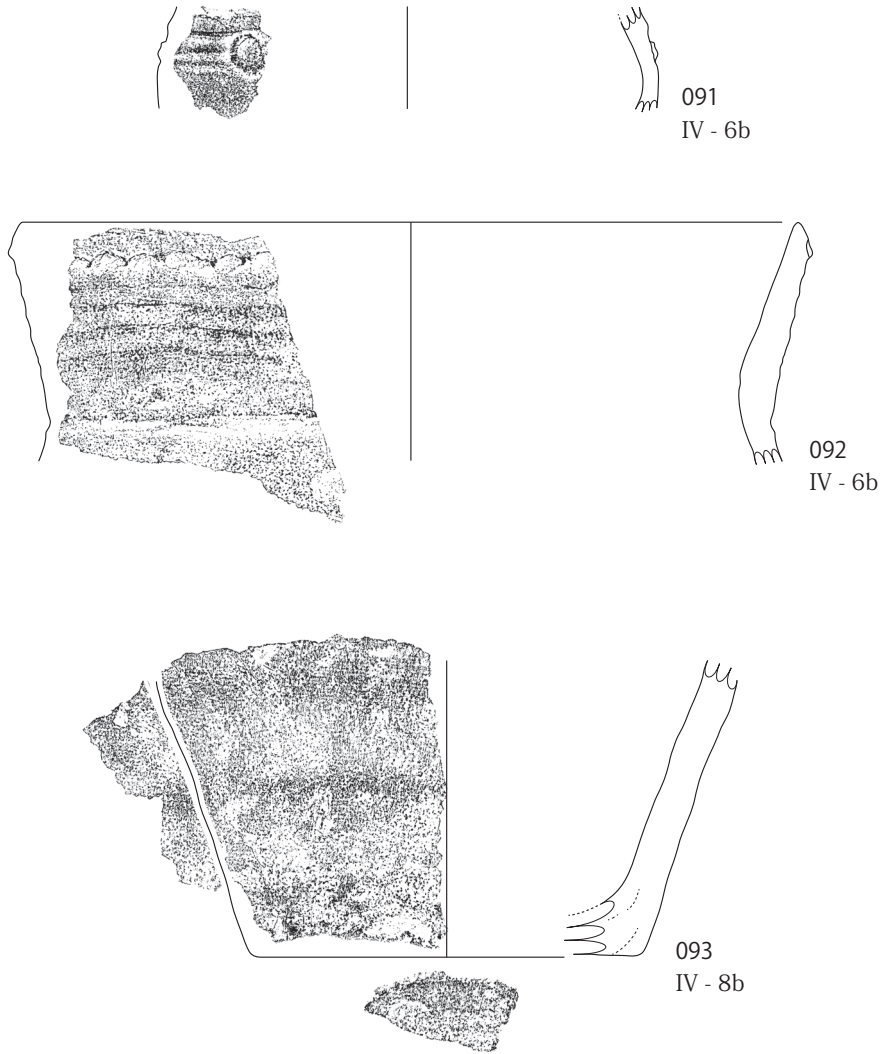


図 30 B1 調査区出土土器 (6) (S=1/2、但し 090 のみ S=1/3)

US 174 (B1a)



US 173 (B1a') (1)

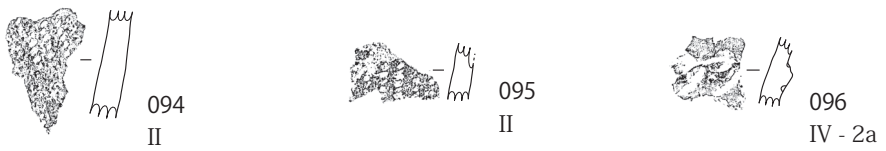


图 31 B1 調査区出土土器 (7) (S=1/2)

US 173 (B1a') (2)

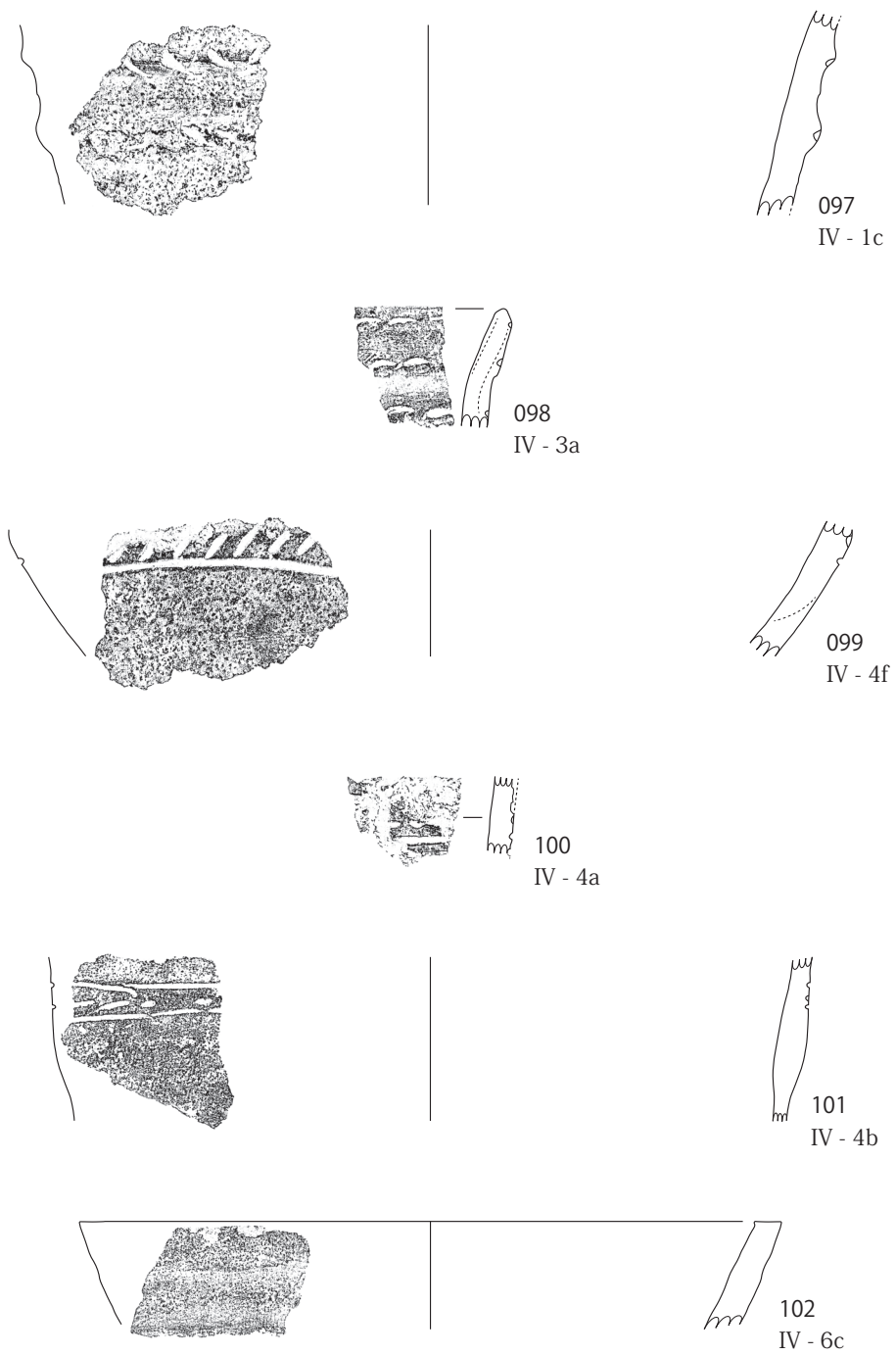
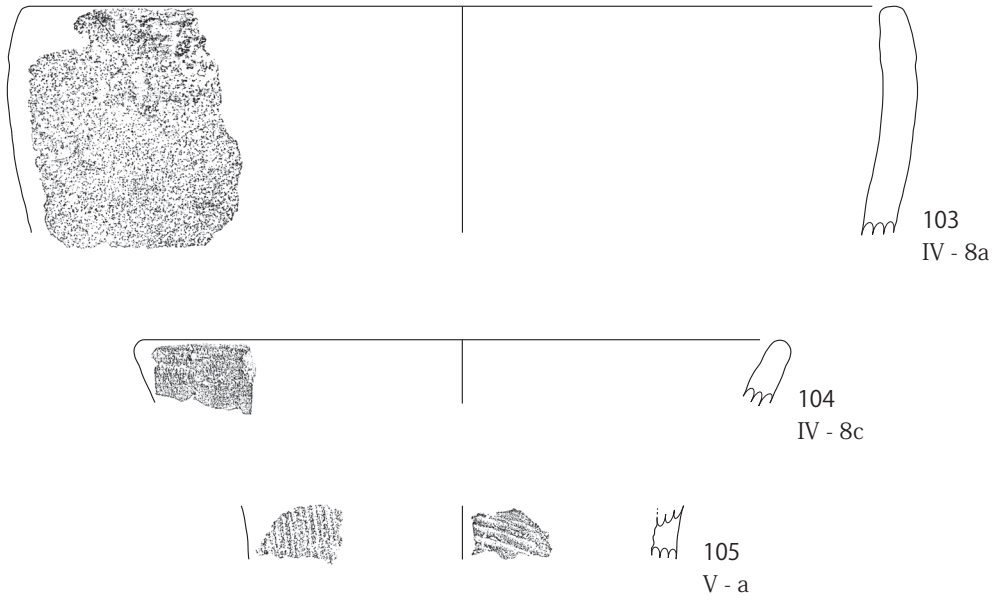


图 32 B1 調査区出土土器 (8) (S=1/2)

US 173 (B1a') (3)



US 173 (B1a) (1)

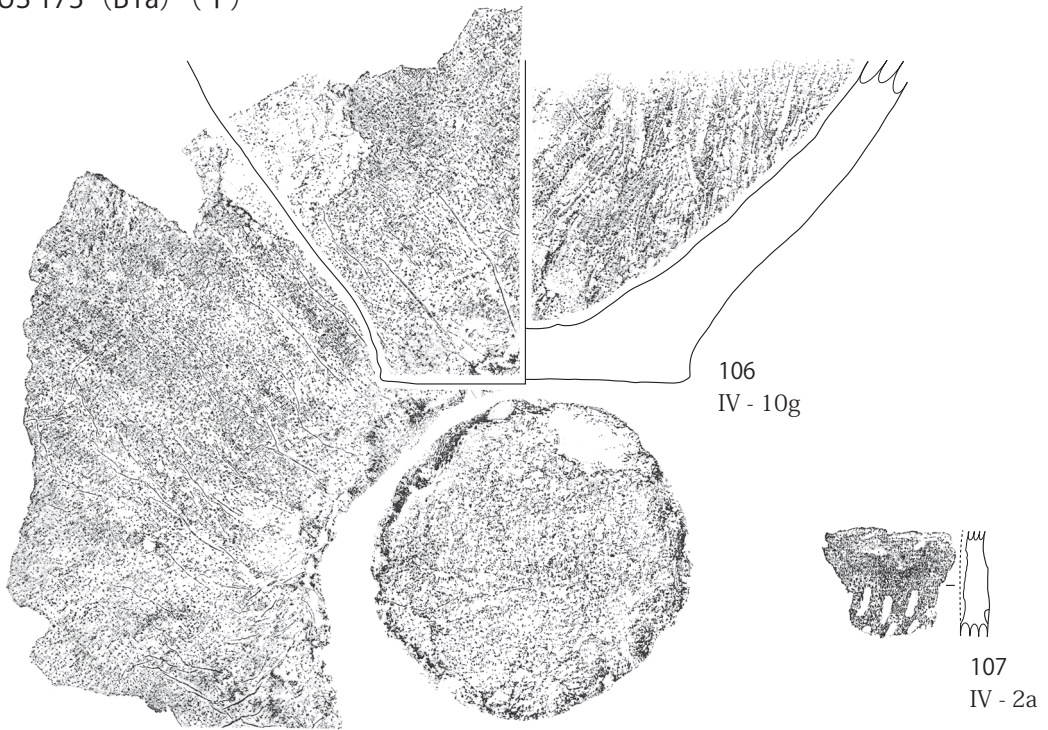


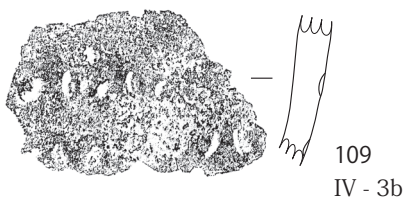
图 33 B1 調査区出土土器 (9) (S=1/2)

US 173 (B1a) (2)

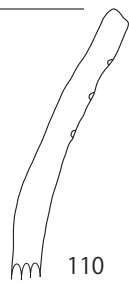
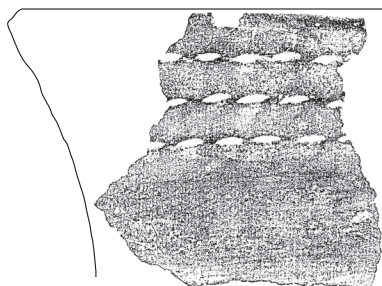


108
IV - 8a

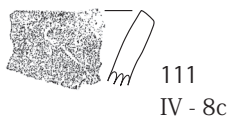
US 204 (B1a)



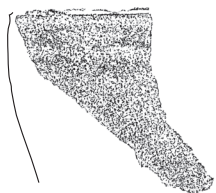
109
IV - 3b



110
IV - 2a



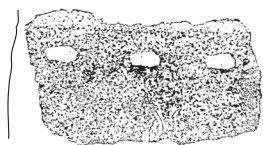
111
IV - 8c



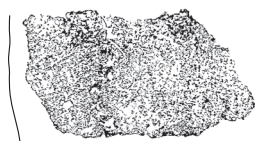
112
IV - 4a

图 34 B1 調査区出土土器 (10) (S=1/2)

US 116 (B1b ベルト)

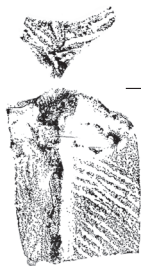


113
IV - 2a

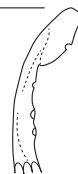
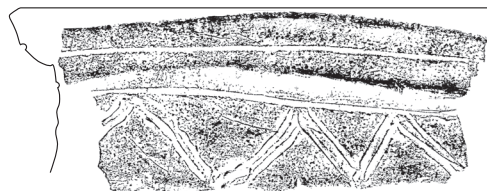


114
IV - 10d

US 117 (B1b ベルト) (1)



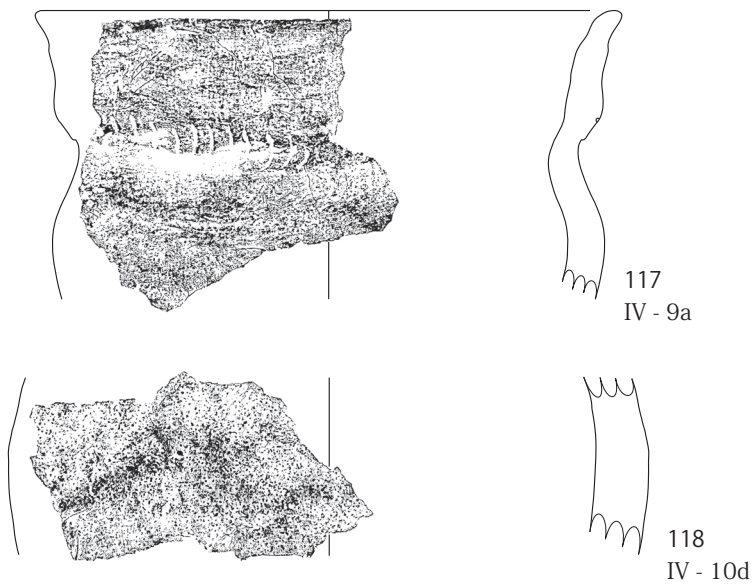
115
II



116
IV - 4g

图 35 B1 調査区出土土器 (11) (S=1/2)

US 117 (B1b ベルト) (2)



US 137 (B1b ベルト)



US 203 (B1b)

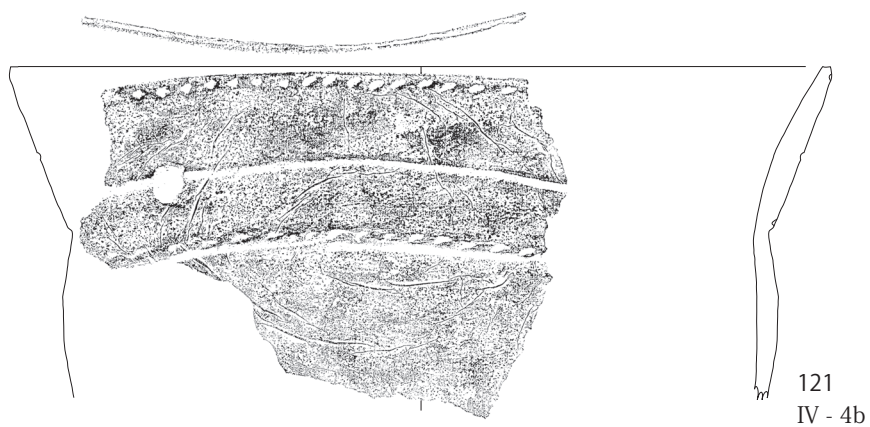
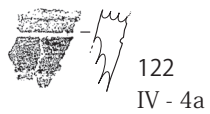


図 36 B1 調査区出土土器 (12) (S=1/2、但し 121 のみ S=1/3)

第2層群上位 (B1b)



第2層群中位 (B1b) (1)

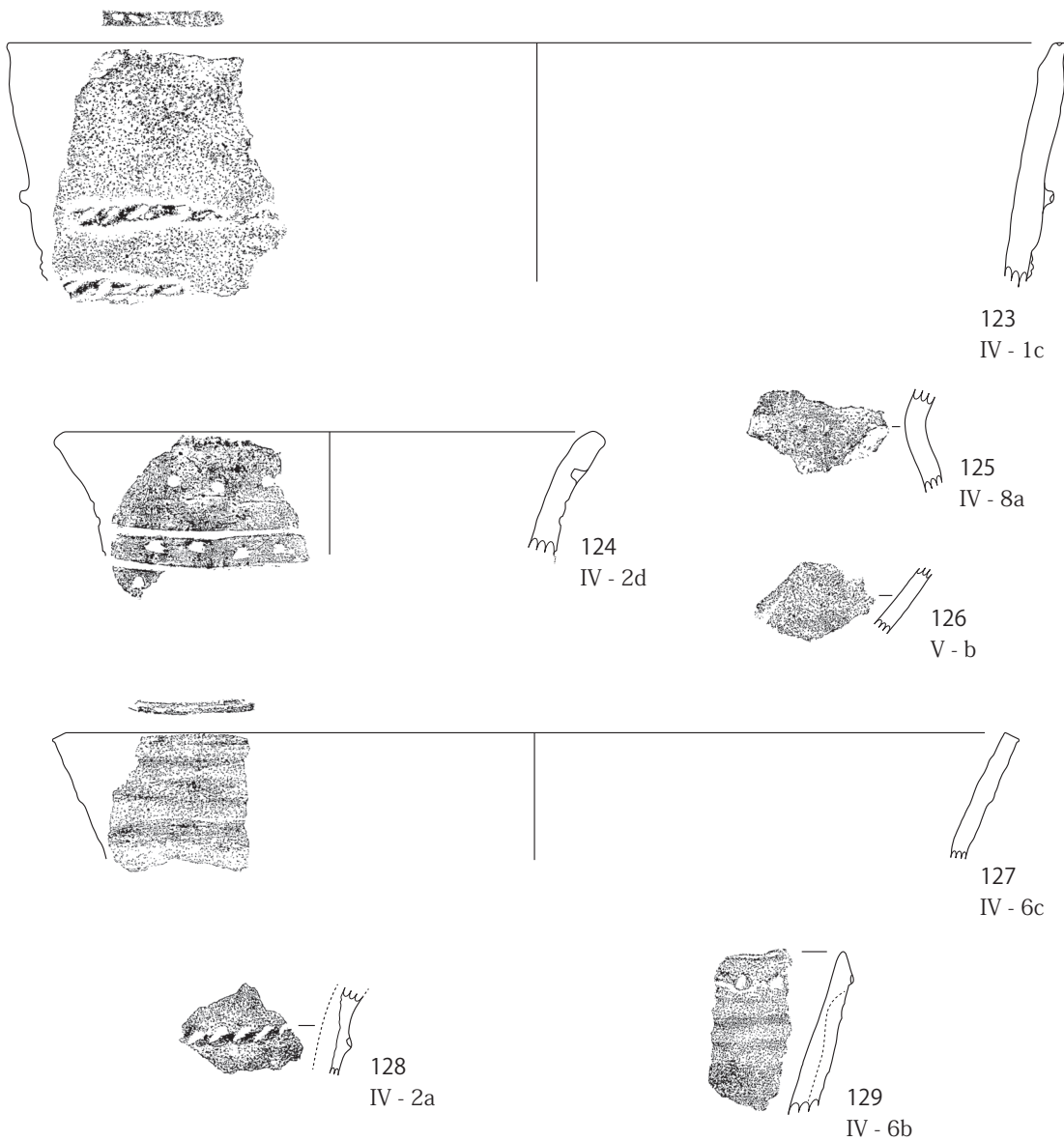
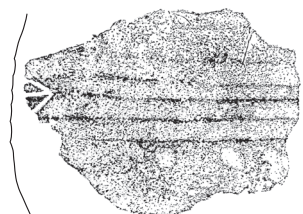


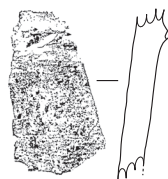
图 37 B1 調査区出土土器 (13) (S=1/2)

第2層群中位 (B1b) (2)



130
IV - 6b

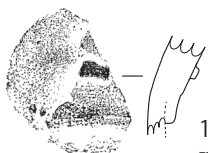
第2層群下位 (B1b)



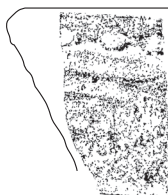
131
IV - 1c



132
IV - 1a



133
IV - 5b



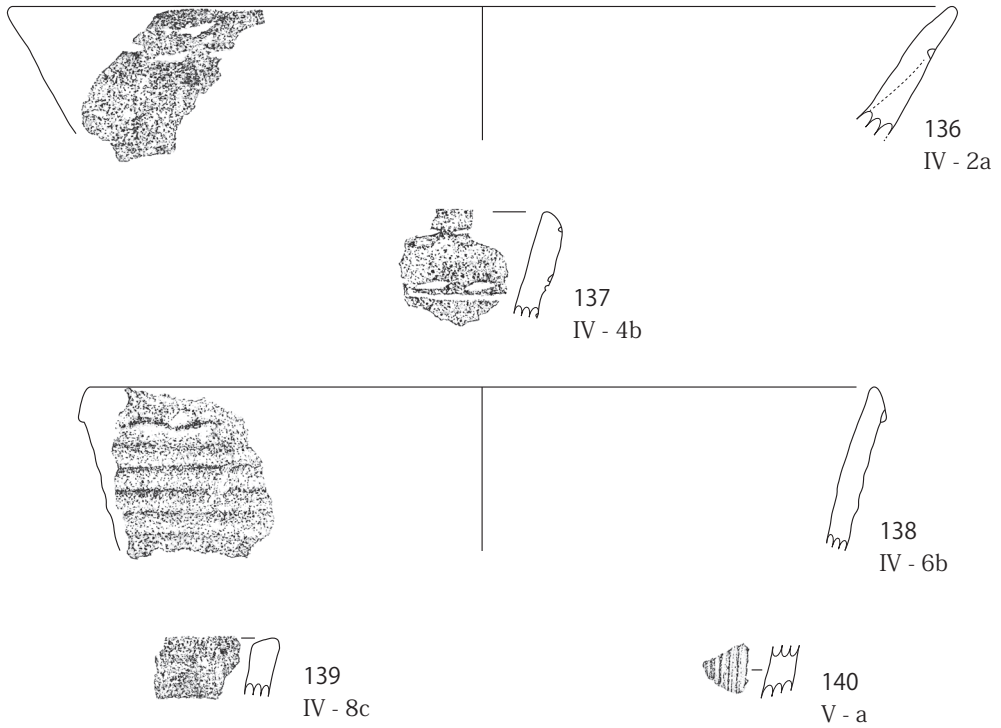
134
IV - 6b



135
IV - 6c

图 38 B1 調査区出土土器 (14) (S=1/2)

US119 (B1a')



US119 (B1a) (1)

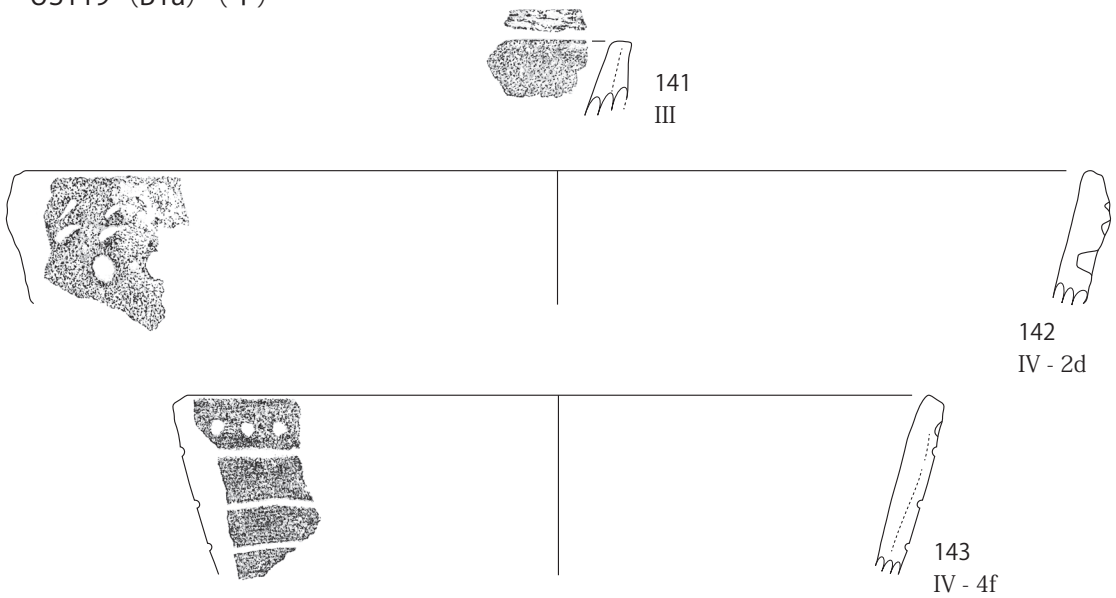


图 39 B1 調査区出土土器 (15) (S=1/2)

US119 (B1a) (2)

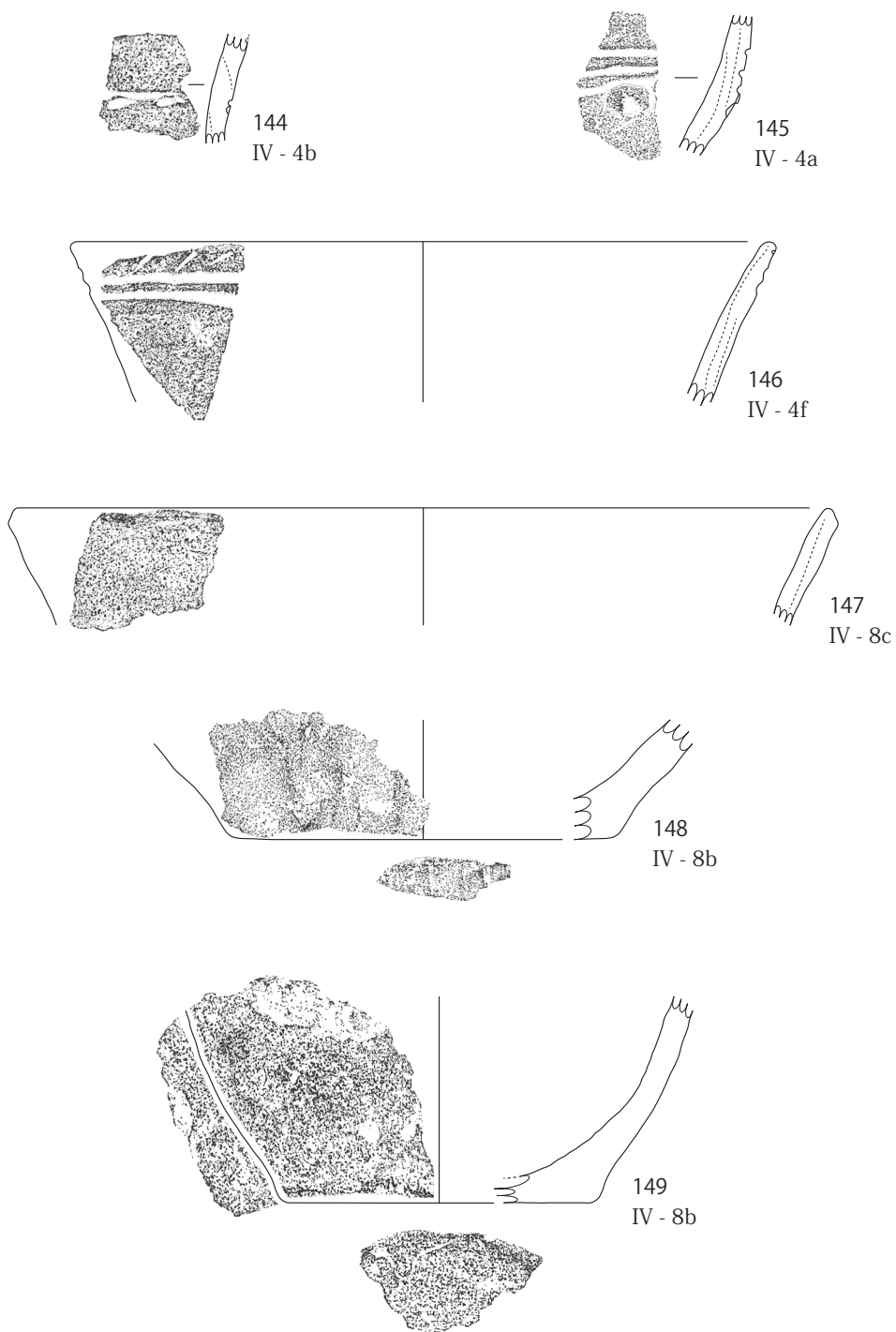


图 40 B1 調査区出土土器 (16) (S=1/2)

US119 (B1)

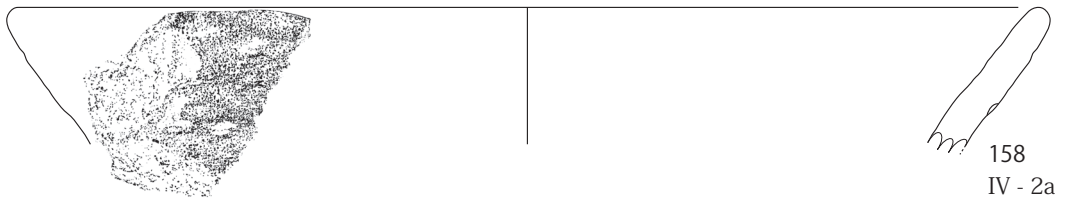
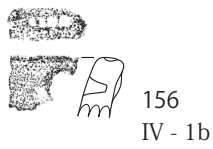
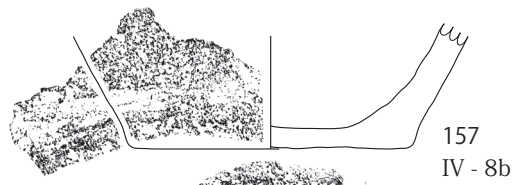
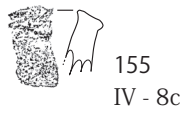
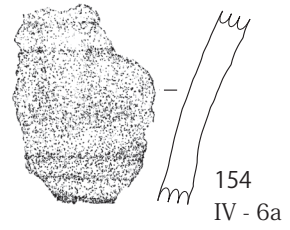
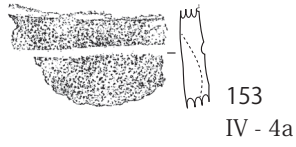
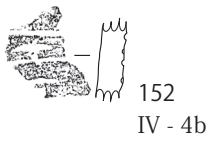
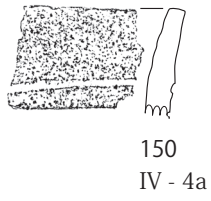


图 41 B1 調査区出土土器 (17) (S=1/2)

US119 (B1b ベルト) (1)

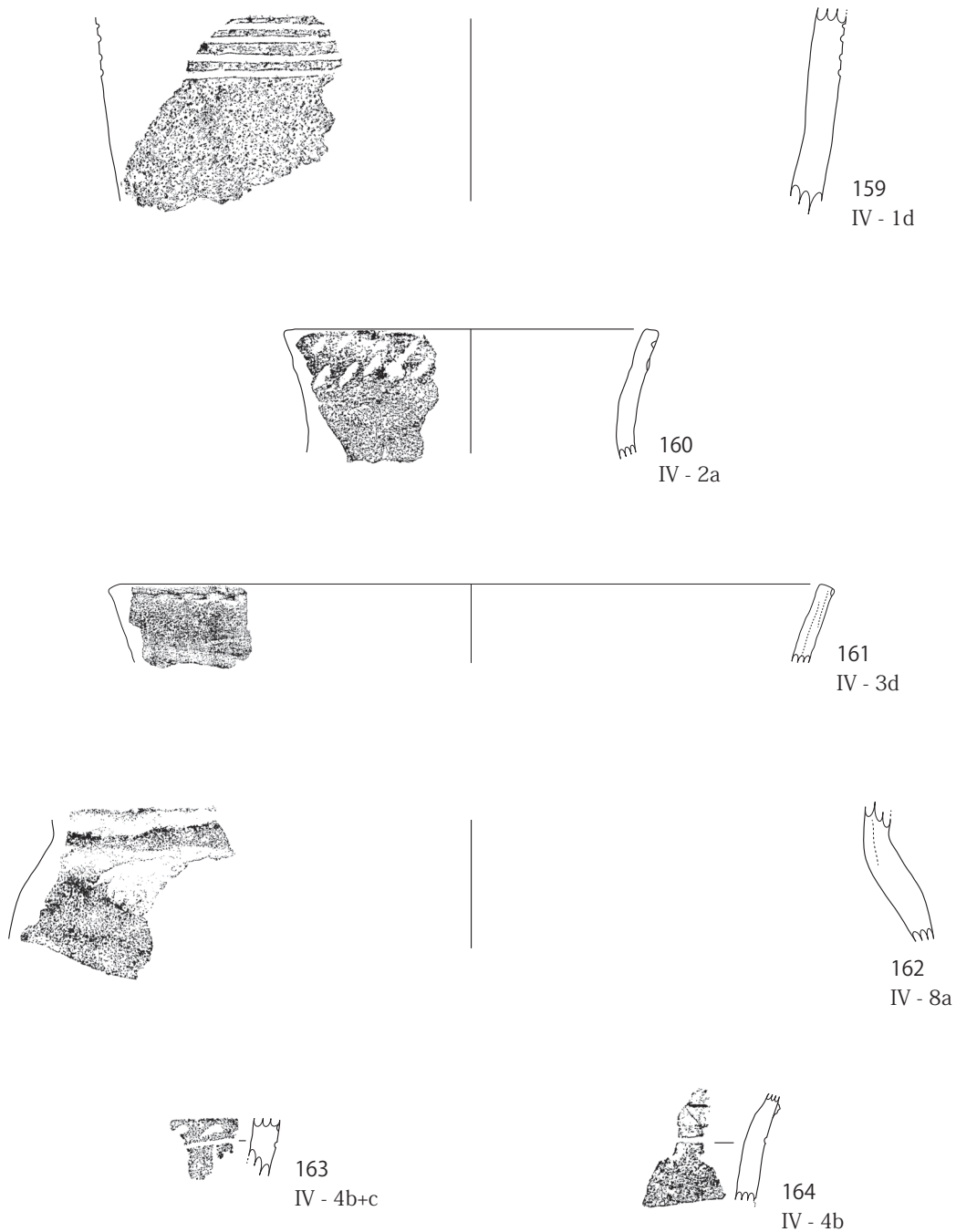
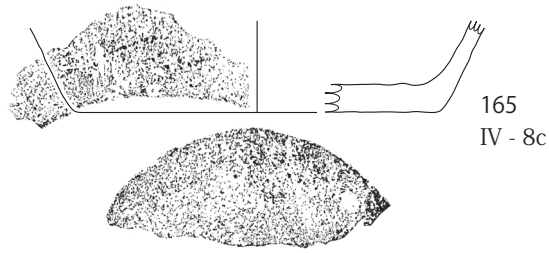
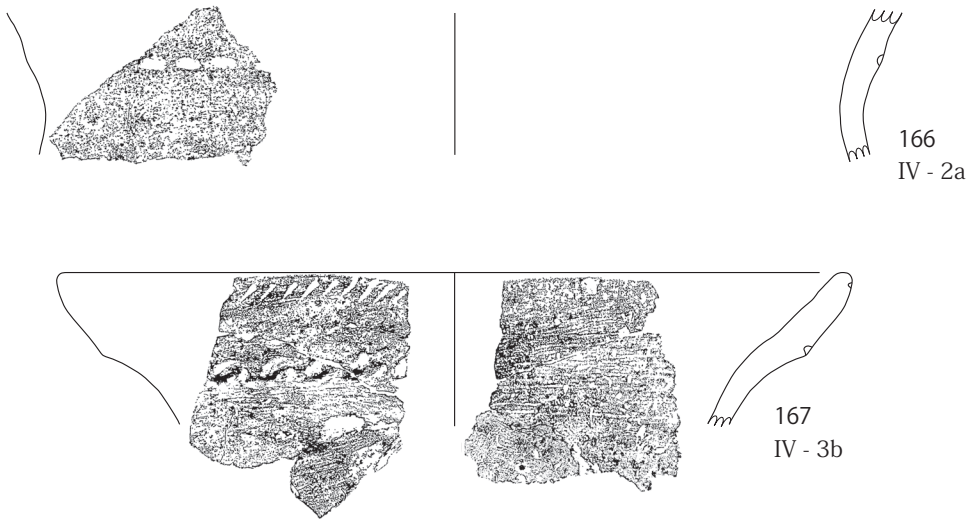


図 42 B1 調査区出土土器 (18) (S=1/2、但し 161 のみ S=1/3)

US119 (B1b ベルト) (2)



US119 (B1b)



US169 (B1b) (1)

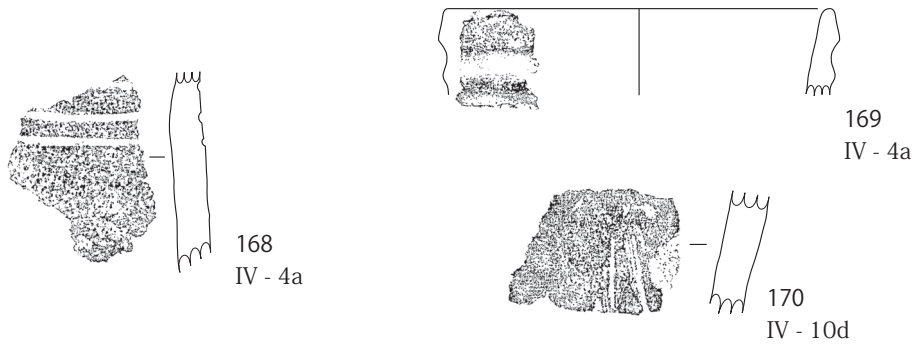
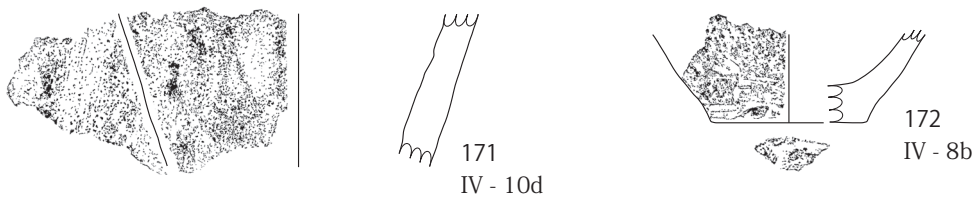
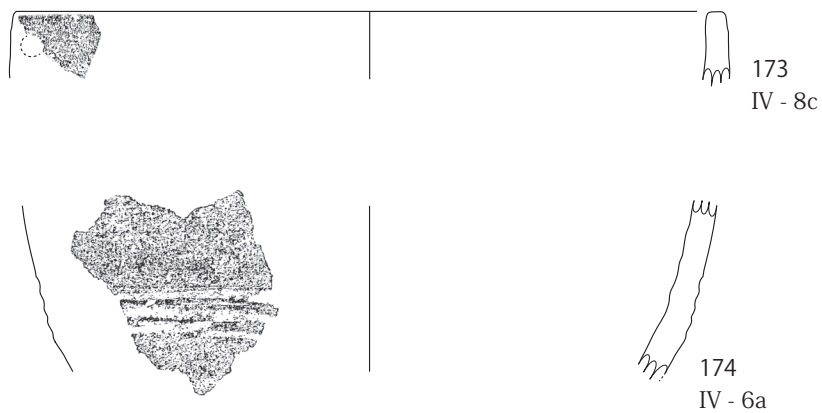


图 43 B1 調査区出土土器 (19) (S=1/2)

US169 (B1b) (2)



US0 (B1a)



US0 (B1) (1)

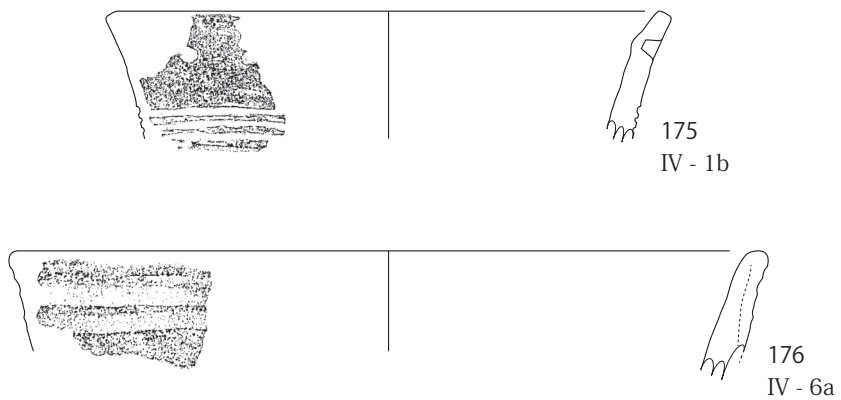
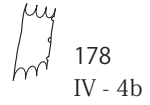
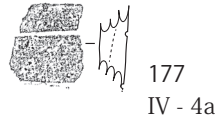


图 44 B1 調査区出土土器 (20) (S=1/2)

USO (B1) (2)



USO (B1b ベルト)

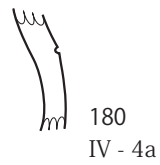


図 45 B1 調査区出土土器 (21) (S=1/2)

(4) B3区 (図46～47、表14、写真2)

B3区は、第1次調査において第2層群に属する堆積層を完掘しており、今回調査においては第3層群に属するUS131・138・139の3層を掘削調査した。出土土器資料は、第3層群内の最上層にあたるUS131からのものに限られているうえ、出土点数も少ないので、ここで出土傾向に関する分析を行うことは難しい。出土事実としては、オホーツク式土器と元地式土器がそれぞれ少量出土している。(岩城)

表14 B3区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数	
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明		
131							1				2	1	1		17	22
138																0
139																0



図46 B3区堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)

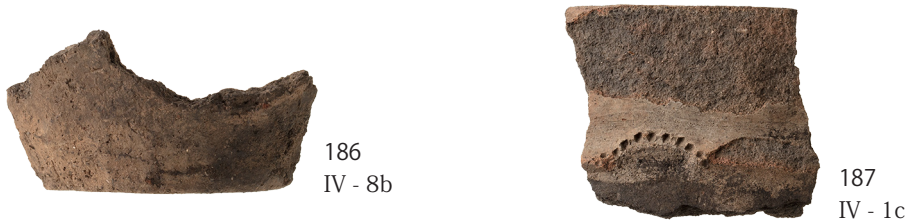
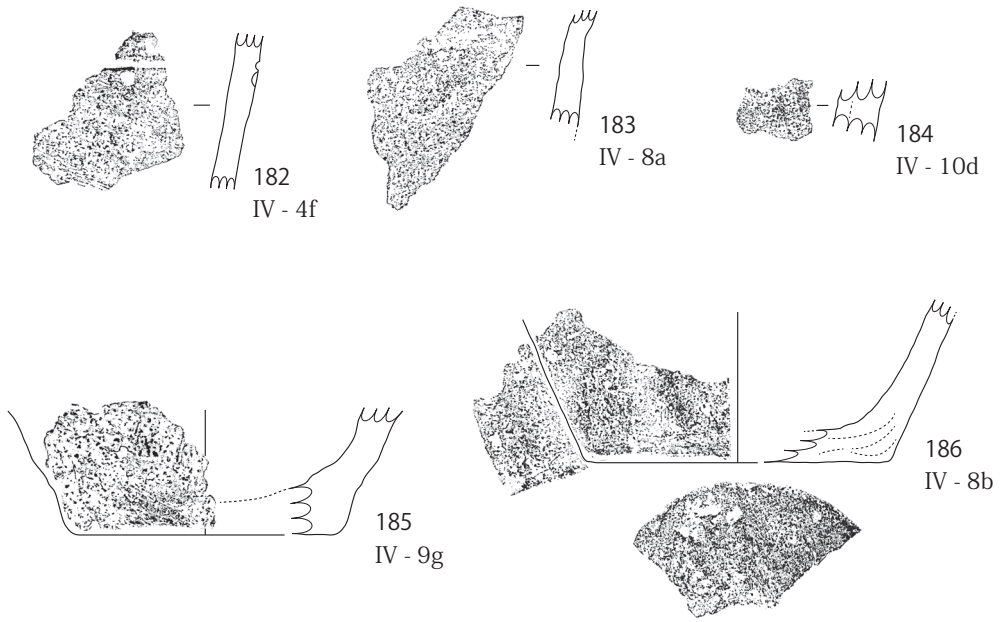


写真2 B3区出土土器

US131



US0

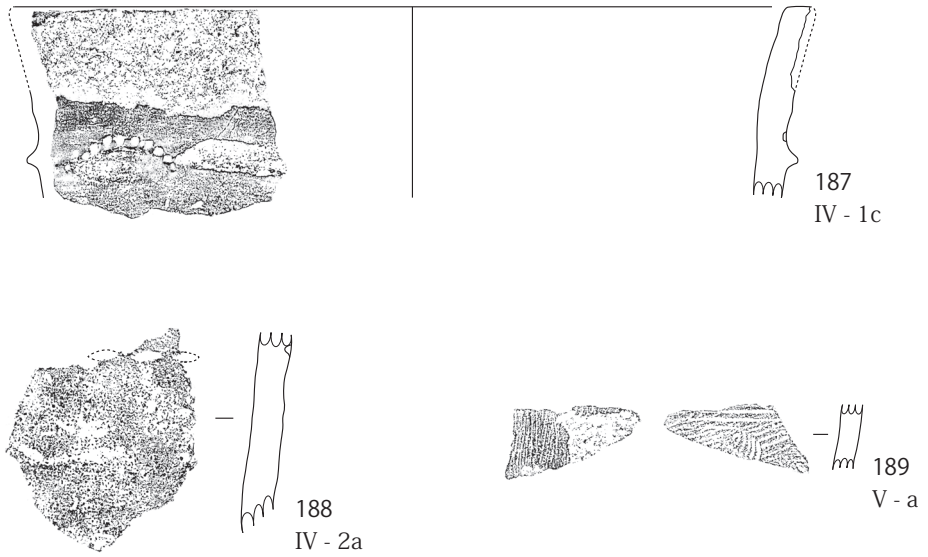


图 47 B3 区出土土器 (S=1/2)

(5) B7区 (図48～73、表15)

B7区は現時点で第2層群の堆積が最も厚く、従って第2層群からの土器出土点数も多い。第1層群では主体となるオホーツク式土器の他に、ややまとまった数量の擦文土器と少量の続縄文土器が、第2層群では主体となるオホーツク式土器の他に、ややまとまった数量の元地式土器と擦文土器、他に続縄文土器と縄文土器が1点ずつ、それぞれ出土している。第3層群からは同定できる土器が2点のみ、オホーツク式土器と擦文土器が1点ずつ出土している。(岩城)

表15 B7区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明	
101		1		2	3		4		1				4	85	100
129				1	5	2	8		1	4	1		3	65	90
149				1	1	1	4		3			2		29	41
147															0
145															0
162		1		1		1	3		1	3	1			19	30
163				1	8	4	7		6	10	3	1	3	114	157
178										2		1		5	8
168														1	1
170							1							2	3
179							1			1	1			1	4
171	1				2		3			3	4	8		57	78
183														10	10
184					1								1	3	5

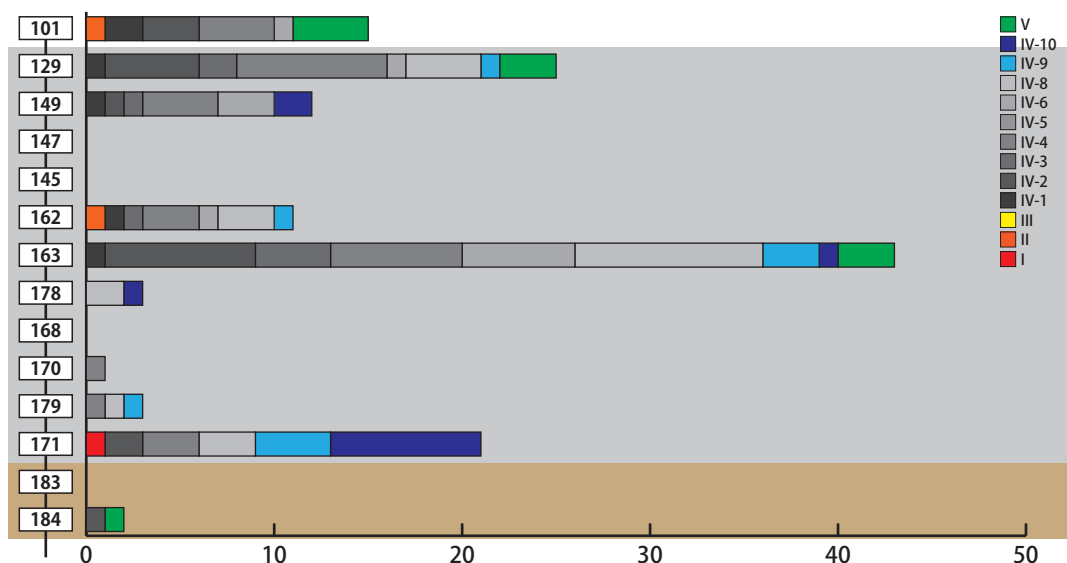


図48 B7区堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)

US101 (1)

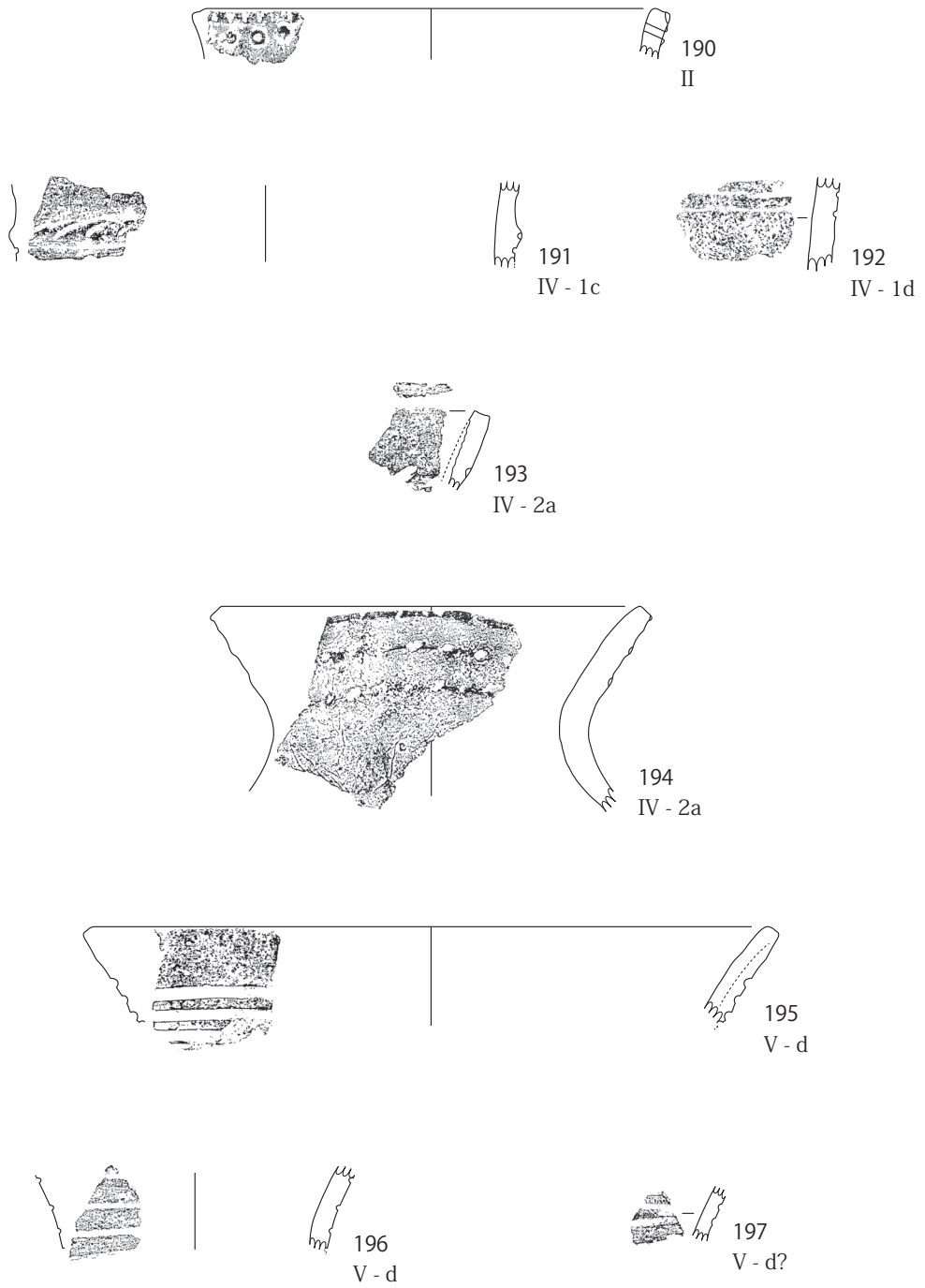


图 49 B7 区出土土器 (1) (S=1/2)

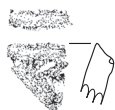
US101 (2)



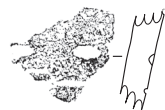
198
IV - 4f



199
IV - 4a



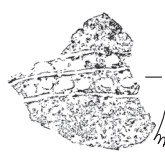
200
IV - 2a



201
IV - 4b



202
IV - 6b



203
IV - 4b



204
V - b

图 50 B7 区出土土器 (2) (S=1/2)

US129 (1)

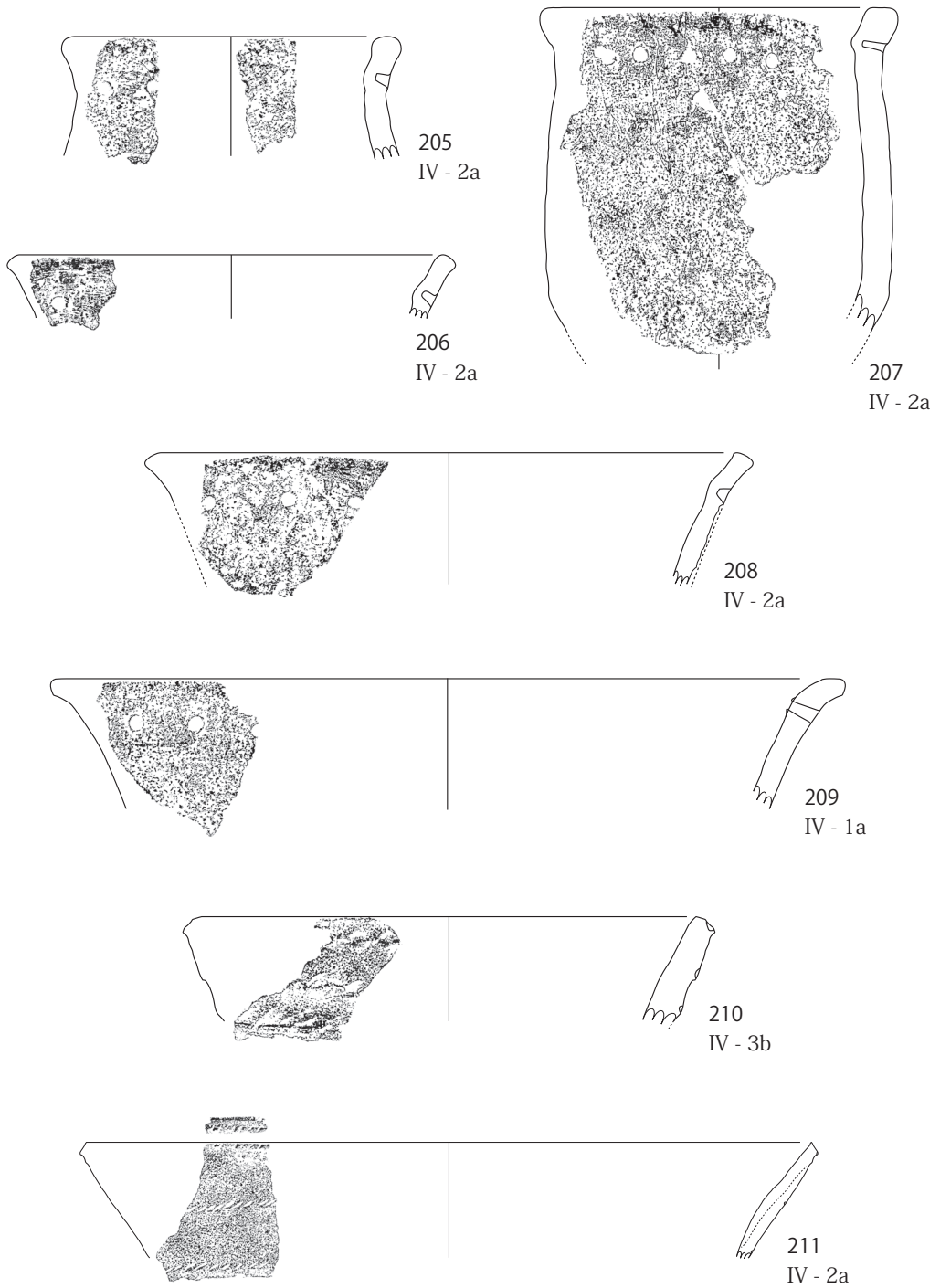


図 51 B7区出土土器(3) (S=1/2、但し 211のみ S=1/3)

US129 (2)

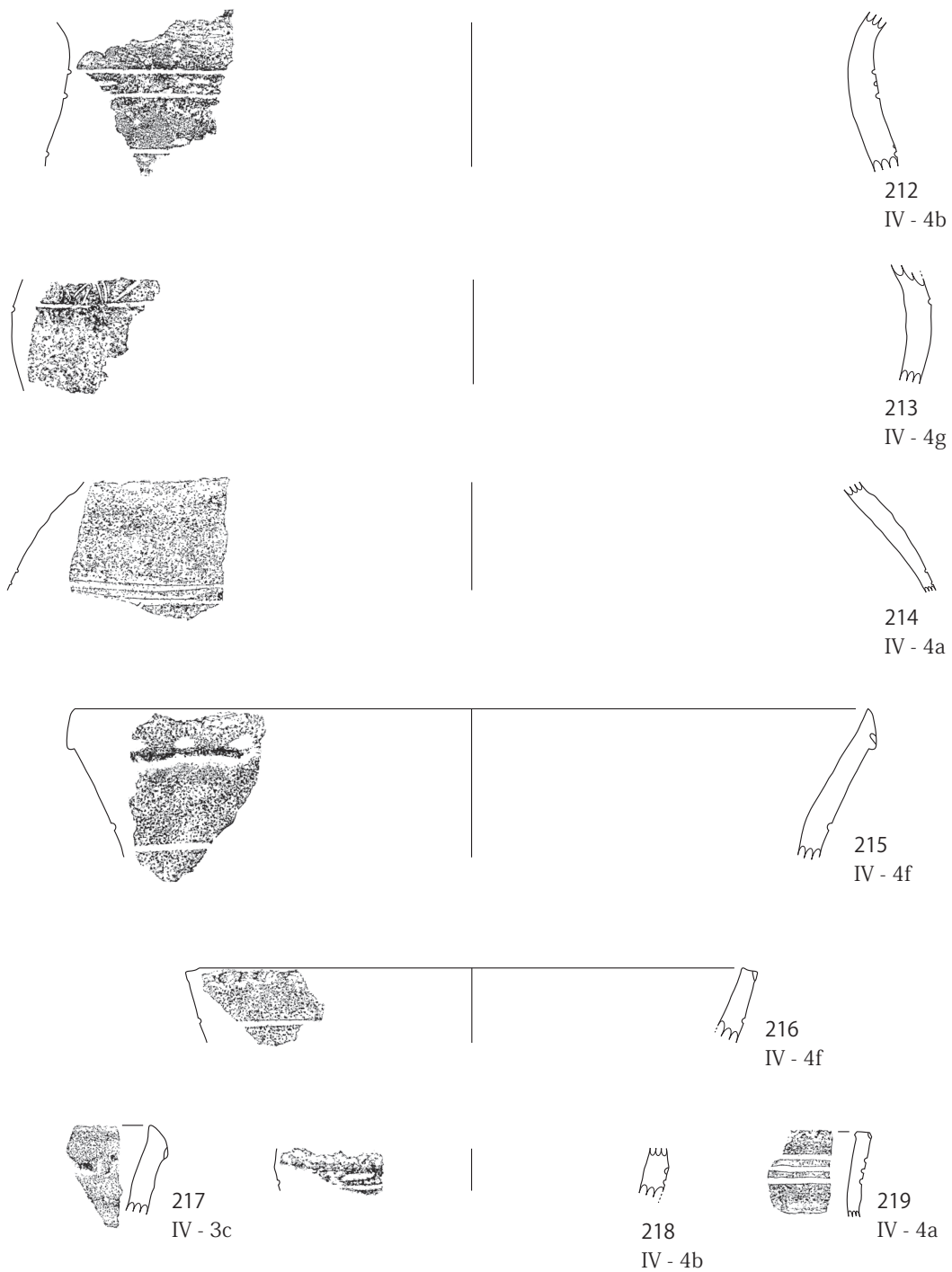


图 52 B7 区出土土器 (4) (S=1/2)

US129 (3)

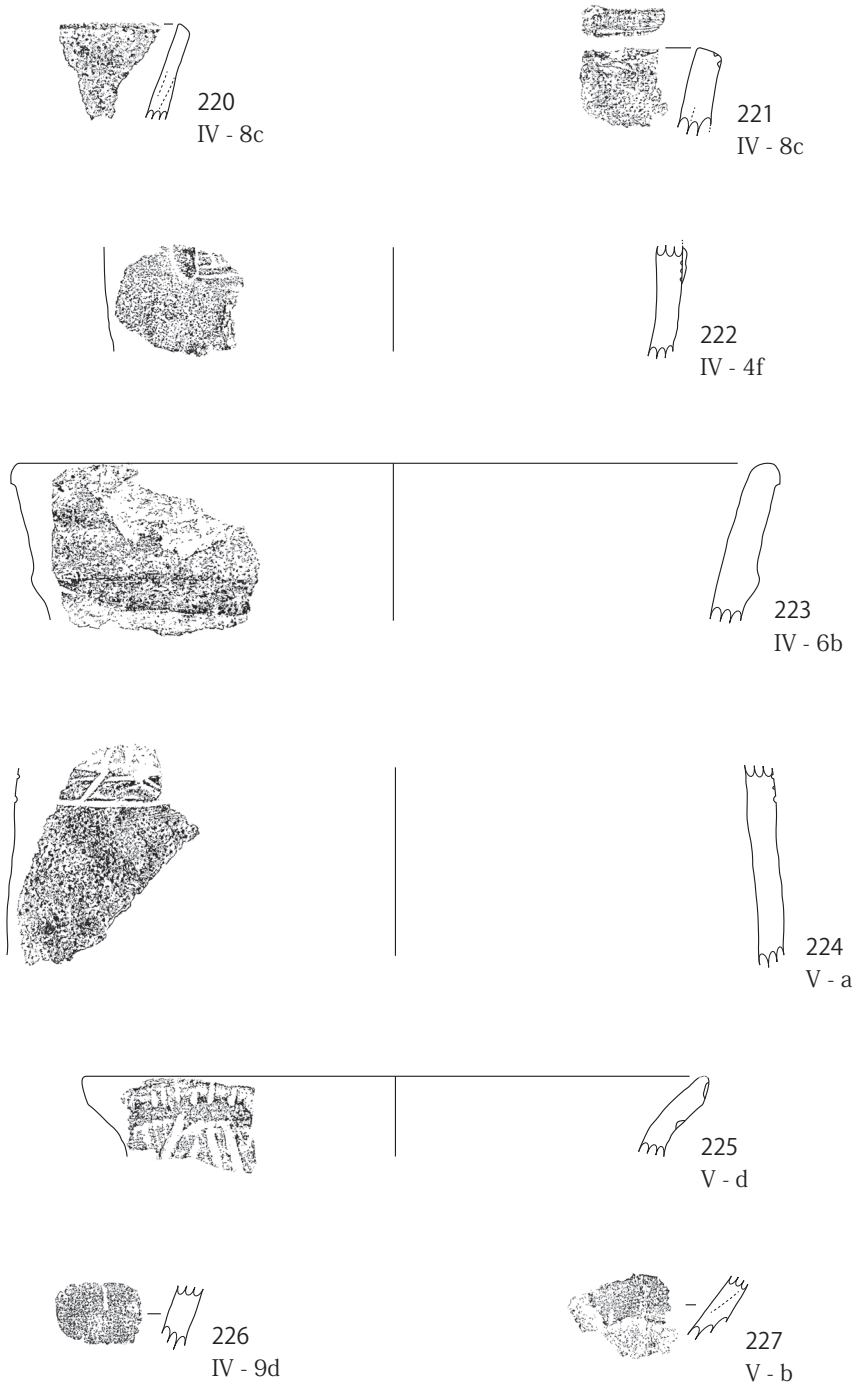


图 53 B7 区出土土器 (5) (S=1/2)

US129 (4)

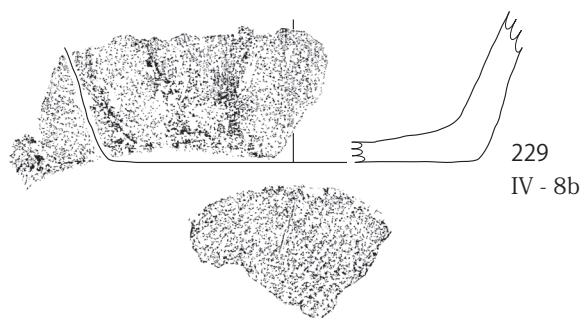
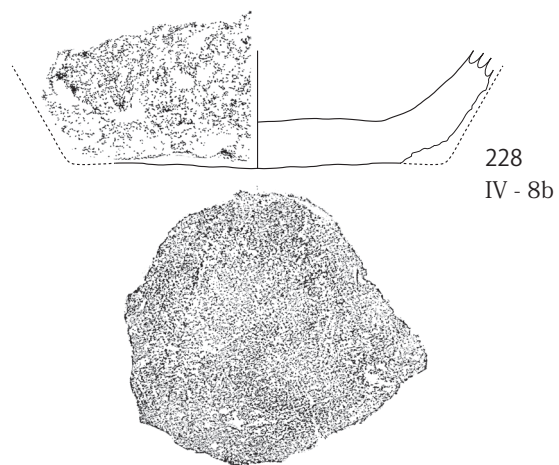


图 54 B7 区出土土器 (6) (S=1/2)

US149 (1)

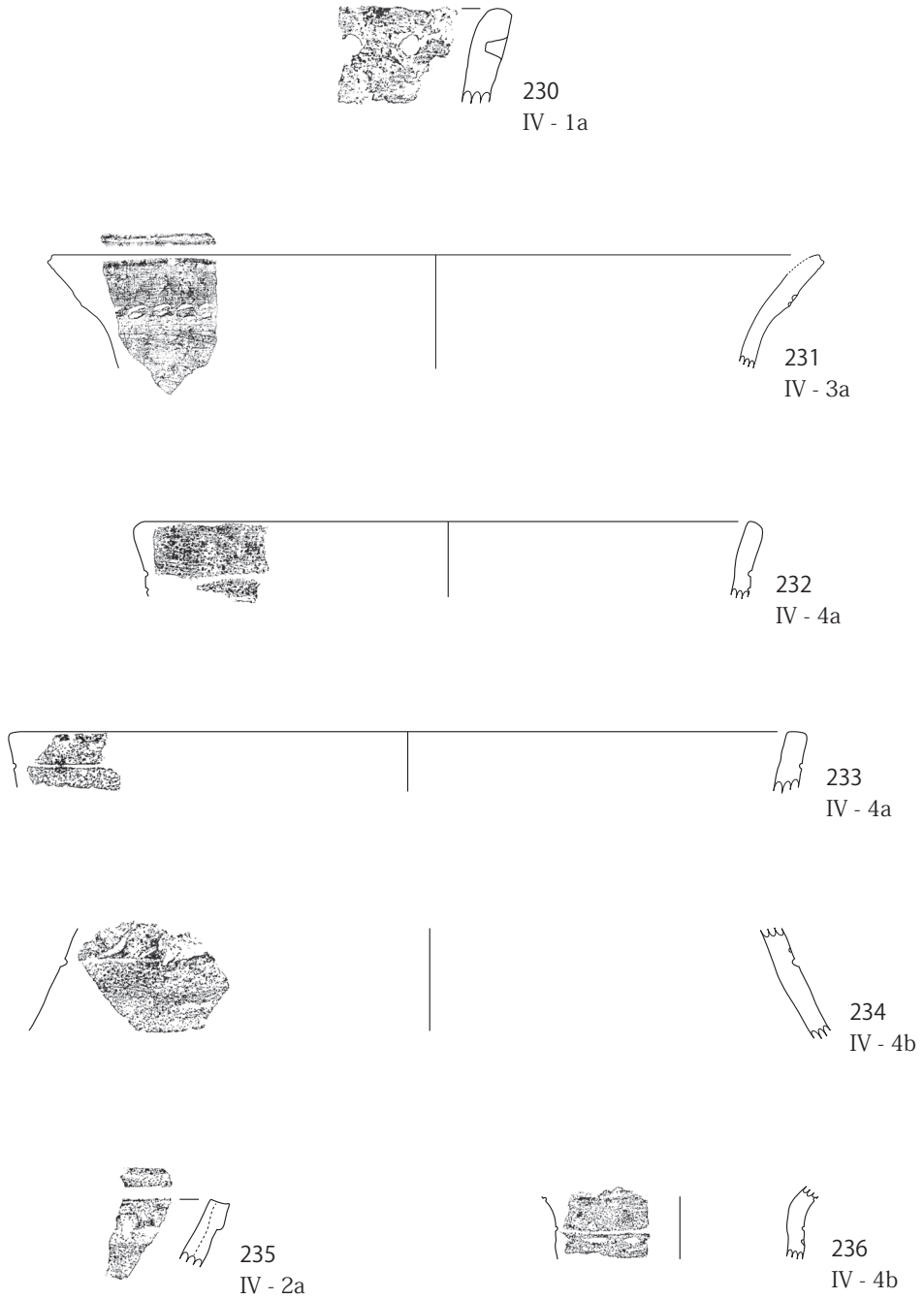


図 55 B7区出土土器(7) (S=1/2、但し 231 のみは S=1/3)

US149 (2)

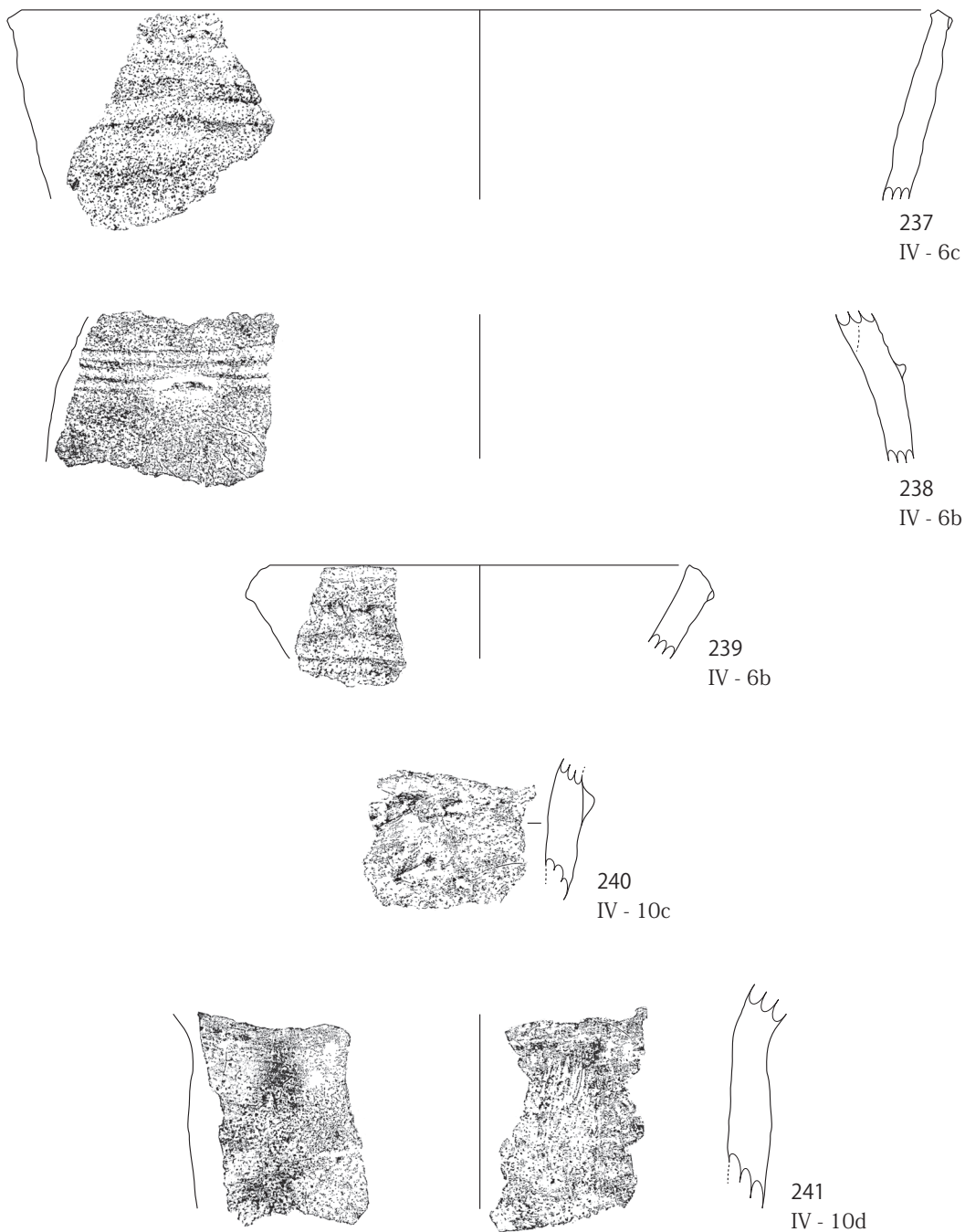


图 56 B7 区出土土器 (8) (S=1/2)

US162 (1)

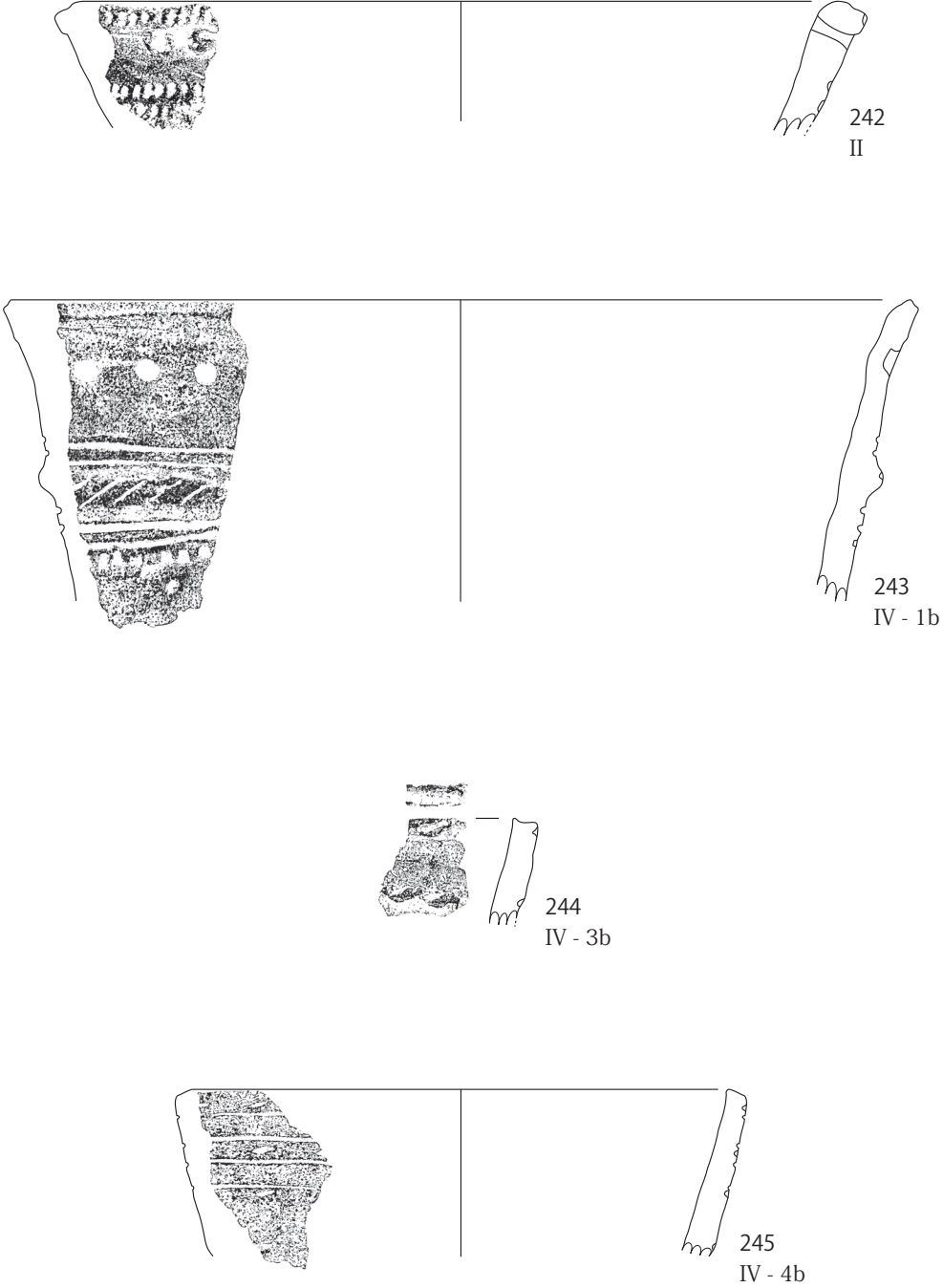
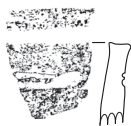


图 57 B7 区出土土器 (9) (S=1/2)

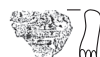
US162 (2)



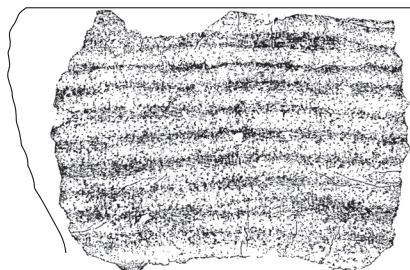
246
IV - 4b



247
IV - 4b



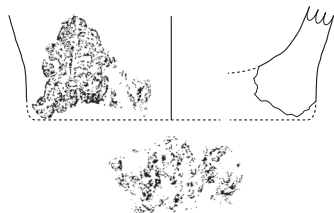
248
IV - 8c



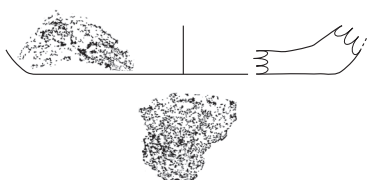
249
IV - 6a



250
IV - 8a



251
IV - 9g



252
IV - 8b

图 58 B7 区出土土器 (10) (S=1/2)

US163 (1)

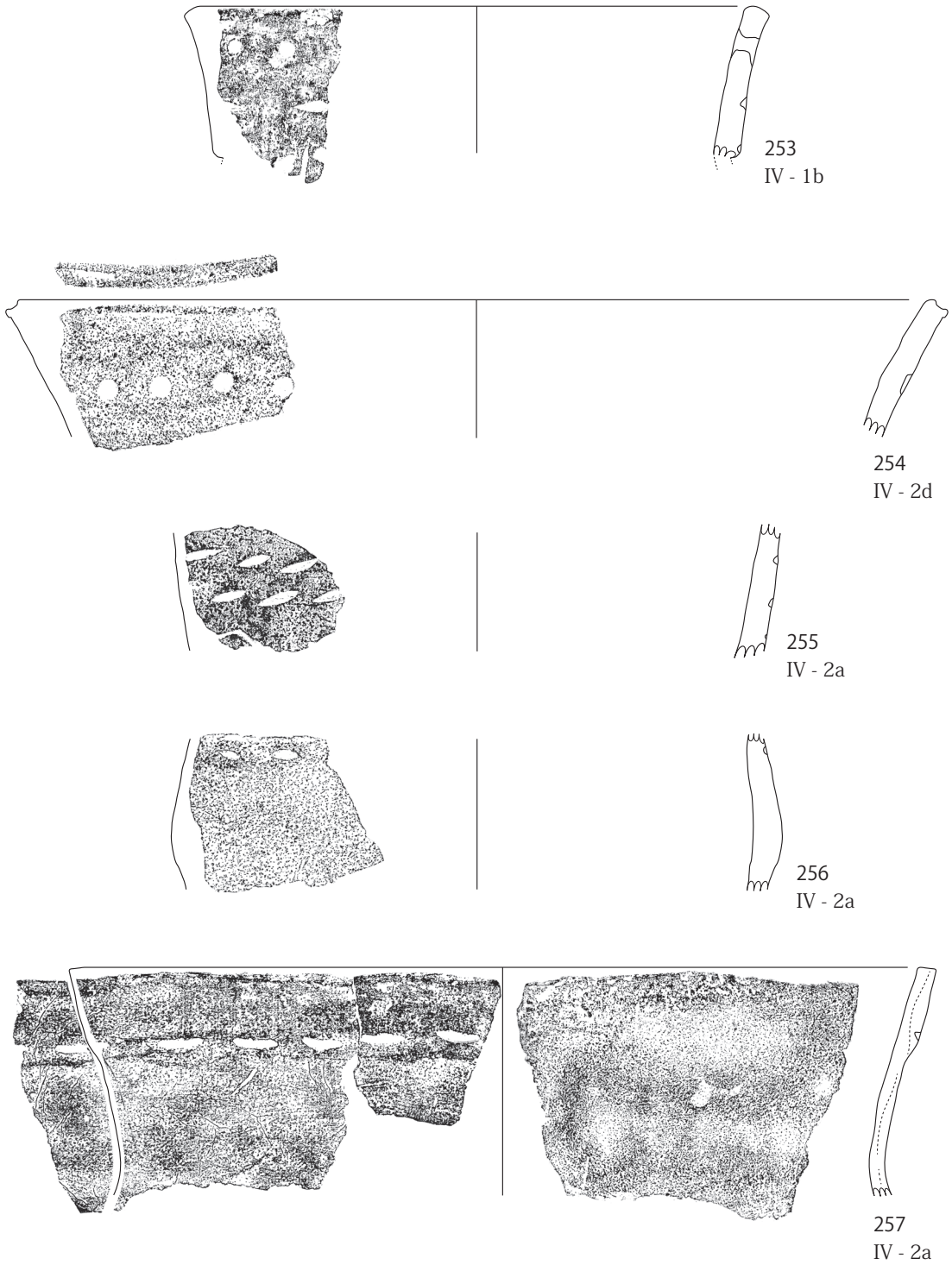


图 59 B7 区出土土器 (11) (S=1/2)

US163 (2)

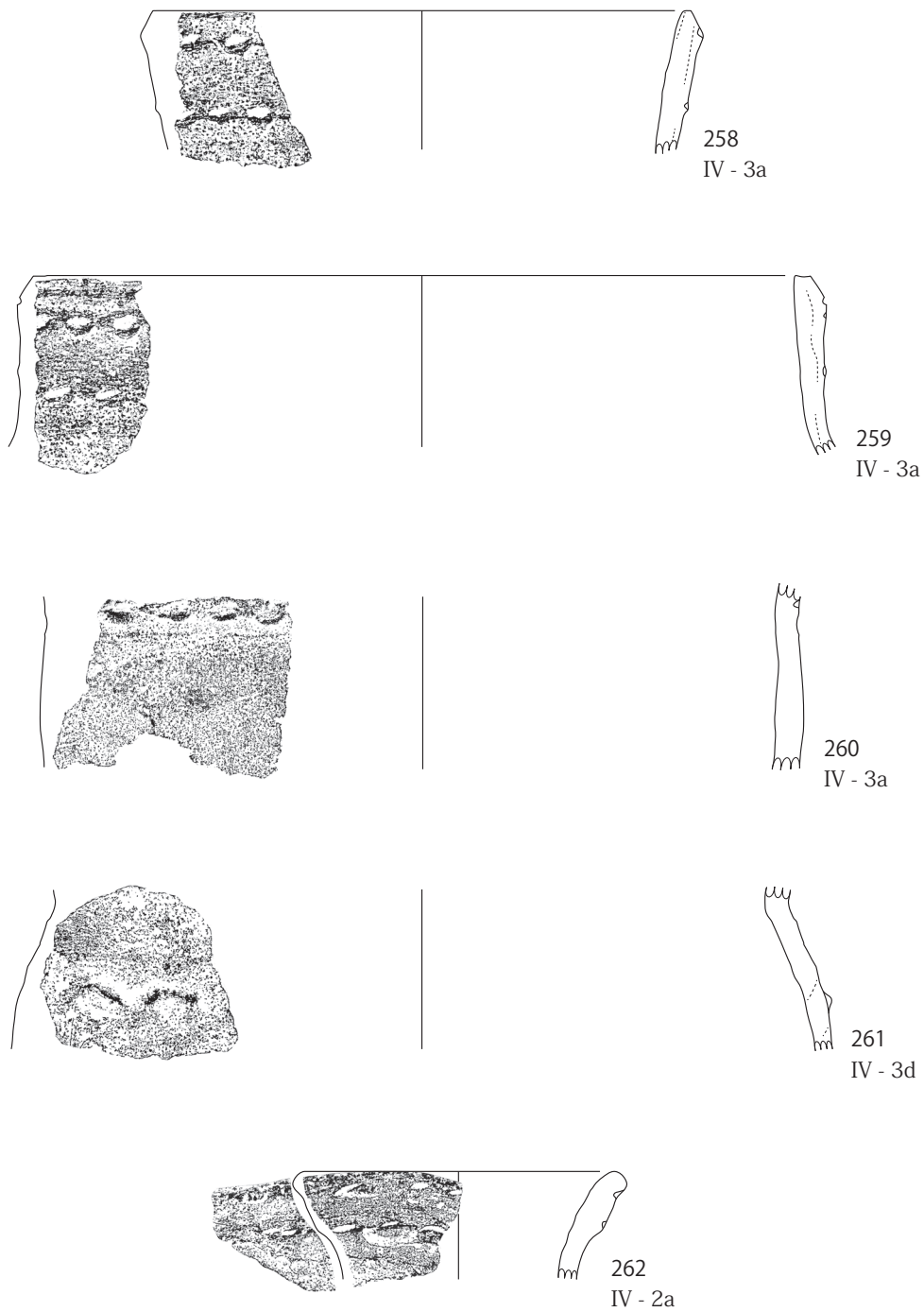


图 60 B7 区出土土器 (12) (S=1/2)

US163 (3)

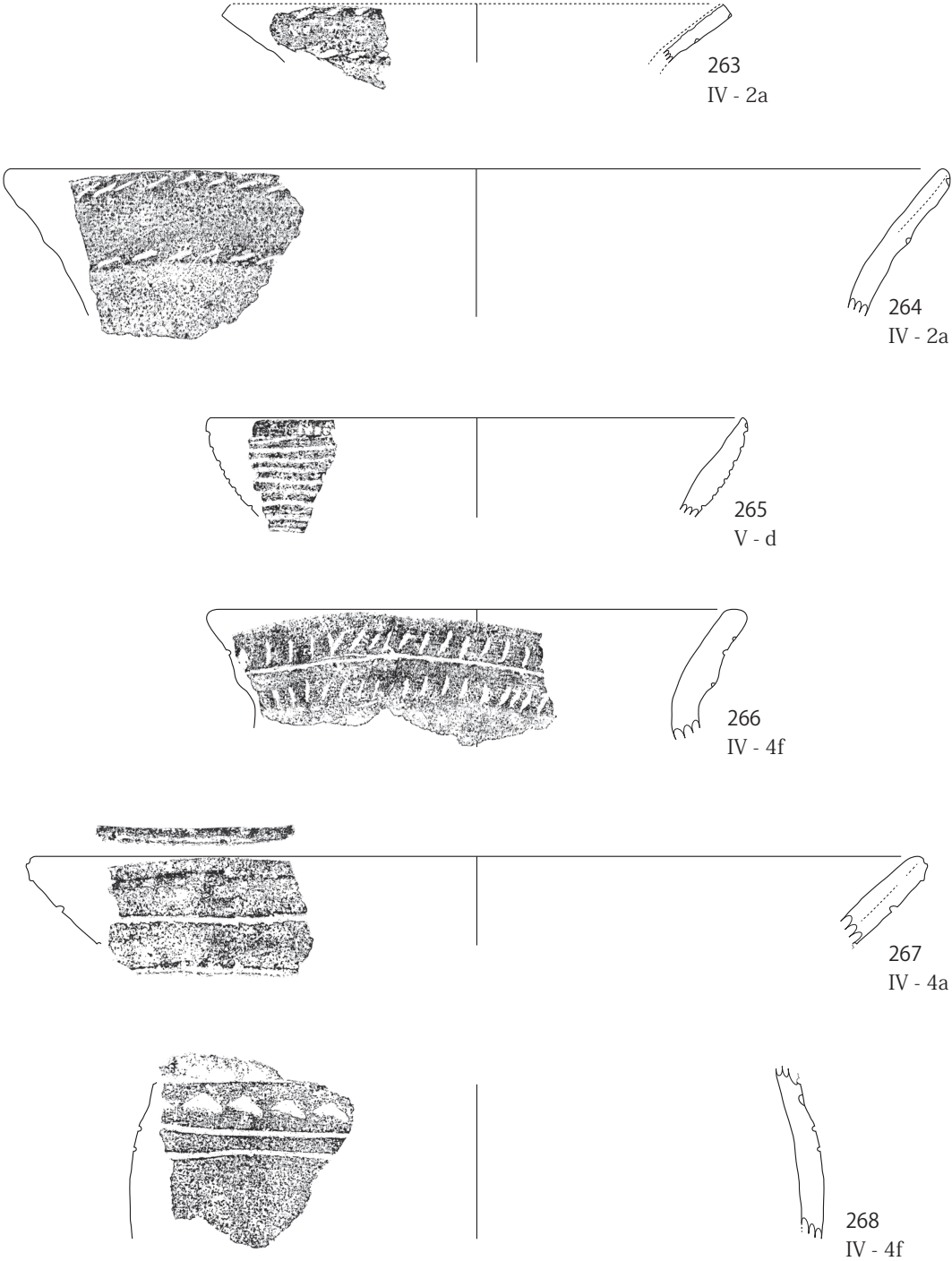


图 61 B7 区出土土器 (13) (S=1/2)

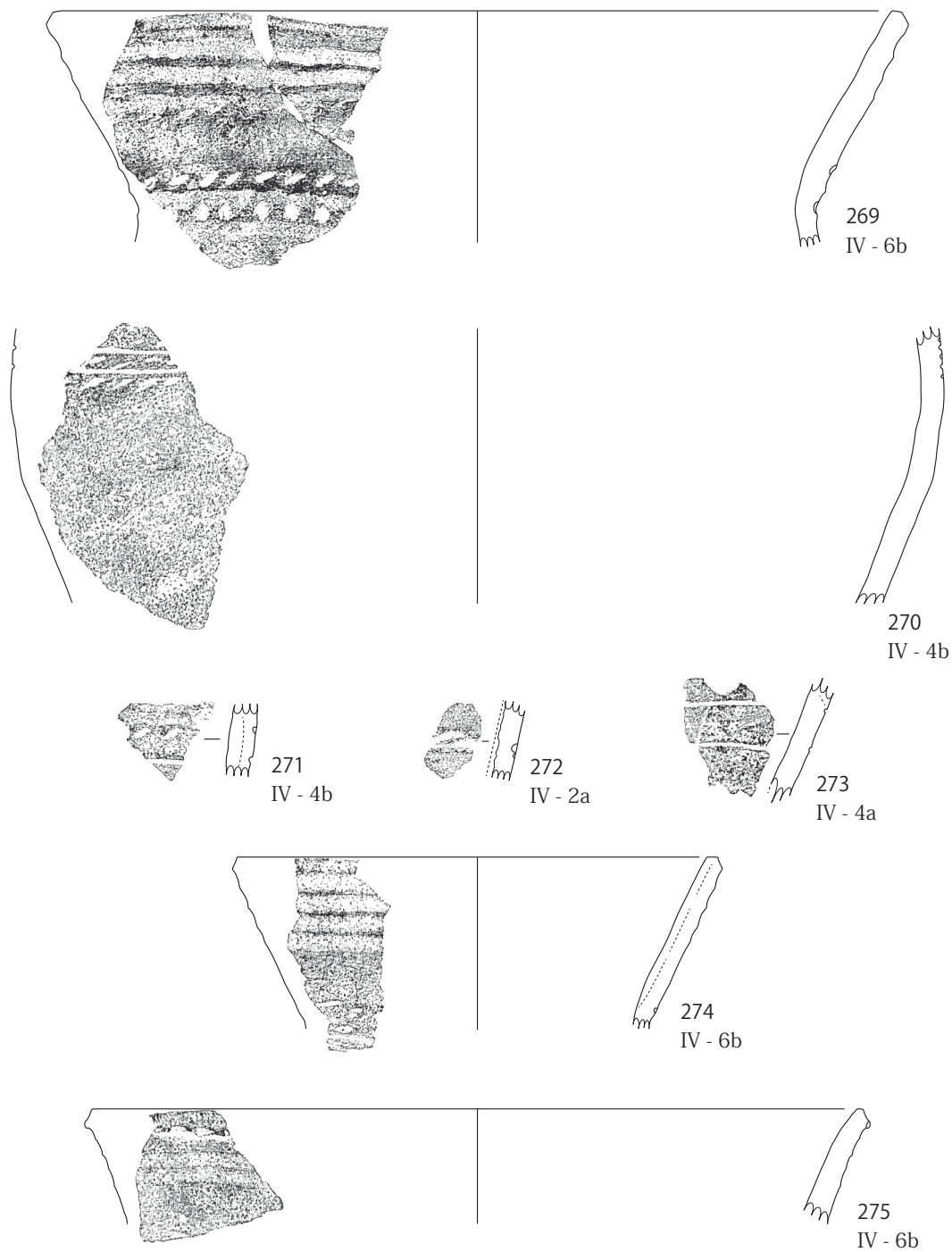


图 62 B7 区出土土器 (14) (S=1/2)

US163 (5)

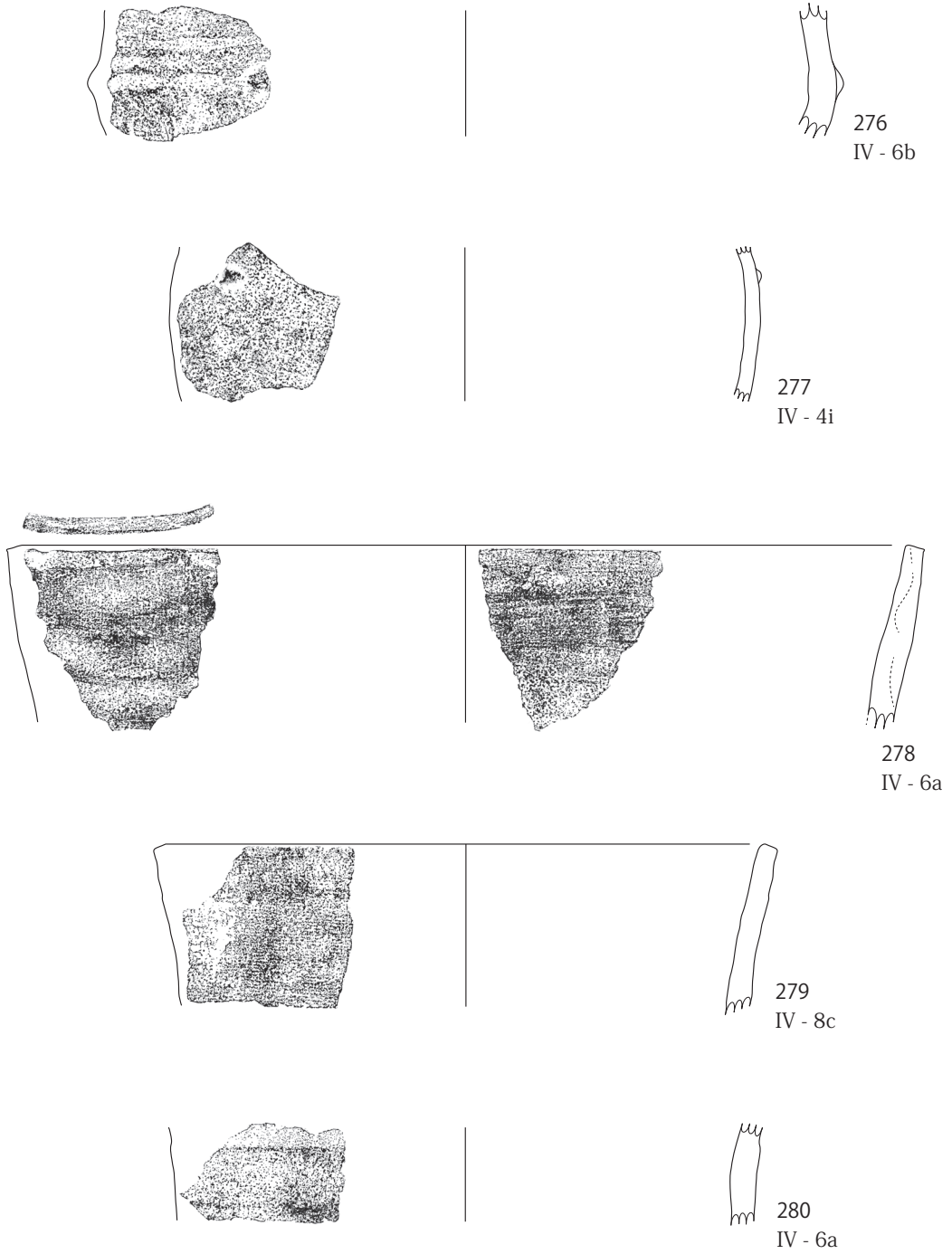


图 63 B7 区出土土器 (15) (S=1/2)

US163 (6)

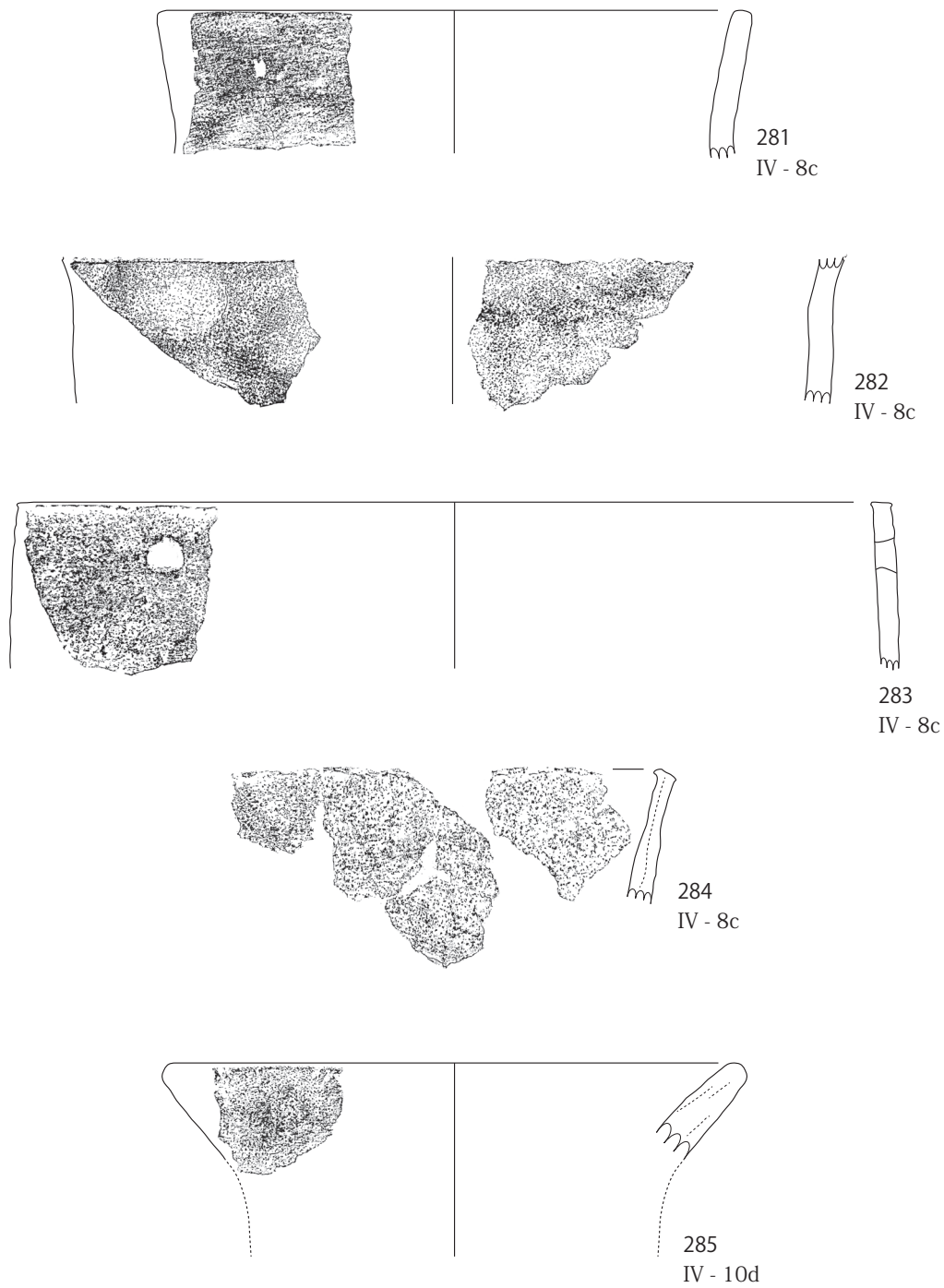


图 64 B7 区出土土器 (16) (S=1/2)

US163 (7)

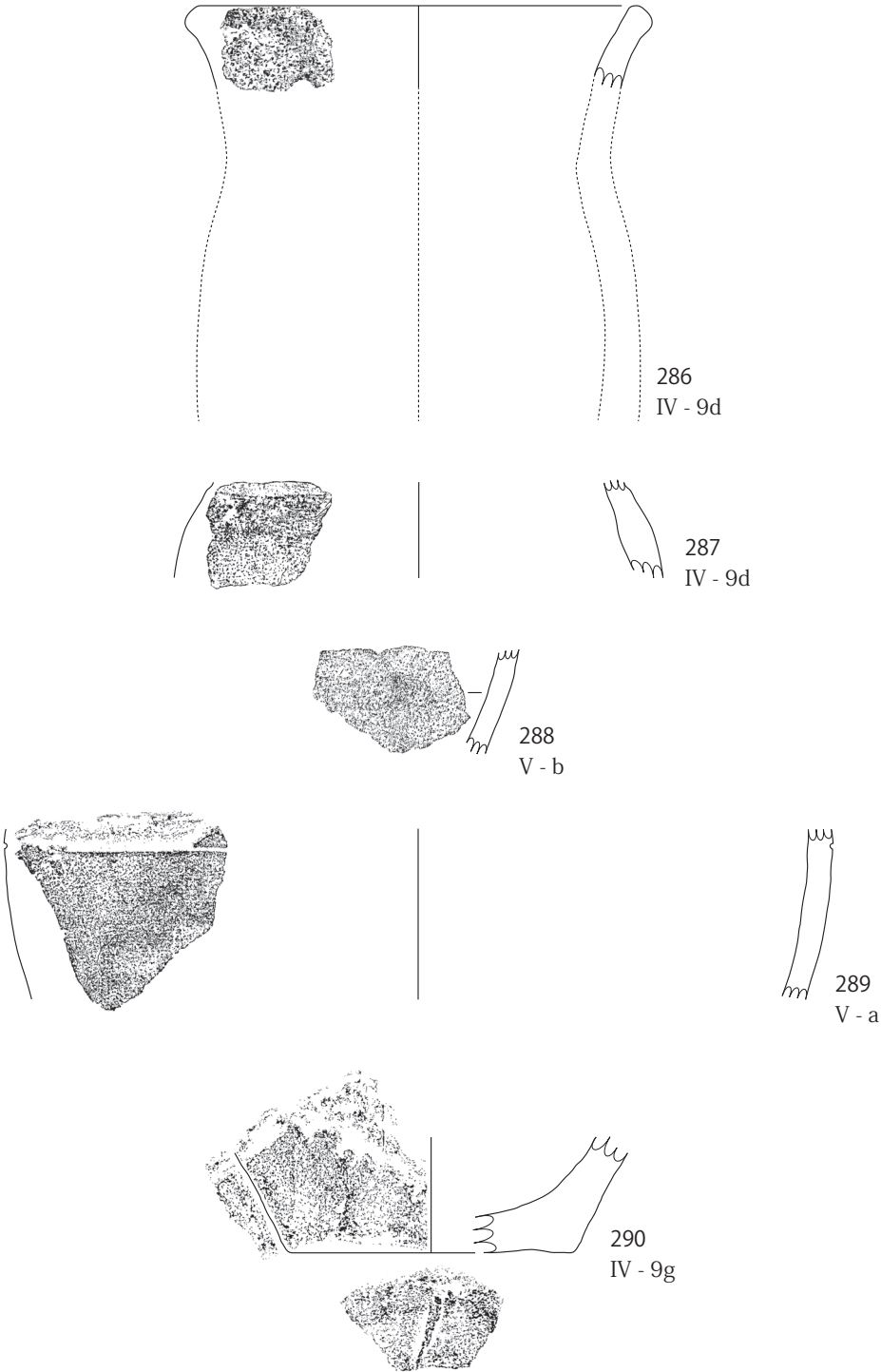


图 65 B7 区出土土器 (17) (S=1/2)

US163 (8)

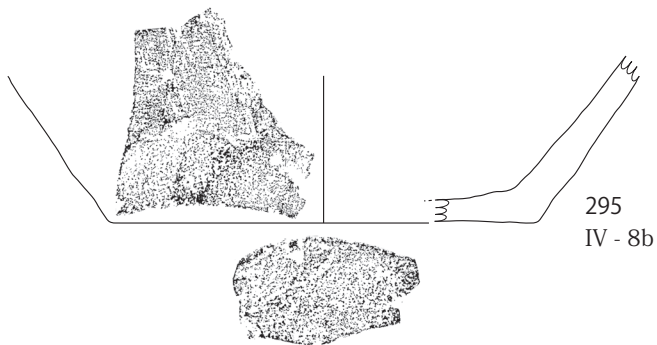
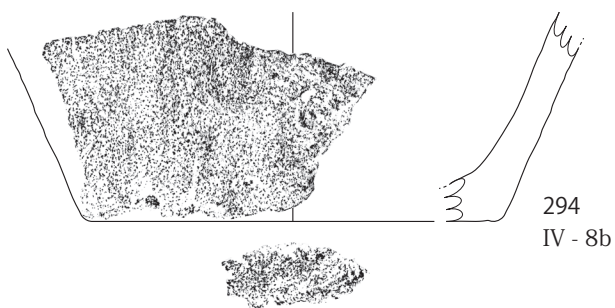
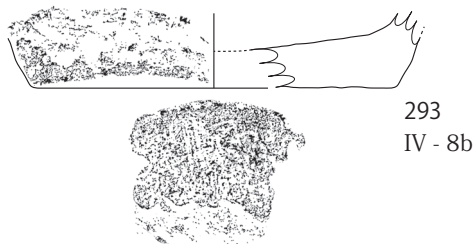
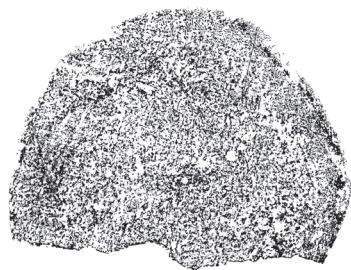
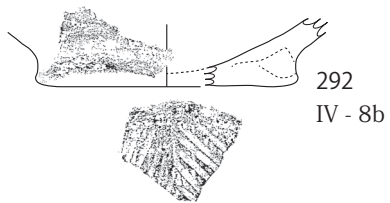
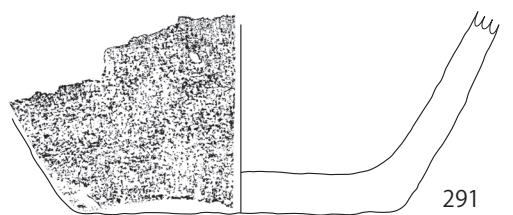
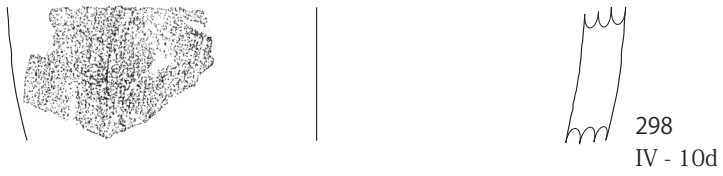
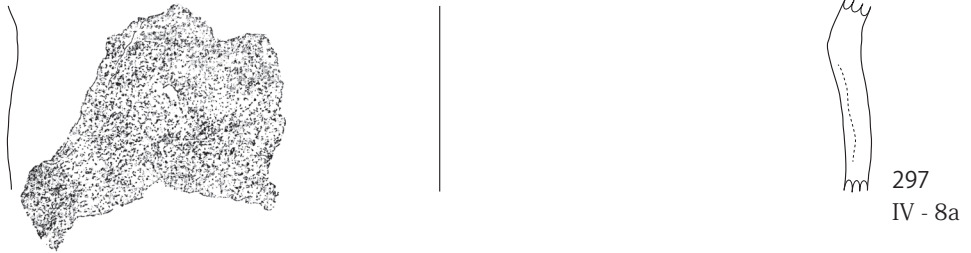
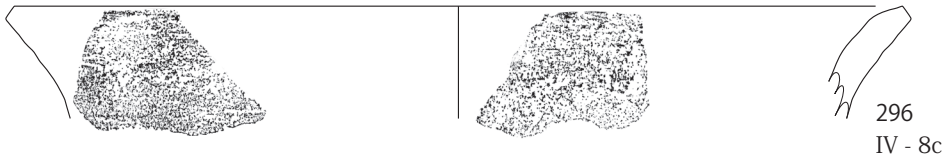


图 66 B7 区出土土器 (18) (S=1/2)

US178



US170, 171



图 67 B7 区出土土器 (19) (S=1/2)

US179



US171 (1)

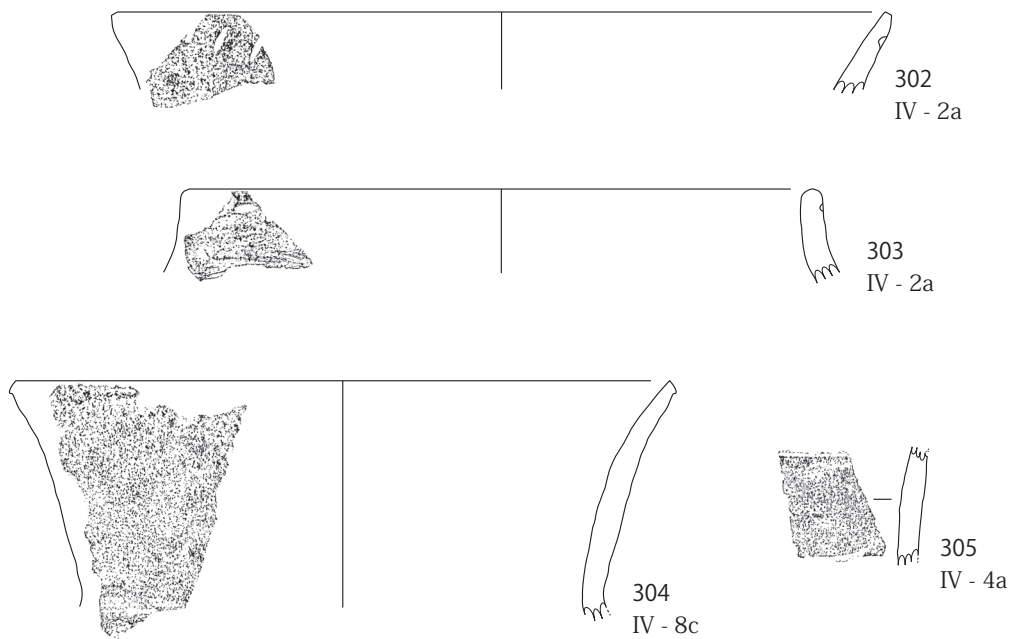


图 68 B7 区出土土器 (20) (S=1/2)

US171 (2)

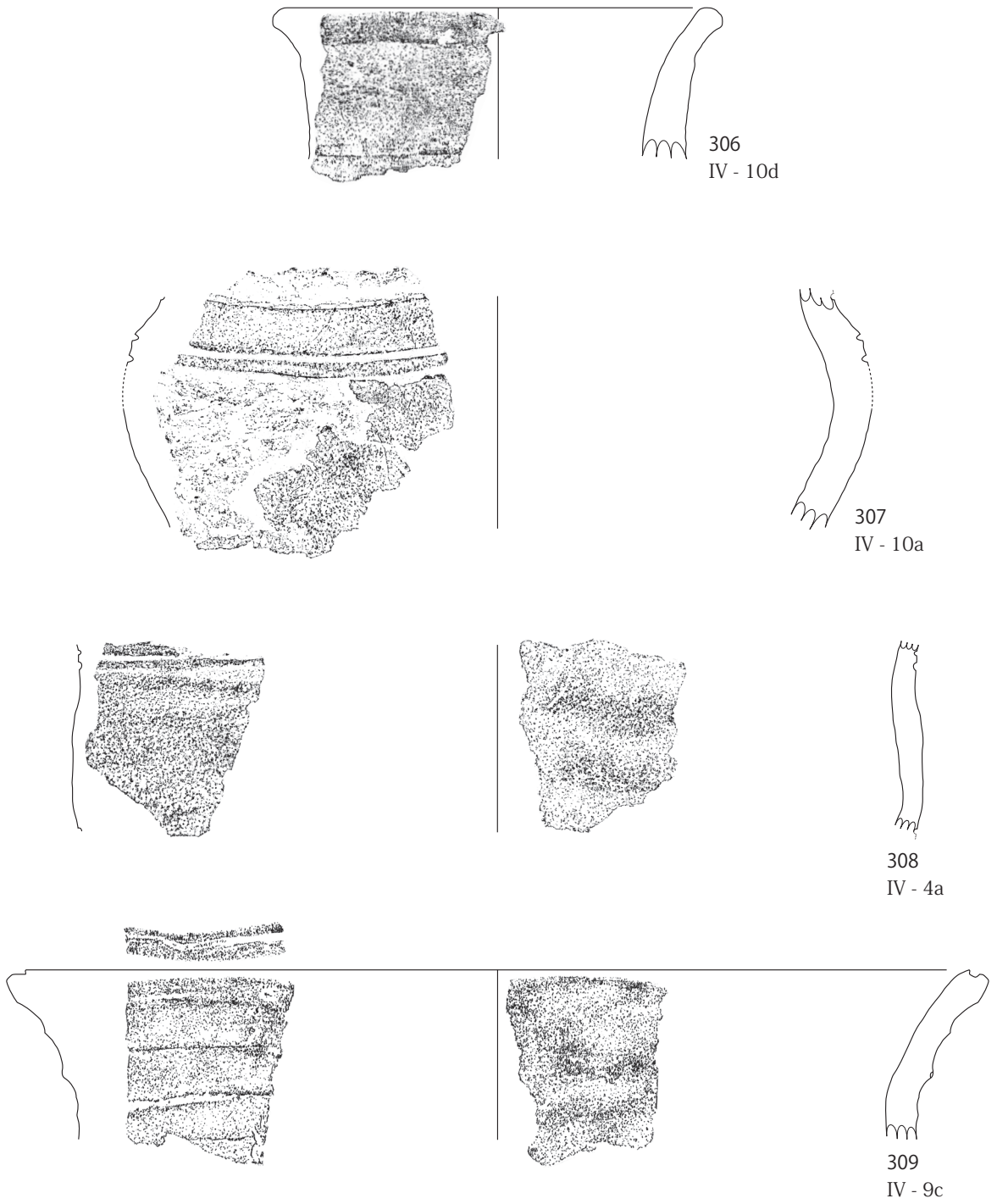


图 69 B7 区出土土器 (21) (S=1/2)

US171 (3)

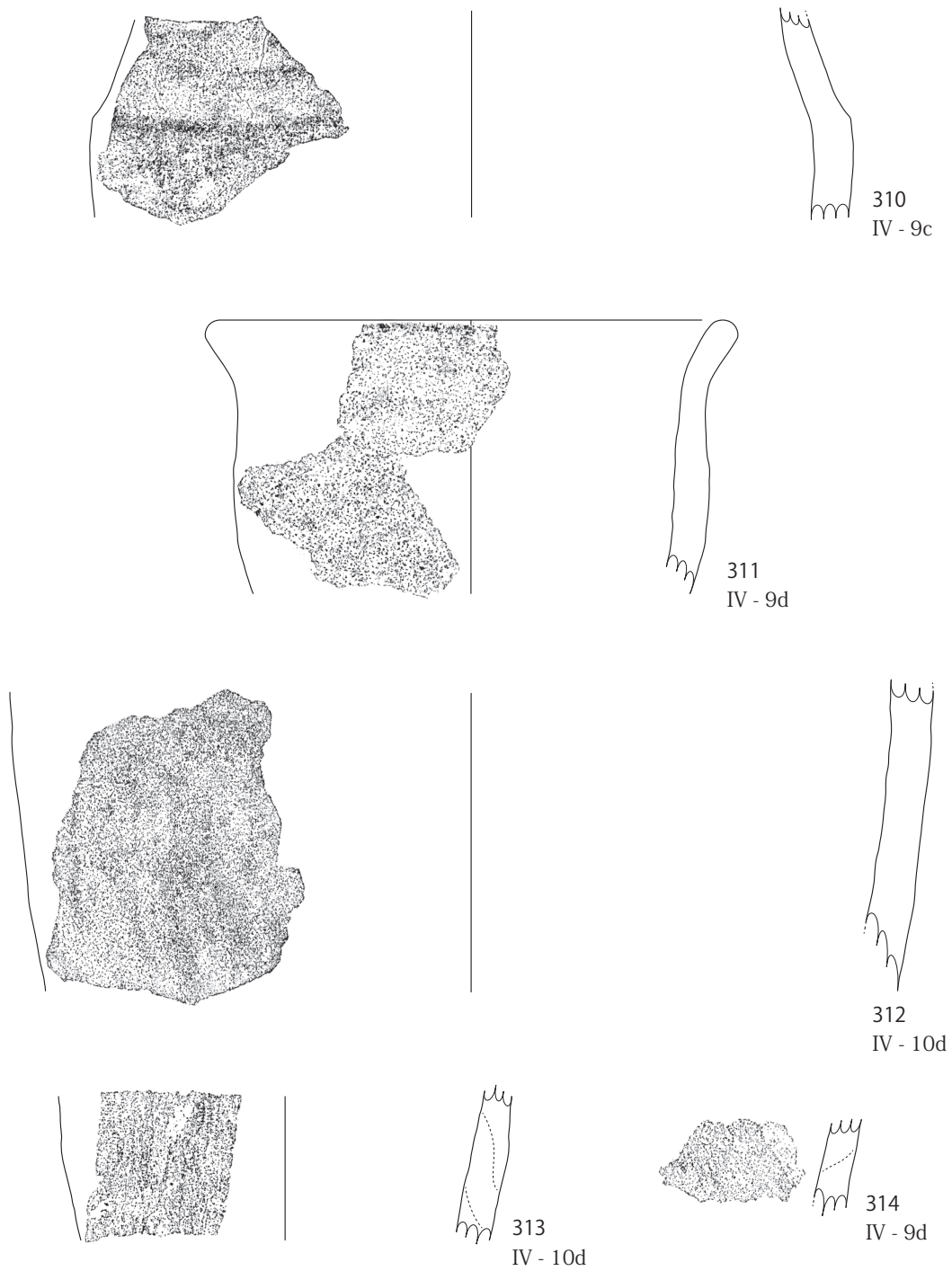


图 70 B7 区出土土器 (22) (S=1/2)

US171 (4)

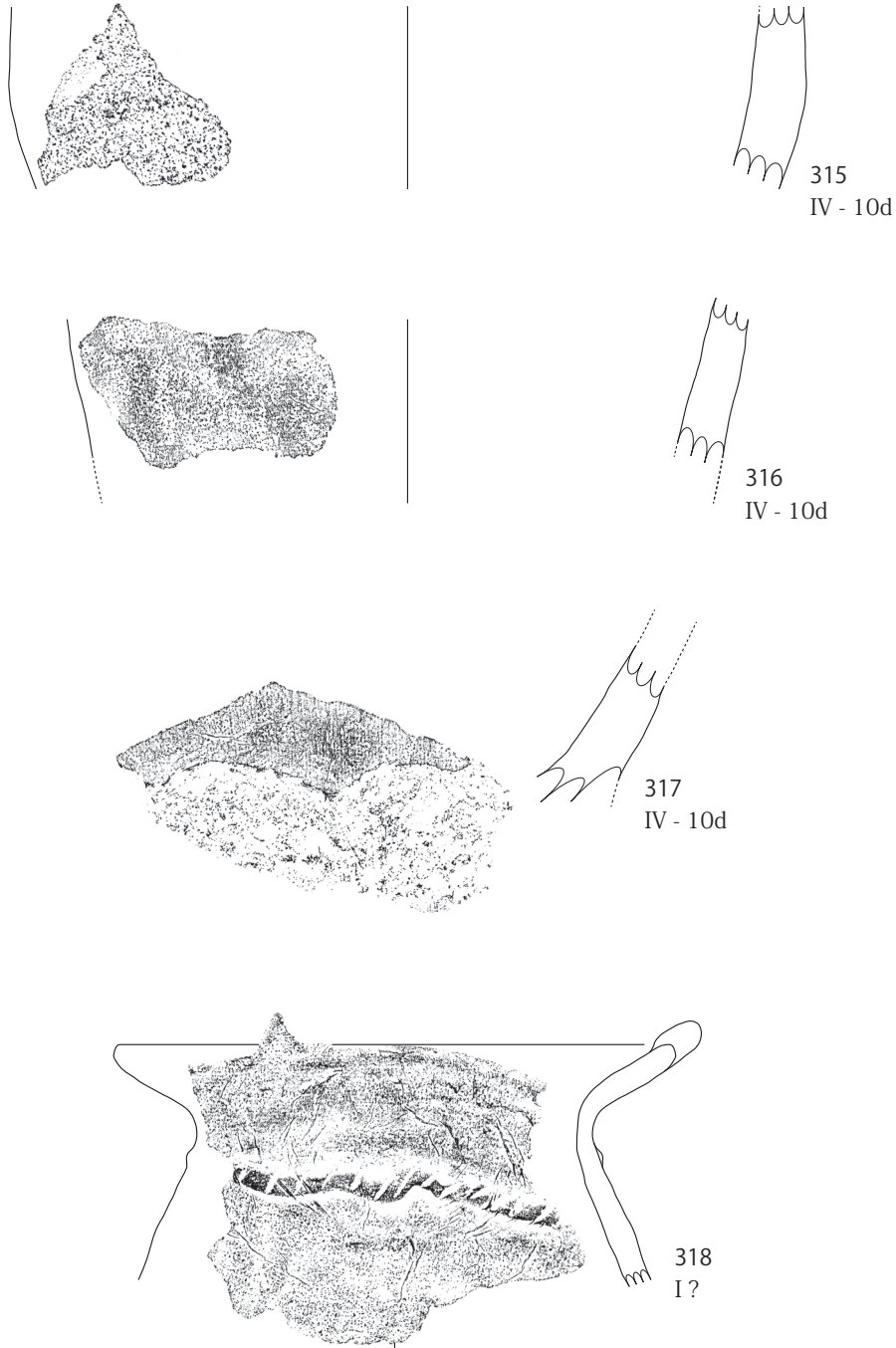
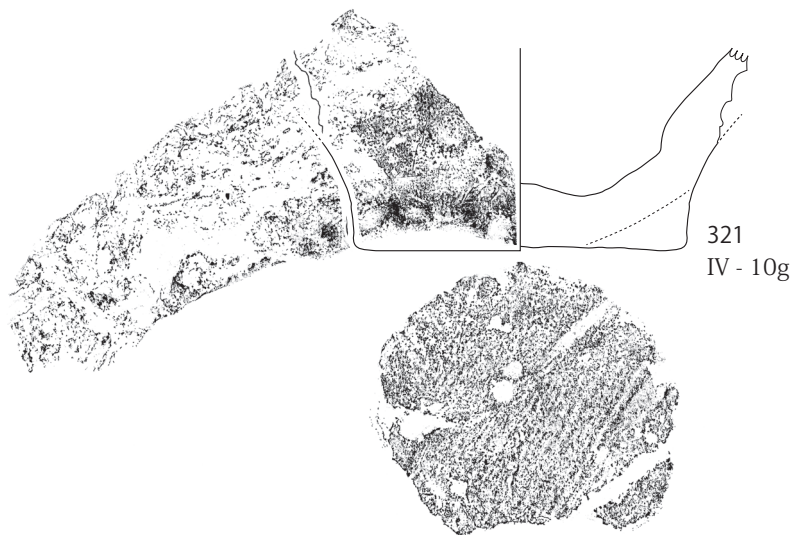
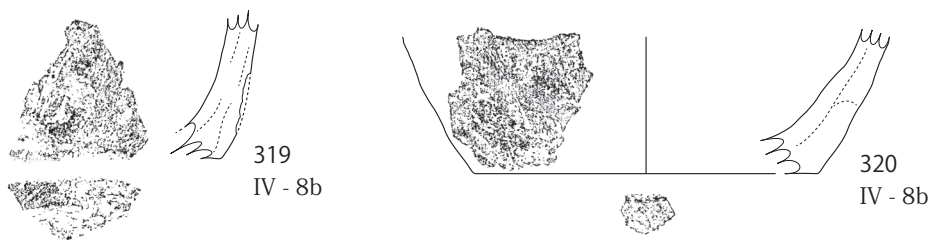


图 71 B7 区出土土器 (23) (S=1/2)

US171 (5)



US184

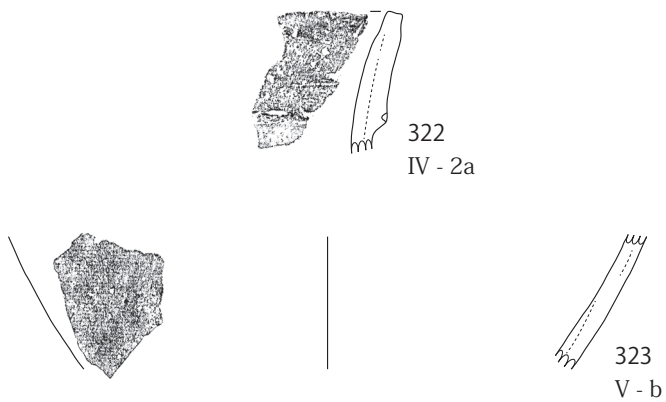


图 72 B7 区出土土器 (24) (S=1/2)

USO

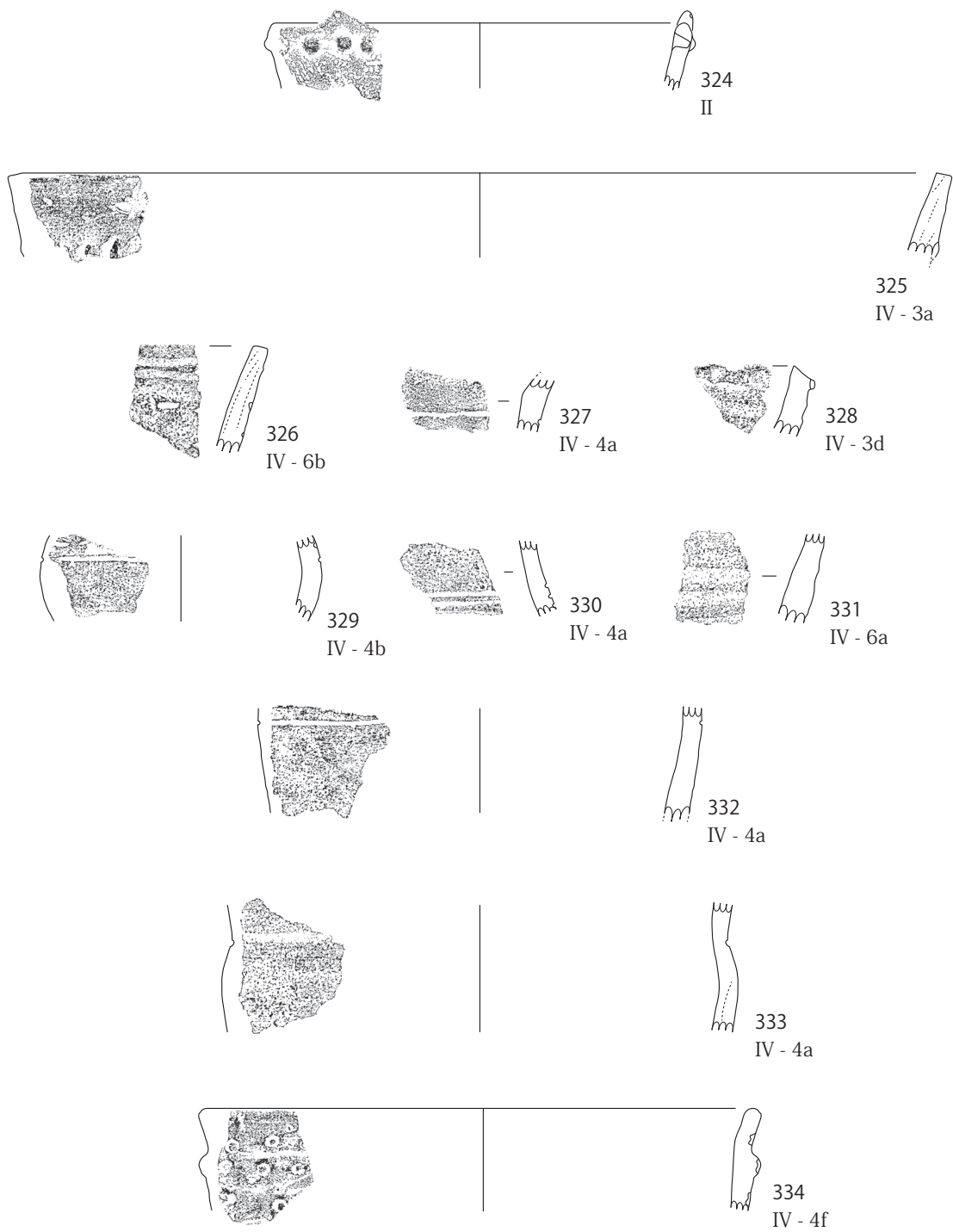


图 73 B7 区出土土器 (25) (S=1/2)

(6) E1 区 (図 74 ~ 84、表 15)

E1 区の出土土器に関しては、調査面積 (2.0 × 2.0m) の広さに比べて出土点数が少ないということがいえる。さらに、少ない出土点数のうち大部分を占めるのが近現代の攪乱を受けていると考えられる第 1 層群出土の土器資料であることから、層位学的な分析をすることは難しい。第 1 層群からは、主体となるオホーツク式土器の他に、続縄文土器、鈴谷式土器、擦文土器がそれぞれ少量出土している。第 2 層群からは、オホーツク式土器のみが少量、第 3 層群からはオホーツク式土器と縄文土器が少量ずつ、それぞれ出土している。E1 区の特徴としては、鈴谷式の出土比率が他地点に比べるとわずかに高いということがあげられる。ただし、鈴谷式の出土はいずれも第 1 層群からのものであるので、現状ではこの区本来の様相を反映したものであるかどうかの判断は難しいと言わざるを得ない。E 地点周辺の土器出土傾向に関する資料・情報の蓄積を待って、改めて検討する必要がある。(岩城)

表 16 E1 区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明	
601			1				2		1	3				33	40
602		4	2	3	3	3	9		4	3			4	140	175
603							1			1				19	21
604	2			1	1		1							10	15
605															0

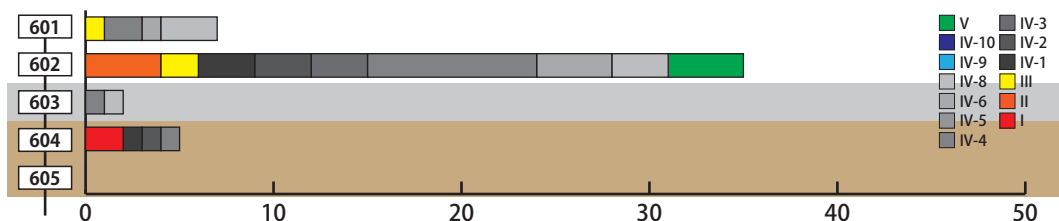


図 74 E1 区堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)

US601

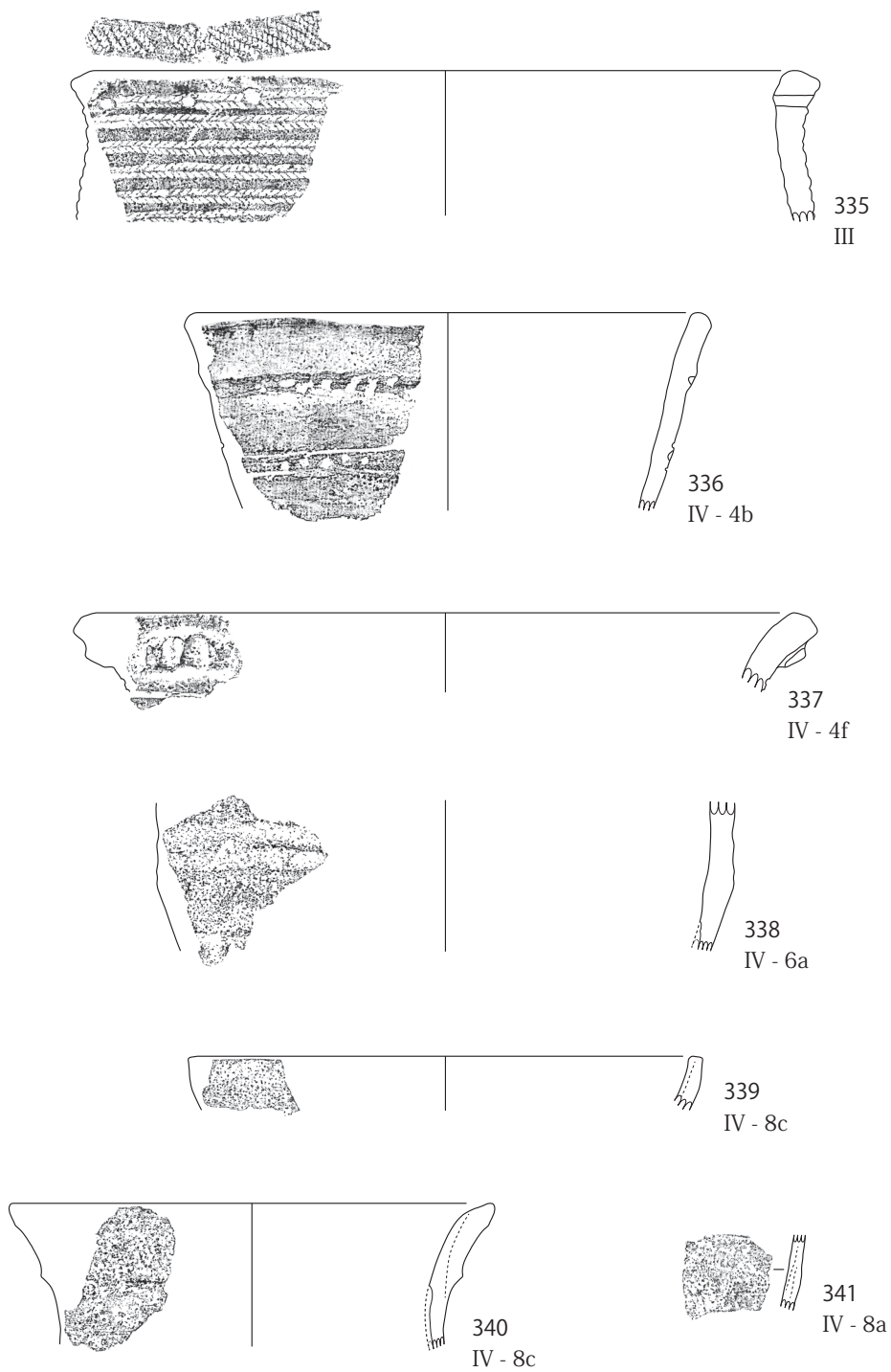


图 75 E1 区出土土器 (1) (S=1/2)

US602 (1)

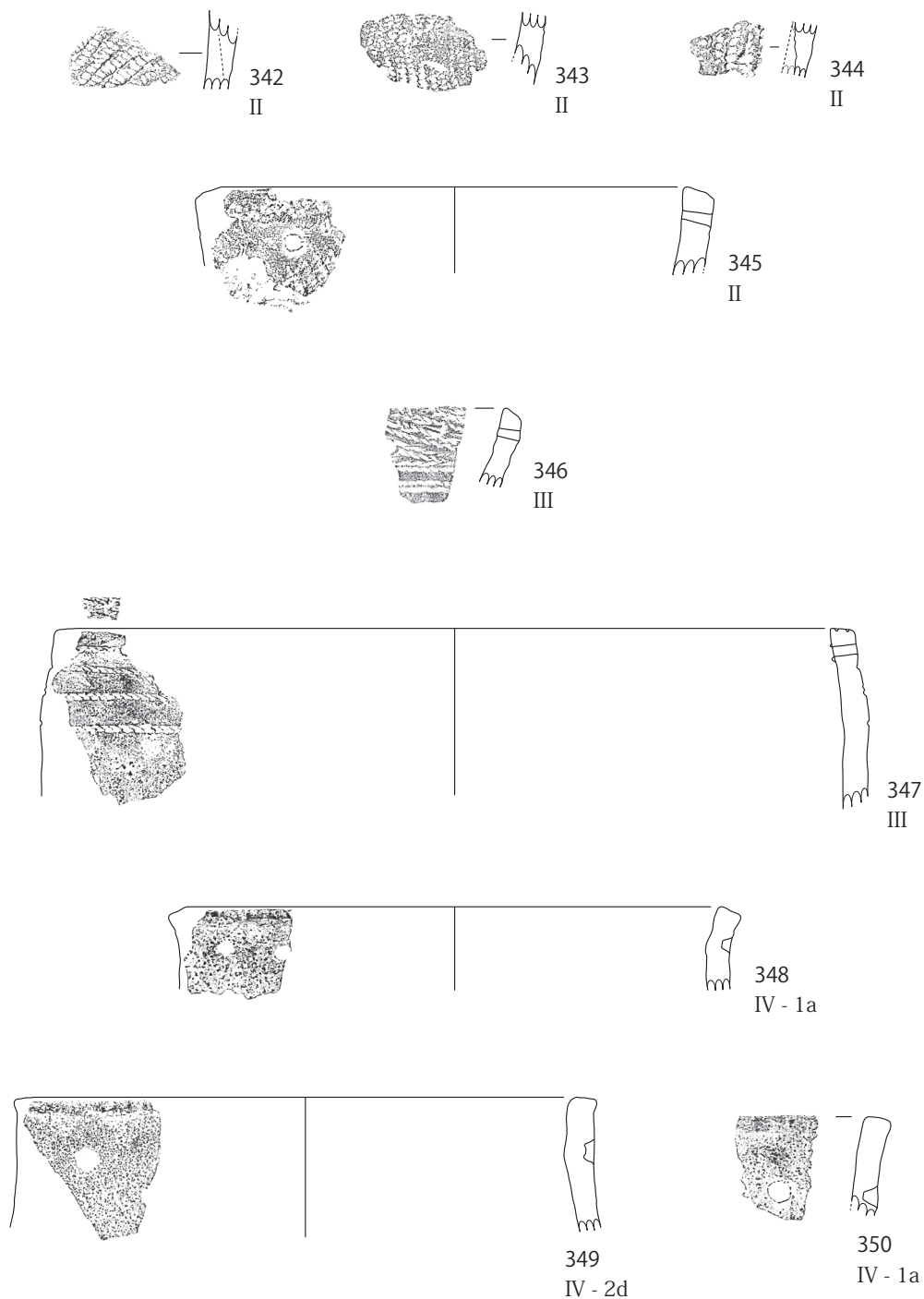


图 76 E1 区出土土器 (2) (S=1/2)

US602 (2)

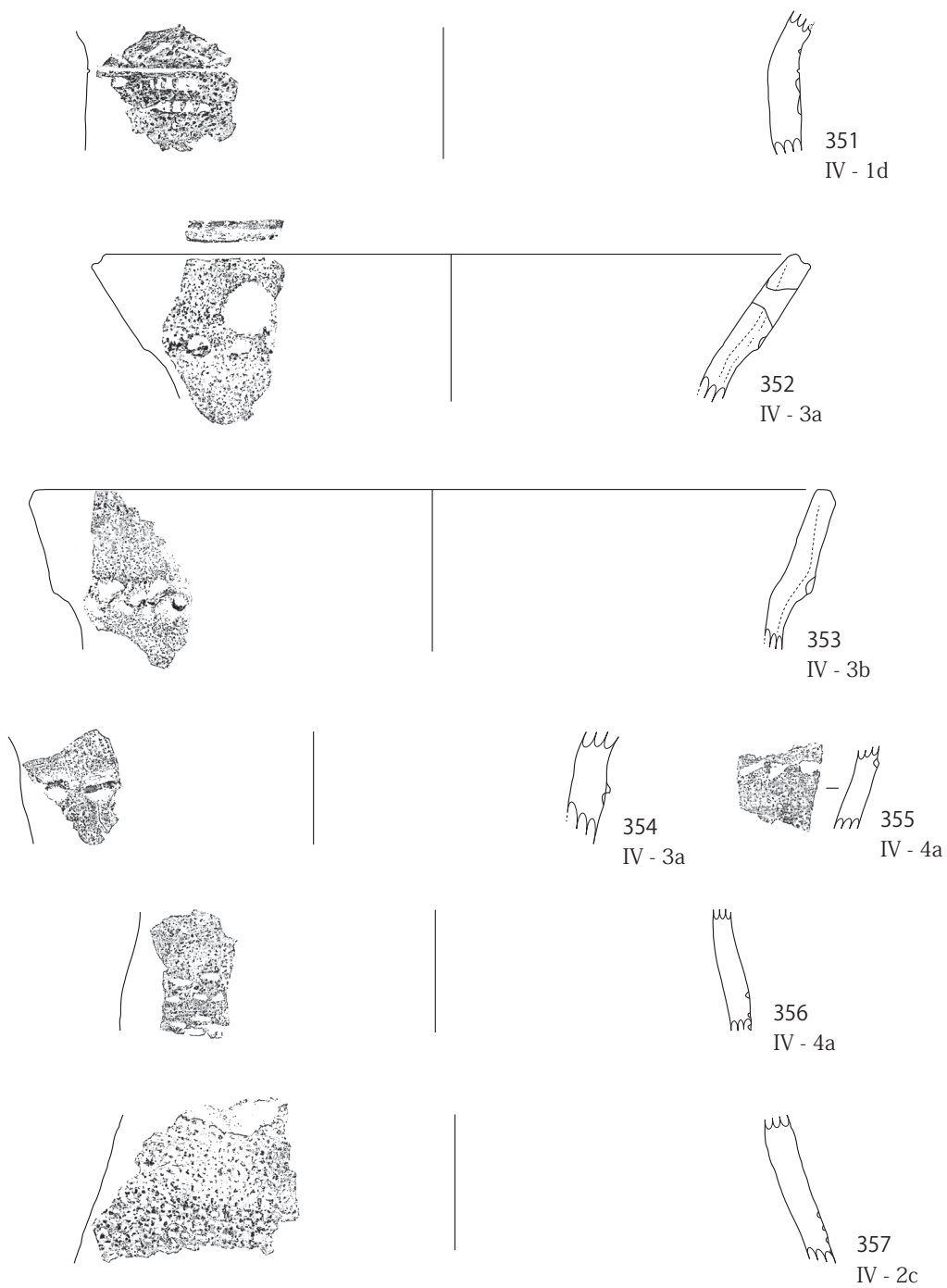


图 77 E1 区出土土器 (3) (S=1/2)

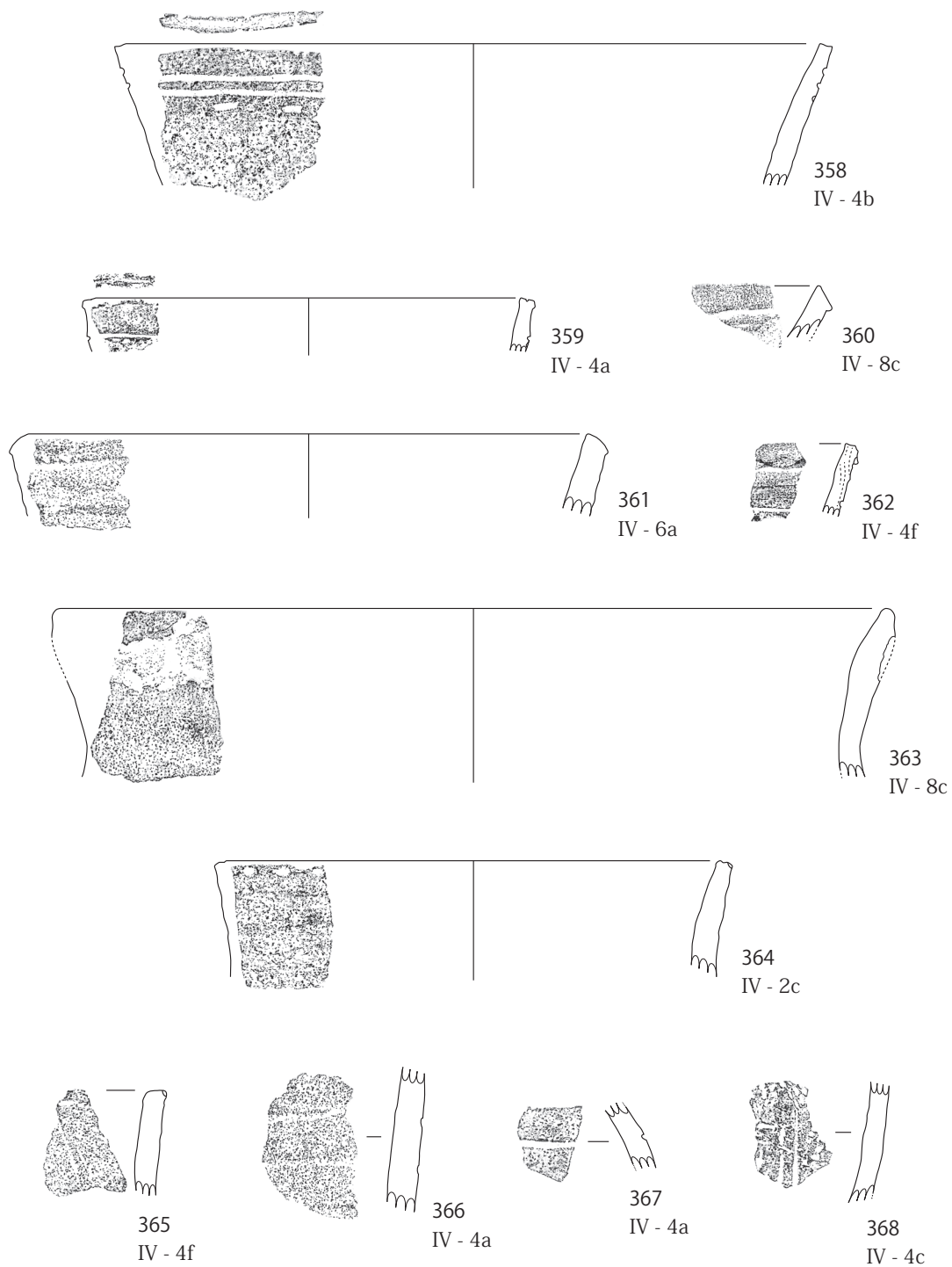


图 78 E1 区出土土器 (4) (S=1/2)

US602 (4)

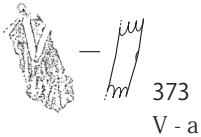
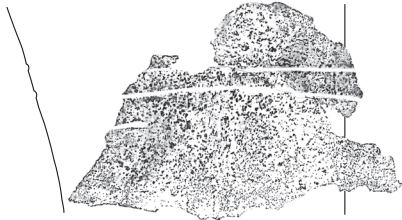
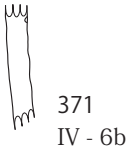
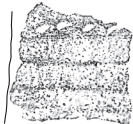
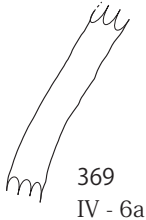
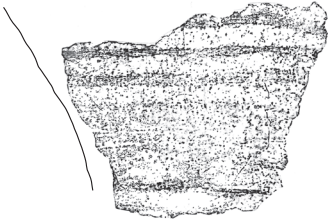
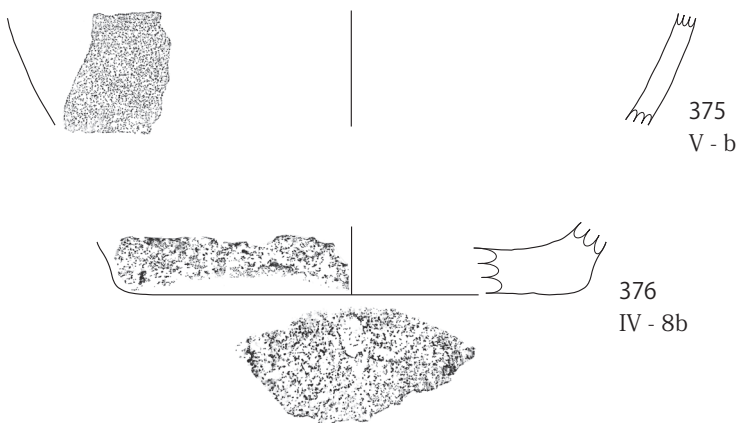


图 79 E1 区出土土器 (5) (S=1/2)

US602 (5)



US603



US604 (1)

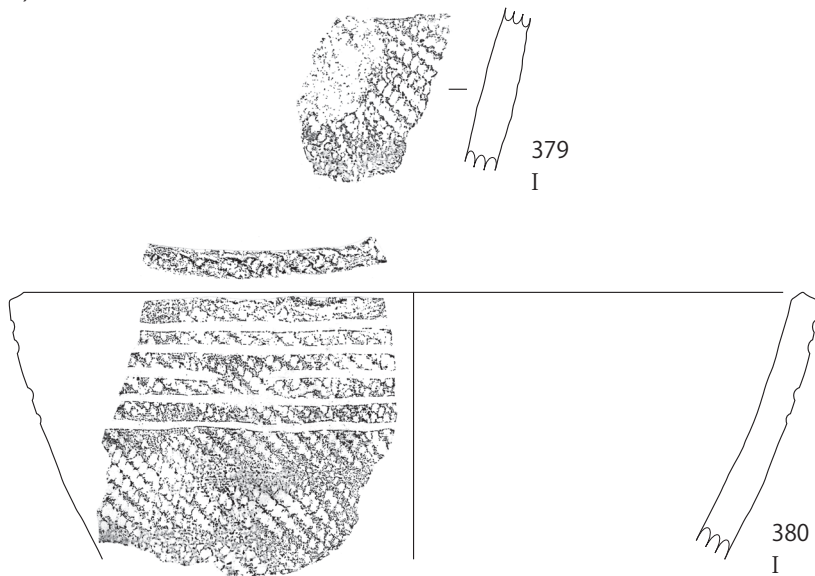
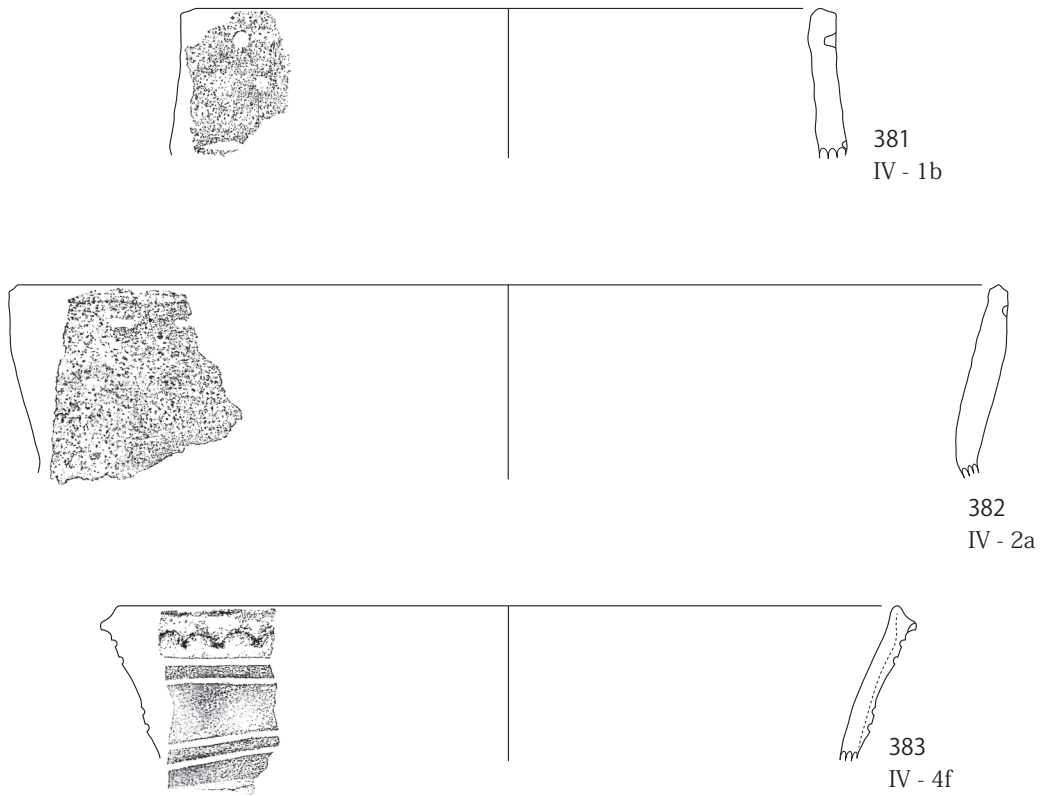


图 80 E1 区出土土器 (6) (S=1/2)

US604 (2)



US0 (1)

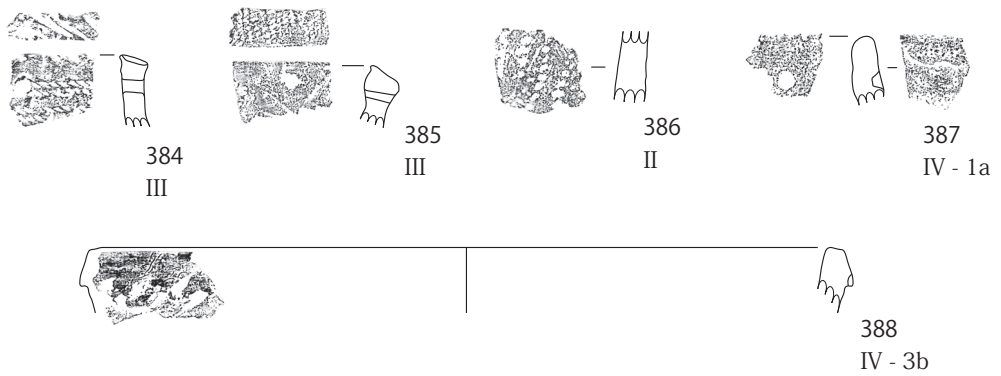


图 81 E1 区出土土器 (7) (S=1/2)

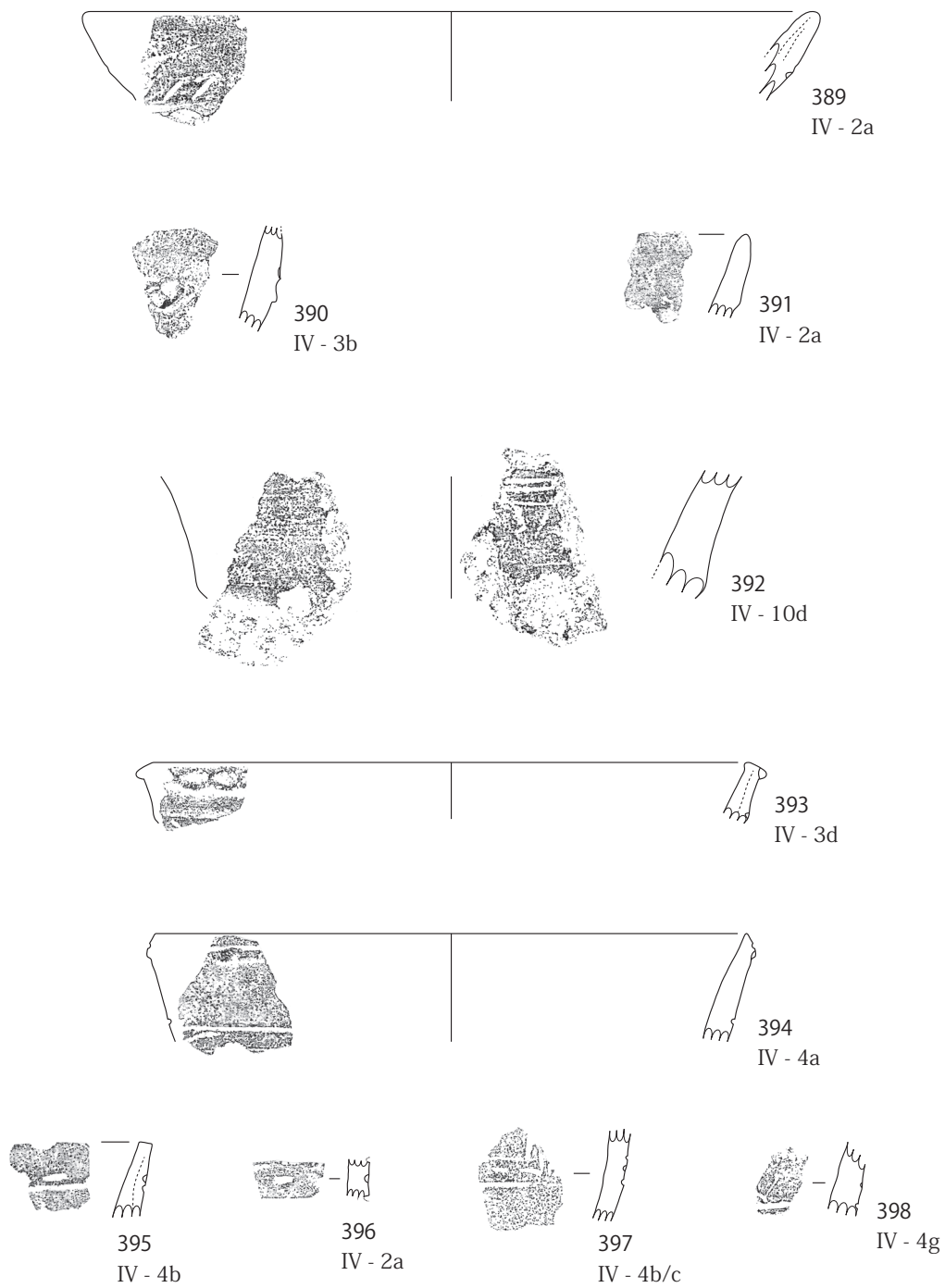


图 82 E1 区出土土器 (8) (S=1/2)

US0 (3)

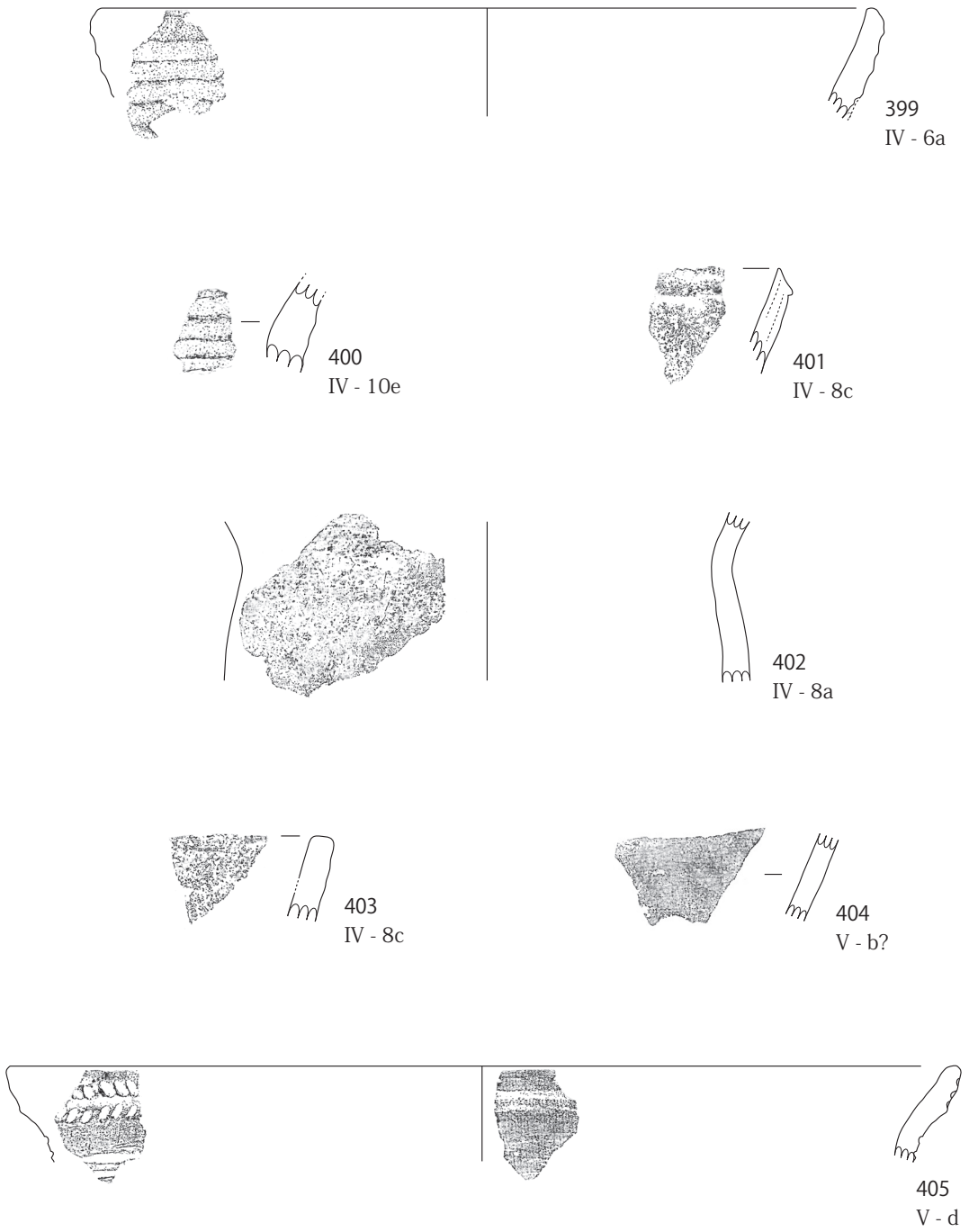


图 83 E1 区出土土器 (9) (S=1/2)

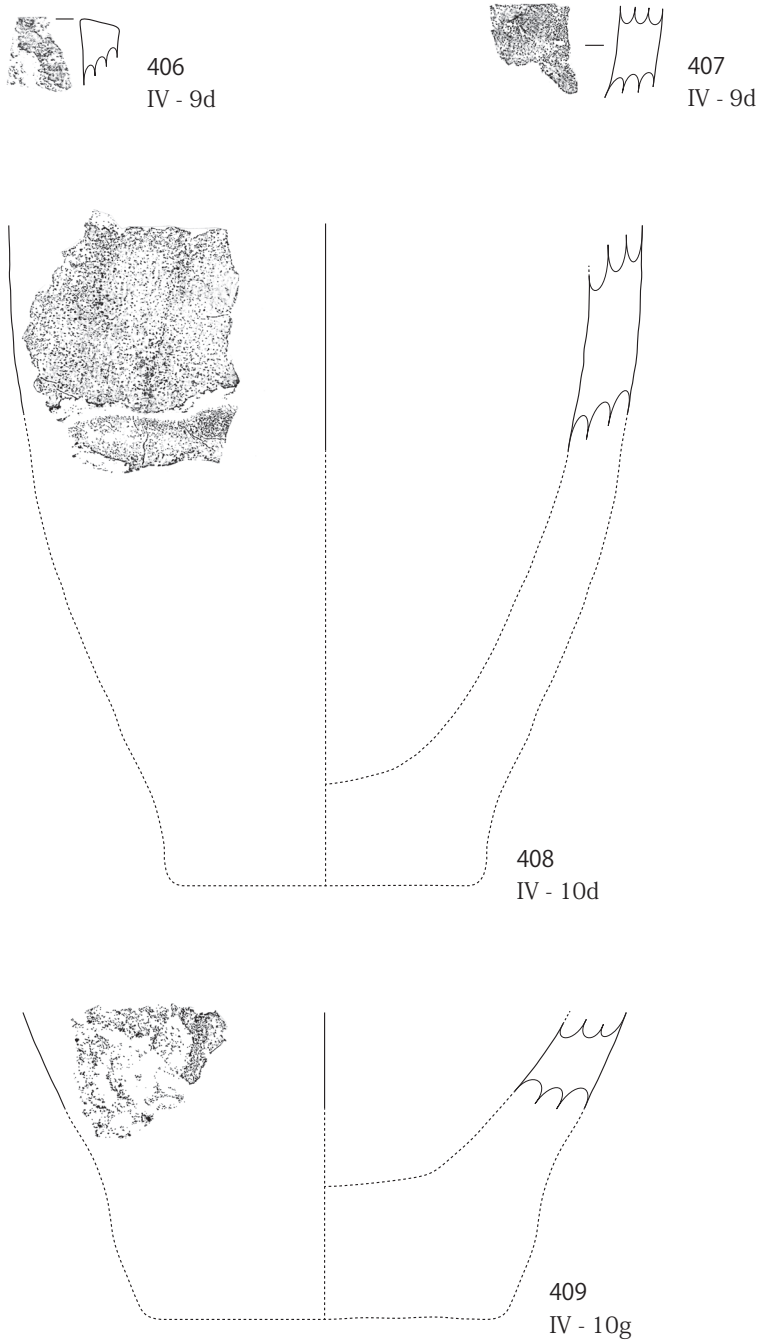


图 84 E1 区出土土器 (10) (S=1/2)

(7) TP1 (図 85～88、表 17、写真3)

TP1 の堆積土層は、現在までのところ近接する B 地点を中心とする第 1 層群～第 3 層群の土層大別とは異なる層相を見せており、他区との層位的な比較が難しい。また、絶対的な土器出土点数も少ないことから、単独で出土傾向について分析を行うことにも限界がある。一点だけここで指摘できるとすれば、下部の堆積層である US155 の出土土器がオホーツク式に限られ、後世の混入物も検出されていないことから、この堆積層が B 地点の第 2 層群に時期的に並行するものである可能性が考えられる。(岩城)

表 17 TP1 各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明	
205		1												2	3
154	1	1					2			3		1		24	32
206															0
155					1		2	2	3					23	31

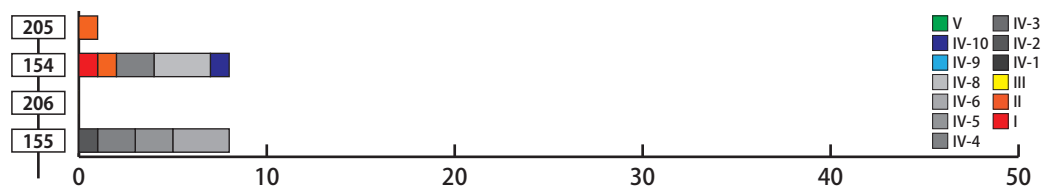
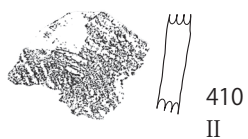


図 85 TP1 堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)



写真3 TP1 出土土器

US205



US154

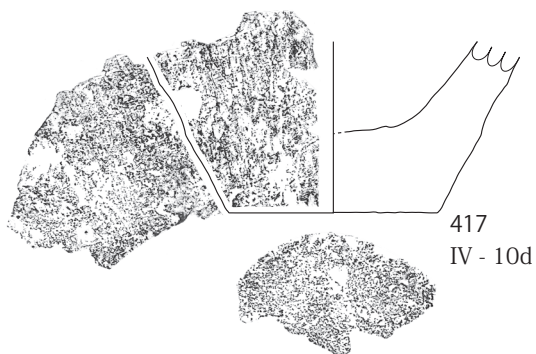
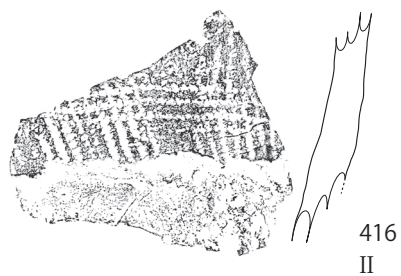
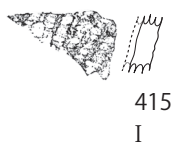
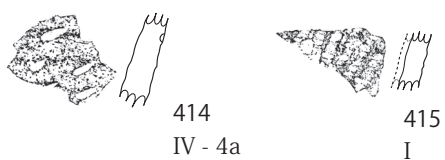
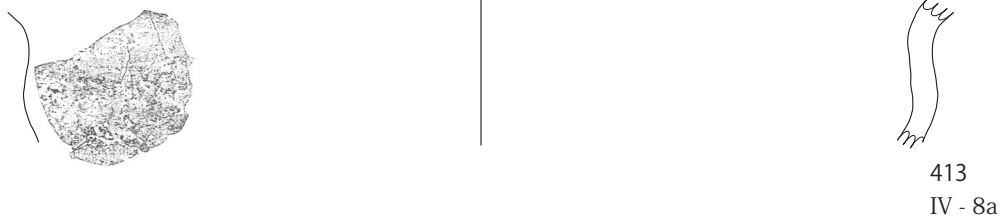
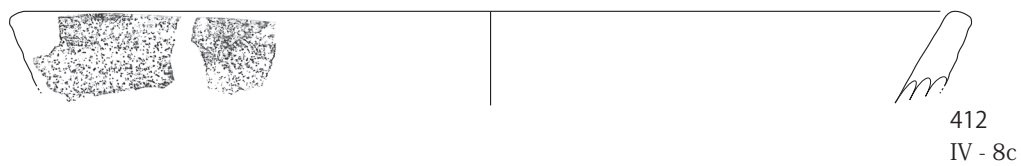


图 86 TP1 出土土器 (1) (S=1/2)

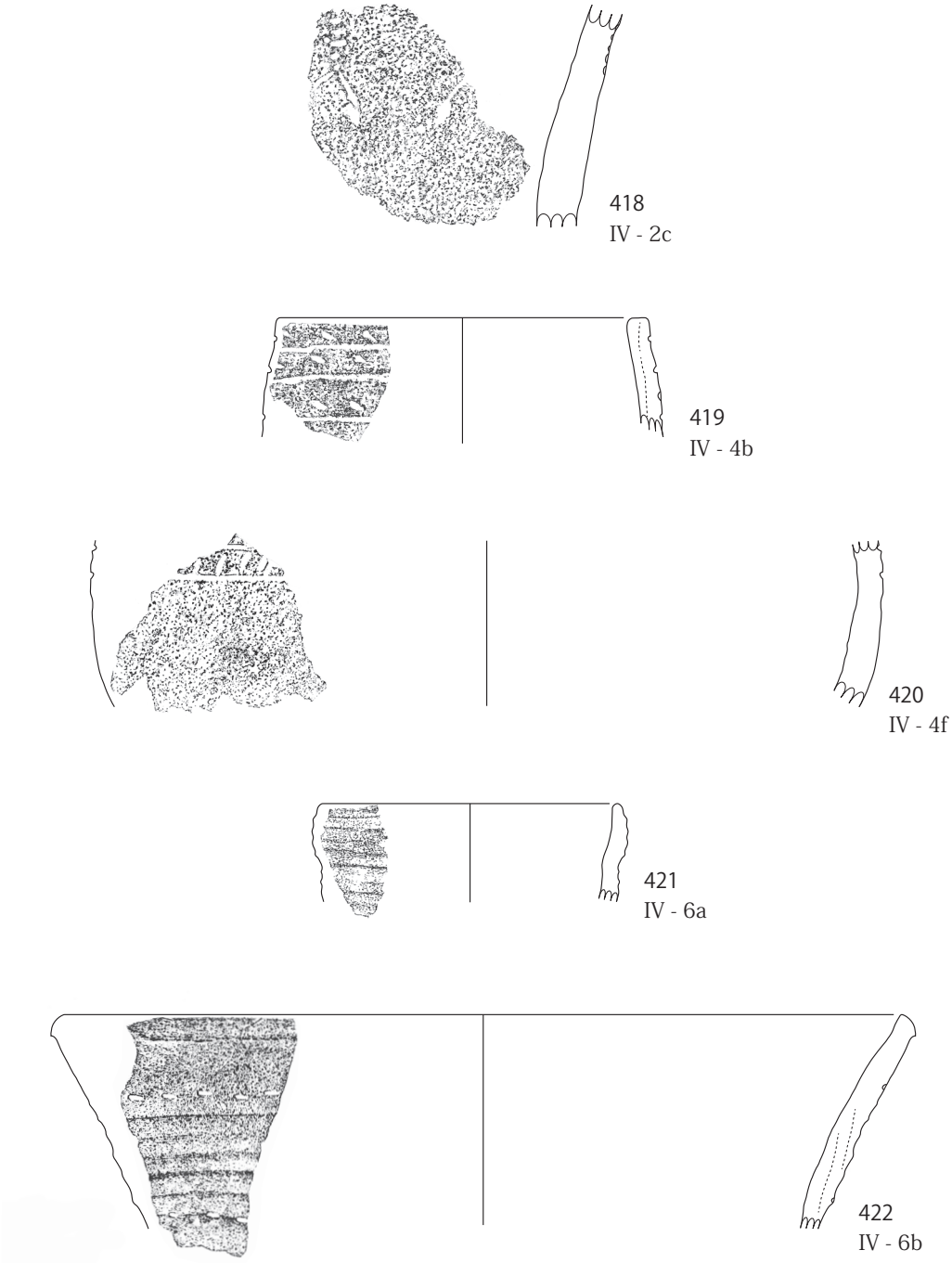
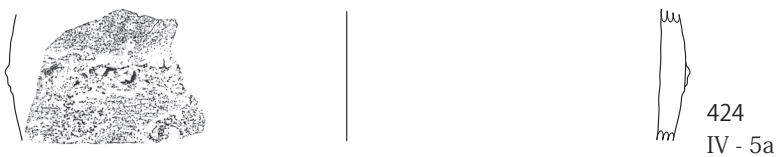
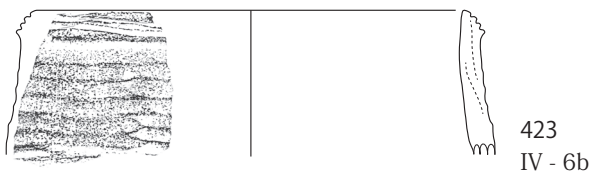


图 87 TP1 出土土器 (2) (S=1/2)

US155 (2)



US0

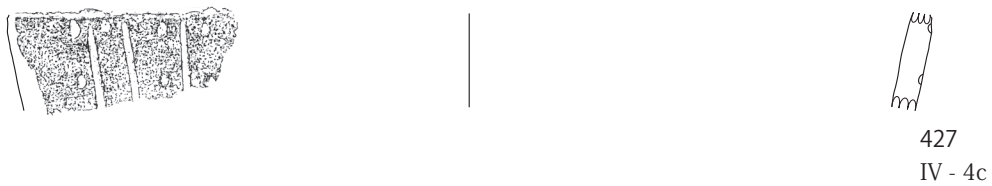


图 88 TP1 出土土器 (3) (S=1/2)

(8) D1・D2区 (図89～91、表18)

D1・D2区は、沼浦海水浴場遺跡の南側に位置する沼浦遺跡内に設定された調査区で、B地点から南西に350m程度の距離がある。両遺跡とも、沼浦マールの南東部、火口壁が沈水して海に向かって開口している部分に形成された海岸砂丘上に位置していることは共通しているが、沼浦海水浴場遺跡が北端に位置しているのに対して、沼浦遺跡は南端に近い部分に位置している。海岸砂丘本体を構成すると考えられる第3層群に属する堆積層は、D1・D2区においても検出されているが、これらが上部において全面的に近現代の営為によって削平・攪乱を受けているため、第2層群に相当する堆積層は存在せず、第3層群の上に直接第1層群の堆積層がのっている。このような堆積状況の中で、図89を見ても分かる通り、D1・D2区の土器出土傾向は他区とは明確に異なるものになっている。まず、第3層群からの出土はほぼ縄文土器のみであり、この付近での明確な縄文期の活動痕跡と捉えられる。上部が攪乱を受けているため、第3層群内における時系列上の位置は明確ではないが、おそらくB地点の第3層群上部からの遺物出土例の時期よりは古い、堆積形成の中期頃に位置づけられると考えられる。もう一点留意すべき点としては、第1層群US401から3点出土している鈴谷式の存在が挙げられる。D1・D2区近辺においては、鈴谷式の表採例が散見されていることから、近現代の削平・攪乱を受ける前の段階で、第3層群の上部、あるいはその上に形成された第2層群相当層という形で鈴谷式期の文化層が存在していた可能性が考えられる。周辺の状態を改めて精査する必要がある。(岩城)

表18 D1・D2区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数														総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	不明	
401		2	3												5
402															0
405		1													1
404		18												16	34
407		2								1					3
408															0
409															0

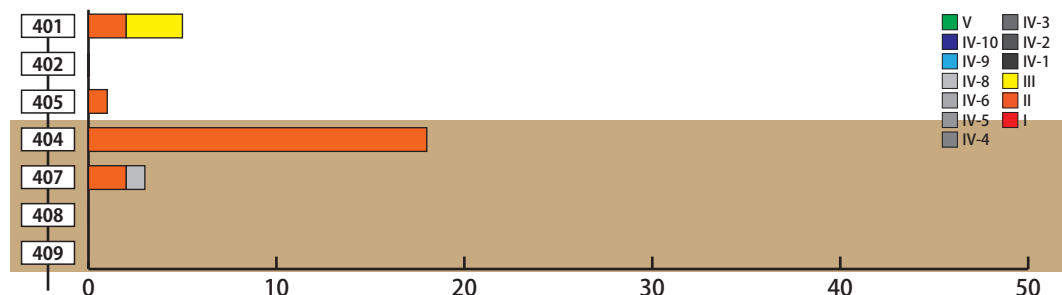
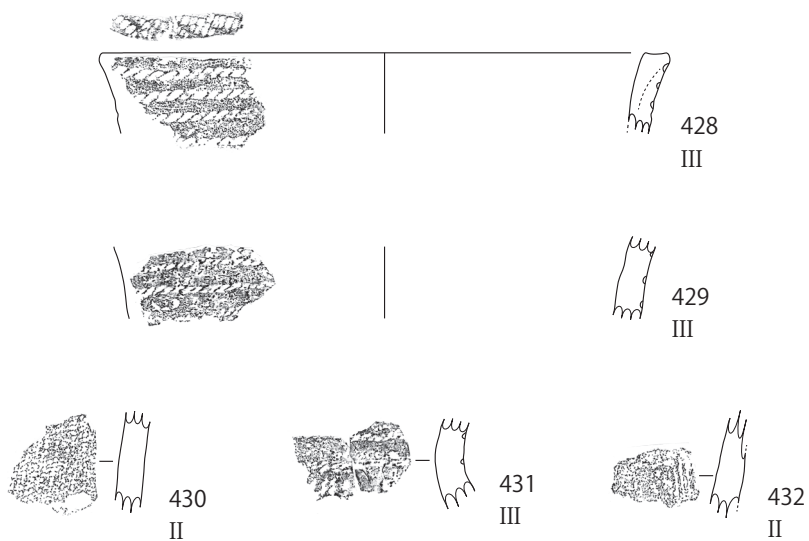
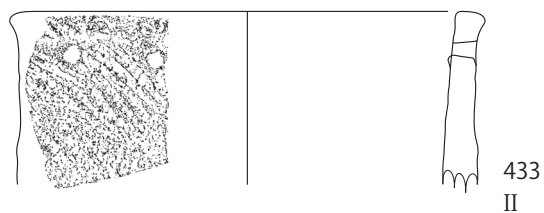


図89 D1・D2区堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)

US401



US405



US404 (1)

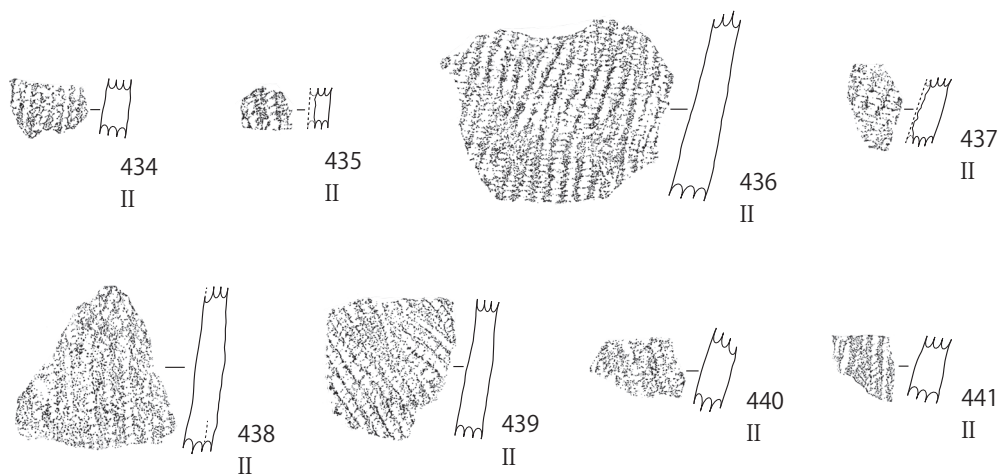
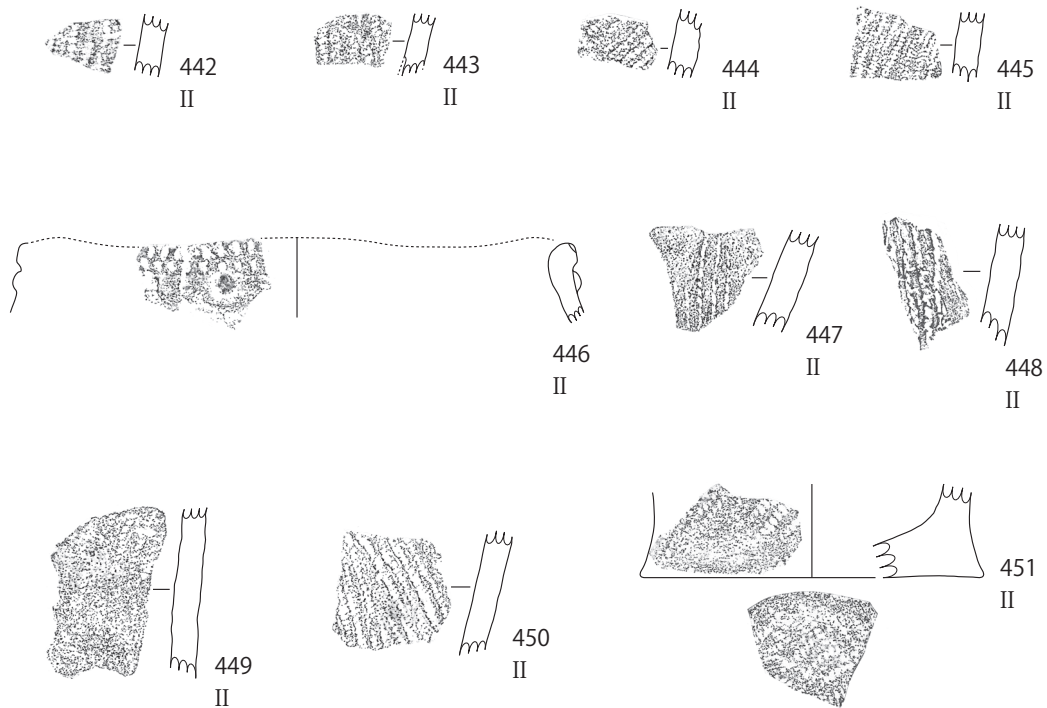
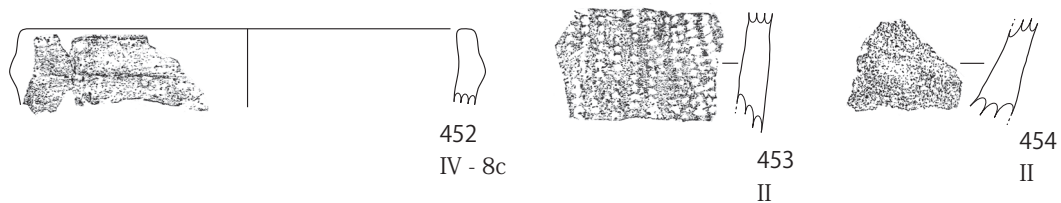


图 90 D1·D2区出土土器(1) (S=1/2)

US404 (2)



US407



US0

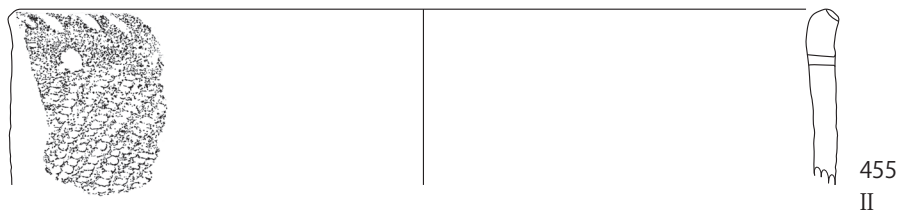


图 91 D1·D2 区出土土器 (2) (S=1/2)

2. 出土石器 (表 19、写真 4)

B1 区、B7 区、E 区において石器が出土している。以下それらを一括して掲載する。

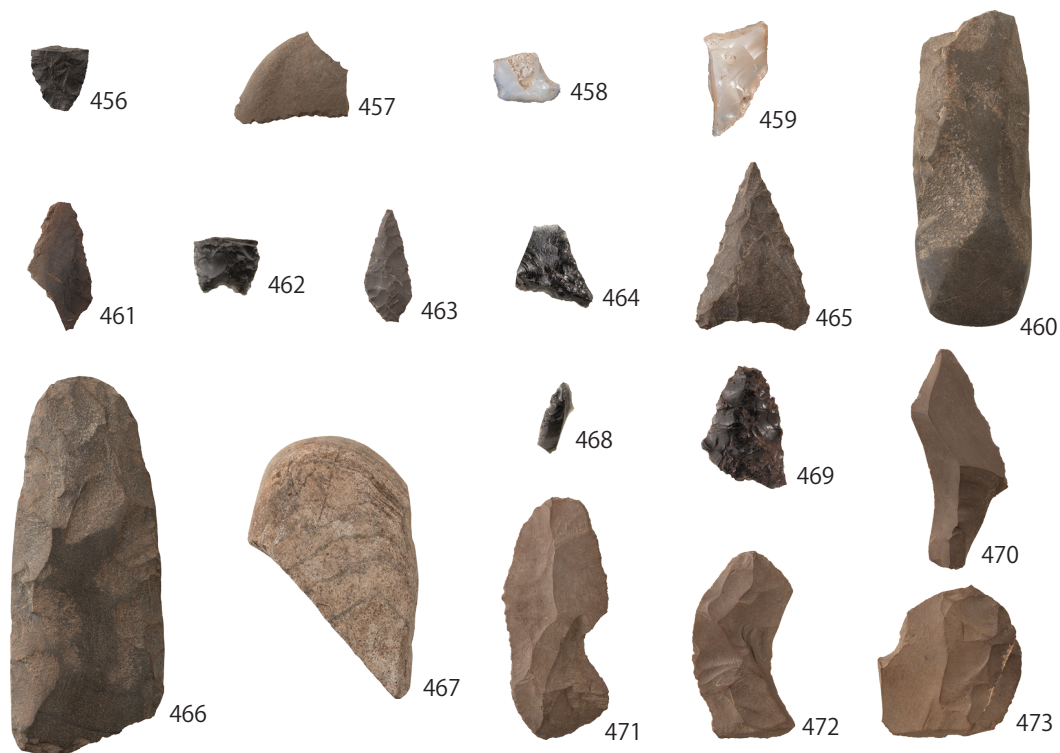


写真 4 出土石器 (S=1/2)

表 19 出土石器観察表

番号	調査区	US	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
456	B1a'	159	尖頭器	1.72	1.52	0.42	1.057
457	B1b	102	剥片石器?	3.2	2.6	0.43	3.057
458	B1b	102	剥片石器?	1.96	1.5	0.59	1.224
459	B1b	119	剥片石器	2.69	1.71	0.75	3.605
460	B1b	203	磨製石斧	8.27	3.08	0.92	50.765
461	B7	101	石鏃未成品?	3.47	1.8	0.55	2.412
462	B7	129	石鏃 (無茎)	1.5	1.75	0.51	1.396
463	B7 周辺	101	石鏃	3.0	1.28	0.4	1.127
464	B7	129	石鏃未成品?	2.5	2.0	0.59	1.682
465	B7	149	石鏃 (無茎)	4.42	3.01	0.85	7.342
466	B7	163	磨製石斧	9.9	4.05	1.7	80.674
467	B7	184	磨製石斧?	6.75	4.65	1.92	54.984
468	E	604	石鏃?	1.89	0.75	0.29	0.312
469	E	604	石鏃	3.23	2.38	0.61	4.101
470	E	604	搔器	5.79	2.57	0.75	6.072
471	E	604	搔器	6.41	2.8	0.55	9.132
472	E	605	搔器	4.3	2.02	0.43	5.305
473	E	605	搔器	3.11	3.94	0.7	11.534

3. 出土骨角器（表 20、写真 5）

B0 区、B1 区、B7 区において骨角器が出土している。以下それらを一括して掲載する。



写真 5 出土骨角器 (S=1/2)

表 20 出土骨角器観察表

番号	調査区	US	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
474	B0	130	未成品	3.8	1.9	0.7	3.092
475	B0	135	未成品	9.7	1.3	0.4	5.829
476	B0	135	未成品	5.6	1.1	0.9	2.874
477	B0	195	装飾品←?	5.2	0.9	0.4	1.801
478	B1a'	159	装飾品	4.3	0.9	0.1	0.414
479	B1b ベルト	116	骨斧 / 骨鋤?	7.6	4.2	1.1	16.443
480	B1b ベルト	137	不明	1.3	0.6	0.6	0.552
481	B1b	102	刺突具	6.3	0.8	0.3	1.348
482	B7	178	未成品	13.2	5.7	2.9	52.001
483	B7	171	未成品	4.5	2.6	0.9	6.428
484	B7	171	骨鏃	3.7	0.7	0.6	0.867
485	B7	0	刺突具	10.6	1.1	0.5	3.104

IV. 沼浦海水浴場遺跡（第2次調査）の動物遺体

内山 幸子（東海大学）

はじめに

沼浦海水浴場遺跡では、2017年度に実施された第2次調査により、さまざまな種類の動物遺体が出土した。II-1にあるように、本遺跡の層位は新しい順に第1層群、第2層群、第3層群に大きく分けられ、このうち第2層群が本遺跡の主体を占める。第2層群では、刻文と沈線文が施文されたオホーツク文化期の土器がおもに出土し、動物遺体の多くもこの時期に伴うものである。このため、ここで報告する動物遺体の内容については、この時期が中心となる。

表21に示したように、確認された動物種は50種以上に上る。形態のみからでは種名まで同定し得なかった資料も多くあるため、ここで示したのはあくまでも最低限の種数であり、実際にはより多くの動物種が利用されていたことが明らかである。

動物遺体の採取は、発掘時に目に付いたものを手で採取する方法と、サンプルとして土ごと採取する方法が採られた。表では、それぞれの分析結果を別に提示しているが、小形の資料ほど発掘時には見落としがちなため、サンプル資料と合わせてみていく必要がある。

75ヶ所で採取された1Lサンプル^(註1)は、1mm目の篩がかけられた上で残った資料について重量(g)を計量した^(註2)。分析時間が限られていたため、動物種ごとの容量・重量を量ることはできず、同定し得た動物の種類と数のみを記すにとどめた。サンプルのなかには、動物遺体が細片化していたために種名の同定に至らなかったものや、肉眼で観察する限り、動物遺体が確認できなかったものも含まれている。

表22～32は、動物遺体を層群ごと、区ごとにまとめたものである。層群が同一の資料の場合は、より上層から順にUS番号ごとに提示している。US番号やその上下関係については、II-1を参照されたい。

オホーツク文化期の動物利用

上述したように、オホーツク文化期のなかでも、中期から後期に移りかわる時期が本遺跡の主体である。以下に、この時期を中心とする出土動物の内容や、そこからうかがわれる当時の動物利用の状況について、動物種ごとに述べることとする。

1) 貝類・フジツボ類（表22・29～32）

貝類とフジツボ類の出土は、表に示したように少ない。量的にやや目立つのは、エゾアワビやタマキビガイ、エゾチヂミボラ、ヒメエゾボラ、イガイである。このうち、タマキ

ビガイやエゾチヂミボラは小形で、これをおもな目的として採集が行われたとは考えにくく、混獲などによって遺跡内に持ちこまれた可能性が高い。食料としてはエゾアワビやイガイ、ヒメエゾボラが利用されたとみられるが、出土量は総じて少なく、他のオホーツク文化期の遺跡^(註3)と同様に、それほど貝類採集には熱心でなかった様子がうかがえる。

2) ウニ類 (表 29 ~ 32)

ウニ類は、手による採取資料のなかにも破片がわずかに見られたが、ほとんどはサンプル中に含まれていた。表には、ウニ類の口器を構成する部位のなかでも出土量が多い顎骨片と中間骨(内山 2001)の数のみを記した^(註4)。

第2層群では全てのUSでウニ類が確認できた。USごとの最小個体数を見ると、B1区(US114)の7個体を最多とし、半数近くの箇所では1個体にとどまった。この結果から、'ウニ層'が形成されるほどウニ類の採集が集中的に行われていたとは言えないが、食料として一定度の役割を担っていたことは明らかである。なお、顎骨片や中間骨では種の区別は困難だが、殻や棘の観察から、キタムラサキウニを中心にバフンウニが混ざるという状況であることが見て取れた。

3) 魚類 (表 23・24・29 ~ 32)

魚類では小形の部位が多いこともあり、手による採取だけでなくサンプルから得られた資料の分析結果も合わせて総合的に見ていく必要がある。

軟骨魚類としては、サメ類が2種確認されている。ツノザメ科とネズミザメ科であるが、いずれも出土量は少なく、積極的に漁の対象にしていたとは言い難い。

硬骨魚類では、科レベルで10種の魚種が確認されている。小形の魚種であるニシン科やアイナメ科は、手による採取では一見出土量が少ないように見えるが、サンプル中には多く含まれており、タラ科やフサカサゴ科と並んで、本遺跡の主体種である。

ニシンの可能性が高いとみられるニシン科は、1サンプルあたりの出土量はそれほど多くないながらも、ほとんどのサンプルに含まれている。

アイナメ科は、形態的にホッケ、アイナメの双方が含まれる可能性がある。アイナメに似た方骨や角骨を体長40cmの現生標本と比較したところ、ほぼ同大の資料とかなり大きい資料が確認できた。このことから、大きく成長した個体を捕獲していたことが分かる。

タラ科は、出土部位の大きさからみて、その多くがマダラである可能性が高い。これも成魚がおもに捕られていたようである。

フサカサゴ科は、最小個体数で見れば、本遺跡でもっとも多く出土している魚種である。フサカサゴ科は利尻島周辺で多数の種類が生息しており、複数種が漁の対象にされた可能性が考えられる。

その他の魚種はいずれも出土量が限られる。サケ科は椎骨が少量確認されるのみである。

カジカ科も第2層群を中心に少量確認されているに過ぎず、今回の資料で見える限り、

積極的に捕る対象にはされていなかったようである。

ヒラメと同定された資料も少ないが、現生標本と比較したところ、体長 70cm を超えるような大形の資料であることが明らかであった。

カレイ科の出土量も少ないが、カレイ科は種数が多い上に形態も多様性に富む（尼岡 2016）。骨格も部位ごと・左右ごとに形態差がみられるため、複数種の現生標本と比較したところ、主上顎骨や歯骨、角骨 2 点（全て右）ではマガレイ、前上顎骨（右）ではアサバガレイ、角骨 1 点（右）と方骨（右）ではクロガシラガレイやクロガレイに似た形態が確認された。これらはいずれも利尻島周辺海域で多くみられる種類である。このように形態の多様性から、フサカサゴ科と同じく、複数種が捕られたものと推測される。

フグ科とした資料は分布域を考慮するとマフグである可能性が高い。出土量は僅か 4 点ときわめて少ないが、マフグの現生標本と比較したところ、最小個体数 2 個体のうち、1 個体は体長 42cm の標本と同大、もう 1 個体はそれより大きな個体であった。マフグであるとすれば、肝臓や卵巣、腸、皮膚に人を死に至らしめるような猛毒や強毒があるため（落合・田中 1986）、当時の遺跡の担い手が毒に関する知識を備えていた可能性は高い。

4) 鳥類（表 25・29～32）

鳥類では、9 種類ほどが確認されている^(註5)。アホウドリ科とウ科、ウミスズメ科がやや目立つが、それらの種類を含めても出土量はそれほど多くない。

出土鳥骨のうち、アビ属、ミズナギドリ目、カモ科、ガン族、カモメ科、カラス科は、調査区全体で数点ずつが出土しているに過ぎない。このうち、カモメ科では、オオセグロカモメよりもはるかに大きくワシカモメに相当するような大形の種類の脛骨が確認されている（B1b 区第 2 層群）。

出土量が割合多い種類のうち、アホウドリ科では、B7 区第 2 層群（US171）の中手骨のように、鳥管骨鏝の素材とされた資料も見られる。他にも、表には記載していないが、切断された痕跡をとどめる資料もあり、鳥類は、食料としてだけでなく、道具の素材としても利用されたことが分かる。

ウ科では、ヒメウと同大の資料が多かったが、わずかにウミウ大の資料やその中間的な大きさの資料もみられた。種ごとでも大きさには幅があるため、大きさのみをもって種名の特定はできないが、複数種が利用されたとはいえるだろう。

ウミスズメ科でも、ウトウ大の資料からハシブトウミガラス大の資料まで、大きさの異なる資料がみられる。出土数的には、後者の資料が主体を占める。

‘種不明鳥類’として表に提示した資料のうち注目されるのは、B1a' 区第 2 層群（US159）から出土した大形鳥類の右上腕骨である。形態的にみて周囲の遺跡ではあまり報告例のないツル科の可能性もあり、今後さらなる検討を進める必要がある。

5) 哺乳類 (表 26 ~ 32)

哺乳類はほとんどが発掘時の採取資料中に含まれていた。サンプル資料のなかでしか見られなかった種類としては、トガリネズミ科がある。

トガリネズミ科とネズミ科は小形であり、意図的に利用されたものではなく紛れこみと考えられる。

陸生哺乳類のなかで目立つのは、ブタである。全身の部位が散乱した状態で出土しており、傷も 2 例のみだが見られたため、解体されたことは明らかである。死亡年齢が査定できた資料の多くは亜成獣であった。オホーツク文化期においてブタは食用家畜とみなされており、若い個体に偏る本遺跡での年齢構成も、前述した出土状況や傷の存在と合わせて、食料にされた根拠となる。性別としては雌雄ともに確認されている。

ブタと並ぶ家畜であるイヌは、第 1 層群で焼骨が 1 点確認されたのみである。

キタキツネは陸生哺乳類のなかでブタに次いで多い。イヌと形態的に近い部位も多いが、大きさを含めた形態からキタキツネと判断した。キタキツネは毛皮が良質のため、毛皮に高い価値が見出された結果、捕獲されたとも考えられる。

海獣類としては、アシカ科とアザラシ科、クジラ目が確認されている。出土点数はいずれもそれほど多くない。

アシカ科では、オットセイ、ニホンアシカに加えて、ニホンアシカかトドの可能性のある資料が見られた。アシカ科は性差が大きく、オットセイでは雌が確認されている。冬から春の時期に繁殖地から南下してきた個体であろう。B1b 区第 2 層群の下顎骨では、頬側に傷が見られ、肉量の少ない部位であることから、毛皮採取時についた傷であると考えられる。オットセイの毛皮は特に良質のため、食用としての利用だけでなく、毛皮を目的とした猟が行われたことは想像に難くない。ニホンアシカでは上顎骨が出土している。欠損部があるなどの理由により、アシカ科とまでしか同定できなかった資料では、四肢骨で傷が複数確認されている。解体に伴うものとみられる。

アザラシ科は第 2 層群を中心に出土が確認されている。出土量としてはそれほど多いわけではないが、食用としてだけでなく、水にも強い丈夫な毛皮を持つ点で、アシカ科とともにアザラシ科の価値が高かったことは容易に想像される。欠損部の少ない上腕骨をみると、ゴマフアザラシの形態に近い。

クジラ目としては、尺骨 1 点以外は、破片資料のみの出土である。尺骨は全長が 58mm ほどしかなく、イルカに分類されるクジラ目のなかでもかなり小形の種類である。

おわりに

以上、動物種ごとに見てきた通り、2017 年度の発掘調査で出土した動物遺体の内容にもとづけば、沼浦海水浴場遺跡では、他のオホーツク文化期の遺跡の例に漏れず、遺跡周辺に生息する動物を中心に利用していたことが明らかである。それに加えて、もともとはこの地にいなかったブタへの依存度が割合高く、北海道内では利尻島・礼文島のみの特有

の特徴も備えている。

本遺跡の発掘調査は今後も継続されるため、遺跡全体の動物利用に対する評価は、調査が完了した後に行いたい。

註

- (1) 容量が 1L に満たないサンプルも 1 ケ所のみだが含まれている (B7 区第 2 層群 US145)。
- (2) 計量前に土器片や骨角器 (未成品) が抜かれたサンプルも 3 ケ所みられる。
- (3) 貝塚が形成されることもあるサハリンの遺跡を除く。
- (4) 顎骨片は対称的な形状の骨 2 点で 1 つの顎骨を構成する。ここでは顎骨片をそれぞれ便宜的に a, b として区分した上でカウントした。顎骨と中間骨は、1 個体のウニ類に 5 つずつあり、これをもとに最小個体数を算出し、サンプルごとの出土量の客観的比較が可能になる。
- (5) 出土鳥骨のうち、手元にある現生標本と比較しても同定が困難であった資料については、北海道大学総合博物館の江田真毅氏の教示を得た。ここに記して感謝申し上げます。

文献

尼岡 邦夫 2016 『日本産ヒラメ・カレイ類』東海大学出版部

内山 幸子 2001 「ウニ類の出土量の算出方法について」『海と考古学』3号 1-8 頁

落合 明・田中 克 1986 『新版魚類学 (下)』恒星社厚生閣

表 21 出土動物一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca	脊椎動物門	Phylum Vertebrata
腹足綱	Class Gastropoda	軟骨魚綱	Class Chondrichthyes
エゾアワビ	<i>Haliotis discus hannai</i>	ツノザメ科	Squalidae gen.
ユキノカサガイ	<i>Acmaea pallida</i>	ネズミザメ科	Lamnidae gen.
ヘソアキクボガイ	<i>Chlorostoma argyrostoma turbinata</i>	硬骨魚綱	Class Osteichthyes
チャイロタマキビガイ?	<i>Temanelia turrita?</i>	ニシン	<i>Clupea pallasii</i>
タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>	サケ科	Salmonidae gen.
クロタマキビガイ	<i>Neritrema sitkana kurila?</i>	タラ科	Gadidae gen.
タマキビガイ科	Littorinidae gen.	マダラ	<i>Gadus macrocephalus</i>
ウミナナ科	Pomatidae gen.	フサカサゴ科	Scorpaenidae gen.
エゾタマガイ	<i>Crypyonatica janthostomoides</i>	アイナメ科	Hexagrammidae gen.
エゾチヂミボラ	<i>Nucella freycineti</i>	カジカ科	Cottidae gen.
ヒメエソボラ	<i>Neptunea arthritica</i>	ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>
マイマイ目	Stylommatophora fam.	カレイ科	Pleuronectidae gen.
斧足綱	Class Peliycopoda	フグ科	Tetraodontidae gen.
エゾタマキガイ	<i>Glycymeris yessoensis</i>	鳥綱	Class Aves
イガイ	<i>Mytilus corsucus</i>	アビ属	Gavia sp.
シジミガイ科	Corbiculidae gen.	ミズナギドリ目	Procellariiformes gen.
ウバガイ	<i>Spisula sachalinensis</i>	アホウドリ科	Diomedidae gen.
節足動物門	Phylum Arthropoda	ウ科	Phalacrocoracidae gen.
顎脚綱	Class Maxillopoda	カモ科	Anatinae gen.
フジツボ類	Balanomorpha fam.	ガン族	Anserini sp.
棘皮動物門	Phylum Echinodermata	カモメ科	Laridae gen.
ウニ綱	Class Echinoidea	ウミスズメ科	Alcidae gen.
エゾバフンウニ	<i>Strongylocentrotus intermedius</i>	カラス科	Corvidae gen.
キタムラサキウニ	<i>Strongylocentrotus nudus</i>	哺乳綱	Class Mammalia
		トガリネズミ科	Soricidae gen.
		ネズミ科	Muridae gen.
		キタキツネ	<i>Vulpes fulpes schrencki</i>
		イヌ	<i>Canis familiaris</i>
		ブタ	<i>Sus scrofa domesticus</i>
		アシカ科	Otariidae gen.
		トド?	<i>Eumetopias jubatus?</i>
		ニホンアシカ	<i>Zalophus californianus japonicus</i>
		オットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>
		アザラシ科	Phocidae gen.
		クジラ目	Cetacea fam.

表 22 軟体動物門 (腹足綱・斧足綱)・節足動物綱

層群	区	US	エゾアワビ	ユキノカサガイ	ヘソアキクボガイ	タマキビガイ	タマキビガイ?	クロタマキビガイ	クロタマキビガイ?	タマキビガイ科	ウミナナ科	エゾタマガイ	エゾチヂミボラ	ヒメエゾボラ	マイマイ目	種不明巻貝	エゾタマキビガイ	イガイ	シジミガイ科	ウバガイ	種不明二枚貝	フジツボ類	
1	B0	130	fr																				
	B1a'	101-102, 151				1												fr				fr	
	B1a	102																fr					
	B1b	134				1			1					fr				L 2 R 1					
	B7	101																fr				fr	
	E1	601-602	1	1		3							4						L 2	L 1 R 2			
	D	401			1							1											
2	B0	132-133, 135-136, 141	2			2						1	3			fr		R 3					
	B1a'	159	2		4								2	1	2			fr					
		152, 173	1		2									1					R 1				
	B1a	105	fr				1							1					R 1				
		146, 173	2										2										
	B1	177								1													
		118																					fr
	B1b-belt	107																LR? 1					
		114																	R 1				
		116	fr			4	1						1	1					R 1		R 1		
		137				1			1											R 1			
		142	1		1	14			4	3			8	1					L 1 R 5				
	B1b	137, 142-143, 150, 157	5				21		2	2		10	1					L 6 R 4					
	B7	129	1			1								2					L 1				
		149	1																				
		162	1										1										
		163	5			5				1			8	5		1	LR? 1		L 8 R 10				
		178	1			1							1	1					L 3 R 1				
		170											1	1					R 1				
		171	6		1					1				5					L 6 R 6				fr2
3	E1	603	1																		fr		
-	TP1	205																L 1					
	B1	0					2											R 1					
	B7	0	fr			3				1								L 1 R 1					
	E1	0								1													
	-	0						1															

凡例 L:左側 R:右側 fr:破片

表 23 魚綱 (1)

層群	区	US	ツノザメ科	ネズミザメ科	ニシン科	サケ科	タラ科	フサカサゴ科	フサカサゴ科?	アイナメ科	カジカ科	カジカ科?	ヒラメ	カレイ科	ヒラメ/カレイ科	フグ科	種不明魚類	
1	B0	130					椎骨1			歯骨 R 1								
	B1a'	102,151					椎骨 1	椎骨 1										
	B1a	102															fr	
	B1b-belt	134											歯骨 L fr 椎骨 1					
	B1b	134	歯髁線 1	椎骨 fr			主上顎骨 R 1 前上顎骨 L 1 椎骨 7	主上顎骨 L 2 前上顎骨 L 2 R 1 歯骨 L 1 方骨 L 2 椎骨 4					第一椎骨 1 椎骨 1					
	B7	101					歯骨 R 1 第一椎骨? 1 椎骨 4	主上顎骨 L 1 歯骨 L 1 椎骨 5					椎骨 2	椎骨 1				
E	601-602				歯骨 R 1	第一椎骨 1 椎骨 9	主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 1 歯骨 L 2 R 1 角骨 L 1 方骨 R 1 前鰓蓋骨 L 1 R 1 椎骨 6	椎骨 1				方骨 L 1					椎骨 1	
2	B0	132-133, 135-136, 140,158	歯髁線 1				椎骨(腹) 1 前上顎骨 L 1 歯骨 L 2 角骨 L 1 椎骨 36	主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 2 R 1 歯骨 R 1 角骨 R 3 前鰓蓋骨 L 1 R 1 主鰓蓋骨 L 1 R 1 第一椎骨 1 椎骨 10		主上顎骨 L 1				椎骨 1			歯骨 L 1	
	B1a'	159				椎骨(腹) 1	前上顎骨 R 2 歯骨 L 1 角骨 R 1 椎骨 9	歯骨 L 1 R 2 角骨 R 1 前鰓蓋骨 L 2 R 1 主鰓蓋骨 L 1 椎骨 5					前鰓蓋骨 L 1				前上顎骨 L 2 椎骨 2	
		152					前上顎骨 L 2 角骨 R 1 椎骨 14	前上顎骨 L 1 歯骨 L 1 主鰓蓋骨 R 1 椎骨 6		角骨 L 1			椎骨 1				椎骨 1	
	B1a	105,111					椎骨(腹) 1	椎骨 4	方骨 R 1		前上顎骨 L 1			椎骨 1				
		190						椎骨 2	主上顎骨 L 1 椎骨 1									
		174						主上顎骨 L 1 椎骨 2	主上顎骨 R 1 前鰓蓋骨 L 1									
		146,173						歯骨 L 1 角骨 L fr 椎骨 8	前鰓蓋骨 L fr 主鰓蓋骨 R fr 椎骨 2									
		176																fr
	B1b-belt	114						方骨 L 1 椎骨 1				第一椎骨 1						椎骨 1
		116						歯骨 L 1 椎骨 7	前上顎骨 L 3 R 1 角骨 R 1 前鰓蓋骨 L 1 主鰓蓋骨 L 2 椎骨 4		主上顎骨 R 1	主鰓蓋骨 R 1		椎骨 2				椎骨 4
		117						歯骨 L 1 椎骨 2										椎骨 1
		137						椎骨 3	主上顎骨 L 1 方骨 L 1 椎骨 2		角骨 L 1		角骨 R 1 椎骨 1					主上顎骨 R 1
142		椎骨 1	椎骨 1				主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 2 歯骨 R 1 方骨 L 1 第一椎骨 2 椎骨 39	主上顎骨 L 1 歯骨 L 1 R 4 角骨 R 2 方骨 L 1 前鰓蓋骨 L 1 R 0 主鰓蓋骨 L 2 R 1 椎骨 9		角骨 L 1 椎骨 1		前鰓蓋骨 L 1 椎骨 3	椎骨 1	第一血管間線 3		椎骨 3		

表 24 魚綱 (2)

			ツノザメ科	ネズミザメ科	ニシン科	サケ科	タラ科	フサカサゴ科	フサカサゴ科?	アイナメ科	カジカ科	カジカ科?	ヒラメ	カレイ科	ヒラメ/カレイ科	フグ科	種不明魚類				
層群	区	US																			
2	B7	B1b	137,142-143,150,157	椎骨 6			主上顎骨 L1 R1 角骨 L1 R1 椎骨 26	主上顎骨 L3 R1 前上顎骨 L2 R2 歯骨 L1 R3 角骨 L2 方骨 L2 R2 前鰓蓋骨 L2 R1 主鰓蓋骨 L2 R1 椎骨 9	方骨 L1		前鰓蓋骨 L1		前上顎骨 L1 角骨 L1 方骨 L1 椎骨 1	前鰓蓋骨 R1 第一血管間棘 1 椎骨 1							
			129				前上顎骨 R1 角骨 R1 第一椎骨? 1 椎骨 6	前上顎骨 L3 歯骨 L2 R1 方骨 L1 R1 前鰓蓋骨 R1 主鰓蓋骨 R1 椎骨 5					椎骨 1	第一血管間棘 1			前上顎骨 R1				
			149				歯骨 L1 R1 椎骨 8	歯骨 L1 R2 角骨 L1 方骨 R2 前鰓蓋骨 L3 R2 主鰓蓋骨 R1 第一椎骨 1 椎骨 2						椎骨 6	椎骨 1						
			162				椎骨 1	主上顎骨 L1 歯骨 L1 椎骨 3								主鰓蓋骨 R1		方骨 R1			
			163		椎骨 1			主上顎骨 L1 前上顎骨 R2 歯骨 L1 R1 第一椎骨 1 椎骨 14	主上顎骨 L3 R2 前上顎骨 L1 R2 歯骨 L2 R1 角骨 L2 R1 方骨 L1 R1 前鰓蓋骨 L3 R4 主鰓蓋骨 L2 R2 椎骨 6	椎骨 1		角骨 R1		角骨 R1 椎骨 6					角骨 R1 椎骨 1		
			178			椎骨 1		椎骨 2	主上顎骨 L1 R1 前上顎骨 R1 角骨 R1 前鰓蓋骨 L2												椎骨 1
			171					椎骨 1	主上顎骨 L2 歯骨 L1 角骨 L2 R1 主鰓蓋骨 R1												
		3	E	603										前鰓蓋骨 fr							
	B1a'	0						主上顎骨 L1													
	B1a	0						椎骨 2													
	B1	0	椎骨 2				歯骨 L1 椎骨 16	前上顎骨 R1 角骨 L1 R1 前鰓蓋骨 R fr 主鰓蓋骨 R1 第一椎骨 1 椎骨 10					椎骨 1 椎骨 1	椎骨 5					椎骨 3		
	B7	0					主上顎骨 L2 前上顎骨 R1 歯骨 R1 椎骨 7	主上顎骨 R1 前上顎骨 L2 R3 歯骨 L1 角骨 L2 R1 方骨 L4 R1 前鰓蓋骨 L3 R1 第一椎骨 1 椎骨 2	角骨 L1										椎骨 2		
	E	0												第一椎骨 1							
	-	0												椎骨 1							

凡例 L:左側 R:右側 fr:破片

表 25 鳥綱

			アビ属	ミズナギドリ目	アホウドリ科	ウ科	ウ科?	カモ科	ガン族	カモメ科	ウミスズメ科	カラス科	種不明鳥類	
層群	区	US												
1	B0	130			尺骨 R d 1 脛骨 R d 1	上腕骨 L p 1					烏口骨 R d 1 大指基節骨 L 1			
	B1a'	102,151			上腕骨 R d 1			上腕骨 L p 1						
	B1a	102				脛骨 L m 1							脛骨 L m 1	
	B1b	134			桡骨 R p 1								脛骨 L m 1	
2	B0	133,135-136 140-141	烏口骨 L p 1	桃骨 L 1 尺骨 L 1	上腕骨 R p f r d 1 桡骨 L p 1 脛骨 R d 1	桡骨 L p 1 R d 1 尺骨 R p 1 脛骨 R p 1					上腕骨 R d 1 烏口骨 R 1	尺骨 R d 1	胸峰 fr 趾骨 1 連合仙椎 fr	
	B1a'	159			烏口骨 L p 1 上腕骨 R d 1			上腕骨 L 1 尺骨 R m 1	桡骨 L p 1		尺骨 L 1		肩甲骨? L 1 上腕骨 R m 1 y 尺骨 m fr 趾骨 fr 連合仙椎 fr 椎骨 1	
					大腿骨 L d 1 脛骨 L d 1			尺骨 L p 1			胸峰 fr 連合仙椎 fr			
	B1a	105											手根中手骨 R d fr	
		174											胸峰 L fr	
		173				尺骨 L 2							尺骨 m fr	
	B1b-belt	116										上腕骨 R p 1		椎骨 2
		117			上腕骨 L p 1									趾骨 1
		137												fr
		142			桡骨 R 1									脛骨 L m 1
	B1b	137,142-143			尺骨 L d 1 中手骨 L 1	中手骨 R p 1 脛骨 L p 2 中足骨 R d 1					脛骨 R d 1			胸峰 fr 椎骨 1
				脛骨 L 1	中手骨 R m 1 大腿骨 L d 1	桡骨 R d 1							上腕骨 p fr 脛骨 R m fr 趾骨 1	
	B7	129			中足骨 R d 1	中足骨 R 1			中足骨 L 1					椎骨 1
			149											胸峰 1
		163		中足骨 L 1	上腕骨 L p 1 R 1 桡骨 L d 1 尺骨 R d 1 中手骨 L p 1 脛骨 L p 1	上腕骨 L 1 p 1 上腕骨 R p 1 切断 d 1 桡骨 L d 1 尺骨 L p 2 大腿骨 R 1	上腕骨 L m 1	尺骨 R 1			上腕骨 L p 1 d 1 中手骨 L 1 脛骨 R d 1		桡骨 m fr 脛骨 L m 1 趾骨 5	
			168,178			大指基節骨 R p 1 中足骨 L 1						烏口骨 L 1		趾骨 1
			179			脛骨 R d 1	大腿骨 L 1							
171			脛骨 R p 1	肩甲骨 R 1 上腕骨 R d fr 中手骨 R m 1 (鳥骨符號)	上腕骨 L p 1 中手骨 L p 1 脛骨 L 1 中足骨 L d 1 R 1			上腕骨 L d 1 大腿骨 L 1		上腕骨 L 1 尺骨 R 1 d 1 脛骨 R d 1	尺骨 R d 1 大腿骨 L p 1		尺骨 R d 1	
						脛骨 R m 1								
B1a	0													
B7	0						中手骨 L p 1				大腿骨 R d 1		椎骨 1	
-	0			中足骨 L d 1										

凡例 L:左側 R:右側 fr:破片
p:近位部 d:遠位部
y:若鳥

表 27 哺乳綱 (2)

種	区	USNo.	ネズミ科	キタキツネ	キタキツネ?	イス	ブタ	ブタ?	種不明陸獣類	トドホノアシカ	ニホンアシカ	オットセイ	オットセイ?	アシカ科	アザラシ科	クジラ目	種不明油鯨類	種不明哺乳類																		
B1b-bd4	142	142,143, 150,157, 160	頭蓋骨(頭頂骨、頭頂骨、側頭骨) L1 頭蓋骨(頭頂骨、口蓋骨水平板) R1 上顎腔三MRI 上顎腔 R d1 y 後件 R p1 尻骨 R p1 椎骨(頸) L y	頭蓋骨(頭頂骨、側頭骨、側頭骨) L1 頭蓋骨(頭頂骨、口蓋骨水平板) R1 上顎腔三MRI 上顎腔 R d1 y 後件 R p1 尻骨 R p1 椎骨(頸) L y	頭蓋骨(頭頂骨) L(×××) 下顎骨 L M,部分分離	頭蓋骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1																	
																				129	149	162	B7	163	178	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1	上顎骨 L p1 上顎骨 R1

表 28 哺乳綱 (3)

種別	区	USNo.											種不明哺乳類				
			ネズミ科	キタキツネ	キタキツネ?	イヌ	ブタ	ブタ?	種不明陸獣類	トドン / アンシカ	ニホンアンシカ	オットセイ		オットセイ?	アシカ科	アザラシ科	クジラ目
2	B7	170,179															中手/中足骨 1 種名(動物) 1
		171	上腕骨 Ld 1 腕骨 Rd 1 種名(動物) 1	種骨(動物) 1	上顎 R 1 y 2												
3	B7	131															腕骨(動物) 1
		183															肋骨 R 1 fr
E	TP1	603															種骨(動物) 1
		154															種骨(動物) 1
B1	0	155															種骨(動物) 1
		0															種骨(動物) 1
B3	0	0															種骨(動物) 1
		0															種骨(動物) 1
E	0	0															種骨(動物) 1
		0															種骨(動物) 1

* 接合し、種名を1とみる

凡例 L:左 R:右 fr:碎片
P:近位部 d:遠位部
I:切端 C:末端 P:前臼歯 M:後臼歯
y:亜成獣

V. 沼浦海水浴場遺跡 第1・2次調査出土人骨について

藤田 尚（新潟県立看護大学）

2016年から調査されている沼浦海水浴場遺跡から、人骨片が出土している。これら人骨片資料は、断片的なもので、その形態の詳細をうかがい知ることは難しい。しかし、人骨か否か、さらには身体の中のどの部位の骨であるかについて、鑑定を行ったので報告する。なお、今回の鑑定資料は2017年（第2次）の発掘資料であるが、2016年（第1次）資料（追加分を含む）についても、合わせて報告する。

2016年度（第1次）資料

B1区

NK04002 (501) : 表土 (US101)

ヒト (下顎・橈骨と思われる)

NK04023 (502) : 表土 (US101)

ヒト (肋骨)

NK04027 (503) : 2層 (US102)

ヒト (顎骨片、左肋骨)

NK04028 (504) : 2層 (US102)

ヒト (顎骨片)、未成年

NK04029 (505) : 2層 (US102)

ヒト (頭骨片)

NK04030 (506) : 2層 (US102)

ヒト (肋骨?)

NK04031 (507) : 2層 (US102)

ヒト (左大腿骨近位部)

NK04035 (508) : 2層 (US102)

ヒト (椎骨)

NK04036 (509) : 2層 (US102)

ヒト (大腿骨頭)、未成年

NK04037 (510) : 2層 (US102)

ヒト (大腿骨遠位端)、未成年

NK04042 (511, 512, 513) : DK1 埋土中一括 (US105)

ヒト (頭骨、下顎、椎骨、肋骨、大腿骨頭左右)

NK04052 (514) : DK1・壁面、埋土中 (US105)

ヒト (頭骨)

NK04106 (516) : DK1 埋土中 (US105)

ヒト (下顎)、NK04052 と同一個体

NK04108 (515) : DK1 埋土中 (US105)

ヒト (椎骨)

B3 区

NK05014 (517) : 3 層 (US121)

この資料について鑑定を行った結果、人骨であることは明らかである。部位については、胸椎 3 個、腰椎 1 個、鎖骨 3 個、中指骨 3 本、距骨 1 個、であると考えられた。おおよそ 15-16 歳程度の未成人人骨と考えられる。

NK05017 (518) : 3 層下部 (US122)

ヒト椎骨の一部と考えられる。

B1a 区

NK06014 (519) : DK1 埋土中 (US105)

ヒト頭骨片

NK06022 (520) : DK4 埋土 (US111)

腓骨及び大腿骨遠位端と思われるが、ヒトではない可能性が大きいと思われる。

NK06028 (521) : DK3 埋土 (US109)

ヒト肋骨片、中足骨と思われた。残る骨片の部位については、さらなる詳細な検討が必要と思われた。

2017 年度 (第 2 次) 資料

B0 区

NK11169 (522) : US135

本資料は土器袋から抽出されたものであるが、成人ヒト頭頂骨の一部である。

B1a 区

NK11034 (523) : DK1 (US104)

成人ヒト頭頂骨の一部である。

NK11035 (524) : DK1 (US104)

成人ヒト頭頂骨の一部である。

NK11100 (525) : DK1 (US104)

成人ヒト肋骨の一部である。

B1a' 区

NK11142 (526) : US173

ヒト大腿骨近位部である。

NK11297 (527) : US 159

ヒト尺骨の可能性が高いと思われた。

NK11422 (528) : US173

ヒトの頭骨片である。

B7 区

NK11125 (529) : US129

本資料は、ヒト大腿骨の骨体部と思われるが、土が付着しており、詳細な観察が不可能であった。可能性は低いが脛骨片であることも考えられる。

NK11235 (530) : US129

ヒトの橈骨片である。

NK11299 (531) : US163

ヒトの肋骨片である。

まとめ

今回鑑定した人骨は、残存状況が悪く、詳細な形態学的検討は、不可能と思われる。しかしながら、今後のDNA分析によって、これらの人骨の人類学上の位置が明らかになる可能性がある。また、年代分析や植生分析など、理化学的分析を進めることも意義あることと思われる。

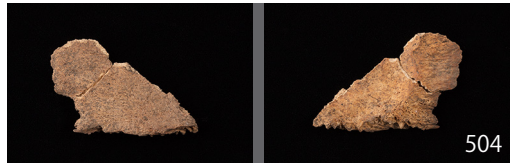


写真6 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真(1)(S=1/2)



511



512



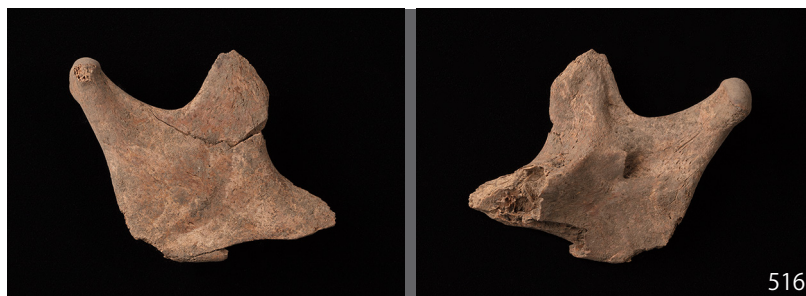
513



514



515



516

写真7 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真(2)(S=1/2)

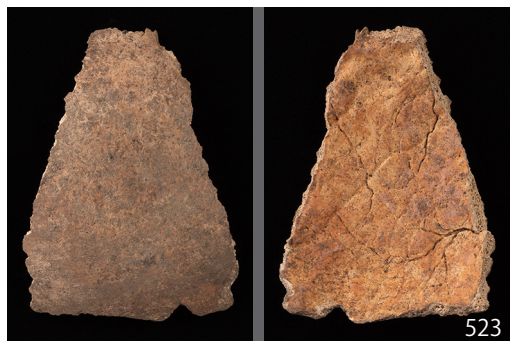
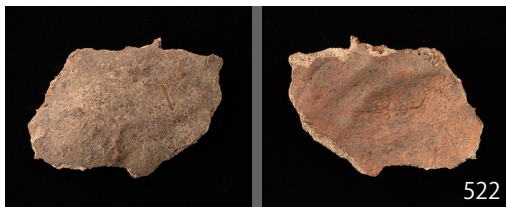
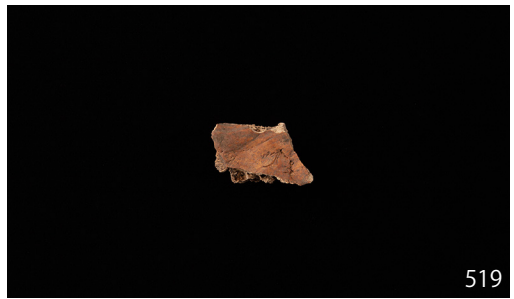
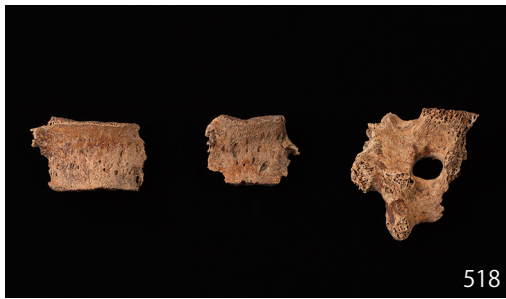


写真8 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真(3)(S=1/2)

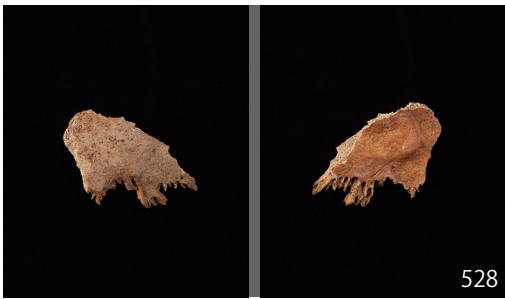
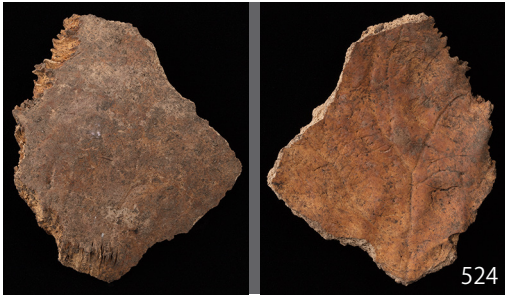


写真9 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真(4)(S=1/2)

VI. 附篇

1. 過去の調査・採集資料 その(2)

今回は沼浦海水浴場遺跡の資料を補足し、新たに亦稚貝塚の資料から竪穴住居より上位のI区資料を、利尻町立博物館の佐藤雅彦氏の格別のご配慮により掲載することとした。

(1) 沼浦海水浴場遺跡

沼浦地区とくに沼浦海水浴場遺跡は、過去の調査例にも指摘されているとおり、地表面に相当量の遺物が露出する島内でも屈指の場所で、地元の住民や来跡者により容易に採集できた歴史がある。

利尻富士町教育委員会には、そうした過去の採集資料が保管されており、前報の附篇でもそれら資料について紹介されたが、今回掲載した土器片についても、調査により得られた資料とともに一定の評価が与えられるものと思ひ、ここに報告するものである。

掲載点数は、55点におよぶ。これらの採集時期を判断する材料としては、ラベルやメモを頼りとし、新たに注記を施した。対象資料には、沼浦海水浴場遺跡のものと考えられるNKあるいはNK?、1991年の道教委によるB調査で得られたNKB、1975年採集のNK750718-9、NK751116、1978.7.30沼浦がある。55点のうち、NKBは601、644、648の3点。NK750718-19は614、616、621、622、633、641、642、650の8点。NK751116は602、603、610、613、615、618、619、620、623、630、631、634、635、639、640、649の16点。1978.7.30沼浦は632の1点で、そのほか27点は、NKあるいはNK?である。

601は、I群晩期と思われる胴部片。602、603は、II群の口縁部片。604もII群だが、後北式か。605、606はIII群で、606は口縁上部に縦列の縄線文が施される。607～611はIV群1類で、610のみ1b類。607は長胴の深鉢形土器であろう。612～620は、IV群2a類で、612～616は1段の刻文が施された口縁部片。616は、有段口縁でやや開く器形。617～620は、2段の刻文が施される。621、623～628は、IV群6b類で、押捺が施されたもの。629、630はIV群2c類で、629は櫛歯状の施文具による。631～634、647は、IV群4b類。635、636は、IV群4a類。637は、IV群5d類。639～642は無文で、642には補修孔が穿たれている。643、644はIV群9d類。645は、口縁部が肥厚した厚手土器。646は、IV群10b類で、3段の円形のスタンプ文が施されている。648はIV群に縄目がついたもの。649、650はIV群の胴部資料で、貼付文がつけられている。651～653はIV群の肩部資料で、651は櫛歯状のスタンプ文、652は横位の沈線下に同間隔で窓枠状の沈線が施されている。653は、3段のスタンプ文の上下端に2本一組の刻文がジグザグに施文されている。654、655は底部資料である。NKB以外は、B地点周辺の畑地などからの採集品が大半を占めるものと考えられる。(山谷)

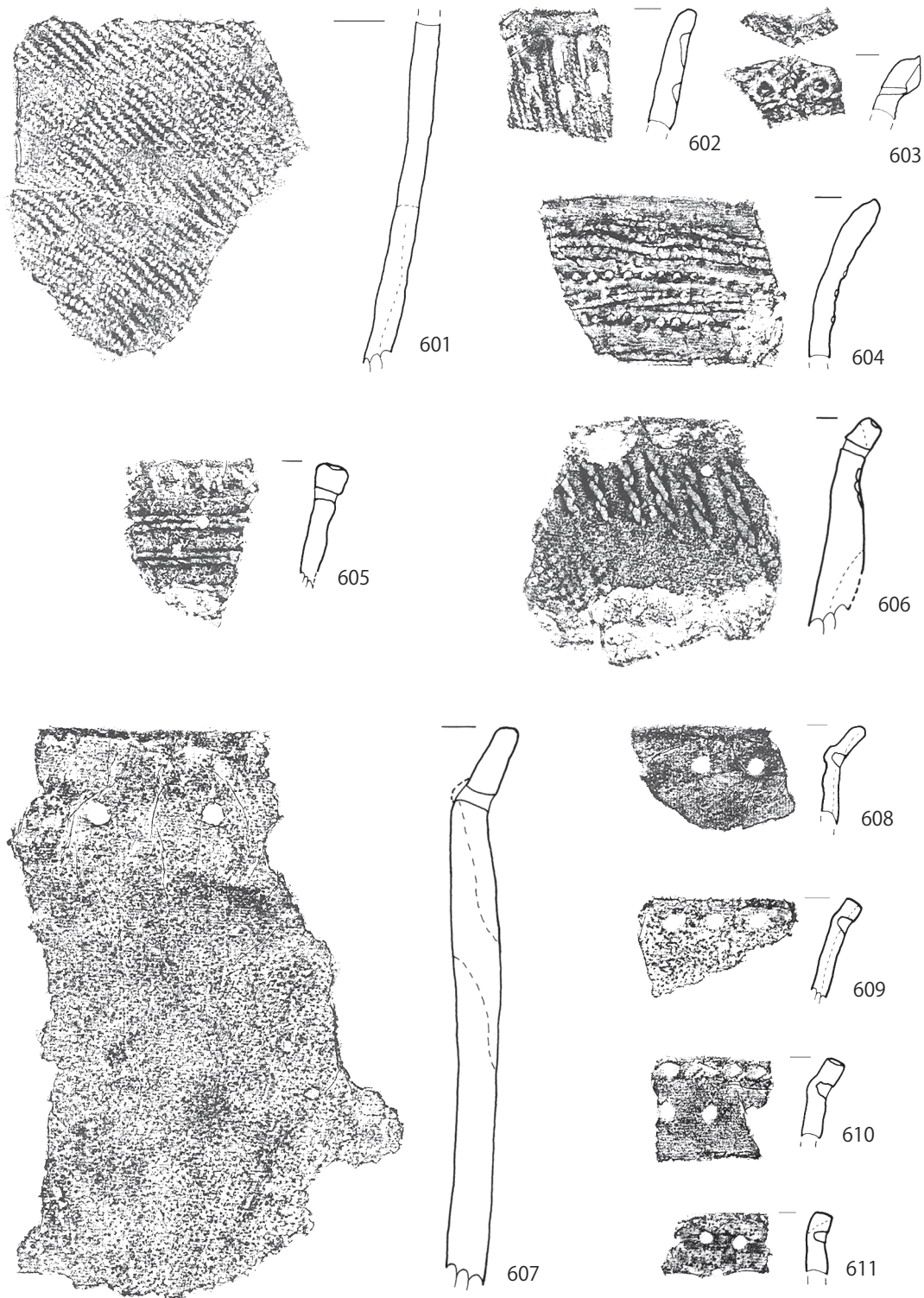


图 92 沼浦海水浴場遺跡採集資料 (1) (S=1/2)

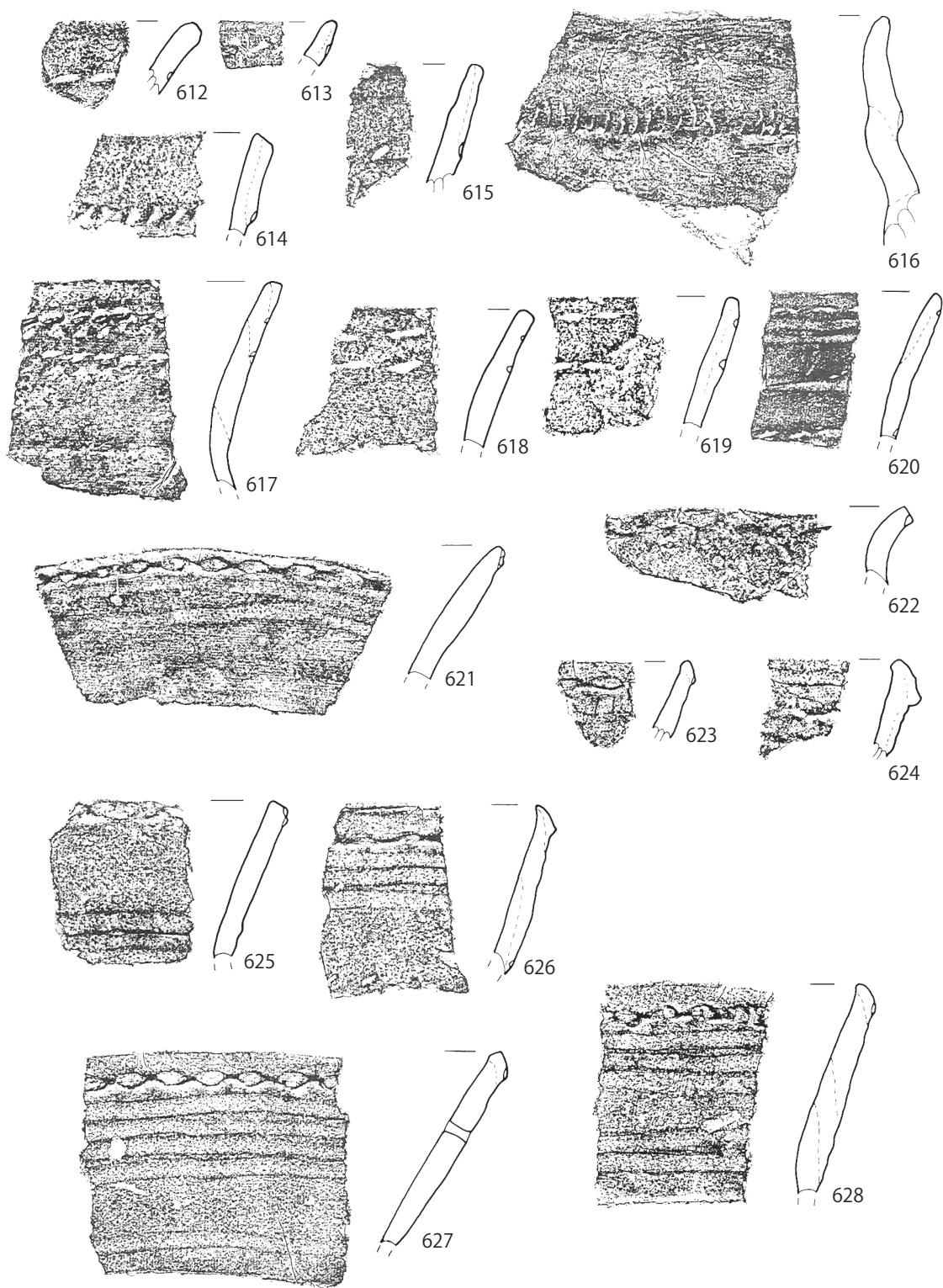


图 93 沼浦海水浴場遺跡採集資料 (2) (S=1/2)

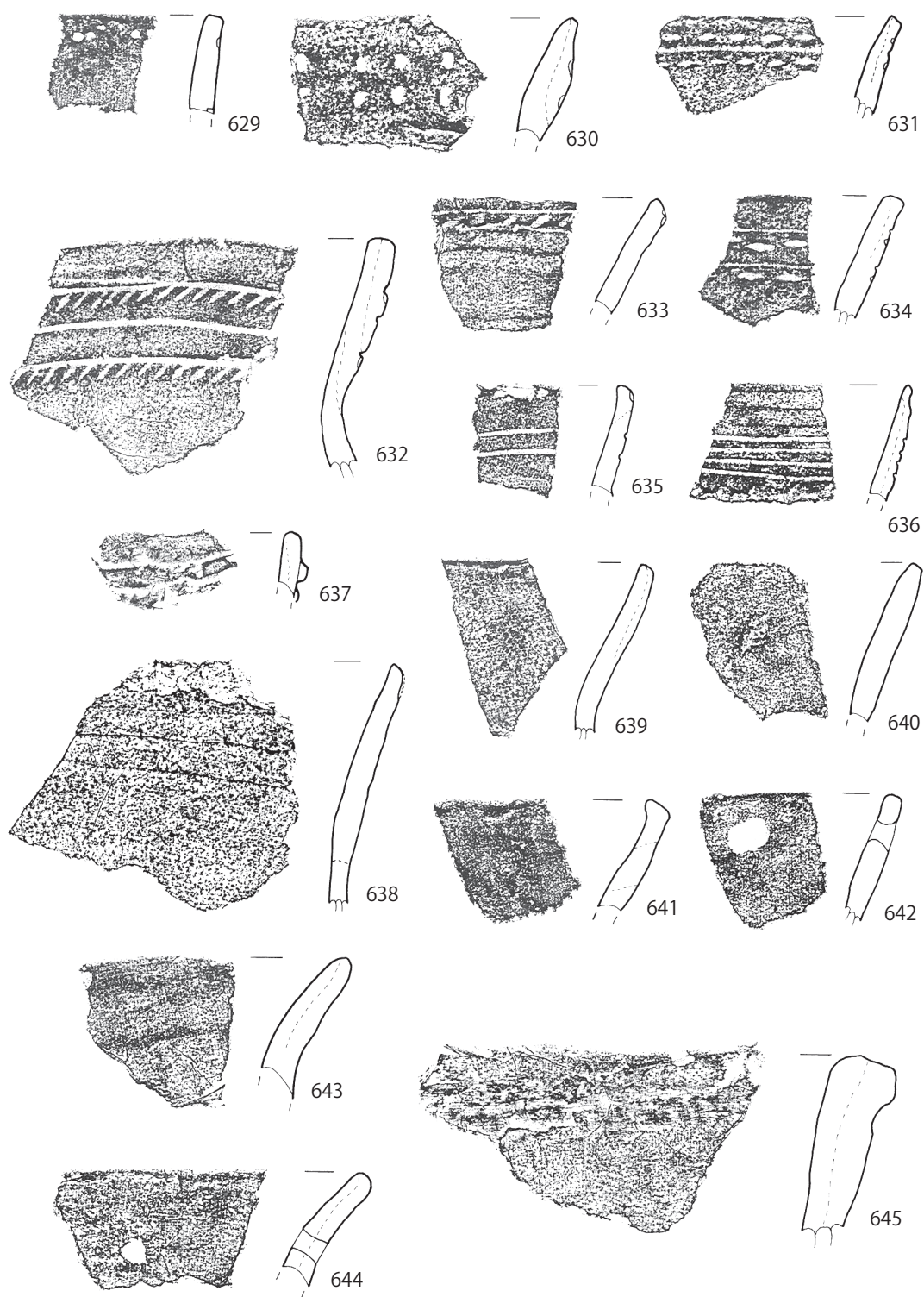


图 94 沼浦海水浴場遺跡採集資料 (3) (S=1/2)

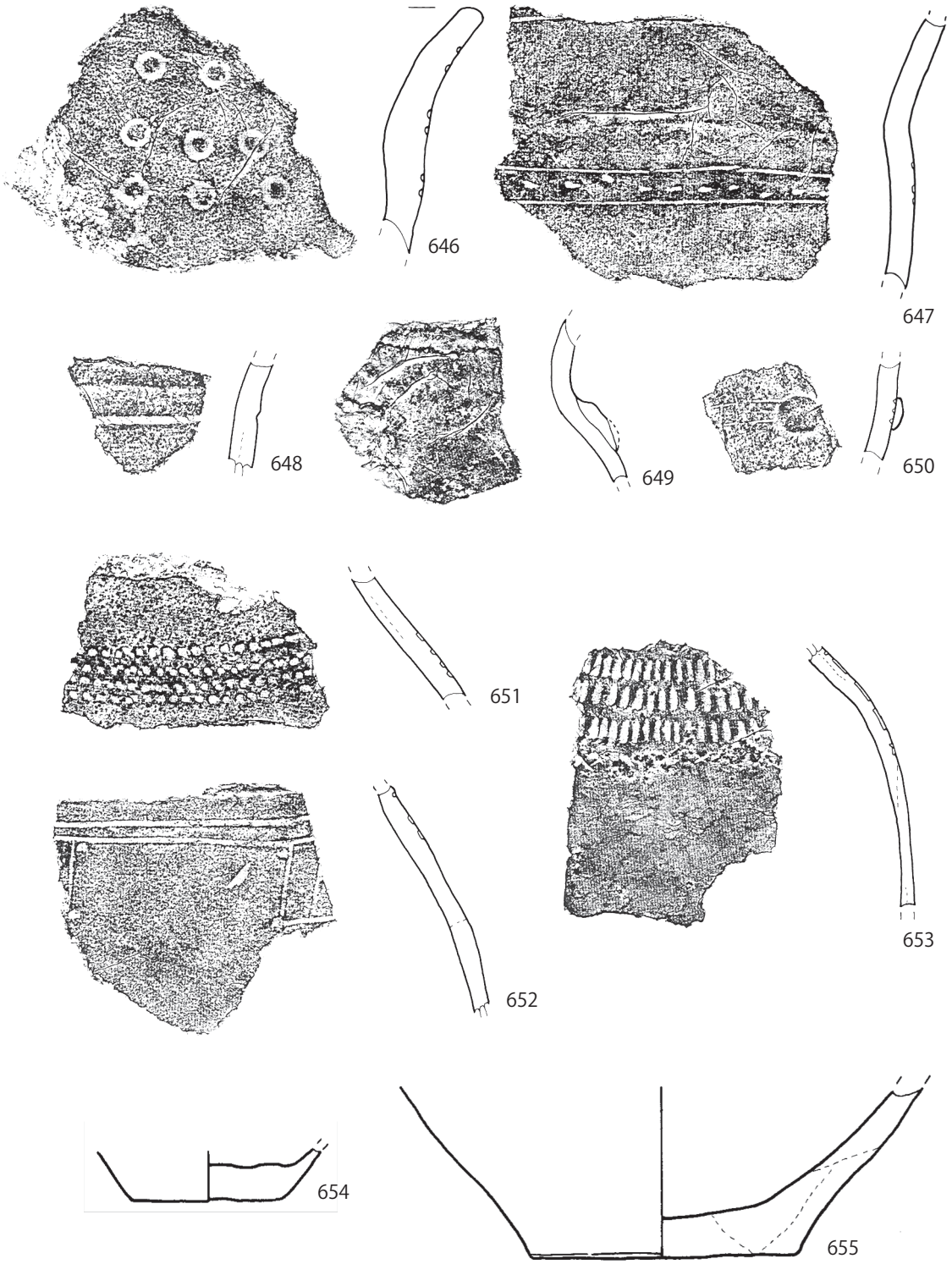


图 95 沼浦海水浴場遺跡採集資料 (4) (S=1/2)

(2) 亦稚貝塚出土の土器資料 その(1) I区

本遺跡の発掘調査は1978年に実施され、翌年には、すみやかに正式な報告書(岡田淳子・梶田光明・西谷榮治ほか1978)が刊行された。利尻島内では屈指の遺物内容を示すことから、多くの研究者に注目され、沼浦海水浴場遺跡との比較から、その重要性は一段と高まりつつあるように思われる。現在、出土遺物や調査資料は利尻町立博物館に一括収蔵・保管されており、一般の見学と研究者の利用に広く供されている。

筆者は2015～2017年にかけて、博物館の佐藤雅彦氏より格別のご配慮をいただき、土器類を対象とした悉皆的な実査を継続中である。前回は沼浦海水浴場遺跡の採集・調査資料の資料化を試みたが、今回の集成では亦稚貝塚のI区を特に取り上げる。この地点は、トナカイ角の彫刻品や多数の完形土器を出土した「焼土遺構」に隣接しており、報告された資料群(第22～24図)と、その他の未掲載の資料をできる限りまとめて紹介したい。

ただし、鈴谷式期に比定される1号竪穴資料(埋土・床面)や一部の資料については、未見のため、今回の集成作業からは割愛する。

報告によるとI区の出土土器は、「第3ブロック」(C・D・E・H・I・Jグリッド)に帰属するとされ、完形品十数点を含む73点が報告されている。筆者の実査では、この他にも、興味深い資料が数多く見いだされた。また、拓本・実測・トレースを完了した資料も存在する。以下の集成では未報告の資料を含め、総数で197点を大小に係わりなく、網羅的に掲載する。竪穴住居址より上位のI区資料は、これらでほぼ資料化されたと考えて良いであろう。未発見のものや他区のテンバコから発見されたものについては、次回に補充を心がけたい。

なおI区の全資料の整理と発表については、佐藤雅彦氏より格別のご配慮をいただき、付属のDVD-ROMに収録した写真資料については、東京女子医科大学の藤原吉希氏より尽力をいただいた。未筆ながら両氏のご厚意に感謝を申し上げる。

以下、集成資料に係わる必要事項について、前もって述べておきたい。

- (1) I区の資料はポスターカラーで注記され、ニス塗布で保全されている。注記内容の表記は、「H-09-2 I41～I44」の書式でほぼ統一されている。
- (2) 「カクラン」資料は、ビニール袋に「カクラン(層)」と記入されているか、資料に「カクラン」と注記されている。
- (3) 注記番号I41～I44及びそれ以下の層の「一括」扱い資料(注記番号I45～I47)の出土月日及び出土層位は、遺物台帳のI区欄末尾において、以下のとおり記載されている。これらの記載内容は、報告書の層序記載、記述とは必ずしも一致しない。

I区遺物番号	月/日	出土層位.....	注記番号
41	4/26	黒色土(層).....	I41
42	〃	黒色砂層.....	I42
43	4/27	黒色土層.....	I43

44	〃	茶褐色土層.....I44
45	4/28	〃（住居内）.....I45
46	4/30	ピット内.....I46
47	〃	住居床.....I47

- (4) 本集成では、各資料を層位順に配列し、最後に「カクラン」層の資料を一括掲載する。
- (6) 前回の「観察表」の項目の他に、新たに「出土層位」と「報告書の掲載」の二項目を追加し、掲載された付図・番号については、備考欄に記載する。
- (7) 「口径・底径」の推定は例言に記載したとおり、推定範囲の最小値を記載している。
- (8) 資料の一部には、縮尺を調整して報告書より転載したもの、及び報告書には未掲載の拓本・実測図・実測図トレースから転載したものがある。未掲載の実測図等には、残念ながら器形の傾き情報が欠けているうえに、対象資料の現物を確認できないものがある。これら資料の掲載に際しては、傾きを任意に設定している。
- (10) 整理済みだが報告書に未掲載とされた実測図等を転載した場合については、備考欄に「*」印を記載する。
- (11) 掲載資料の「分類と記載コード」については、前回の集成に含まれていない土器があるため、便宜的に、以下のように拡充・改訂したものを用いる(表 33)。(柳澤)

表 33 掲載土器の分類と記載コード

分類	コード	分類	コード
縄文土器	JM	元地 2 式の模倣・折衷系	MC2'
続縄文土器	ZJ	ポスト元地式	PMC
鈴谷式（広義）	SY	擬縄貼付文土器	GJ
十和田式（広義）	TD	ソーマン文土器	SM
刻文土器 A	KA	擦文 I ~ IV	ST ^(1~4)
刻文土器 A の模倣・折衷系	KA'	「擦文前期土器」	SZ
刻文・沈線文土器	KC	(変容土師器) / 土師器	HJ
刻文・沈線文土器の模倣・折衷・変容系	KC'	不詳の口縁部（無文を含む）	FK
元地 1 式	MC ₁	不詳の胴部（無文を含む）	FD
元地 2 式	MC ₂	不詳の底部（無文を含む）	FT

表 34 亦稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (1)

番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
701	I41	SM3		口頸部片。頸部に幅広く、直線+波線+直線+2本の波線、さらに3本の線やかな波状貼付文を施す。螺旋手法の可能性あり。貼付文は蒲鉾または平坦。	○	第23図25 (資料未見)
702	I41	SM1?	14.6	口頸部片。器厚7~8ミリ、暗褐/黄褐色を呈する。口頸部に幅広くネット状のソーメン文を施す。貼付文は平坦。	○	第23図26
703	I41	GJ	19.4	口縁~胴上半片。器厚8~11ミリ、黄褐色を呈する。捻り波状と直線状の擬細貼付文を口頸部に幅広く施し、その内部に浅い沈線で平行線を描き、枕木状に短沈線を加える。このモチーフは不鮮明であるが、擬細貼付文土器における古い要素の併用を示しており、興味深い。先祖返りの一例といえる。	○	第22図24
704	I41	PMC		胴部片。器厚10~12ミリ、赤褐色を呈し、凹凸や歪みを伴う。焼成良好な重い個体。表裏ともにタテナデ。	×	
705	I41	PMC		胴部片。器厚8~13ミリ、赤褐/黄褐色を呈する。表裏とも、指押しによる凹凸があり、歪みを伴う。表裏ともヨコナデ。板作り手法。	×	
706	I41	PMC/MC2'		無文の胴部片。器厚は7~10ミリ。黒褐色を呈する、やや重い個体。ヨコナデ。	×	
707	I41	PMC/KC?		口縁付近から頸部の破片。器厚7~10ミリ、黒/黒褐色を呈する。重い個体で凹凸、歪みを伴う。肥厚口縁端にごく浅い沈線を引く。	×	
708	I41	PMC		肩部の破片。器厚9~14ミリ、暗赤褐/黒褐色を呈する。表裏とも指押しによる凹凸、歪みを伴う。表はタテナデ、裏はヨコナデ。重い個体。	×	第22図10例と大きさ、調整、焼成が酷似しており、同一個体と考えられる。
709	I41	PMC/MC2'		胴部片。器厚8~9ミリ。表裏に小凹凸、ヨコナデ。やや重い個体。	×	
710	I41	KC		胴部片。器厚6~8ミリ。浅い沈線を2本引き、その下に粗雑な刻み目を持つ貼付文を施す。	×	
711	I41	KC/MC2'	(12.8)	3/5 残存。I41 (2点) と I42 (4点) が接合。口唇部に1個の小ボッチが残存。これは744例に共通する。口頸部を無文扱いとし、肩部には大きなボッチを施し、その間を沈線で連繋する。	○	第22図6
712	I41	KC		坏片か? 器厚6~7ミリ、皿状の器形をなすと推定される。胎土は砂粒が多く、赤褐/黒褐色を呈する。上端には鋭い沈線が施される。	×	
713	I41	KC		口縁下端~胴部片。器厚4~8ミリの薄手で、頸部に米粒状の刻文を施す。	×	
714	I41	KC'		挿れ部片。器厚5~8ミリ、赤褐色を呈する。3本の太沈線の上下に円形刺突文を施す。刻文・沈線土器の規範からは外れた個体。板作り手法を用いる。	×	
715	I41	KC		胴部片。器厚6~8ミリ、平行沈線に刻文を施す。	×	
716	I41	KA	27.8	口縁部片。器厚6~10ミリ、赤褐色を呈する。捻り入りの爪形文を施し、その上に円形刺突文を加える。裏面は段状に凹面をなす。表裏ともヨコナデ。	○	第23図7
717	I41	KA	22.6	口縁部片。器厚7~10ミリ、赤褐/黄褐色を呈する捻り入り爪形文を施す。口唇部は隅丸平頭をなす。表裏ともヨコナデ。	×	
718	I41	KA	13.4	口縁部片。器厚6~14ミリ、黄褐色を呈する。口唇部は浅い凹面を呈し、口縁下端には、指押しによる刺突文を加える。表はヨコナデ、裏は斜交差するナデ。板作り手法。	×	
719	I41	TD	22.2	口縁部片。器厚4~6ミリ、灰褐/黒色を呈する。口唇部は浅い凹面をなす。内面より突瘤文、口縁下端は稜線をなし、そこに「八」の字状の鋭い刻文を施す。	○	第23図11
720	I41	PMC	7.0 × 7.4	ハツレ痕の著しい完形底部。焼成堅緻で重い個体。裾部分は指押しによる調整。内面は凹凸が目立ち、底面はやや楕円形を呈する。	×	
721	I41	PMC		底部片。器厚18~32ミリ。	×	* (資料未見)
722	I41	PMC?		底部片。器厚14~32ミリ。	×	* (資料未見)
723	I42	MC2	17.2	口縁部~胴部上半片。器厚8~12ミリ、厚手で重い個体。歪み、凹凸が目立つが、焼成良好。微細な砂を多く含み、胎土の素地は擦文的。	×	
724	I42	MC2	20.2	口縁部片。器厚9~15ミリ、黄褐色を呈する。拇指状に肥厚・外反し、口唇は丸頭状。指押しによるごく浅い凹面帯が1条認められる。全体に凹凸と歪みを伴う。	×	
725	I42	MC2	11.6	口縁部~胴部上半片。器厚9~12ミリで重い個体。口頸部に浅い沈線で斜線を描く。赤褐色を呈し、小さな凹凸、歪みを伴う。表裏ともヨコナデ。	×	
726	I42	MC2		胴部片。器厚14~15ミリで重い個体。褐色を呈する。小さい穴が目立ち、荒れた器面をなす。	×	

表 35 亦稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (2)

番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
727	I42	MC2'	21.6	折り返し状の肥厚口縁部片。器厚 8～15 ミリで、板作り手法を用いる。赤褐/黒色を呈し、胎土には大粒の砂を多く含む。口唇の窪みは刻み目文か？	×	
728	I42	MC2'	20.0	折り返し状の貼り付け口縁部片。器厚 10～18 ミリ。指押しによる 3 条の凹面帯を施す。器形は壺形と推定される。砂粒を多く含む、褐/淡黄褐色を呈する。	×	
729	I42	KC'/MC2'	(12.8)	3/5 残存の個体。I41 (2 点) と I42 (4 点) が接合。口唇部に 1 個の小ポッチが残存する。744 例に共通する。口頸部を無文扱いとし、肩部にも大きなポッチを施し、その間を沈線で連繋する。	○	第 22 図 6
730	I42	MC2'		胴部片。器厚 9～11 ミリで重い個体。やや大きな円形ポッチを施す。表裏ともヨコナデ。	×	*
731	I42	MC2'		胴部片。器厚 12～13 ミリの重い個体。細く鋭い沈線で波状文を描く。	×	*
732	I42	KC'/MC2'		胴部片。器厚 9～11 ミリで重い個体。表はタテナデ、歪み大、赤褐色を呈し、焼成良好。裏は凹凸・歪みなく、ヨコナデ。	×	
733	I42	MC2'		胴部片。器厚 10～11 ミリで焼成堅緻。表タテナデ、裏ヨコナデ。暗青灰色を呈する。	×	
734	I42	KC' ?		頸部～胴部片。器厚 4～7 ミリ、黒褐色を呈し、表裏ヨコナデ。	×	
735	I42	KC'		口頸部～胴部片。器厚 4～5 ミリの薄手な作り。括れ部に円形刺突文を二段施し、その間に「菱形文+円形刺突文」を連繋したモチーフを反復して挿入する。砂粒を多く含む、淡黄褐色を呈する。	○	第 23 図 23
736	I42	KC'	17.4	折り返し状の口縁部片。器厚 6～8 ミリ、茶褐色を呈し、焼成堅緻。板作り手法。	×	
737	I42	KC'	19.2	口縁部～口頸部片。器厚 7～9 ミリのやや重い個体。表裏ともヨコナデ、暗褐色を呈する。	×	
738	I42	KC		胴部片。器厚 8～13 ミリで重い個体。上端に明瞭な沈線を引く。赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。	×	
739	I42	KC ?		胴部片。器厚 6～9 ミリ、赤褐色を呈し、表裏とも凹凸あり。	×	
740	I42	KC		胴部片。器厚 8～12 ミリで重い個体。上端に細く浅い平行沈線を引く。赤褐/暗褐色を呈し、小さい凹凸あり。表はタテナデ、裏はヨコナデ。胎土は砂粒を多く含む。	×	
741	I42	KC	24.8	複段口縁を有する部片。器厚 9～15 ミリ、赤褐色を呈する。上段の下端、下段の上下に刻文を施し、さらに平行沈線を加える。その下にも平行沈線を引き、擦文土器から借用したモチーフを間欠的に施すと推定される。焼成堅緻で重い個体。擦文 III の要素を模倣した例であろう。	○	第 23 図 18
742	I42	KC	15.8	口縁部片。器厚 7～11 ミリ。下端に刻文を施し、口頸部にポッチと、それを連繋する沈線を鋸歯状に描く。ポッチの形状は 744 例に酷似。赤褐色を呈する。	○	第 23 図 19
743	I42	KC		口頸部片？ 器厚 7～8 ミリ、暗褐色を呈する。3 条の断続する沈線を引き、ボタン状のポッチを施す。	×	
744	I42	KC'	17.8	口縁部～胴部上半の大破片。器厚 7～13 ミリ。口唇上に小ポッチを施し、口頸部に 15 本の沈線を引く。さらに平行斜線を幅広く描いて 3 本沈線で文様帯を閉じる。第 3 描線には間欠的に凹みを持つポッチが施される。擦文 III を変形・模倣したものと認められる。	○	第 23 図 17
745	I42	KC	16.2	口縁部片。器厚 4～6 ミリで、赤褐/暗褐色を呈する。焼成堅緻で、表裏ともヨコナデ。口唇部に浅い凹面を有する。	○	第 23 図 20
746	I42	KC		胴部片。器厚 7～9 ミリ。黒褐/赤褐色を呈し、表裏とも凹面と歪みを伴う。	×	
747	I42	KC	(4.8)	小型の壺形土器。口縁直下に 2 個一単位の刻文を横位に施す。胴部には 2 本の平行沈線を引き、大きなポッチを 2 個、その間に刻み入りの棒状貼付線を挿入する。これは男性シンボルを意識した装飾であろう。	○	第 18 図 1 (資料未見)
748	I42	KC		壺形土器の肩部片と推定される。器厚 3～5 ミリ、黒色を呈し、表裏ともヨコナデ。	×	
749	I42	KC		胴部片。器厚 5～7 ミリ。3 本の平行沈線を 3 本引き、その間に円形刺突文を施す。表裏ともヨコナデ、暗褐色を呈する。板作り手法。	×	
750	I42	KC	26.2	口縁・口頸部片。器厚 7～9 ミリ。二段の平行沈線の間に横位の刻文を施す。黒/黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。	○	第 23 図 13
751	I42	KC	11.4	口縁部片。器厚 6～7 ミリで焼成堅緻、重い個体である。口頸部に 2 本の沈線を引き、下の沈線に掛かるように鋭い刻文を斜めに施す。板作り手法。	×	
752	I42	KC	12.0	口頸部片。器厚 5～7 ミリ。口唇部は浅い凹面をなし、口端に大粒の刻文を加え、頸部に 2 本の沈線を引く。表裏ともヨコナデ、ミガキ。	○	第 23 図 14

表 36 亦稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (3)

番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
753	I42	ST		胴部の剝脱片。擦文土器を模倣したものの。灰赤褐色を呈する。器面は平滑、ヨコナデ。鋸歯状に刻線を施す。	×	
754	I42	KA'		壺形土器の拵れ部片。器厚 7 ~ 10 ミリ。別に収納されていた 2 片が接合。やや太い 4 条の横走沈線文に斜格子文を加えて文様帯を幅広く構成する (「横走沈線文→右斜線→左斜線」、擦文 II 系)。さらに第 1・2 線にかけて、縦型のポッチ (刻文土器 A 系) を間欠的に施す。キメラ (折衷) 土器の一例と認められる。胎土・焼成はオホーツク式系。	×	
755	I42	KA	24.2	口縁部片。器厚 5 ~ 10 ミリ。下端に大粒の爪形文を施す。茶褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。	×	
756	I42	KA'	17.8	口縁~頸部片。器厚 6 ~ 10 ミリ。下端に斜位の刻文、頸部には断続する 3 本の浅い横走沈線文を施す。刻文土器 A と擦文 II の要素を折衷したもの。頸部は凹面が左右に連なり、歪みが大。黒褐色を呈する重い個体。口唇部は小波状をなす。焼成堅緻。	×	
757	I42	KA	17.8	口縁部片。器厚 6 ~ 10 ミリで、口唇部は角頭状をなす。口縁下端に爪形文を施し、その上に円形刺突文を加える。暗褐色を呈し、裏面には小さな凹凸あり。胎土は砂粒を多く含む。	×	
758	I42	KA'	11.8	口縁~頸部片。壺形を呈するものか。器厚 4 ~ 7 ミリで薄手の作り。焼成良好で重い個体。暗褐 / 黒褐色を呈する。仕上がりの良い小型土器。	×	
759	I42	KA ?		口頸部片。肥厚口縁? 端に斜位の刻文を施す。	×	
760	I42	SY	18.2	口縁部片。口唇~頸部縄線文と貫通孔を施す。	×	
761	I42	SY	12.6	口縁部片。口唇~頸部縄線文と貫通孔を施す。	×	
762	I42	MC2	(5.6)	底部付近の破片。内側は丸底面をなし、条線状の整形痕を残す。径の小さな底面に向けて窄まる形態。胎土は層状で多孔質。重い個体。	×	
763	I42	MC2' ?	(9.0)	底部片。裾部は粗い工具でタテ調整。底面には凹凸・段差あり。内面には小穴や凹凸が目立つ。	×	
764	I42	MC2' ?	8.9 × 8.7	底部完形品。皿状の内底面をなし、外底面には小穴が目立つ。裾部分には指押しによる凹面状の調整痕が連なる。	×	
765	I42	MC2' ?	(9.7)	底部片。内底面は椀状をなし、外底面は平坦ながら、大小の凹面が目立つ裾部分は軽く外に張り出し、小さな凹凸を有する。	×	
766	I43	MC2		胴部片。器厚 16 ~ 20 ミリ、焼成良好で重い個体。表裏とも赤褐色を呈し、擦痕状の調整痕を残す。	×	
767	I43	KC/MC2'		胴部片・器厚 10 ~ 13 ミリ、赤黄褐色を呈し、表はタテナデ、裏はヨコナデ。胎土は小砂粒を多く含む。	×	
768	I43	KC'	25.6	口縁部片。器厚 4 ~ 7 ミリ、黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。小さな凹凸あり、焼成良好で重い個体。	×	
769	I43	KA		胴部上半片。器厚 6 ~ 7 ミリ、暗褐色を呈する。下端に逆「く」の字状にスタンプ文を施す。	×	
770	I43	KC'	22.9	折り返し状の口縁部片。器厚 6 ~ 10 ミリ、暗赤褐色を呈し、ヨコナデ、胎土に砂粒を多く含む。肥厚した口縁部には、2 本の弱い沈線を引き、下端に指押しの刺突を施す。	×	
771	I43	KC	19.6	口頸部片。器厚 5 ~ 7 ミリ、暗灰 / 褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。口唇部は平角状をなし、その直下にやや太い沈線を 2 本引き、レリーフ状の平坦線を作成する。	○	第 24 図 27 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。 822 に近似した個体。
772	I43	KC	21.0	口縁部片。器厚 5 ~ 7 ミリ、黒褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。口唇部は平角状をなし、口縁部下の凹面帯に爪形文を 2 段に施す。黒色を呈し、表はヨコナデ・ミガキ、裏はヨコナデ。焼成堅緻、胎土に輝粒子を含む。沈線に沿って刻文を施す。	○	第 24 図 25
773	I43	KC	20.2	口頸部片。器厚 6 ~ 8 ミリ、黒 / 暗褐色を呈し、焼成良好、胎土には砂粒を多く含む。表裏ともヨコナデ。口唇部は隅丸平頭状、口頸部に 2 本の沈線と横位の刻文を施す。	○	第 24 図 27
774	I43	KC	21.8	口縁部片。器厚 4 ~ 6 ミリ、赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。胎土は擦文的である。焼成堅緻。口唇部は凹面をなし、大粒の刻文と平行沈線を施す。	○	第 24 図 24
775	I43	KC	22.8	口縁~口頸部片。器厚 5 ~ 7 ミリ、黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。胎土は砂粒を多く含む、焼成堅緻。口端は斜傾し、口頸部に浅い沈線を 2 条施す。	○	第 24 図 26
776	I43	KC	20.0	口縁~頸部片。器厚 4 ~ 8 ミリ、黄褐色を呈し、ヨコナデ。微細な砂を多く含む、焼成堅緻。口唇部は角頭状、口頸部に 3 本の平行沈線を引く。内側に三角状の大粒な刻文を施す。	○	第 24 図 20
777	I43	KC		胴部片。器厚 6 ~ 8 ミリ、青灰色を呈する。裏面には段状の凹面帯。2 本の沈線に沿って刻文を施す。	○	第 24 図 23

表 37 亦稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (4)

番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
778	143	KC	14.8	口縁部片。器厚 6～7 ミリ、黄褐 / 黒褐色を呈する。口唇部は平角状をなし、沈線と横位の刻文を施す。	×	
779	143	KC	11.6	口頸部片。器厚 3.5～5 ミリ、褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。指押しによる凹線をほさみ、口端部と口頸部に横位の刻文を施す。	×	「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
780	143	KC		胴部片。器厚 6～8 ミリ、赤褐色を呈し、裏面はタテナデされ、凹凸・歪みあり。沈線と刻文を施す。	×	
781	143	KC	24.4	口頸部片。器厚 6～8 ミリ、暗褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。斜傾した口端部下に摩擦式浮文を施す。	×	
782	143	KC		頸部片? 器厚 7～8 ミリ、暗 / 黒褐色を呈する。表裏ともヨコナデ、摩擦式浮文を施す。	×	
783	143	KC	28.6	口縁～頸部片。器厚 5～7 ミリ、赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。焼成堅緻、胎土は擦文的、輝く粒子を含む。口唇部は尖頭状をなし、ペン先状に傾斜する。端部に横位の指押し刺突を加え、その下に摩擦式浮文を施す。胎土は擦文的。	○	第 24 図 11
784	143	KC'	10.8	口頸部～胴部上半片。器厚 4～6 ミリ、黒 / 黒褐色を呈し、ヨコナデされ、焼成良好。口頸部に 4 本の横走沈線文を施し、以下を無文扱い。擦文Ⅲの横走沈線文を模倣・借用したものであろう。	○	第 22 図 8 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
785	143	ZJ/SY?	13.8	口縁部片。器厚 5～6 ミリ、暗褐色を呈し、ヨコナデ、擦痕を残す。表裏とも歪みあり。口唇部は隅丸平頭状、口縁部下端に 2 条の細線文を施す。	×	
786	143	KC		口縁部片。器厚 5～6 ミリ、口端部直下にごく低い段差がある。下端にやや太い沈線を施す。胎土は砂粒を多く含み、焼成不良。	×	
787	143	KC	19.2	口縁～頸部片。壺形の器形で強く外反。器厚 5～6 ミリ、黒 / 黒褐色を呈し、ヨコナデ・ミガキ、光沢を帯びる。口縁部には棒状のスタンプ文を施す。頸部にへら状工具によるミガキを加える。	○	第 24 図 17 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
788	143	KC	21.4	口頸部片。器厚 4～7 ミリ、赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ、胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。口唇部に凹線と刻文、弧頸部にはレリーフ状の稜線を削り出し、それに沿って横位の刻文を施す。	×	
789	143	KC	16.4	口縁～口頸部片。器厚 9～10 ミリ、赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。胎土には砂粒を多く含み、焼成不良。口端下に 3 段の爪形文を施す。	×	「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
790	143	KA/KC	14.0	口縁部片。器厚 5～7 ミリ、黒褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。口唇部は平角状をなし、口縁部下の凹面帯に爪形文を 2 段に施す。	×	
791	143	KA		剥脱した口頸部片。肥厚口縁の稜線部分に斜位の刻文を施す。灰白色を呈する。	×	「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
792	143	KA	8.8	口縁～頸部片。器厚 3～7 ミリ、赤褐 / 黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ・ミガキ。口唇部は隅丸平頭をなし、肥厚した稜線に大粒の刻文を斜めに施す。	○	第 24 図 7 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
793	143	KA	21.8	口縁～頸部片。器厚 4～6 ミリ、黒 / 褐色を呈し、ヨコナデ、裏面には小さな凹凸が目立つ。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。口縁の上下に斜位の刻文を施し、頸部に円形の刺突文を加える。	○	第 24 図 3 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
794	143	KA	20.4	口縁部片。器厚 6～9 ミリ、黒色を呈し、表裏ともヨコナデ、焼成良好な重い個体。口縁下端は貼付により稜線状に膨らむ。そこに指押し文を施し、その上に横位の刻文を加える。板作り手法。	×	
795	143	KA	18.0	口縁～頸部片。器厚 7～8 ミリ、暗褐 / 赤褐色を呈する。口唇部は丸頭状、肥厚した口縁端に大きな刻文を施す。焼成良好、硬質。	×	
796	143	KA		口縁～頸部片。器厚 4～8 ミリ、黒褐 / 茶褐色を呈する。表裏ともヨコナデ、歪み大。肥厚した口縁端に斜位の刻文を施す。	×	
797	143	KA	13.4	口縁～頸部片。器厚 3～6 ミリ、黒色を呈し、光沢を帯びたミガキが施される。若干の歪みあり、焼成良好。肥厚した口縁部に大小の円形刺突文を施す。	×	「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
798	143	KA		口縁部片。器厚 4～7 ミリ。口唇部は小波状をなし、口唇部は浅い凹面をなす。歪み大、口縁の下端に刻文らしき痕跡が見える。	×	
799	143	KA		口縁下端～頸部片。口縁は肥厚すると推定される。	×	
800	143	KA		口縁部下端片。横位の指押し文を施す。	×	
801	143	KA		口縁部付近か。斜位の刻文を施す。	×	
802	143	KA		胴部小片。三角状の小さな刻文を施す。	×	
803	143	KA		胴部小片。櫛歯状のスタンプ文を施す。	○	第 24 図 18 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
804	143	KA		胴部小片。矢羽状に刻文を施す。	×	
805	143	KA		胴部小片。斜めに櫛歯状のスタンプ文を施す。	×	

表 38 赤稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (5)

番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
806	I43	KA		胴部片。804 例と同一個体か。上下逆転の可能性あり。	○	第 24 図 30 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
807	I43	KA' ?		拵れ部～胴上半片。器厚 5～7 ミリ、暗黄褐 / 黒褐色を呈する。「X」字状のモチーフに横位の刻文を加える。十和田式の要素を借用した折衷的な土器と思われる。	○	第 24 図 14 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
808	I43	KA ?		壺形土器片か。器厚 7～8 ミリ、黄褐 / 青灰色を呈し、小凹凸・歪みあり。肩部に十和田式に由来する要素を施文する。	○	第 24 図 13 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
809	I43	FD		胴部下半片。器厚 8～10 ミリ。やや不規則に二段の円形刺突文を施す。器面に荒れあり、淡黄褐色を呈する。広義の十和田式に含まれるものか。淡黄褐色を呈する。重い個体。	○	第 24 図 28 「I 区 オホーツク 黒色砂層」袋より抽出。
810	I43	TD ?		口頸部片? 稜線が脱落していると推定され、その直下に刻文が見える。	×	
811	I43	ZJ		胴部片。縄文を施文。	×	
812	I43	ZJ		胴部片。縄文を施文。	×	
813	I43	JM		胴部片。縄文を施文。	×	
814	I43	JM		胴部片。縄文を施文。	×	
815	I43	ZJ	16.8	口縁部片。口端に刻文、口頸部には沈線で工字文風のモチーフを描く。	×	
816	I43	FT		底部小片。内底面は皿状を呈すると推定される。	×	
817	I43	FT	(13.4)	僅かに側面を残す底部片。内面は平坦で緩やかに立ち上がる。外底面は中央が浅い凹面をなす。赤褐色を呈し、裾部には横位の条線状の整形痕を残す。	×	
818	I43	ZJ	(10.2)	底部付近片。縄文を施す。底面には原体圧痕が見られる。	×	
819	I43	ZJ	(9.6)	底部片。裾面・底面に縄文を施文。	×	
820	I44	MC2 ?		胴部大片。器厚 9～14 ミリ、赤褐 / 淡黄褐色を呈し、重い個体。表は指押しによる帯状の整形痕を残す。裏はヨコケズリされ、多数の小穴を残す。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好。	×	I23 (4/27) と I25 (4/27) が接合したもの。茶褐色土層 (I44) に帰属する。
821	I44	KC		拵れ部～胴上半片。器厚 6～9 ミリ、淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。拵れ部には指押しによる凹線がめぐる。その下にボタン状のボッチを施す。	×	
822	I44	KC	20.8	口縁～頸部片。器厚 4～8 ミリ。口端下に 2 本の沈線を引き、拵れ部に直線の貼付文? を施す。レリーフ状の装飾といえる。口唇部は平角状をなす。暗褐色を呈し、ヨコナデ。	×	
823	I44	KC	24.0	口縁～頸部片。器厚 5～7 ミリ。口唇部は隅丸平頭をなし、口端に大粒の刻文、2 本の沈線を施す。赤褐色を呈し、焼成堅緻、表裏ともヨコナデ・ミガキ。	×	752 例、第 33 図 12 例と類似する。
824	I44	KC		胴部片。器厚 4～6 ミリ、赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。	○	左側：第 33 図 14 右側：未掲載
825	I44	KC	24.2	口縁部片。器厚 6～7 ミリ、茶 / 黒褐色を呈し、ヨコナデ。大粒の刻文を三段に施す。板作り手法。	○	第 33 図 11
826	I44	KC	9.0	口縁～頸部片。器厚 4～7 ミリ、暗褐 / 黄褐色を呈し、表はヨコナデ、裏はヨコナデ・ミガキ。胎土に砂粒少なく、焼成堅緻。板作り手法。	×	
827	I44	KA ?	8.4	口縁～胴上半片。器厚 4～6 ミリ、黒色を呈し、表裏ともヨコナデ、擦痕を残す。焼成堅緻。	×	
828	I44	KA	17.0	口縁～頸部片。器厚 6～8 ミリ、赤褐色を呈し、ヘラ状工具により丁寧なミガキ、焼成堅緻な優品。口唇部は隅丸角頭状。	○	第 33 図 2
829	I44	KA	16.2	口縁～頸部片。器厚 5～7 ミリ、赤褐 / 黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。板作り手法。	○	第 33 図 6
830	I44	KA	(26.8)	口縁～頸部片。口唇は丸頭状をなし、斜めの刻文を二段に施す。	×	* (資料未見)
831	I44	KA		口縁～頸部片。口唇が丸頭状をなす。斜めの刻文を二段施す。	○	第 33 図 5 (資料未見)
832	I44	KA		拵れ部～胴上半片。肩部に斜めの刻文を二段に施す。	○	第 33 図 19 (資料未見) I42 と I35 の接合資料
833	I44	KA	21.2	口縁～頸部片。器厚 7～12 ミリ、赤褐 / 黒褐色を呈し、表裏ともヘラ状工具でヨコミガキ。板作り手法の重い個体。	○	第 33 図 8
834	I44	KA	14.2	口縁～頸部片。器厚 5～6 ミリ、暗褐 / 褐色を呈し、ヨコナデ、胎土は砂粒を多く含む。口唇部は隅丸平頭 / 丸頭状をなす。口縁下端にやや太い刻文を斜めに施す。	○	第 33 図 4
835	I44	KA	21.4	口縁～頸部片。器厚 4～8 ミリ、軽く肥厚し、口唇部は角頭状をなす。淡黄褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。焼成良好。	○	第 33 図 3

表 39 亦稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (6)

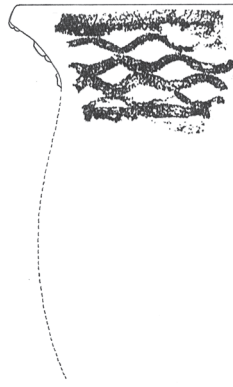
番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
836	I44	KA		頸部～胴上半片。器厚6～9ミリ、黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。胴上半に楕状の工具で二単位の条線文を引き、同じ工具によるスタンプ文を施す。	○	第33図18 I44の5点が接合、D28に同一個体
837	I44	KA		頸部～胴上半片。器厚6～7ミリ、黒褐/茶褐色を呈し、表はヨコミガキ、裏はヨコナデ、焼成堅緻、若干の凹凸・歪みあり。	○	第33図17
838	I44	TD		胴上半片。器厚6～8ミリ、黒色を呈し、胎土は砂粒に富む。平行沈線に鋭い斜位の刻文、「八」字状の刻文を施す。	×	
839	I44	TD	13.8	口縁～胴上半片。器厚5～8ミリ、赤褐/黄褐色を呈し、歪み大の重い個体。外側から突瘤文を施す。胎土は砂粒に富む。	×	
840	I44	JM	21.8	口頸部片。器厚6～7ミリ、暗茶褐色を呈し、表は斜めナデ、裏はヨコナデ。口唇部に凹線と刻み目文、直下にやや太い平行沈線を引き、2個一単位の円形刺突文を加える。	×	
841	I44	ZJ		胴部片。縄文を施す。	×	
842	I44	ZJ		胴部片。縄文を施す。	×	
843	I44	ZJ		胴部片。縄文を施す。	×	
844	I44	ZJ		胴部片。縄文を施す。	×	
845	I44	MC2	7.0 × 7.7	底部完形品。やや楕円形をなす。内底面は皿状、外底面には浅い凹凸。きわめて重く、分厚い個体。小穴が目立ち、裾部にはタテの面取り痕。	○?	第22図15?
846	I44	MC/KC'	9.8 × 10.3	底部完形品。やや楕円形を呈する。内底面は「く」字状に立ち上がり、外底面は平坦。大小の凹凸あり。側面にはタテの明瞭な面取り痕。裾部は外側に軽く張り出す。	×	
847	Iカクラン	MC2		口縁～胴上半片。肥厚した口縁部下に幅狭い凹線状の頸部を作り出す。胴部は球形状に窄まる。器厚4～9ミリで黒褐色を呈する。口縁部は表裏とも歪み大。重い個体。	×	
848	Iカクラン	PMC/MC2'		口縁～胴上半片。器厚7～8ミリで重い個体。黒/黒褐色を呈し、凹凸・歪みを伴う。頸部に指押しによる凹みが面状に連なる。口唇部は丸頭状をなし、凸凹している。	×	
849	Iカクラン	PMC/MC2'		口縁部片。器厚10～12ミリ、ずんぐりした重い個体。口唇部は丸頭状で、口頸部の歪み大。暗褐/赤褐色を呈する。	×	
850	Iカクラン	PMC		胴部片。器厚10～12ミリ、赤褐色を呈し、表裏ともタテナデ。裏面には凹凸あり、四段の輪轆み痕を残す。	×	
851	Iカクラン	PMC2?		口縁部片。器厚8～10ミリで暗褐/赤褐色を呈する。表裏とも凹凸で歪み大。斜め又はヨコナデ、重い個体である。	×	
852	Iカクラン	MC2'		胴部下半片。器厚13～15ミリ。赤褐色を呈し、帯状のタテ整形痕を残す。表は粗いタテナデ、裏はヨコナデ、歪み大。胎土は砂粒を多く含む、焼成不良。重い個体。	×	
853	Iカクラン	MC2'		口縁～口頸部片。器厚8～10ミリ、暗褐/赤褐色を呈し、内面は凹凸・歪みあり。口頸部に幅広い凹線が3帯施され、摩擦式浮文のように見える。表裏ともヨコナデ。板作り手法。	×	
854	Iカクラン	PMC2?		口縁部片。器厚7～9ミリ、灰赤褐色を呈する。板作り手法の個体。口端に棒状工具による圧痕が見られる。表面には2条の浅い段がある。表裏ともヨコナデ。	×	
855	Iカクラン	FD		壺形土器の肩部片か? 器厚8ミリ、黒褐/暗褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。	×	
856	Iカクラン	KC		口縁～口頸部片。やや内側に傾斜する角頭をなす。器厚6～8ミリで赤褐色を呈し、焼成良好。表裏ともヨコナデ。	×	
857	Iカクラン	KC		口縁～口頸部片。器厚5～9ミリ、角頭をなし、黒褐色を呈する。表裏ともヨコナデ、ミガキ。小さな凹凸を有する重い個体。口唇部には、ごく浅い凹面がめぐる。	×	
858	Iカクラン	MC2'		口縁～口頸部片。器厚7～8ミリで、黒褐色を呈し、指押しによる凹面がめぐる。表裏とも凹凸があり、胎土は砂粒を多く含む。口唇部は隅丸平頭を呈する。	×	
859	Iカクラン	KC		口縁部片。器厚7～8ミリ。口唇部は丸頭状で、暗褐色を呈する。裏面はヨコナデ。	×	
860	Iカクラン	KC		口頸部～胴上半片。器厚6～10ミリ、黒褐/暗褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。	×	
861	Iカクラン	KC		胴上半片。877例に類似。器厚7～9ミリ、黒褐/暗褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。3本の平行沈線を引き、間欠的に斜刻線を加える。	×	
862	Iカクラン	KC		口頸部片。器厚8～10ミリで、数条の摩擦式浮文を施す。赤褐/暗褐色を呈する。凹凸・歪みあり。	×	
863	Iカクラン	KC		胴部片。器厚6～8ミリで、赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ。4条の摩擦式浮文を施す。	×	

表 40 赤稚貝塚 (I 区) 出土土器資料一覧 (7)

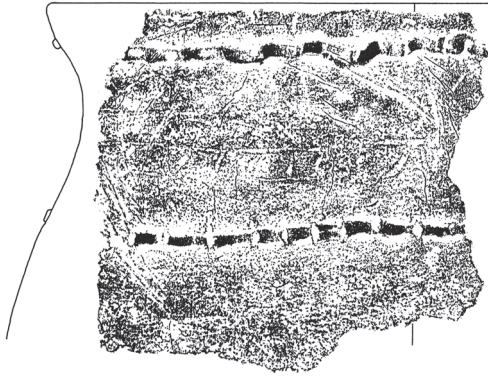
番号	注記番号	分類	口径・底径	観察	掲載	備考
864	Iカクラン	KA		口縁～口頸部片。器厚 6～8 ミリ、暗褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。幅広い口頸部に 3 帯の刻文を施す。	×	
865	Iカクラン	KA		口縁部片。器厚 4～8 ミリ、口唇部は隅丸平頭をなす。幅広い口縁下端に捻りを加えた爪形文を施す。赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ、焼成良好。板作り手法。	×	
866	Iカクラン	KA		口縁部片。器厚 3～5 ミリの薄片。隅丸平頭をなし、赤褐 / 黒褐色を呈し、表裏ともヨコナデ・ミガキ、焼成堅緻。	×	
867	Iカクラン	MC2'?	(6.6)	底部片。内底面は皿状。外底面はごく浅い凹面を呈する。ハツレ痕大。黒褐色を呈し、内面に段差あり。	×	
868	Iカクラン	MC2'?	(10.2)	1/3 残存の底部。内底面は皿状、外底面は凹凸が著しい。赤褐色を呈し、ハツレ痕大。内面は粗い整形痕を残す。	×	
869	Iカクラン	KC		口縁部片。2 条の幅広い凹線文を施す。	×	*
870	Iカクラン	KC		口頸部片。2 条の凹線文の一部に刻点文を加える。	×	*
871	Iカクラン	KC		口縁部片。4 条の沈線文の下端に刻点文を重ねて施す。	×	*
872	Iカクラン	KC'?		括れ部片。やや太く粗い沈線でモチーフを描く。一般的な刻文・沈線文土器の範疇には取まらない資料。	×	*
873	Iカクラン	KC		口縁部付近の破片。3 条の沈線文の上に横位の刻文を施す。	×	*
874	Iカクラン	KC		口縁部片。4 条の沈線文の下端に刻点文を重ねて施す。斜傾した口唇部に刻文を加え、口頸部に 2 本の沈線文を施す。	×	*
875	Iカクラン	KC		括れ部～胴部上半の破片。2 条の沈線文に横位の刻文を間欠的に加える。	×	*
876	Iカクラン	KC		斜傾口縁部片。	×	*
877	Iカクラン	KC		胴部片。3 条の沈線文に 3 本の短刻線を間欠的に加える。	×	*
878	Iカクラン	KC		胴部片。3 条の沈線文に 3 本の短刻線を間欠的に加える。4 条の沈線文を施す。	×	*
879	Iカクラン	KC		幅広く指押文と刻文を二段に施し、その下に浅い摩擦式浮文を加える。	×	*
880	Iカクラン	KA		拇指状に肥厚する口縁部片。稜線上に細かい刻文を二段に施す。	×	*
881	Iカクラン	KA		口縁部片。口唇端と二段の稜線上に鋭い刻文を施す。	×	*
882	Iカクラン	KA		幅広くやや内傾する口縁部片。上端には刻文、下端には捻り爪形文を施す。	×	*
883	Iカクラン	KA		括れ～胴部上半片。四段の櫛歯状のスタンプ文を施す。	×	*
884	Iカクラン	KA		軽く肥厚する口縁部片。下端に明瞭な刻文を施す。	×	*
885	Iカクラン	KA		小波状の口縁部片。軽く捻りを加えた爪跡を施す。	×	*
886	Iカクラン	KA		胴部片。1 条の刻文を横位に施す。	×	*
887	Iカクラン	KA		口頸部～胴部片。二段の横位刻文の間に櫛歯状のスタンプ文を充填する。	×	*
888	Iカクラン	ZJ		口縁部片。棒状工具による太い沈線文。	×	*
889	Iカクラン	ZJ		口縁部片。棒状工具による太い沈線文。	×	*
890	Iカクラン	ZJ		胴部片。縄文施文。	×	*
891	Iカクラン	JM		胴部片。縄文施文。	×	*
892	Iカクラン	JM?		胴部片。縄文施文。	×	*
893	Iカクラン	ZJ		底部片。縄文施文	×	*
894	Iカクラン	ZJ		胴部片。縄文施文。	×	*
895	Iカクラン	ZJ		底部片。縄文施文	×	*
896	Iカクラン	ZJ		胴部片。縄文施文。	×	*
897	Iカクラン	ZJ		底部片。縄文施文	×	*



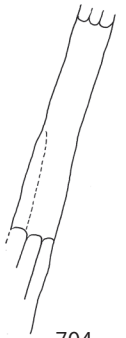
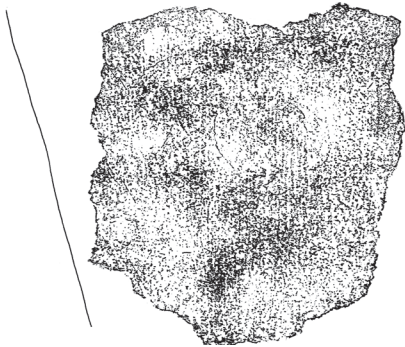
701



702



703



704

图96 I区 I41 (「黑色土」) 出土土器 (1) (S=1/2)

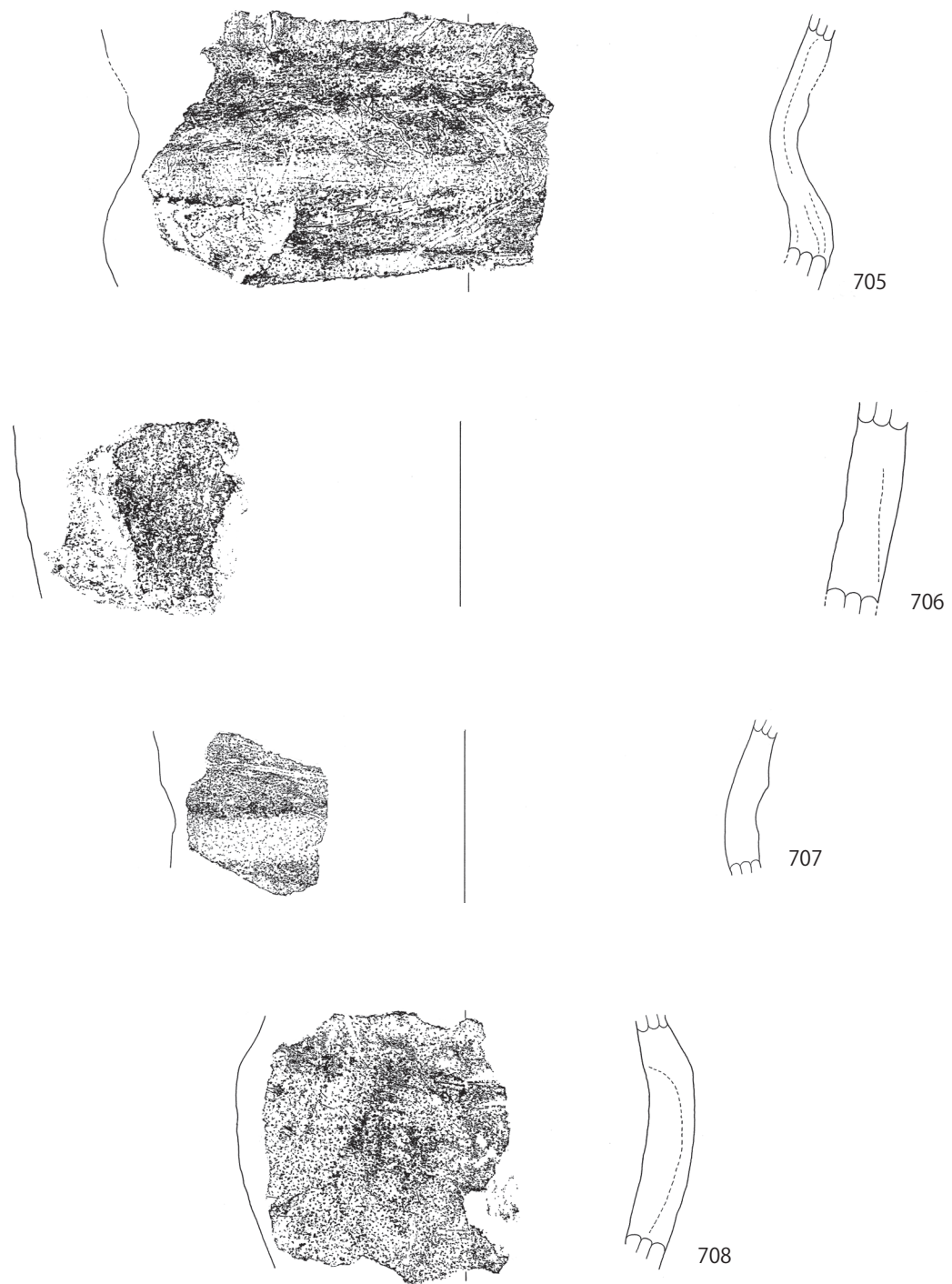


图97 I区 I41 (「黑色土」) 出土土器 (2) (S=1/2)

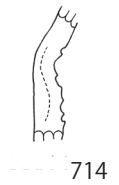
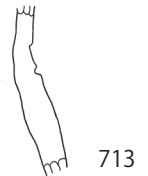
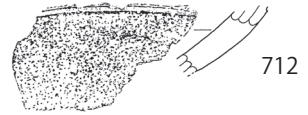
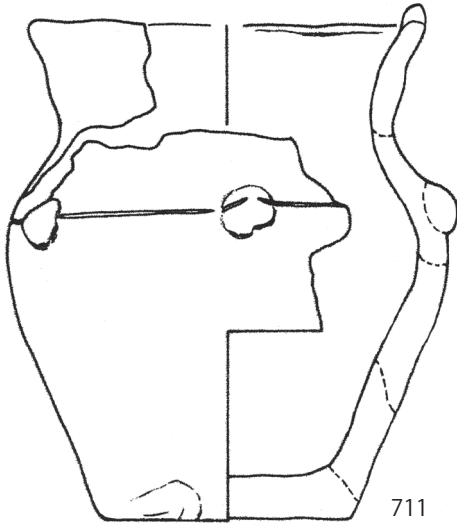
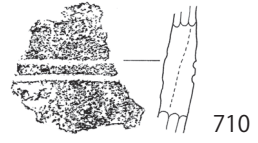


图98 I区 I41 (「黑色土」) 出土土器 (3) (S=1/2)

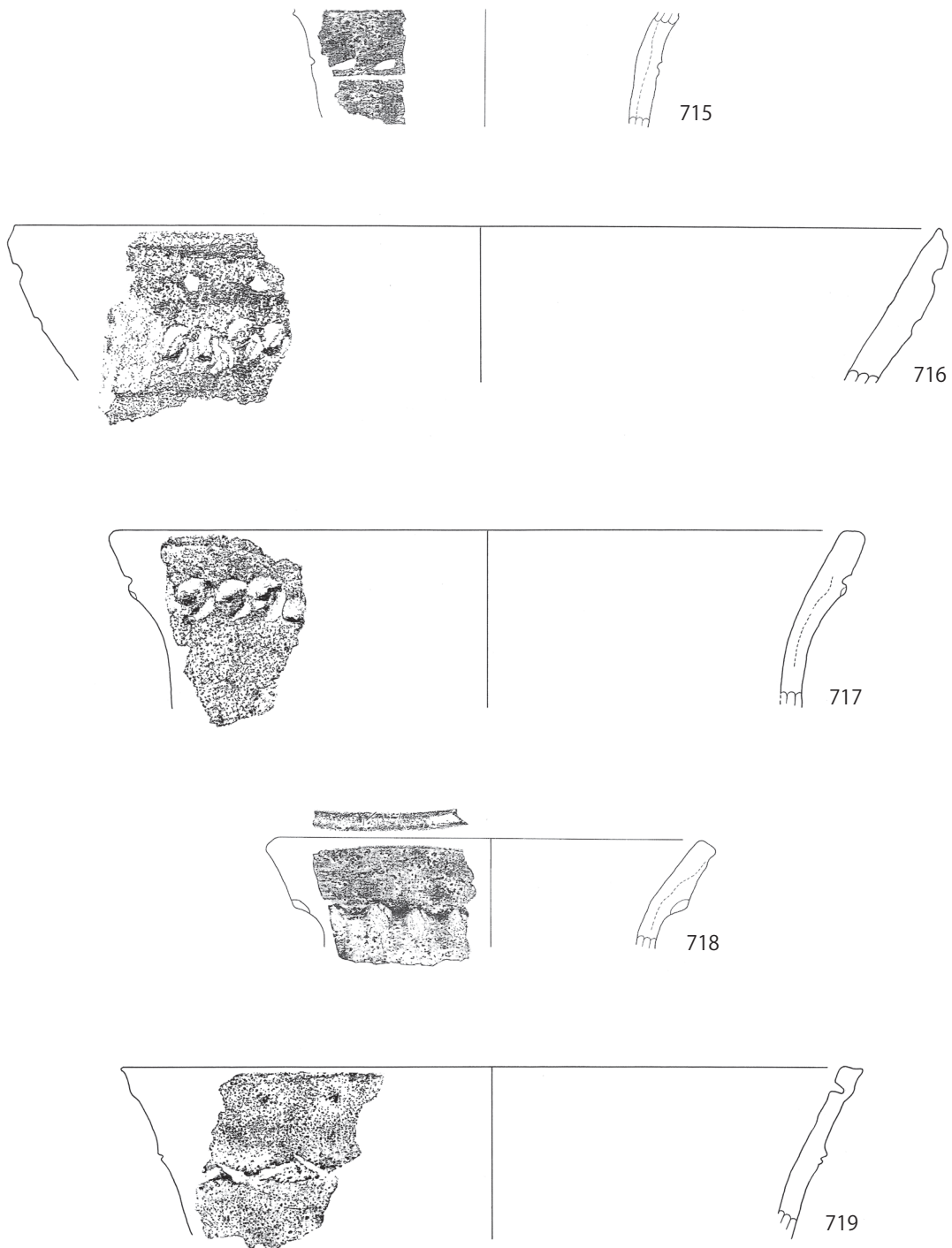


图99 I区 I41 (「黑色土」) 出土土器 (4) (S=1/2)

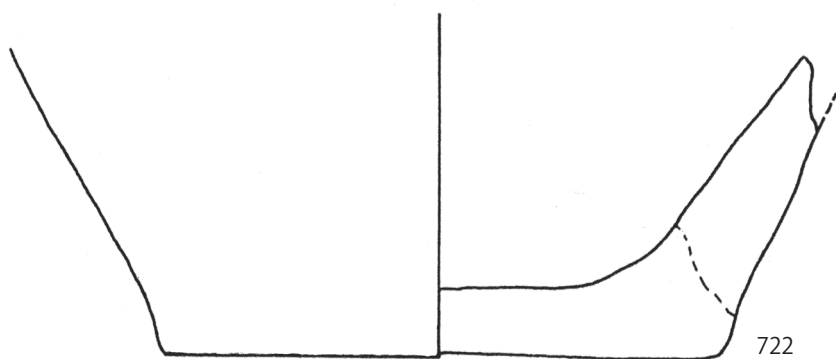
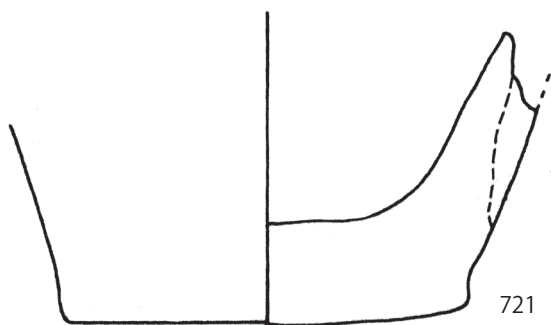
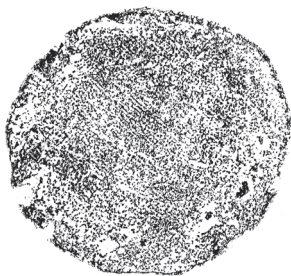


图 100 I区 I41 (「黑色土」) 出土土器 (5) (S=1/2)

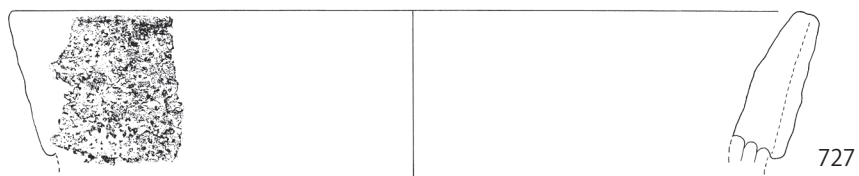
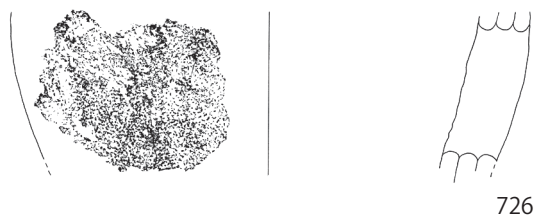
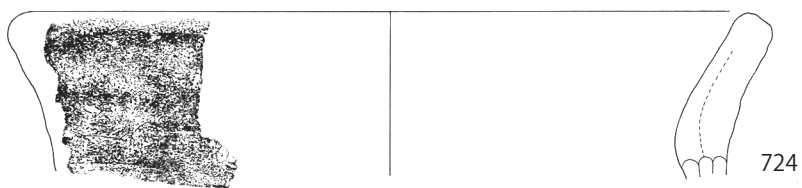
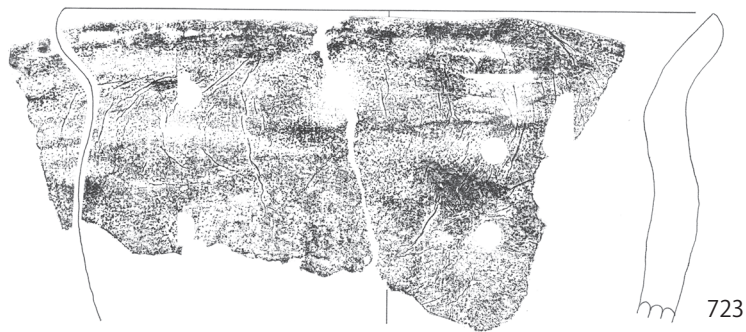
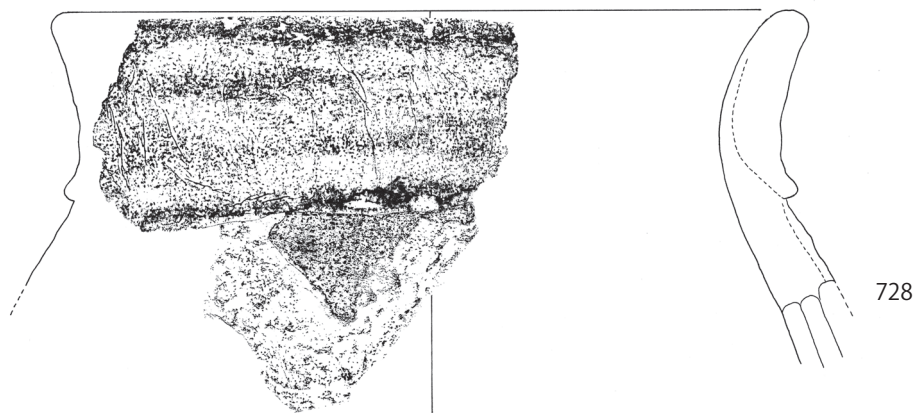
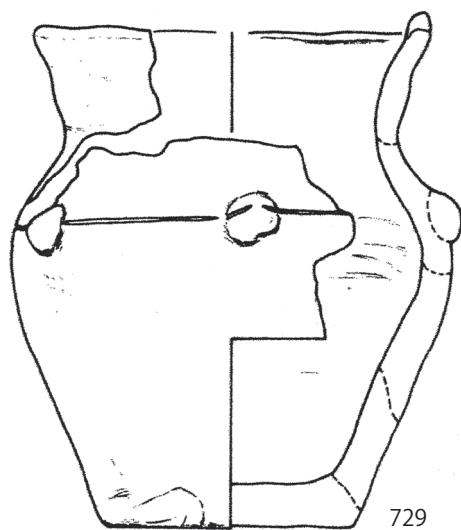


图 101 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (1) (S=1/2)



728



729



730



731

图 102 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (2) (S=1/2)

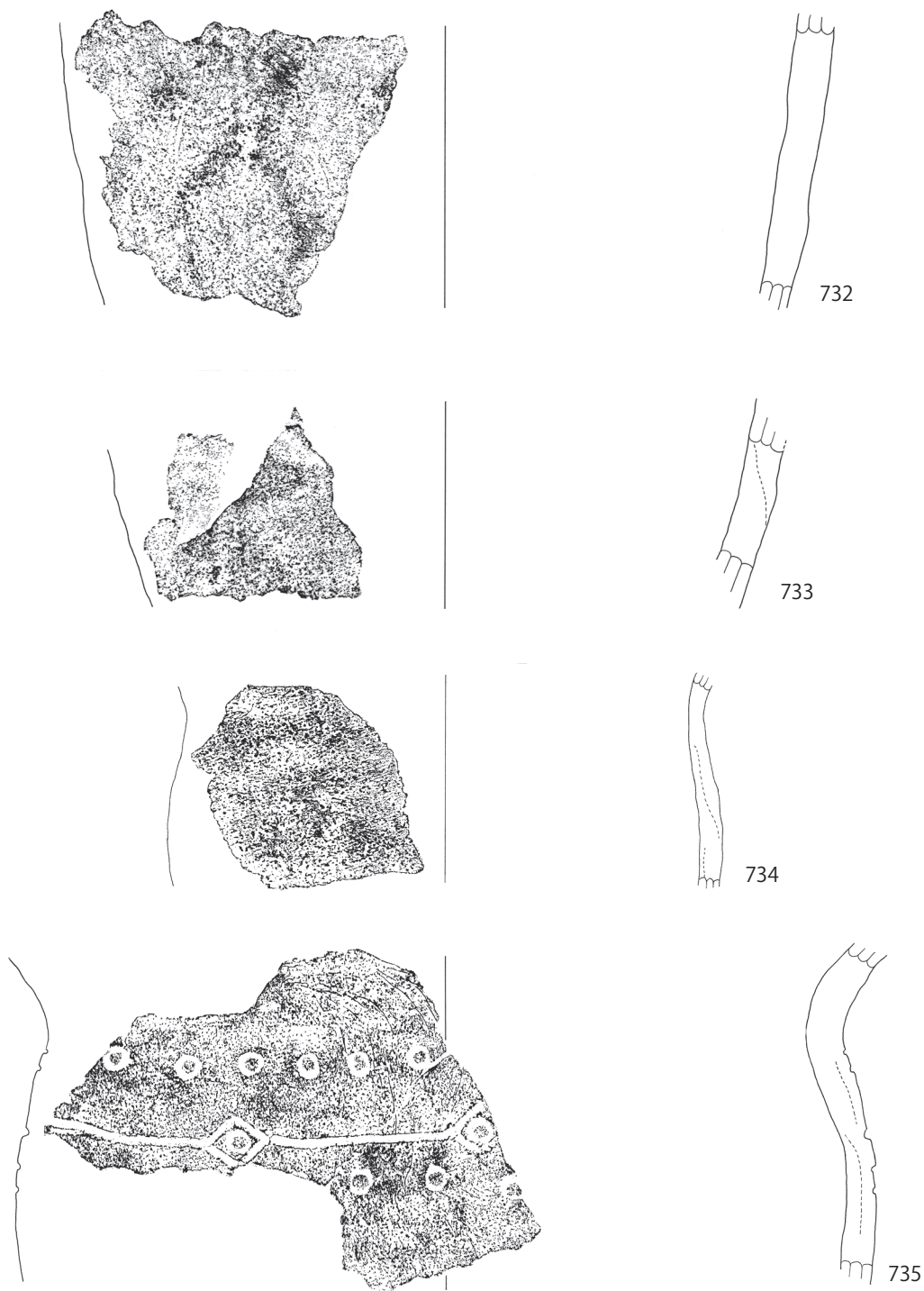


图 103 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (3) (S=1/2)

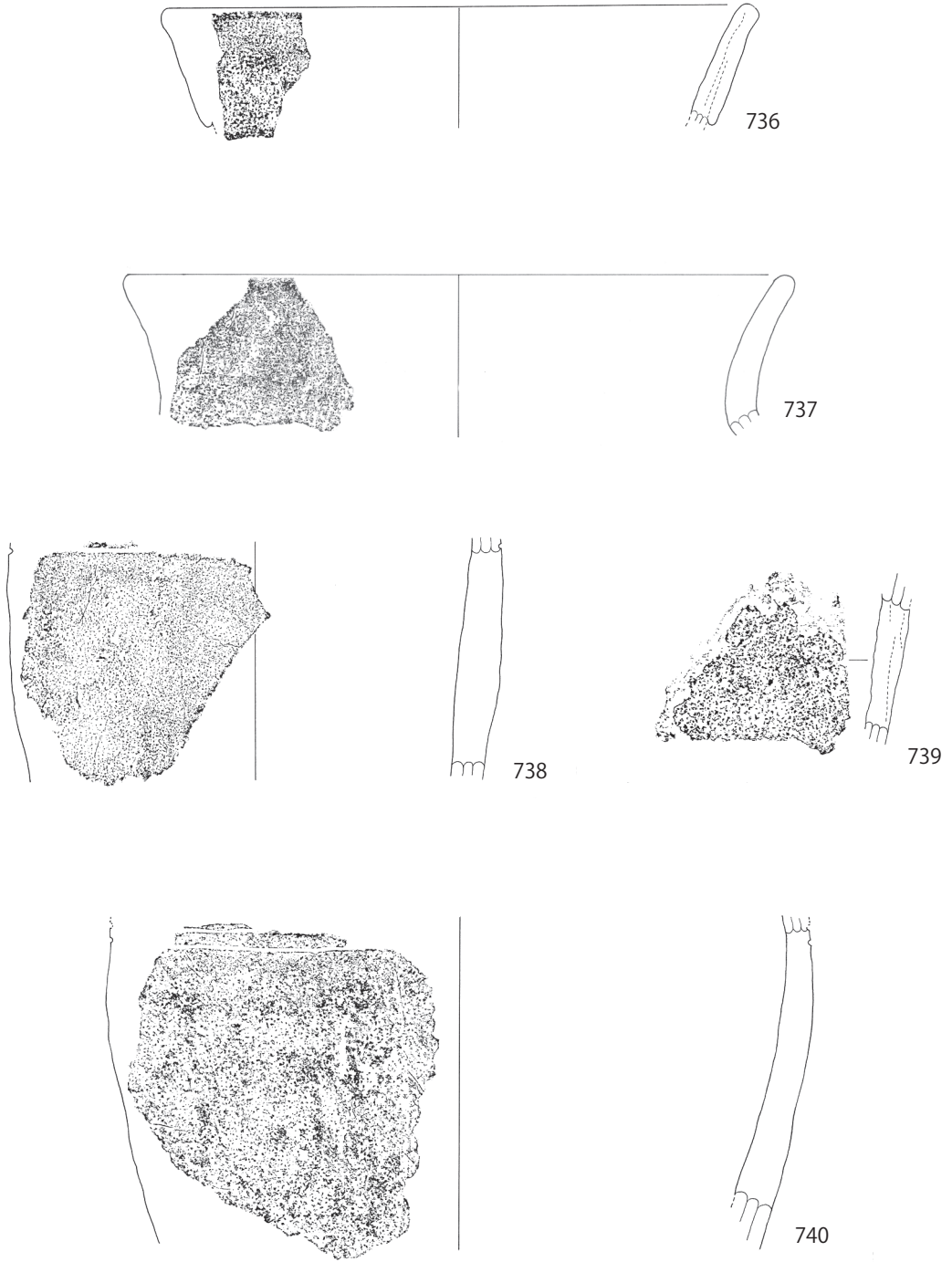
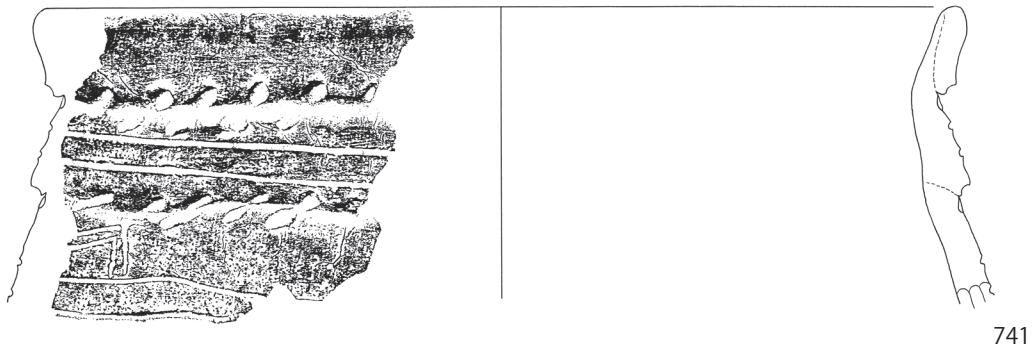
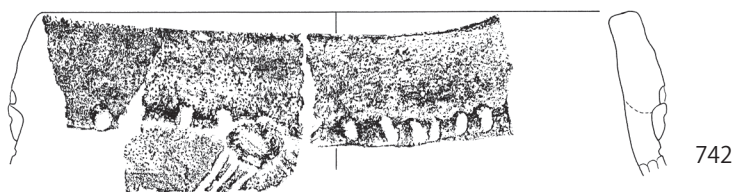


图 104 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (4) (S=1/2)



741



742



743



744

图 105 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (5) (S=1/2)

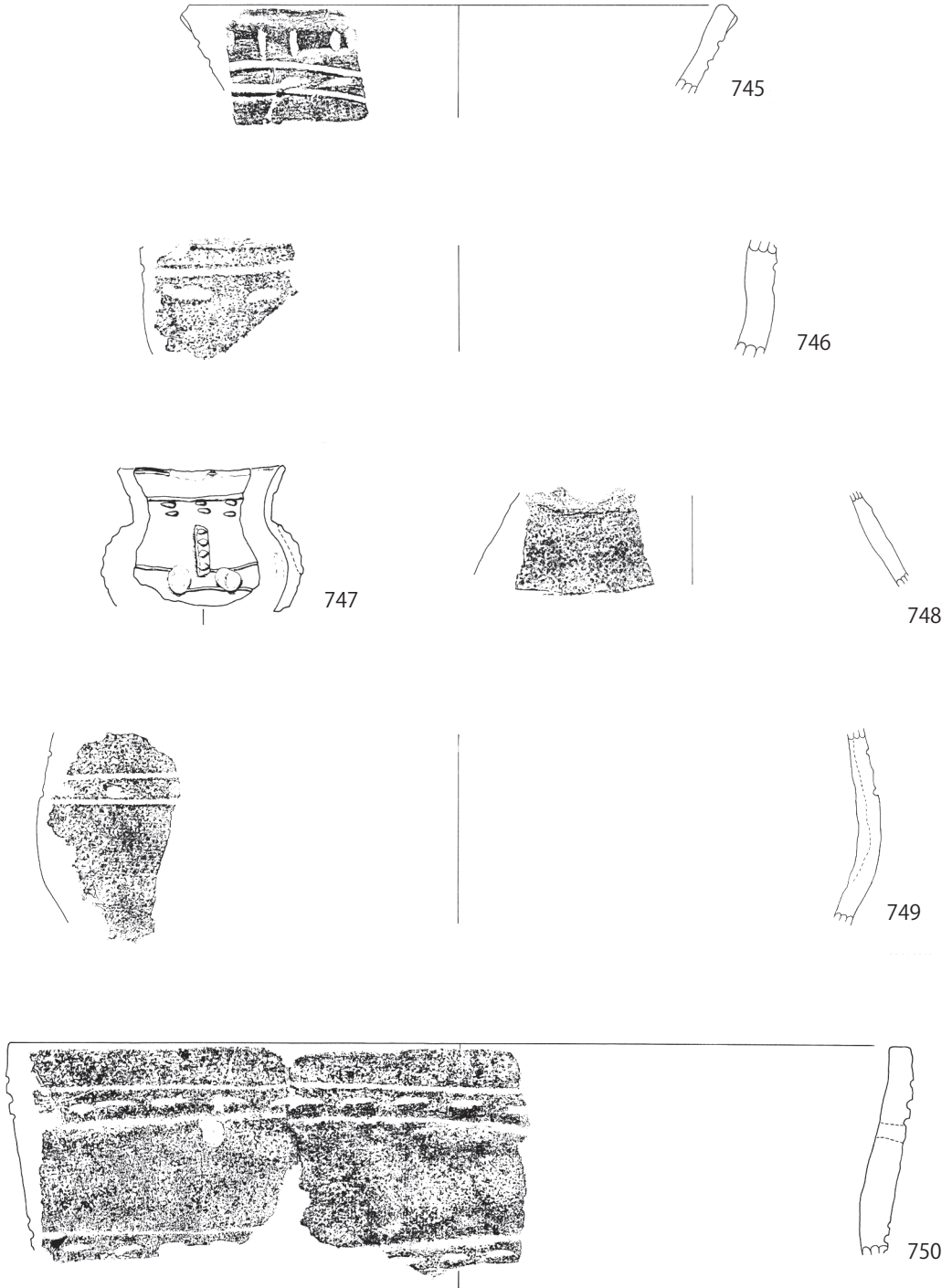


图 106 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (6) (S=1/2)

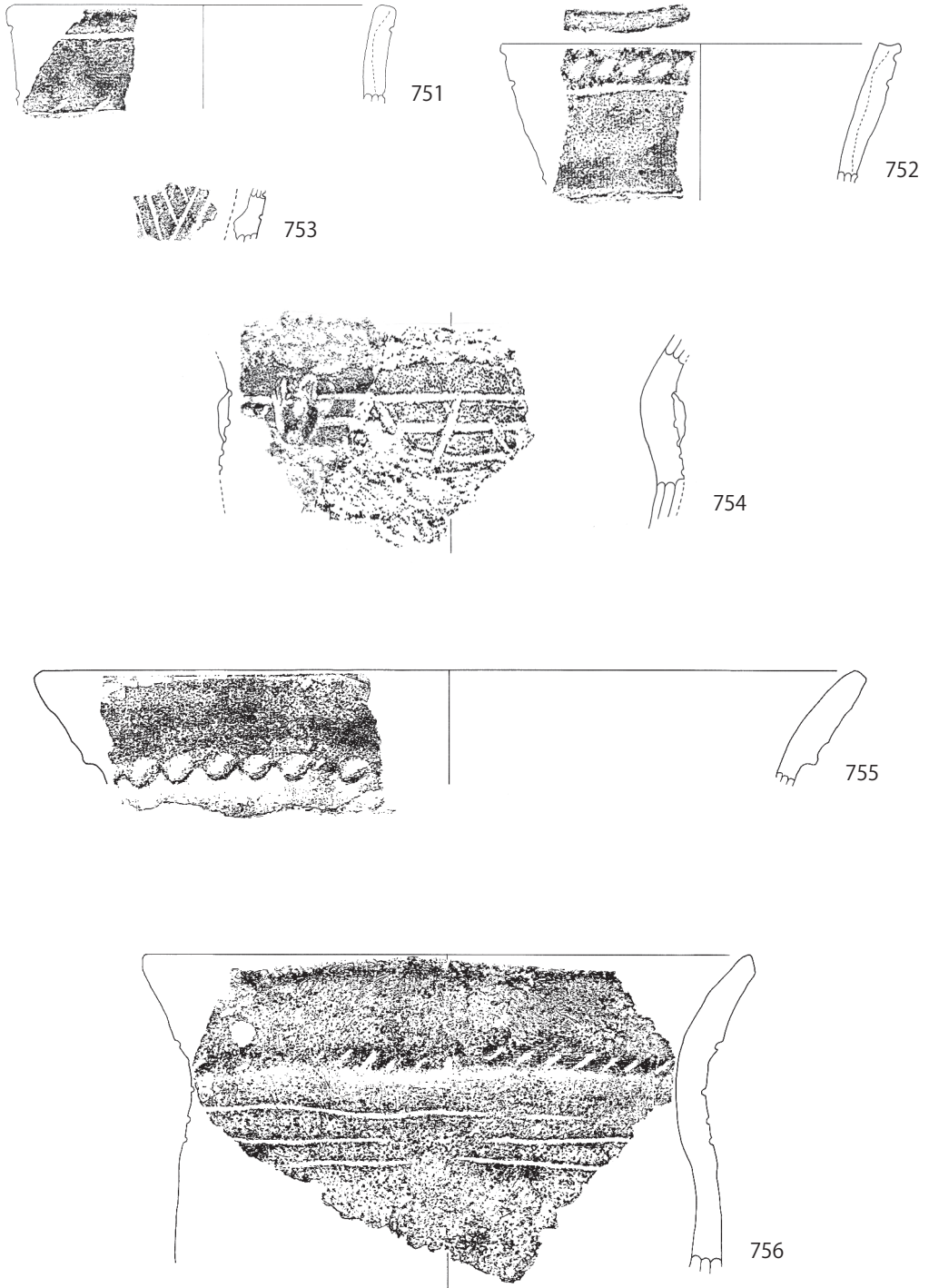


图 107 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (7) (S=1/2)

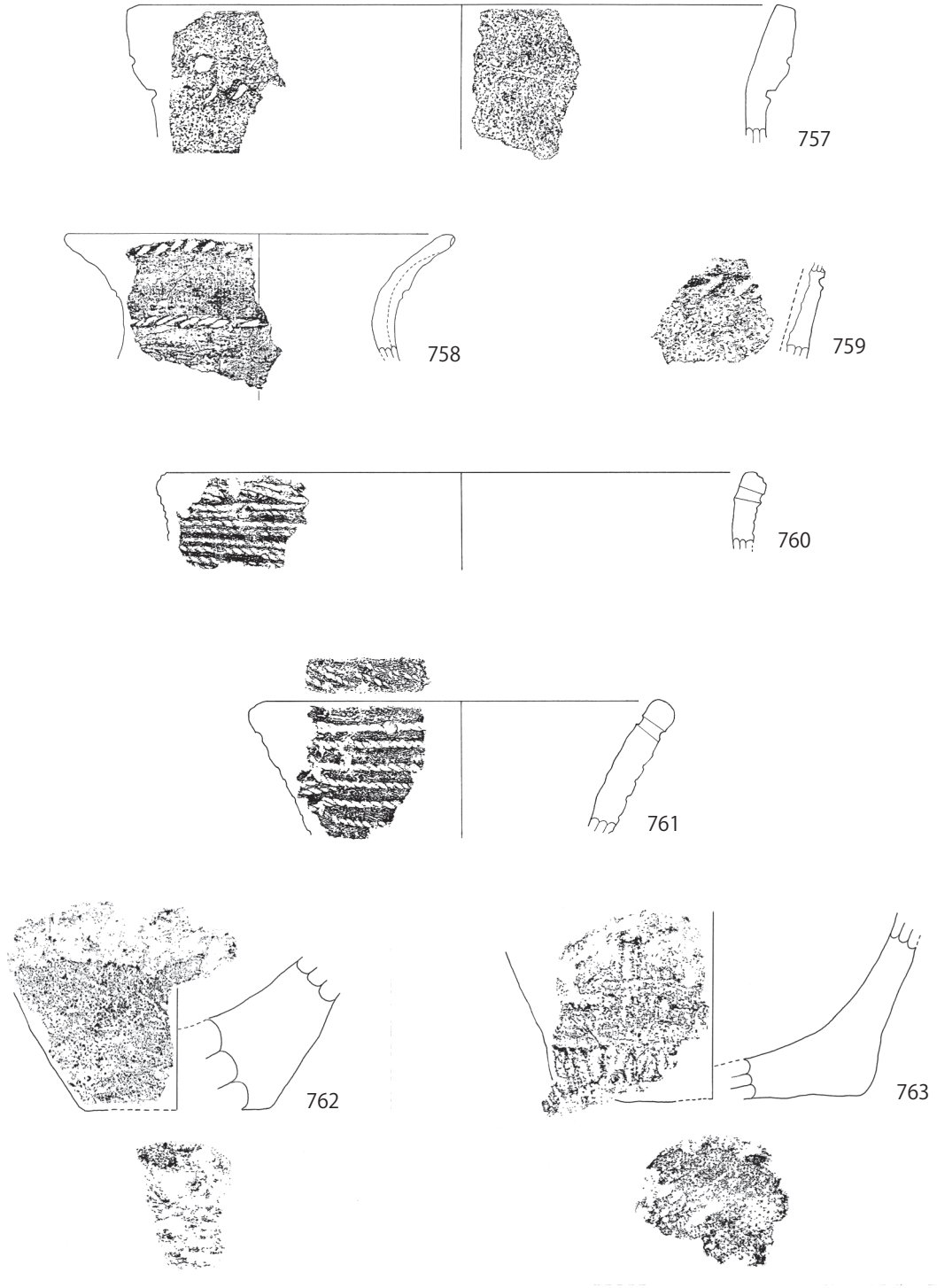


图 108 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (8) (S=1/2)

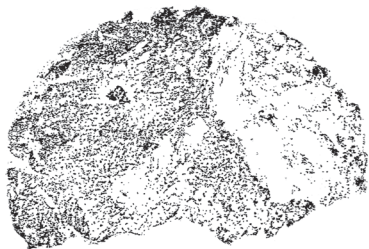
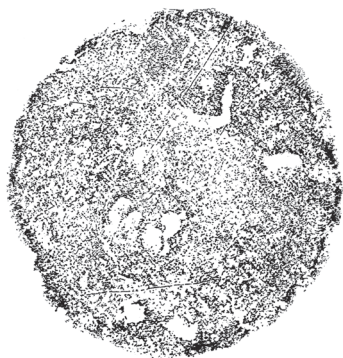


图 109 I区 142 (「黑色砂層」) 出土土器 (9) (S=1/2)

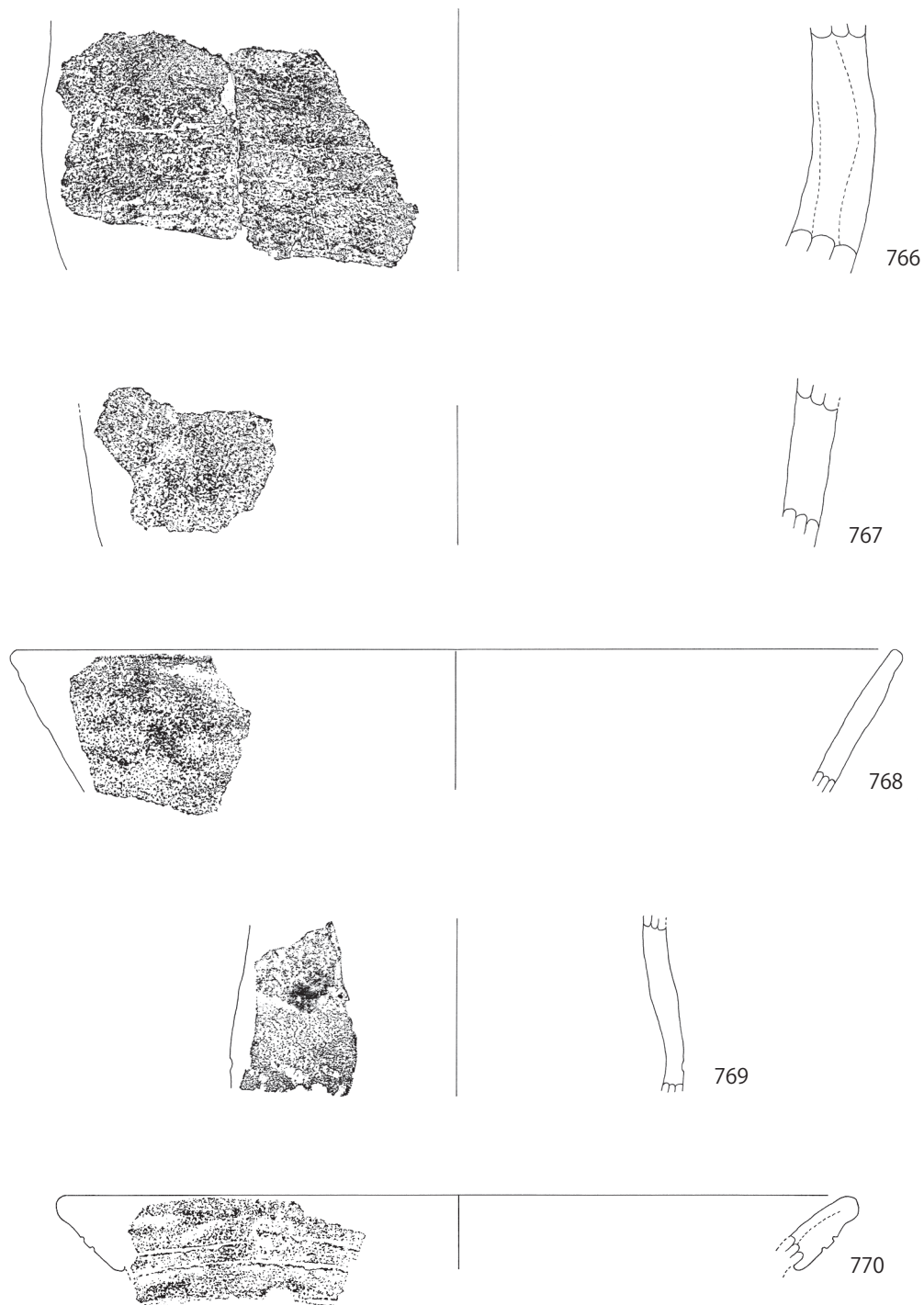


图 110 I区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (1) (S=1/2)

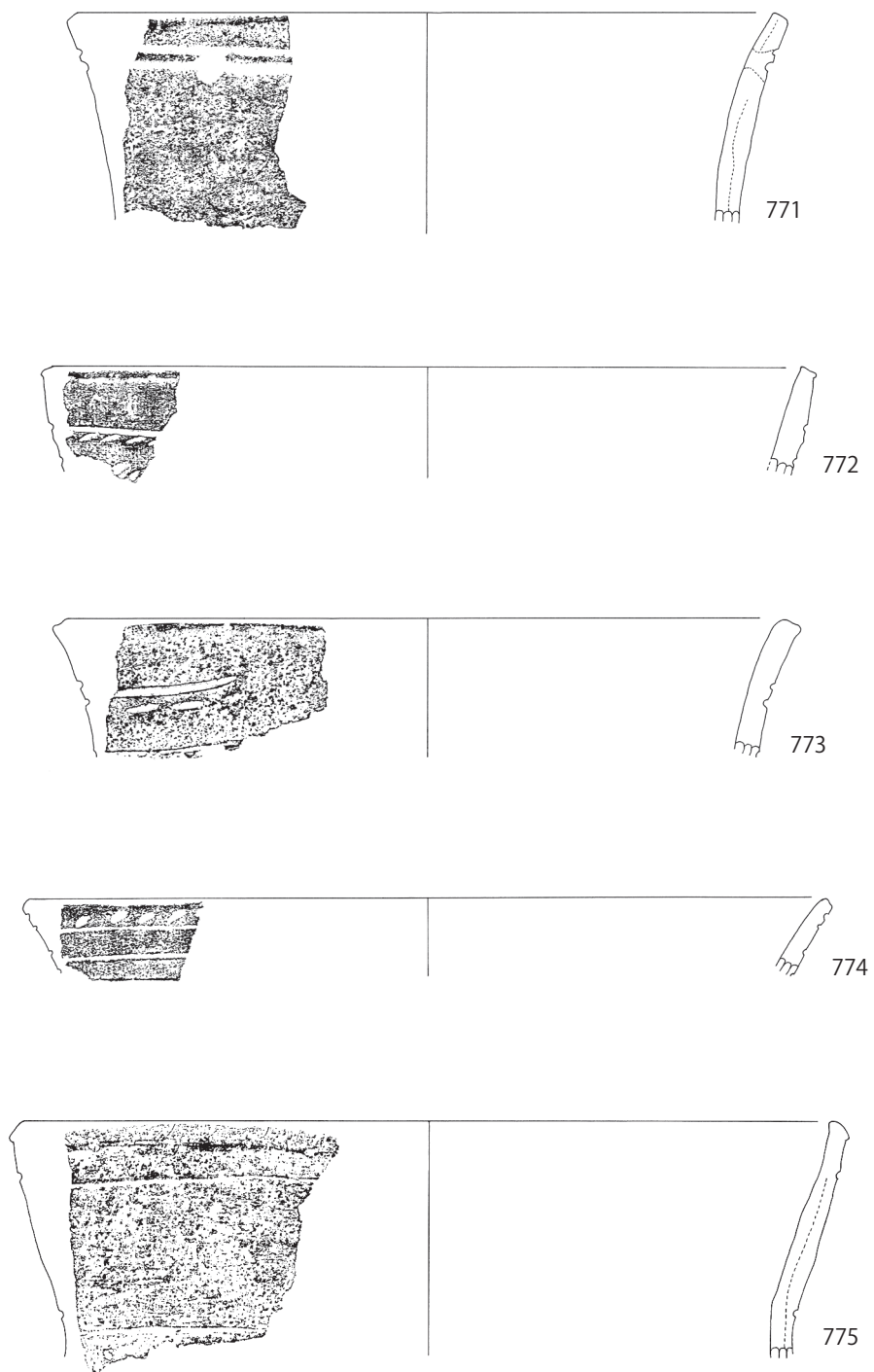


图 111 I区 143 (「黑色土層」) 出土土器 (2) (S=1/2)

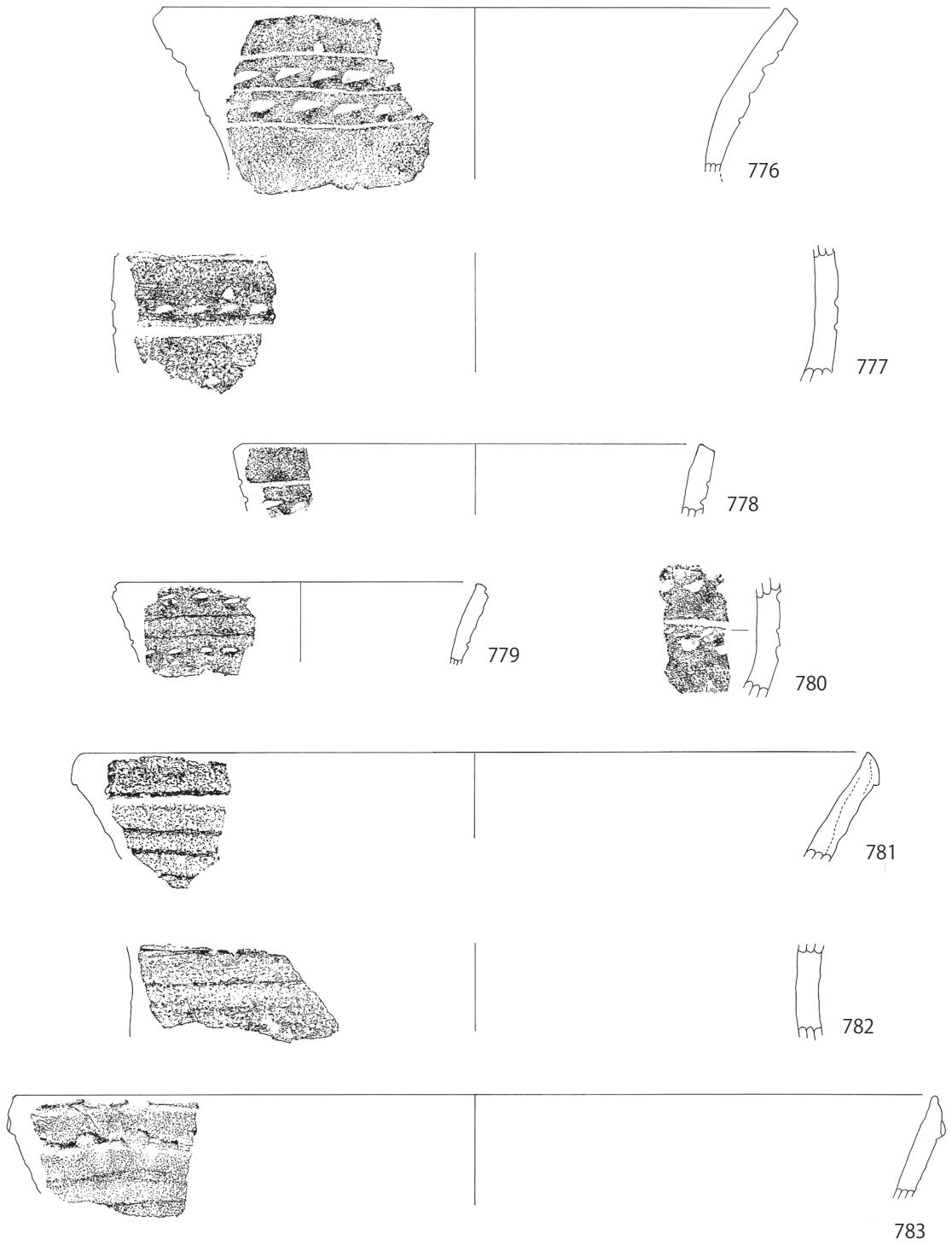


图 112 I区 I43 (「黑色土層」) 出土土器 (3) (S=1/2)

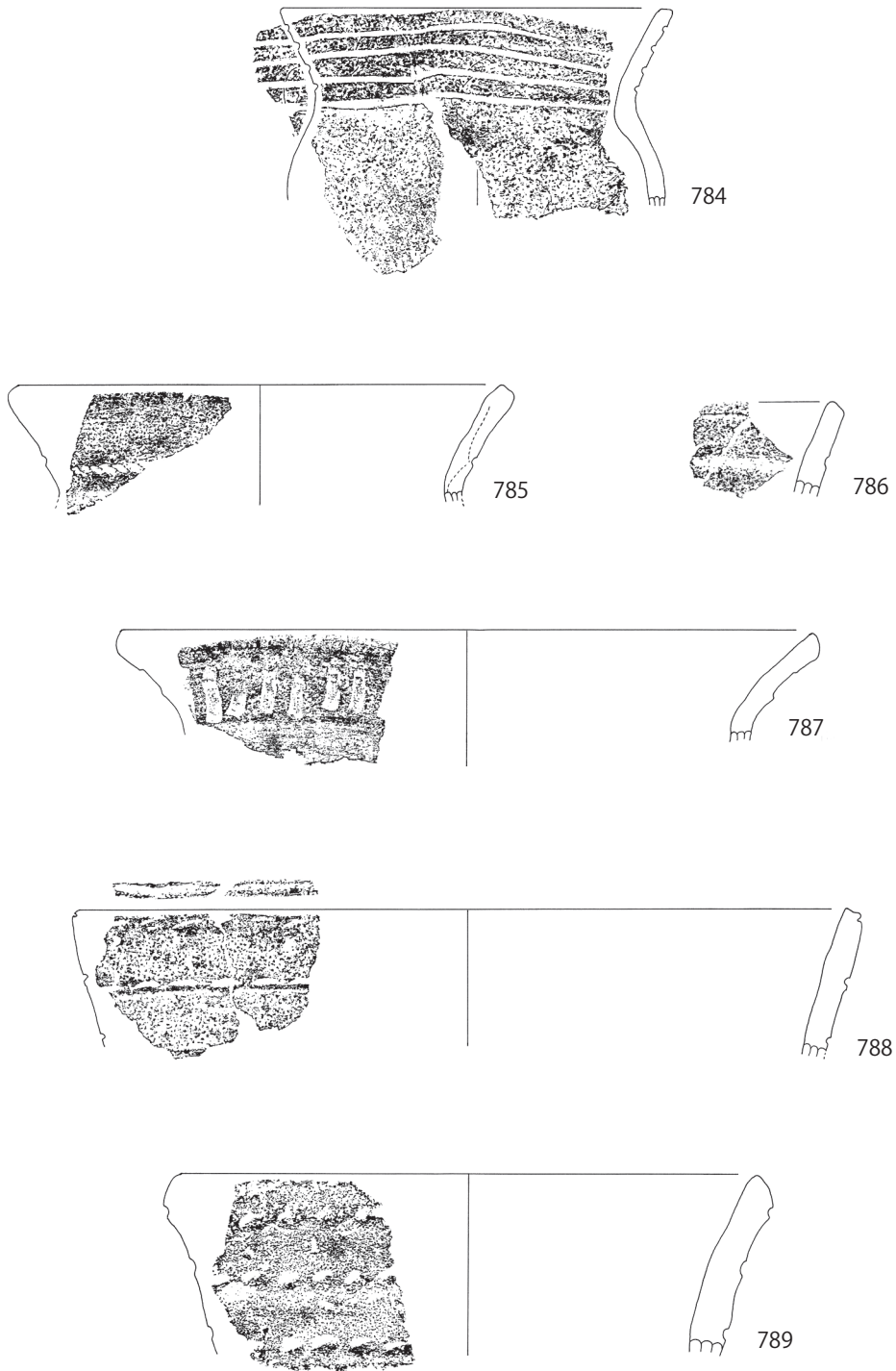


图 113 I区 143 (「黑色土層」) 出土土器 (4) (S=1/2)

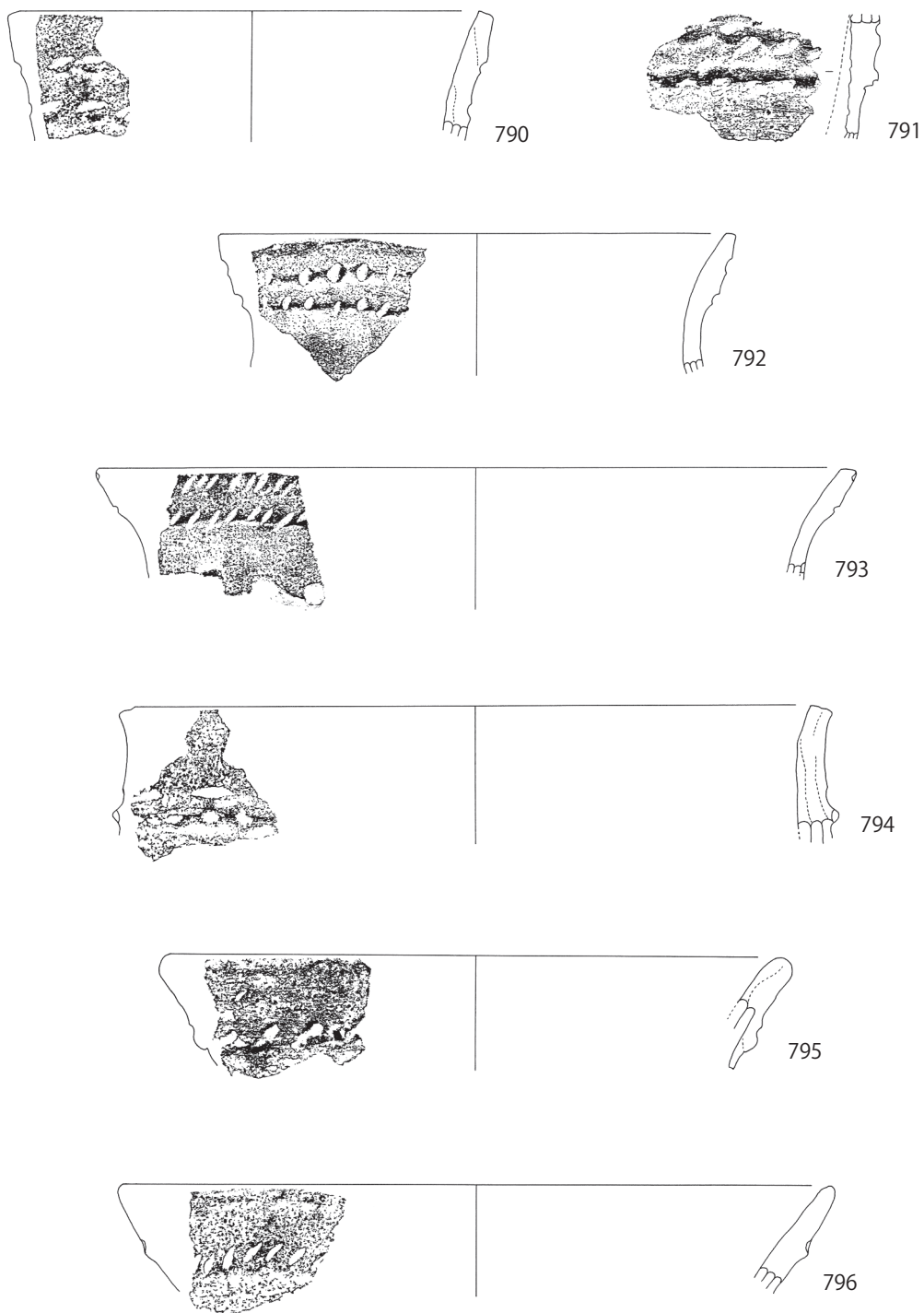


图 114 I区 I43 (「黑色土層」) 出土土器 (5) (S=1/2)

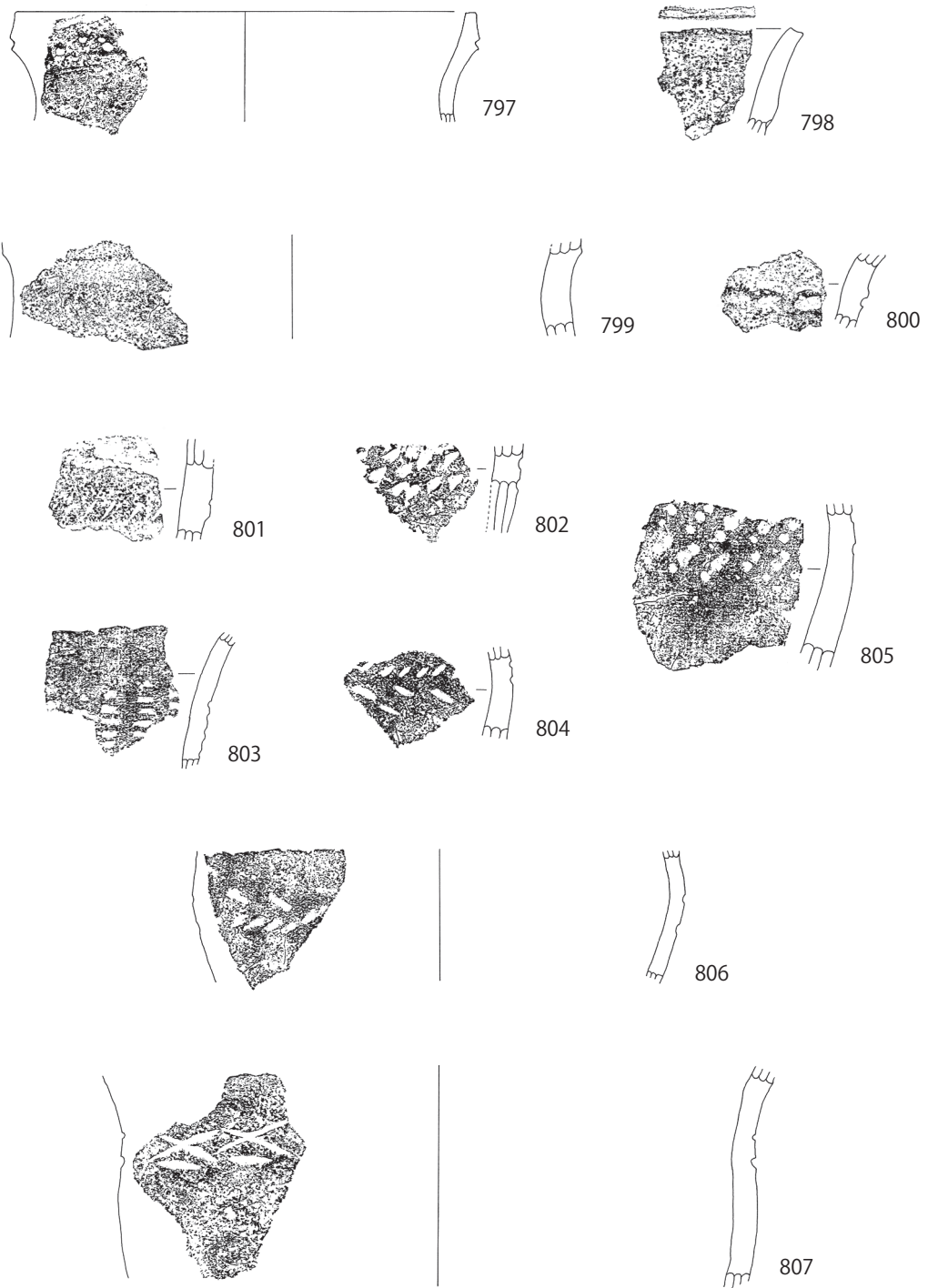


图 115 I区 143 (「黑色土層」) 出土土器 (6) (S=1/2)

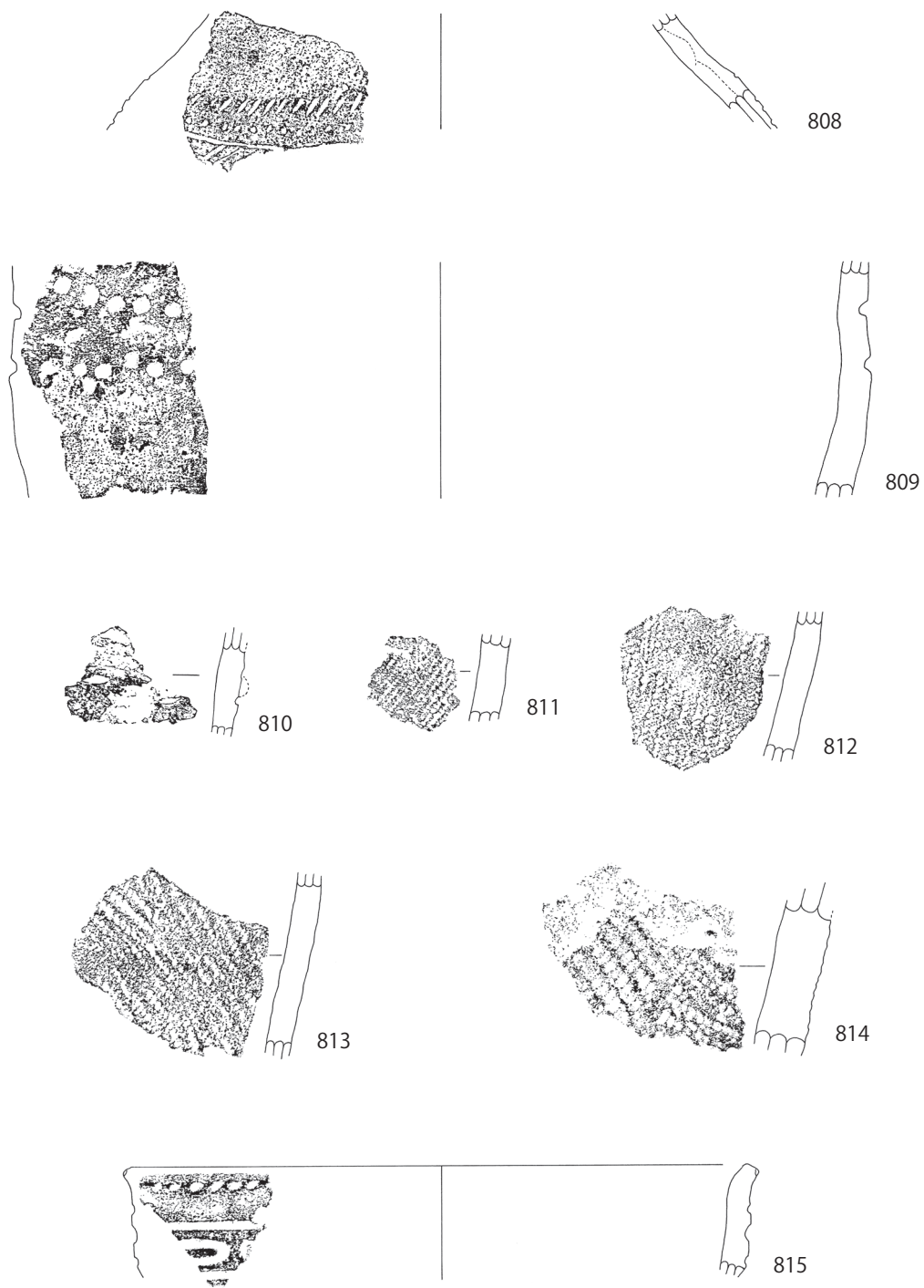


图 116 I区 I43 (「黒色土層」) 出土土器 (7) (S=1/2)

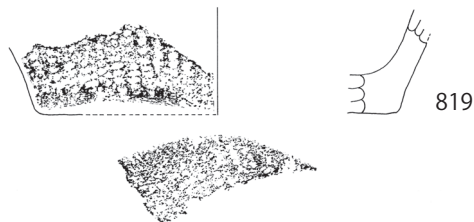
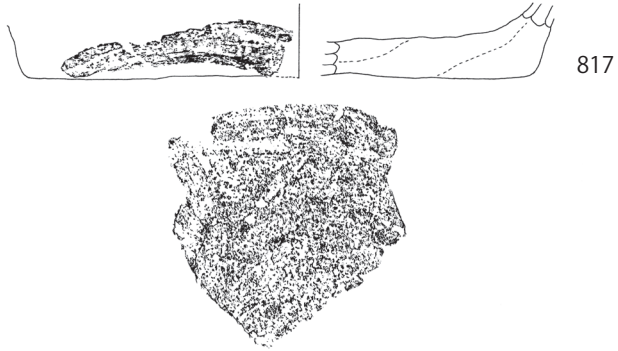
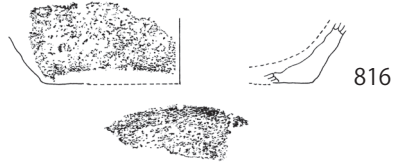


图 117 I区 143 (「黑色土層」) 出土土器 (8) (S=1/2)

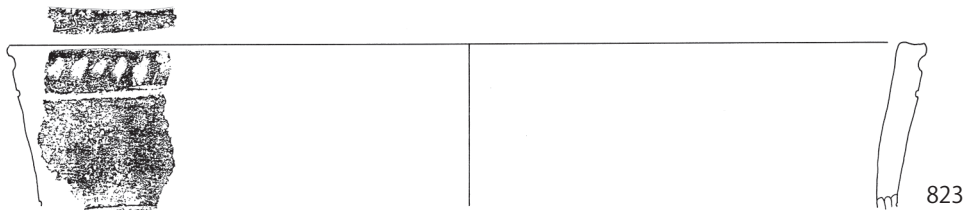
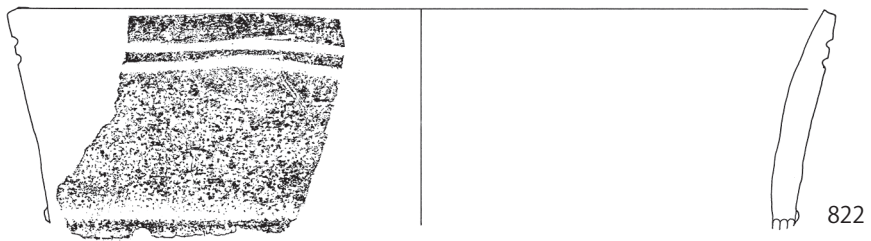
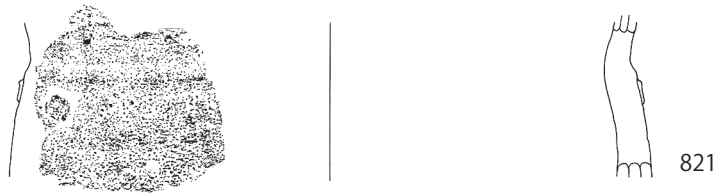
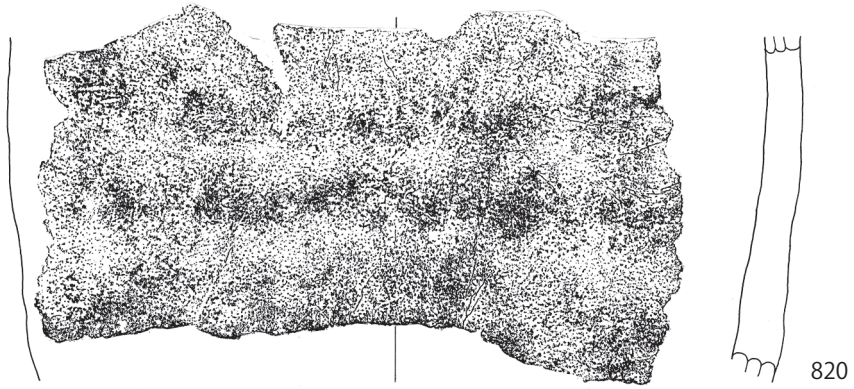


图 118 I区 I44 (「茶褐色土層」) 出土土器 (1) (S=1/2)

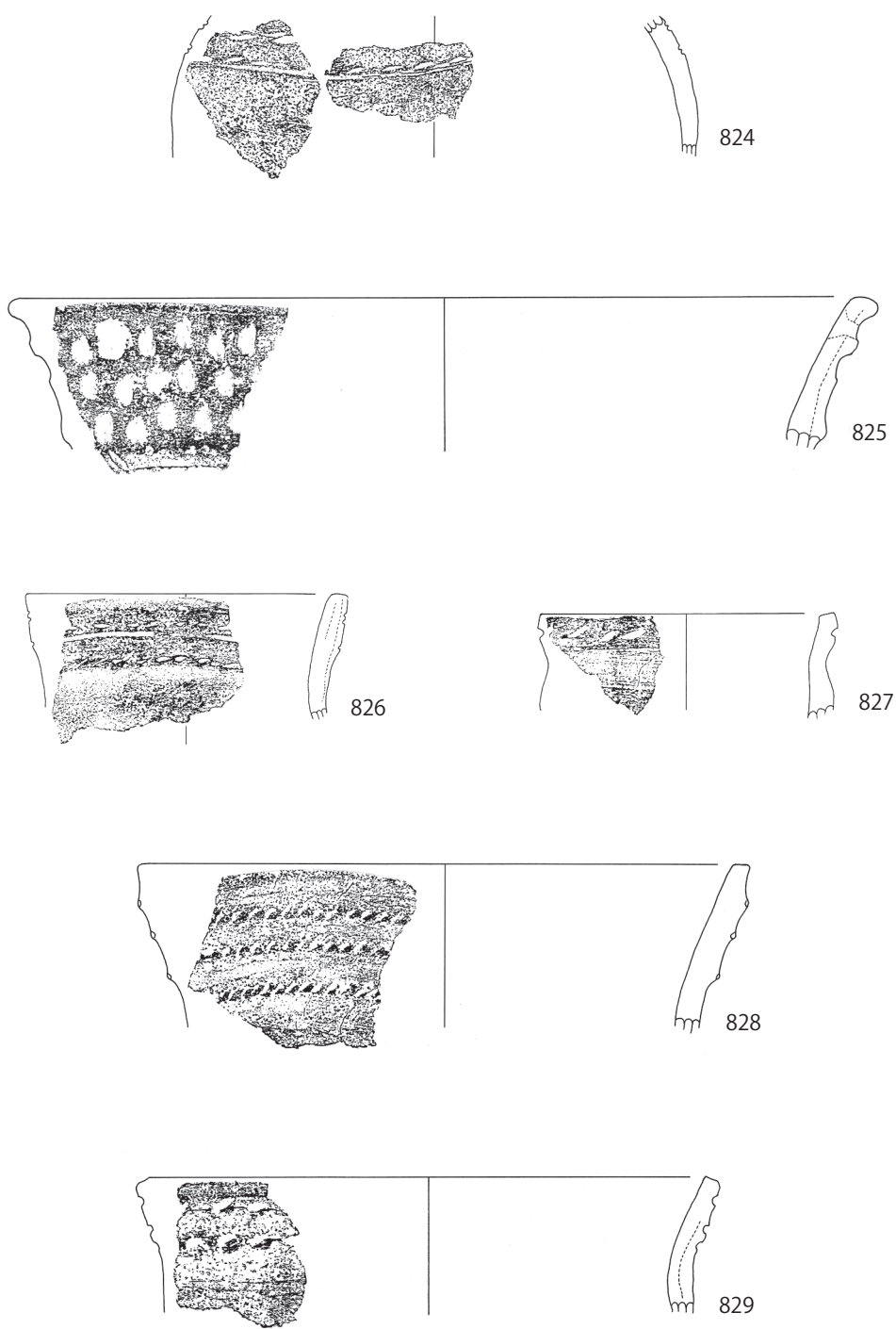


图 119 I区 I44 (「茶褐色土層」) 出土土器 (2) (S=1/2)

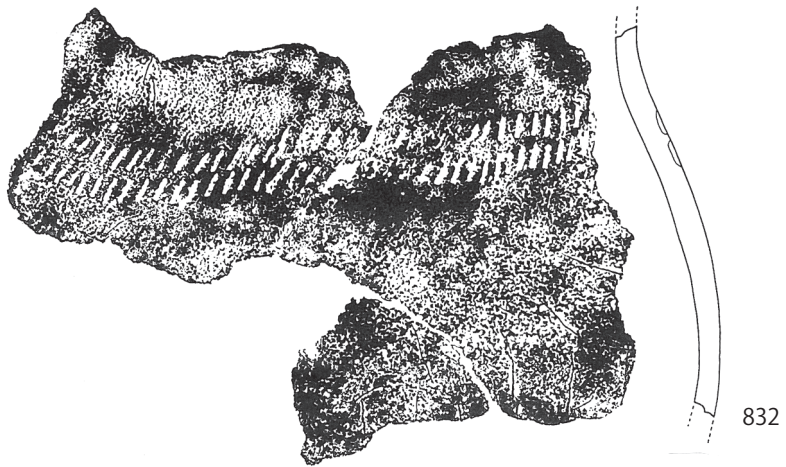
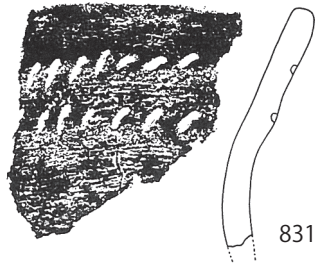
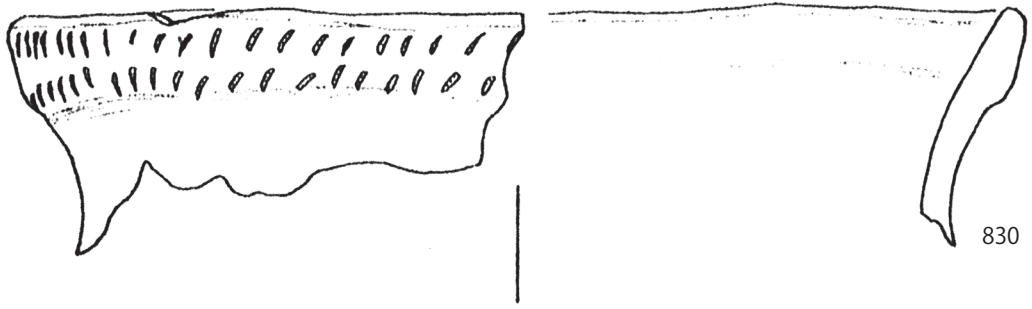


图 120 I区 I44 (「茶褐色土層」) 出土土器 (3) (S=1/2)

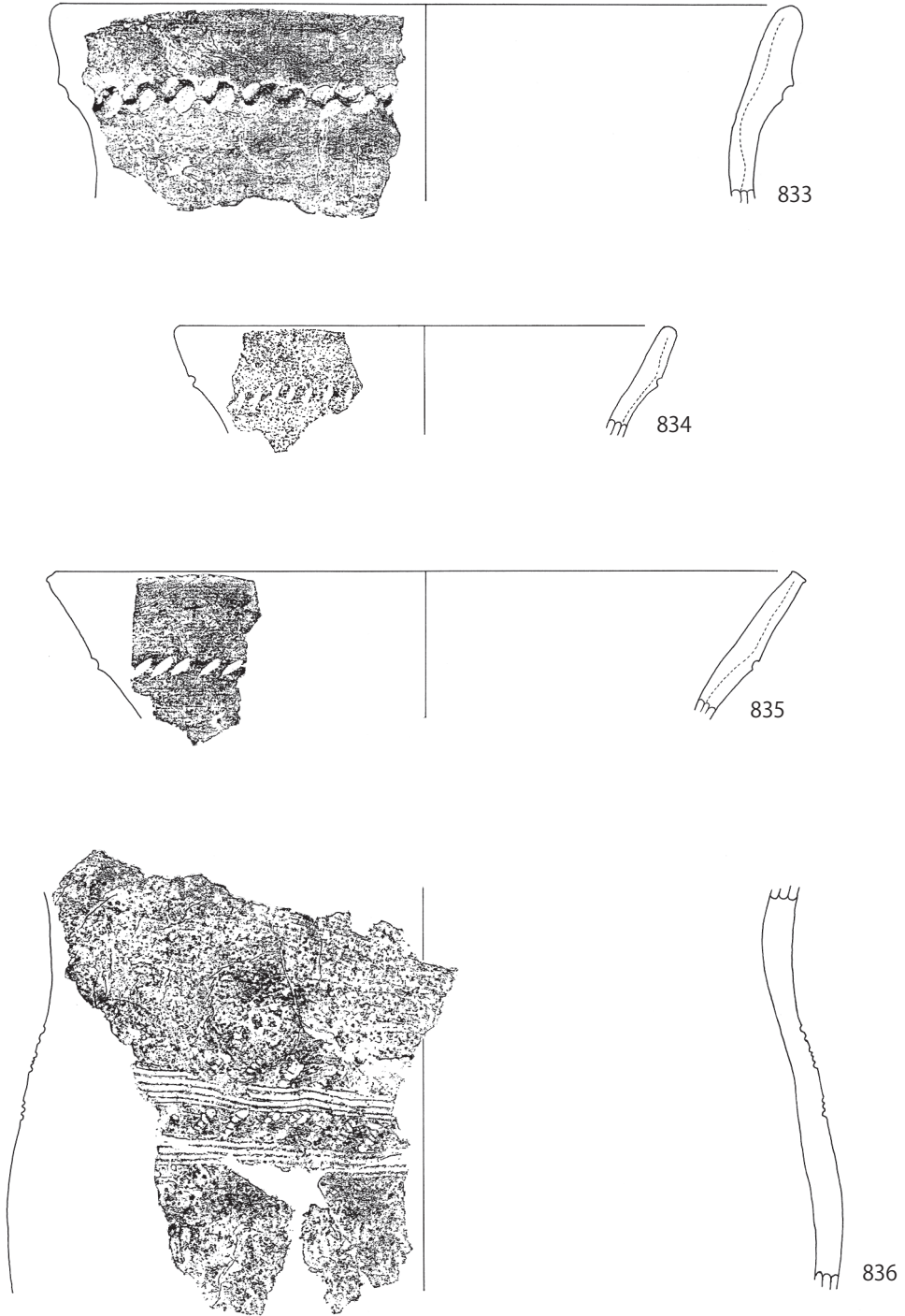


图 121 I 区 I44 (「茶褐色土層」) 出土土器 (4) (S=1/2)

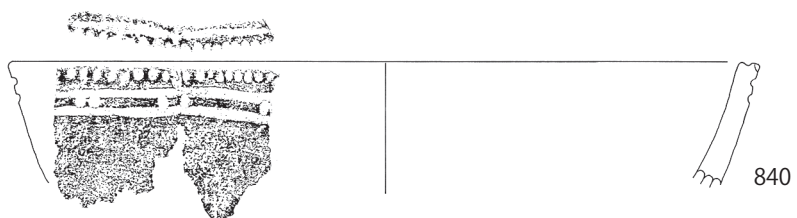
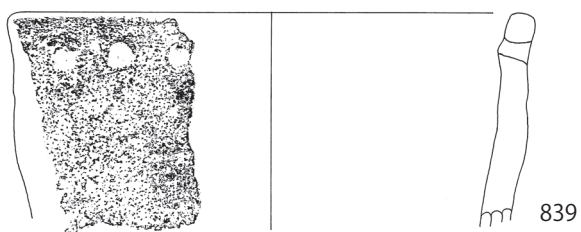
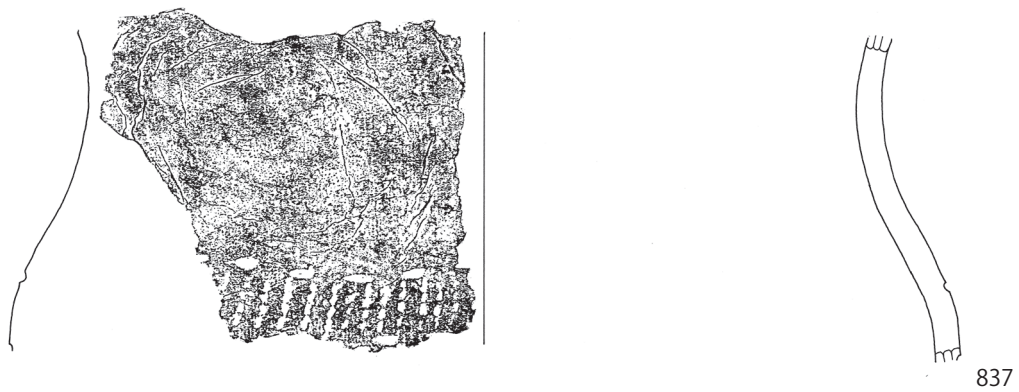
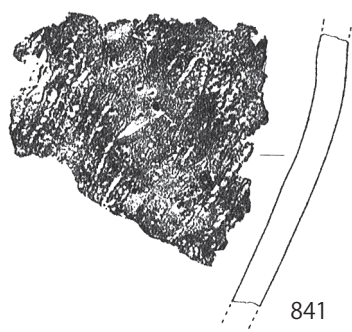
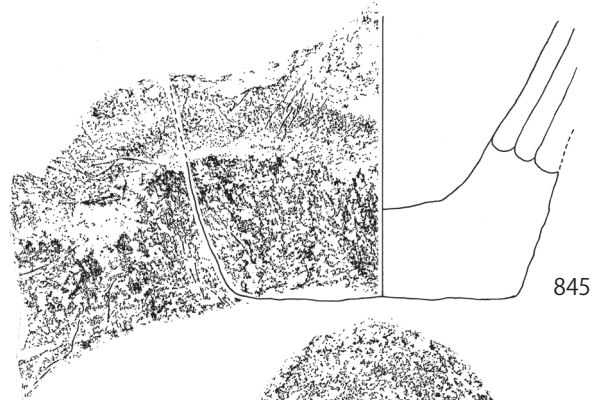


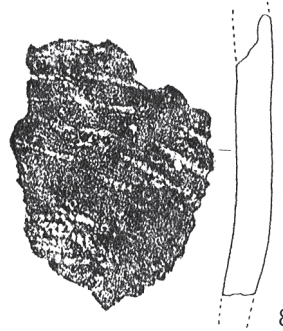
图 122 I区 I44 (「茶褐色土層」) 出土土器 (5) (S=1/2)



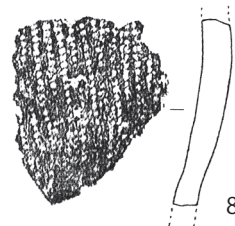
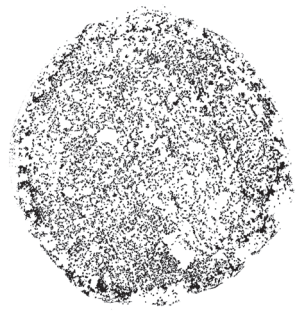
841



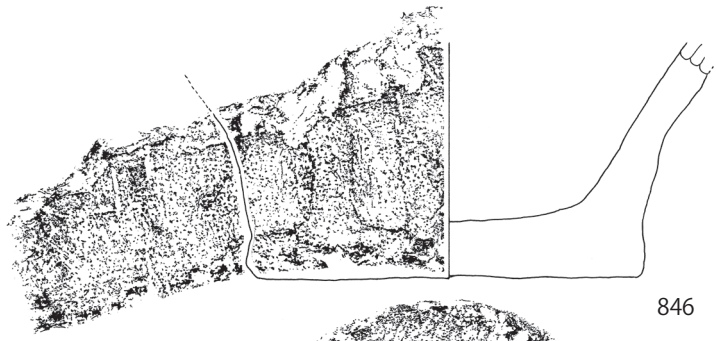
845



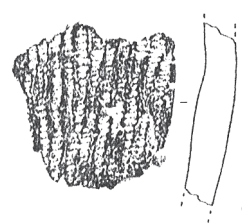
842



843



846



844

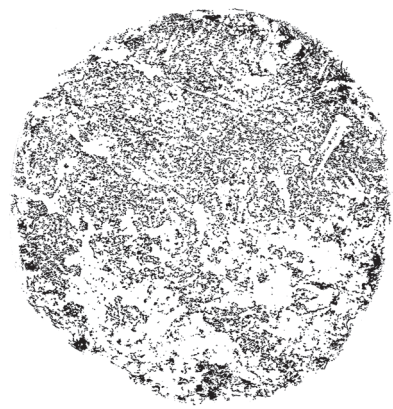


图 123 I 区 I44 (「茶褐色土層」) 出土土器 (6) (S=1/2)

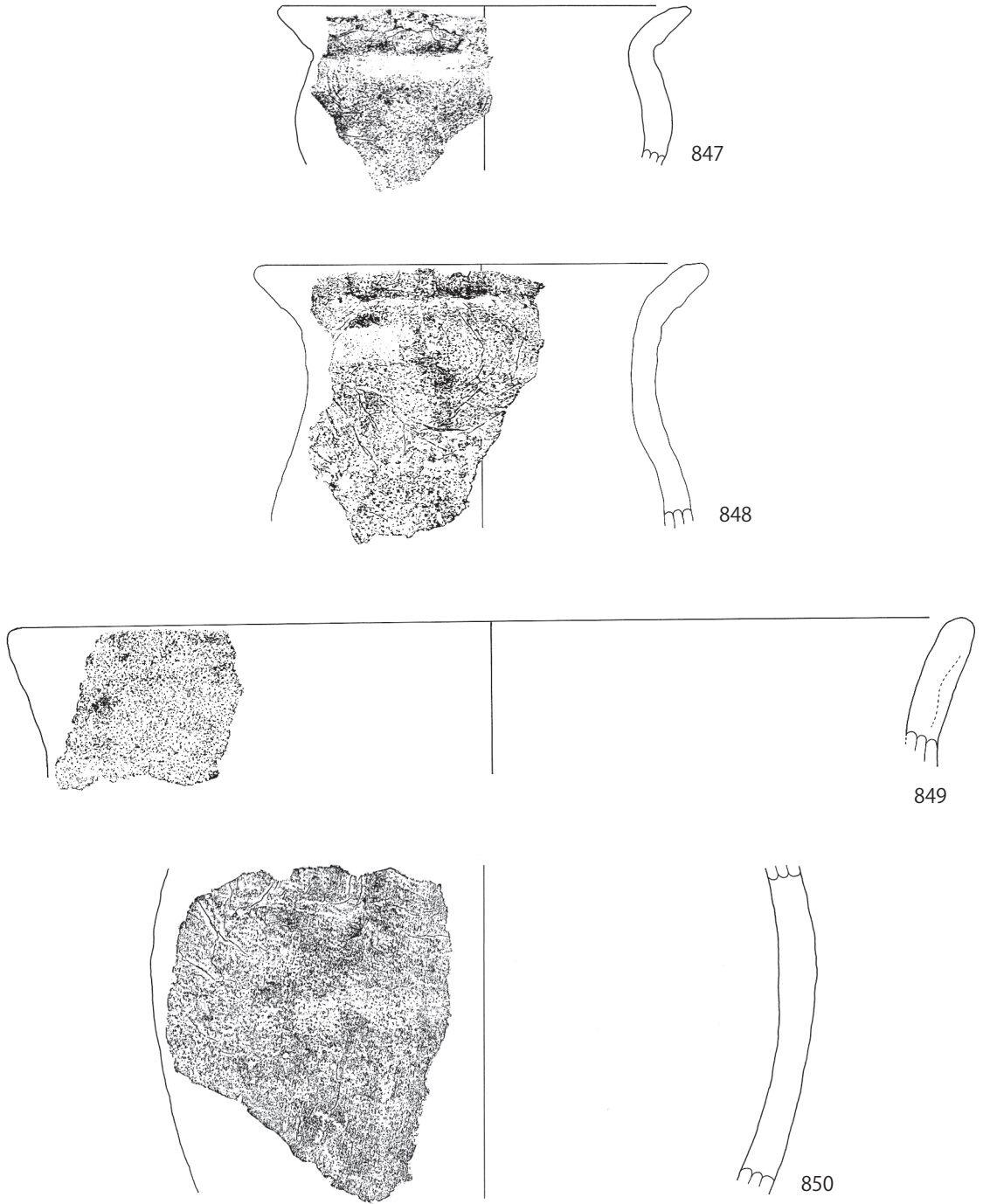


図124 I区「カクラン」出土土器 (A) (1) (S=1/2)

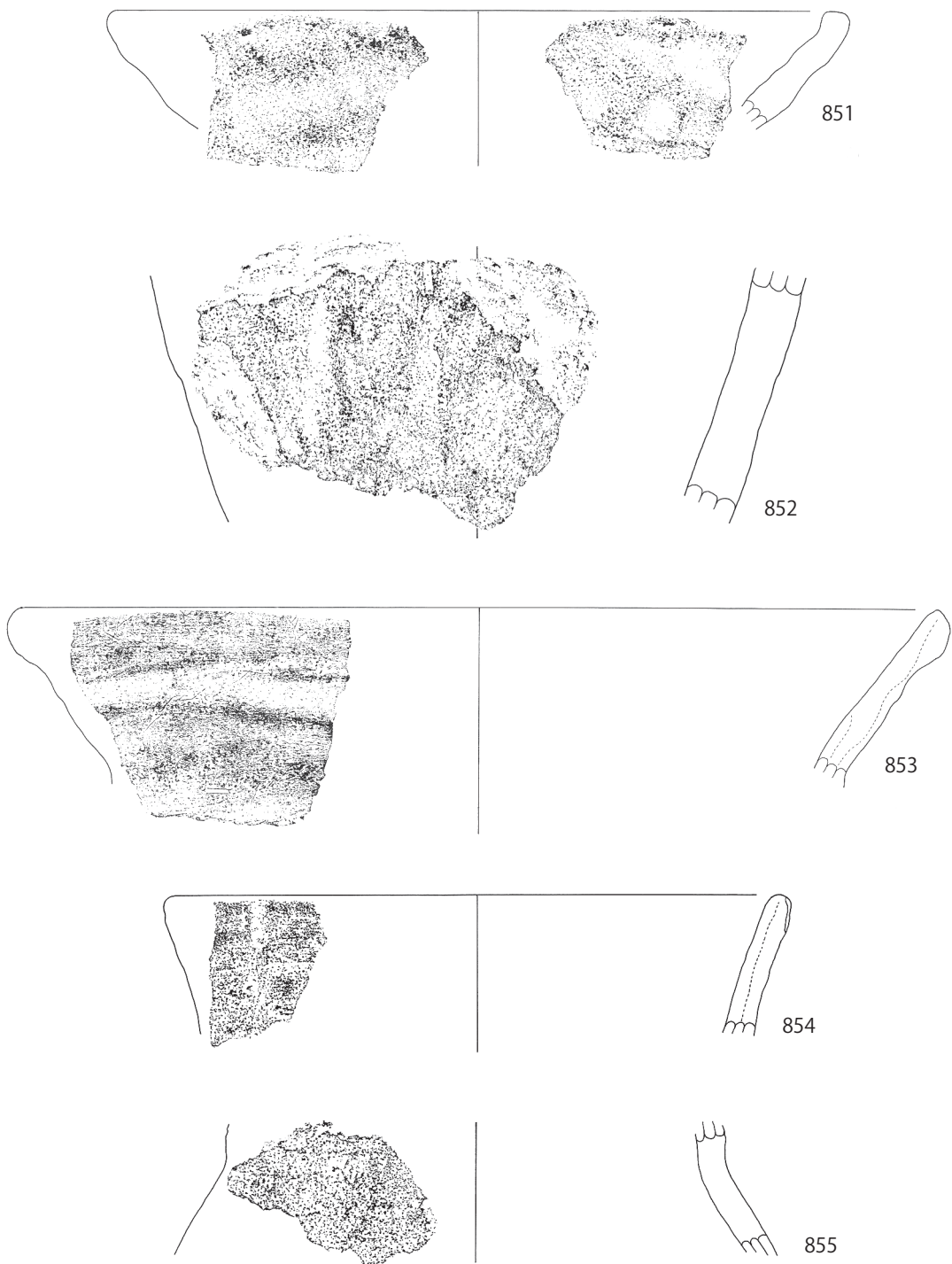


図 125 I区 「カクラン」 出土土器 (A) (2) (S=1/2)

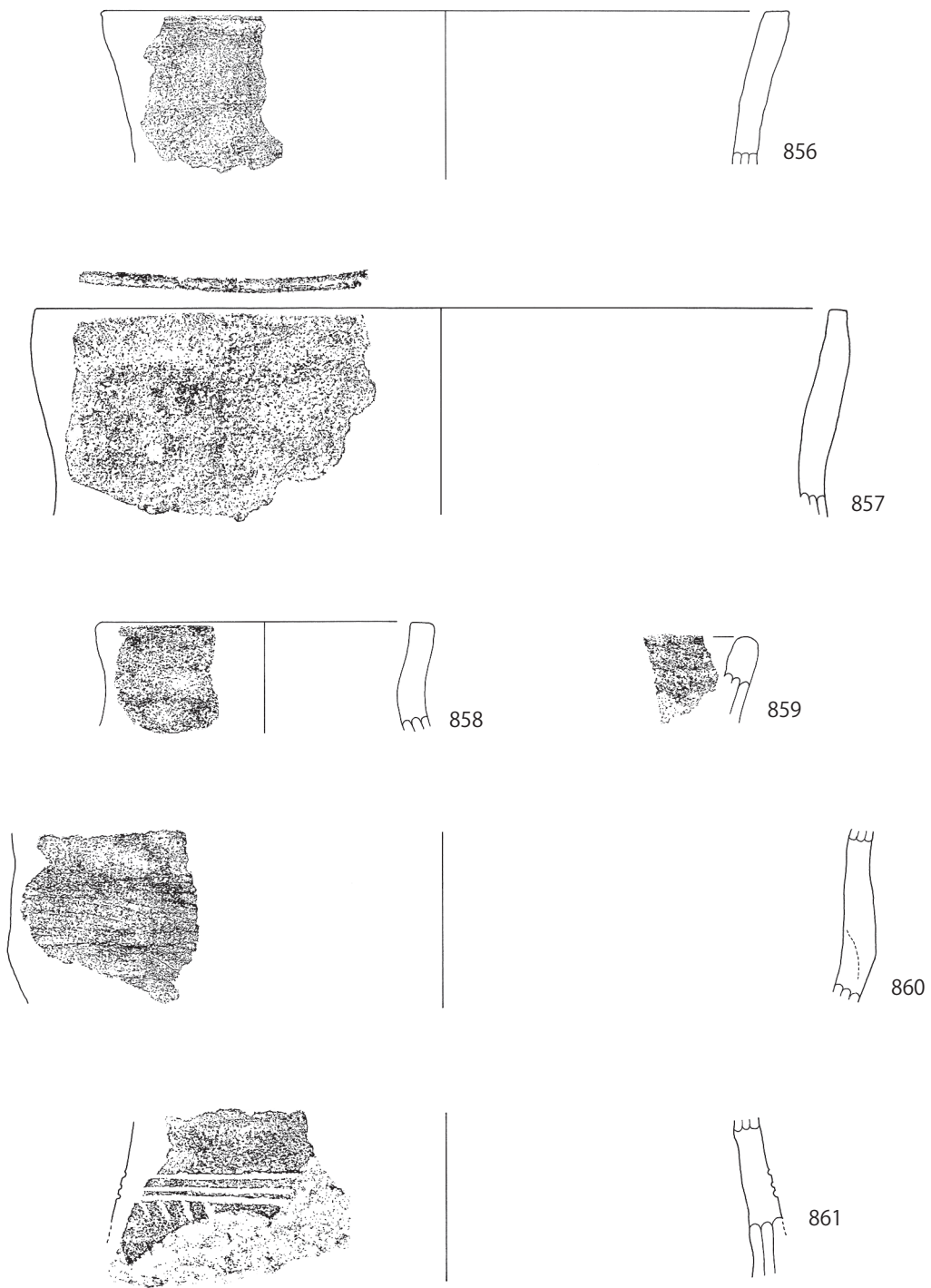
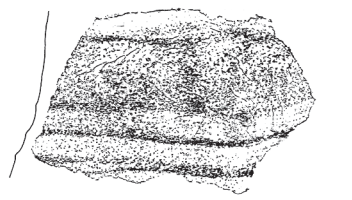


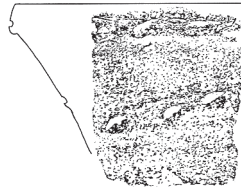
図126 I区「カクラン」出土土器(A)(3)(S=1/2)



862



863



864



865



866

図 127 I区 「カクラン」 出土土器 (A) (4) (S=1/2)

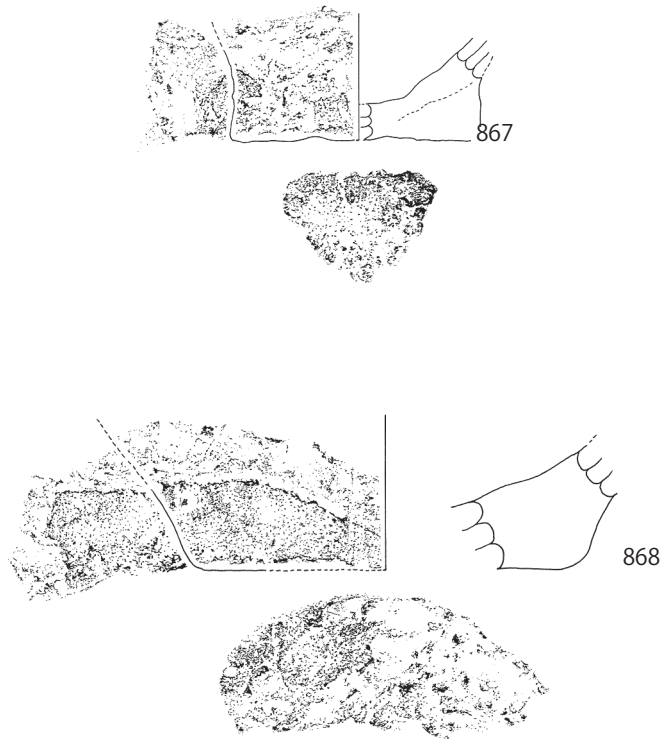


図 128 I区 「カクラン」 出土土器 (A) (5) (S=1/2)

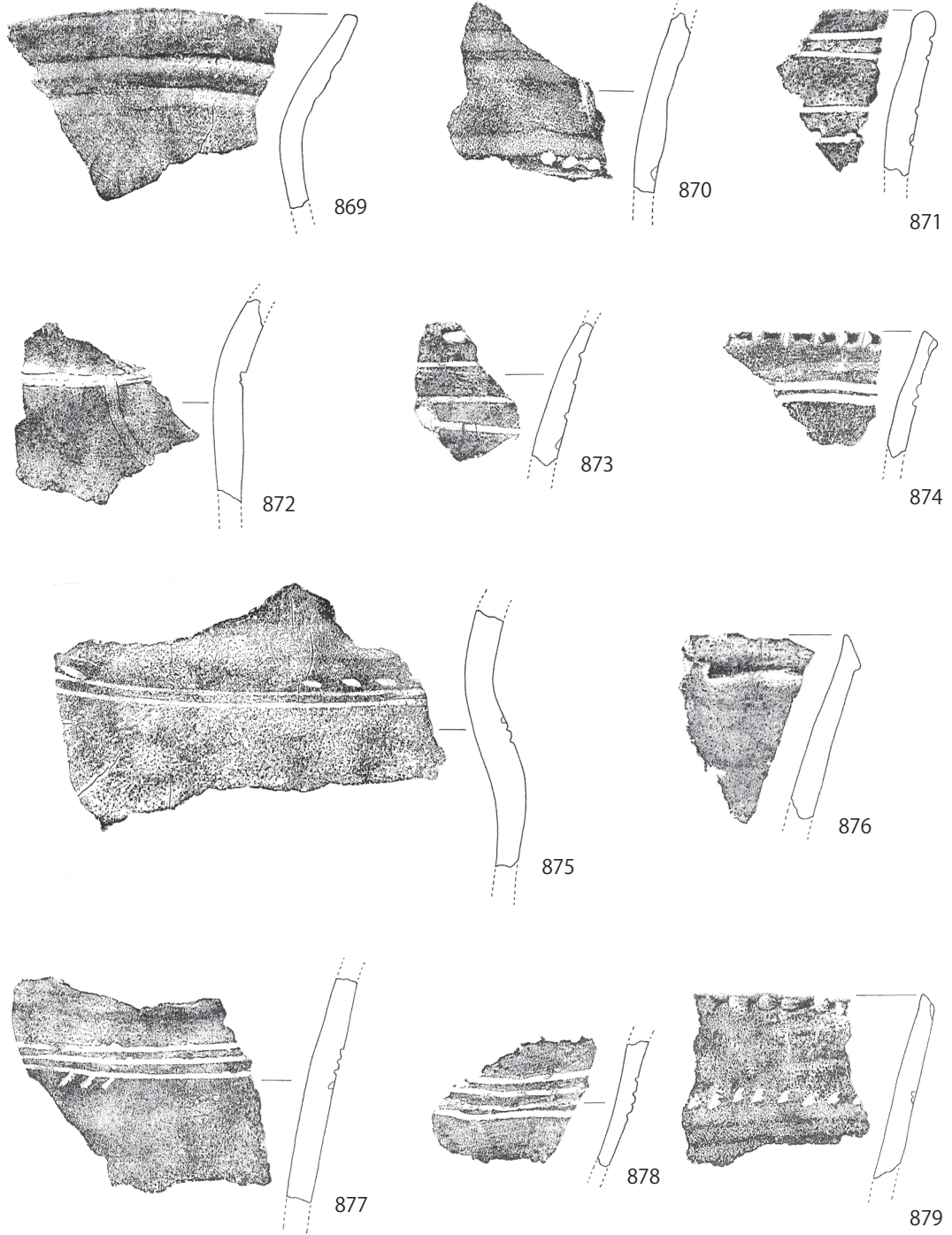


図 129 I区「カクラン」出土土器 (B) (1) (S=1/2)

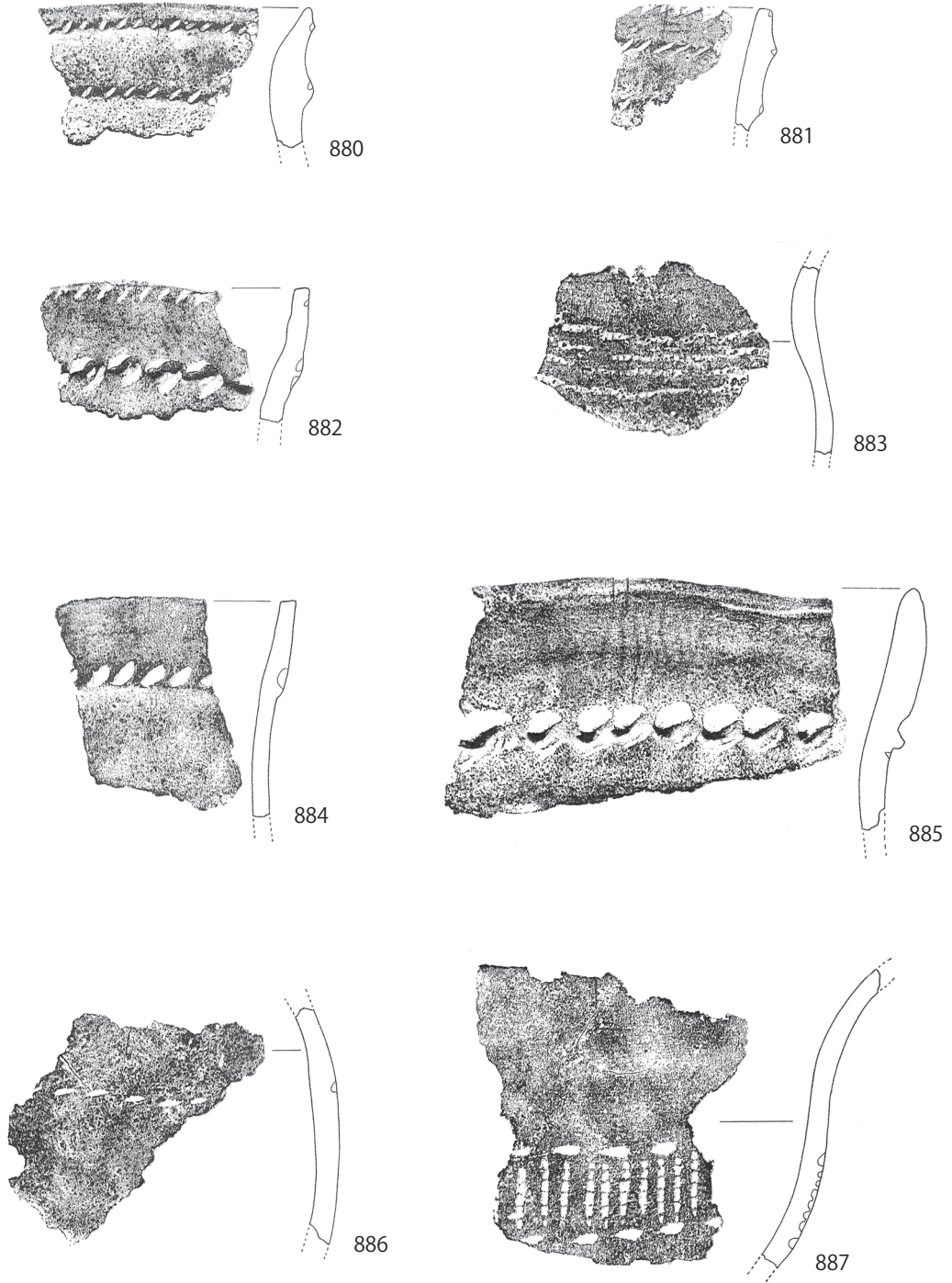


図 130 I区 「カクラン」 出土土器 (B) (2) (S=1/2)

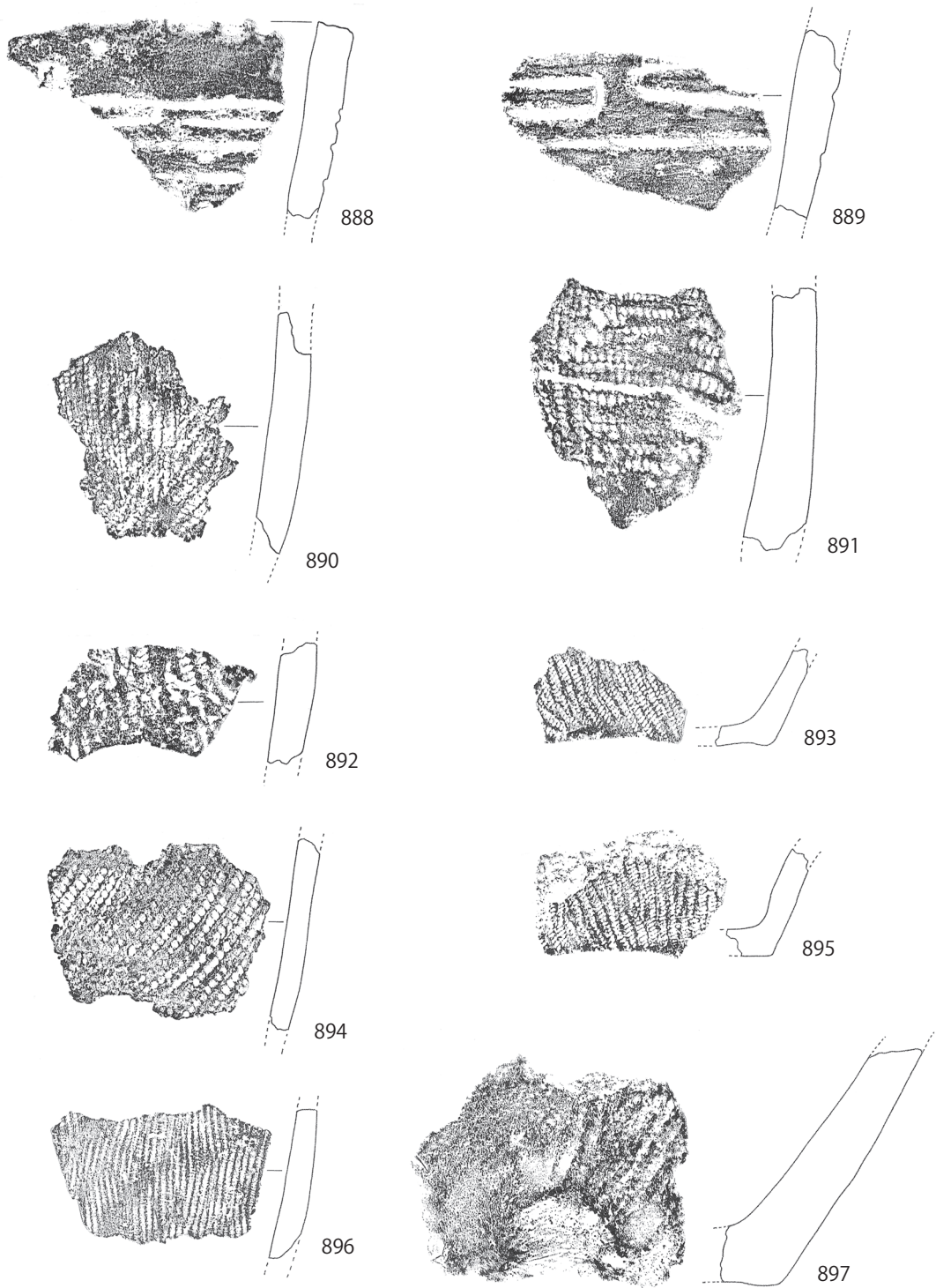


図 131 I区「カクラン」出土土器 (B) (3) (S=1/2)

まとめ

本年度は、沼浦遺跡（D 地点）の調査を併行して行い、海水浴場遺跡では E 地点を新設した。都合 B・E・TP1・D 地点の四箇所を掘削したが、その結果は本文の資料が示すとおり、小規模ながら注目すべき成果が得られた。以下、各地点の概要をまとめたい。

B0 区 第 2 層群では十和田式や続縄文土器・刻文土器 A・擦文 III・元地 2 式などが見られるが、それらを除くと主体を占めるのは刻文・沈線文土器（古）である。これは浜中 2 遺跡の B4・5 区に先行する層位的な土器様相の一例として注目されよう。

B1a'～B1b 区 系統を異にした堆積層が重なり東西壁の様相は一致しない。第 1 層群は攪乱され新旧の土器が混在する。第 2 層群では刻文・沈線文土器（古）が主体を占め、続縄文土器・擦文 III・元地 2 式を含む。第 3 層群でも刻文・沈線文土器が検出される。

B3 区 刻文・沈線文土器・元地 2 式の小片が出土し、ハケメ痕を持つ擦文片も採取された。

B7 区 明瞭な堆積状態が観察され、注目すべき土器組成を示している。第 2 層群では刻文・沈線文土器が主体を占めるが、刻文土器 A や十和田式もやや目立つ。それらと共に擦文 III（古）やその模倣土器、元地 2 式の影響をうけて作られた模倣的な土器が検出された。また横走沈線文を施し、刻文・沈線文土器の胎土・焼成を示す個体も認められる。

E1 区 耕作や遺構の構築に伴う攪乱がある。第 2 層群では、刻文・沈線文土器が主体を占め、刻文土器 A・鈴谷式・十和田式・中厚手の模倣土器・擦文 III などが見られる。表採資料にも同様の組成が認められ、元地 2 式も含まれている。

D 地点 この地点ではごく僅かの鈴谷式片と、それに先行する続縄文系土器片を若干検出したに留まる。後者は時期的には纏まりがあるように観察される。

人骨・土壙 B 地点では人骨が検出された。ただし明確に墓壙に伴うものは DK1 の成人・未成人骨に限定され、一部の遺存骨には切創やひび割れ痕が観察された。DK3 は攪乱されており、規模・形状は判然としないが、人骨片（第 1 次）を伴っており墓壙の可能性が想定される。DK1 の東側に置かれた板状石は、おそらく墓標的な意味を持つのであろう。B1a 区の東壁にも類似の大石が見られたが、土壙や人骨片などは検出されていない。

動物遺存体・骨角・石器類 B・E 地点で多くの動物遺存体が確認された。鑑定数は 50 種以上を数える。第 1 次調査に比べてブタが増加し、魚類ではアイナメ・フサカサゴ・ニシン科が主体を占める。時期的には刻文・沈線文土器の前半に比定される。骨角器では骨針・刺突具や骨鏃、装飾品など、石器類では石鏃・磨製石斧、削器が僅かに出土したにとどまる。亦稚貝塚や浜中 2 遺跡とは異なり、利器類に乏しい様相が再確認された。

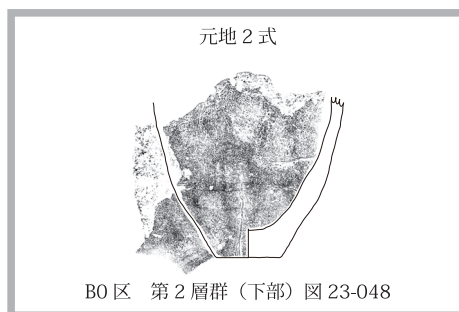
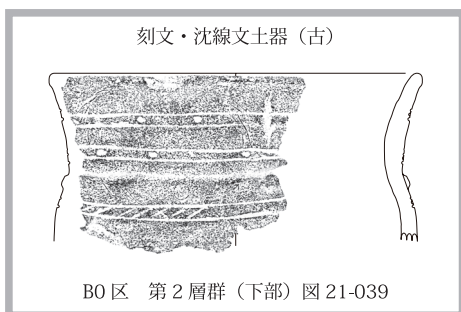
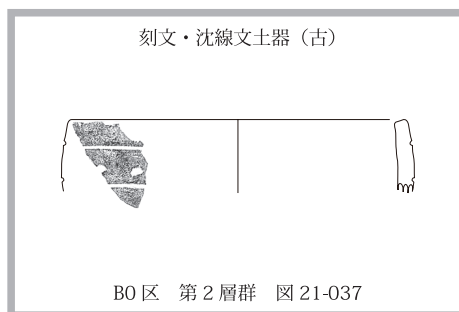
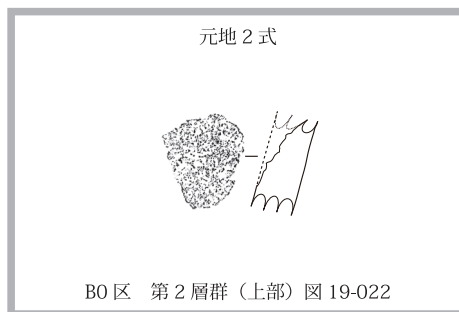
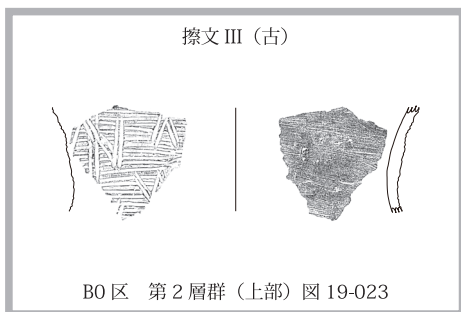
さて本年度で注目されるのは、B 区における層位事実である。総括すると、「第 1 層群：表土・攪乱層、第 2 層群：刻文・沈線文土器に若干の擦文 III・元地 2 式、第 3 層群：刻文・沈線文土器」という流れで捉えられる。この所見は通説的な島嶼域・道央編年案とは一致しない。第 3 次調査での検証を心掛け、層位資料の充実と補填に努めたい。（柳澤）

参考文献

- 荒川 暢雄 1997 『礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 岩城 克洋・北 沙織・土肥 幸子 編 2016 『北海道礼文町 浜中 2 遺跡第 5 次発掘調査概報』礼文・利尻島遺跡調査の会
- 岩城 克洋・北 沙織・土肥 幸子 編・藤原 吉希・柳澤 清一・山谷 文人 2017 『北海道利尻富士町 沼浦海水浴場遺跡第 1 次発掘調査報告書』礼文・利尻島遺跡調査の会
- 宇田川 洋 校註 1983 『河野常吉ノート 考古篇 2』北海道出版企画センター
- 内山 真澄ほか 1995 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』利尻富士町教育委員会
- 大川 清 1998 『北海二島一 禮文・利尻島の考古資料一』窯業史博物館
- 大場 利夫・大井 晴男 編 1976・1981 『オホーツク文化の研究 2 香深井遺跡 (上・下)』東京大学出版会
- 大谷 喬司 編 2000 『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版社
- 岡田 淳子・西谷 榮治ほか 1983 「利尻島の埋蔵文化財 (1)」『利尻町立博物館年報』 2
- 岡田 淳子ほか 1984 「利尻島の埋蔵文化財 (2)」『利尻町立博物館年報』 3
- 佐藤 達夫 1972 「擦文土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部
- 岡田 淳子・梶田 光明・西谷 榮治ほか 1978 『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 種市 幸生 編 1977 『北海道礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 種屯内遺跡調査団 1998 「種屯内遺跡第 2 次発掘調査概要 (1996 年)」『利尻研究』 17
- 種屯内遺跡調査団 1999 「種屯内遺跡第 3 次発掘調査概要 (1997 年)」『利尻研究』 18
- 種屯内遺跡調査団 2001 「種屯内遺跡第 5 次発掘調査概要 (1999 年)」『利尻研究』 20
- 種屯内遺跡調査団 2004 「利尻島種屯内遺跡の考古学的調査」『歴史人類』 32
- 種屯内遺跡調査団 2002 「種屯内遺跡発掘調査報告 総括篇 1 事実関係」『利尻研究』 21
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2012～2016 『北海道礼文町浜中 2 遺跡 (第 1～5 次) 発掘調査概報』
- 名取 武光 1933 「利尻、禮文島紀行」『蝦夷往来』 11
- 前田 潮・藤沢 隆史編 2001 『礼文町 香深井 6 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦 清 編 1992 『浜中 2 遺跡の調査』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦 清 編 2002 「礼文島浜中 2 遺跡第 2～4 次発掘調査報告」『筑波大学先史学考古学研究』 13
- 前田 潮・西谷 榮治 1997 「利尻町種屯内遺跡発掘調査報告」『利尻研究』 16
- 山谷 文人 編 2011 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書 II』利尻富士町教育委員会
- 山谷 文人・内山 幸子 2004 「利尻島沼浦海水浴場遺跡発掘調査報告」『海と考古学』 7
- 柳澤 清一 2011 『北方考古学の新展開一火山灰・蕨手刀をめぐる編年体系の見直しと精密化一』六一書房
- 柳澤 清一 2015a 『北方考古学の新潮流一「逆転編年」説の検証と年代観の改訂一』六一書房
- 柳澤 清一 2015b 「道東における擦文 IV 期以降の層位事実と文様現象について」『先史考古学研究』 12
- 柳澤 清一 2015c 「水禽・「鱗」状モチーフから見た「貼付文系土器」の広域編年」『古代』 137
- 柳澤 清一 2017 「礼文・利尻島編年の新検討 その (1) - 香深井 5 遺跡を中心として -」『利尻研究』 36
- 柳澤 清一 2018 「礼文・利尻島編年の新検討 その (2) - 亦稚貝塚を中心として -」『利尻研究』 37

報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうりしりふじちょう ぬまうらかいすいよくじょういせき (だいにじ) ぬまうらいせき (だいいちじ) はくつちょうさほうこくしょ							
書名	北海道利尻富士町 沼浦海水浴場遺跡 (第2次) 沼浦遺跡 (第1次) 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳澤清一・内山幸子・藤田尚・山谷文人・岩城克洋・大野彩奈・北沙織・高坂勇佑・箱石幸祐・藤原吉希・横田真名望							
編集機関	礼文・利尻島遺跡調査の会							
所在地	〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33 千葉大学文学部考古学研究室 気付 TEL 043-290-2304							
発行年月日	2018年12月20日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ぬまうらかいすいよくじょういせき 沼浦海水浴場遺跡	ほっかいどうりしりぐんりしりふじちょうおにわき 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇 あざぬまうら 字沼浦 132、145、146 番地	015199	H-10-16	45° 06′ 52.3″	141° 17′ 29.7″	2017.04.28 ~ 2017.05.15	16.5m ²	学術研究
ぬまうらいせき 沼浦遺跡	ほっかいどうりしりぐんりしりふじちょうおにわき 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇 あざぬまうら 字沼浦 99 番地	015199	H-10-17	45° 06′ 40.5″	141° 17′ 17.3″	2017.04.28 ~ 2017.05.15	8.0m ²	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
沼浦海水浴場遺跡	貝塚	縄文 統縄文 オホーツク 擦文 近現代	墓壇 (1・2次) 2基 土壇 (1・2次) 2基		縄文土器 統縄文土器 オホーツク式土器 擦文土器 石器 骨角器 各種の近現代遺物	貼付文期と推定される墓壇 (1)、 ウニ殻・魚骨層などを伴う廃棄場 などを検出		
沼浦遺跡	貝塚	統縄文 近現代	道路状遺構		統縄文土器 各種の近現代遺物			



北海道利尻富士町
沼浦海水浴場遺跡（第2次）
沼浦遺跡（第1次）
発掘調査報告書

発行日 2018年12月20日
編集 礼文・利尻島遺跡調査の会
写真撮影 藤原吉希
発行所 礼文・利尻島遺跡調査の会（代表 柳澤清一）
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
千葉大学文学部考古学研究室（気付）
利尻富士町教育委員会（監修）
〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鷺泊字富士野 6